

# 桃香ちゃんと愚連隊

ヘルシェイク三郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

最近三国志について語らう際に飛び出してくる、「正史では〜」率の高さ、蜀アンチの多さたるや、雲霞の如し。

癒しを求めて恋姫二次を漁ってみたら、二次創作における桃香ちゃんの風当たり辛きこと冬の如し。

だから、桃香ちゃんの部下が桃香ちゃんを思う存分愛でる二次作品を書きたかったんです。

## 目次

第一回	呉子遠、五台山で大人物と出会う	1
第二回	劉玄德、股肱の臣と愛馬を得、王佐と出会う	21
第三回	劉玄德、王佐の才を幕下に加える	39
第四回	劉玄德、広陽にて御遣いの右腕と出会う。	59
第五回	劉玄德、太陽と出会い苦悩する	77
第六回	呉子遠、主を励まし策を与える	107
第七回	呉子遠、天啓を得る	121
第八回	呉子遠、奮闘する	161
第九回	呉子遠、悔しがる	193
第十回	劉玄德、道を定める	214
第十一回	曹孟徳、視野を広げる	245
第十二回	曹孟徳、玄德と出会う	262
第十三回	劉玄德、成らず者を志す	292
最終回	劉玄德の足跡を読む。	328

## 第一回 呉子遠、五台山で大人物と出会う

呉懿子遠はエン州の陳留郡の生まれである。

エン州は、古くに斉の桓公を輩出し、高名な儒者を多数生んだ土地であるが、子遠自体は後に英雄として名を馳せるような――、いわゆる将器を持つような輩とは似ても似つかぬ人となりをしていた。

散逸された諸資料を筆者こと、羅貫中が拾い集めた限りで言えることは……。

良く言えば、生真面目であり。

悪く言えば、小人物である。

そんな、およそ大事を成そうという志を抱きすらしない、まさに”平凡”という言葉を体現したかのような性格をしていたことは疑いようがないだろう。

子遠に転機が訪れたのは、丁度光和六年（183年）の春ごろになるだろうか。

彼は、叔母が皇帝の外戚である何進の私兵をやっていたということもあり、洛陽の近隣で学問を学び、武芸を鍛え、何進の下でそれなりの職に就くことができていた。

……といつても、この大陸において才気を持つものの大半は女性であり、男で大成するものはごくわずかにすぎない。

当然ながら、彼も文武をそれなりに身につけたものの、そのどれもが人から頭抜けた能力を持つには至らなかった。

大概の事を人並みにこなす男。恐らく、周囲からはそのように見られていたのだと考えられる。

与えられた仕事を人並みに片付け、それなりに充実した日々を送っていた子遠は、ある日叔母の家に呼び出され、いきなり借金をせびられた。

「し、し、子遠さ、後生だ。オラに金さ、貸してくれねえだか」

※このようなやりとりが実際にあったかは分からないが、筆者が散逸された資料から判断するに、似たようなやり取りがあったことは想像に難くない。

叔母の呉匡はこの時、三十路を越えたあたり。その風貌は伝わっていない。

彼女は何進よりかなりの給金を貰っていたが、大変な浪費家で多くの借財を重ねている人物でもあったという。

時には阿蘇阿蘇アソアソに載っていた冬物ふあつしよんを大人買いし、また時には洛陽魚香らくよううおかあを頼りにお勧めの酒家に繰り出し、朝まで酒食に耽ってしまう。

筆者が思うに、雑誌の作る流行に乗せられてああだこうだと動く人間は大抵が頭が緩いはずなので、恐らくこの呉匡なる人物もかなりのぱーぷりんであったに違いあるまい。

その羽毛の如き軽い頭は、何進に仕えることになった経緯が「肉食いてえ」であったことから窺えよう。

たかが肉ごときで釣られるとは何事か。漢書曰く「肉なんぞ太るだけで百薬の長にもなりませぬ」とあるように、食べるならばやはり甘味だ。

ああ、甘味ならば、筆者も釣られてしまふやもしれぬ。

閑話休題、この時の呉匡は都で有名な干人ホストに引掛かっていたらしい。

当世においてもそうであるが、官職を得た女性は得てして婚期が遅れるもので、婚期が遅れると憂さ晴らしとばかりに商売男にのめり込むことがある。

呉匡はまさに行き遅れ女の代表格であった。

時は光和年間、霊帝の治世。

都で起きた天変の地異に対し「あー、男なんかが政治にかかわっているから起きるんじゃないですかね」と進言がなされ、「なるほど、確かに！」と容易く受け入れられるような男性蔑視の風潮の中でのことである。

たとえ行き遅れの風当たりは強くないとしても、やはり思うことがあったのかもしれない。

子遠は行き遅れた叔母を大変哀れに思い、三か月分の給金を貸すことにした。

すると、味をしめた叔母は翌月になってさらに借金をせびってくるようになり、以降は金に困ったら甥に頼るようになる。

流石の子遠もこれには憤りを見せ、

「いい加減にして下さい、伯母上。干人は、干人は結婚してくれませぬ」

と彼女の愚行をたしなめた。

しかし、叔母は子遠の言い分を聞かないばかりか、

「かかか彼は、こここ今後をオラに誓ってくれただよ！ だつてのに、そげな言い方はねえべや！ 大体子遠さが職にありつけてんのは、オラの伝手だべ！ そげな子遠さがオラに何て口聞くだか！」

などと意味不明なことを供述し、常日頃より八つ当たりをするようになったため、子遠は日々の仕事に支障が出るようになった。

温徳殿おんどくでんには大蛇が現れ、大河は時に氾濫した。

明けの空には凶星が輝き、雄鶏おんどりは何故か雌になった。

このままでは命も危ぶまれるのではと恐れた子遠は、

「今までお世話になりましたが、それがしにも生活というものがございません」

とまくしたて、職を辞して放浪の旅に出ることを決意する。

左氏伝に曰く、「黄河の濁りが清く澄むのを百年も待つなんて馬鹿じゃねえの」とあるが、それからの子遠はいにしえの君子を思わせる迅速さを見せた。

四半刻とかけずに荷物をとりまとめ、「善は急げ」とばかりにさっさと河南郡より逃げ出してしまふ。

余談になるのだが、筆者は歴史上の人物が見せるこういった有能さの片鱗が愛しいと思える。

何で物語や歴史上の人物はかつこよく見えるのだろう。

ああ、現実の男性はやっぱりクソだと思いました。まる。

さて、彼の出立を耳にした同僚の肉食系女子たちは大いにそれを悲しんだという。

特に行き遅れ女たちの怒りは凄まじく、温徳殿おんどくでんには大蛇が現れ、都をすさまじい雷雨が覆った。

青州を大津波が襲い、雌鷄めんどりは何故か雄になった。

朱雀門では呉匡を狙い、素性の知れぬ匪賊が襲いかかったが、これは容易く返り討ちにされた。

こうして、河南郡を発つた子遠は幼くして亡くした母との思い出が残る陳留を避け、何故か幽州ゆうしゅうの啄郡《たくぐん》へと向かう。

幽州は河南と比べると田舎である。

しかし田舎ではあったが、風光明媚な良い土地でもあった。

子遠は大いに風光明媚を楽しみ、道中で子どもに文武の芸を教えつつ、時には用心棒まがいのことをしつつも五台山ごたいさんの麓の街まで辿り着く。

街では管輅かんろなる占い師が、怪しい予言を流布していた。

「何だ、何だ」

と民草が集る中で、管輅は高らかにこう叫んだそうだ。

「東方より飛来する流星群は、乱世を治める使者の乗物ですぞー！」

このままでは世界が滅びますぞー！」

当時は、官匪の横暴、太守の暴政がまかり通る世になっており、巷では重税に耐えかねた農民が匪賊にやつして民を襲うこともあった。

まさに世紀末を思わせる乱れようだ。

当然、何進の私兵ながら役人まがいの仕事をしていた子遠もその予言に思うところがああり、思わず管輅に声をかけてしまう。

「なるほど、確かに今の世は乱れており、流星のような天変が起きてもおかしくはない。しかし、この世が滅ぶとはいかなる見か。あまり滅多なことは言うものではない」

「それではもう金輪際言いませんので、あそこの酒家で麻婆豆腐を食べさせてはもらえないでしょうか。……もう三日も何も食べていないのです」

子遠は管輅を哀れに思い、一杯の麻婆豆腐を与えることにする。

これは幽州魚香ゆうしゅうおかあにも載るほどの絶品であったそうで、その日の管輅は占いを止めた。

満腹ご満悦の管輅によくよく話を聞いてみたところ、どうやら流星の飛来自体は本当に起こり得るらしく、子遠は万が一に備えて東方の

月が見える峰に陣取り、天変を見張ることにする。

一日経ち、二日経ち、三日経つたところで、天変ではなく、周辺に異変が生じた。

桃色髪の少女が、匪賊に襲われていたのである。

その少女こそが、劉備玄德その人であった。

筆者はこの出会いこそが、劉備玄德の運命を決める一種の分岐点だったのではないかと考える。

何故ならば、ほぼ同時期に後の世に大きな影響を残す、桃園三兄妹が五台山にて劇的な出会いを果たしていたからだ。

もし、玄德が子遠と出会わずに、三兄妹と出会っていたらどうだろう。

やはり、三国一のち、ちん、種馬とすら謳われる長兄の、あれや、これやにハマってしまったのではないだろうか。

歴史に”たられれば”はないものの、歴史が大いに狂ったであろうことだけは想像に難くない。

◇

「へへっ、嬢ちゃん……。一人でこんなところをふらつくなんて無防備にもほどがあるぜえ」

「やつ、いやっ……!」

上弦の月に照らされた竹林の中で、匪賊らしき三人の男どもに少女が襲われている。

少女は腕を掴まれて、ぽよん。

必死に抵抗するも、ぽよん。

気を十分に使えない女性の力では、ぽよん。

ふりほどけずにいるようで、ぽよん。

泣きそうな顔で叫んでいた。

ああ、凄い。いや、何がと言わないが。

しかし、いくら河南を出たとは言っても、こんなガチの婦女暴行現場に出くわすとは思ってもみなかったため、それがし正直驚いてい



る。

田舎って実は修羅の国なんだな……。

最近大陸中で治安が悪化してきているというのは、あながち本当のことなのかもしれない。

どこもかしこも、都住まいをしていたそれがしの知る常識とは、違った理で動いているのだ。

ああ、誰だ。都での窮屈な生活を捨て、田舎で自由にゆるやかに暮らしたいとかいっていた奴は。

それがしである。

……今更ながら帰りたくないなあ、都！

しかし、それがしの郷里に向ける思慕が募っていくのとは全く別問題として、眼下で行われつつある蛮行を見過ごすわけにはいかなかった。

何せ、これでも何進様の家来として、河南の治安を守り、兵庫の番を務め、それに手の空いた時には市場の経理も手伝っていた身の上である。……結構、労働条件きつかったな。

とにかく、何処に目があるか分からないのだ。

いたいけな少女の窮地を捨て置いたと何処ぞで噂されれば、今後の就職活動に支障が出るかもしれない。

悪評が千里を走る前に、さっさとその芽を摘んでしまおう。

まずは、勝てそうな相手か検分する。

匪賊の数は伏兵がおらぬのならば三人。

不意をつけば、十分に勝機が見込める数であった。

匪賊の一人はこんぼうを持っており、贅肉の詰まった腹を愉快げに揺らしている。

力はあるやもしれないが、鈍そうだ。

もう一人は短刀を持つ小柄な男。

こいつは嫌らしい笑みを浮かべながらも、少女から一番距離をとっている。

臆病なのか、この三人組の中でもっとも下っ端なのかのどちらかであらう。

最後に少女を捕まえている、頭髮の薄い細男である。こういう歳のとり方だけはしたくない。

こいつは背中に青竜刀を提げており、見た感じでは一番見えそうな雰囲気放っていた。

んー、都でよく見る、明らかにやばい奴らの匂いはしない。

大抵才気を放っている人物は見ただけで分かるのだ。

例えば、道すがら涼州弁を話す女とすれ違ったら、そつと俯いて道を譲るのが正しい。

友人のまさし君が言っていた。

この世の中には「ひろいん」と「もぶ」がいる。君は実に「もぶ」だなあ、と。

言葉の意味は分からなかったが、匪賊は多分「もぶ」にあたるんじゃないかと思う。

「もぶ」と「もぶ」が相対するならば、後は武術の練り上げ方が物を言う。

百姓殺法なんのその。都剣術の使い手たる、それがしならば十分に打ち倒せるはずだ。

……うん、やろう。

それがしは護身用の短槍を構え、少女のもとへ駆けつけようとする。

その瞬間――、

ぽよん。

涙で顔をぐしゃぐしゃにする少女の双丘が派手に弾んだ。

……なんたる見事な大きさだ。

まるで、五台山のような母性を感じる。もう少し助けるのを待って、弾む様を見ていたいという魔力がそこには秘められていた。

「……あつ」

だが、少女と目が合ってしまった。

空色の、玉を思わせる綺麗な瞳だ。そんな目で縫られては、もう躊躇する余地はない。

まさし君の人物観に当てはめるならば、彼女は間違いなく「ひろい

ん」に当たる人物だ。

「ひろいん」が悲しい目にあつてはならない。

それがしは竹林を駆け、短槍を振り回し、少女を取り押さえる匪賊どもをさんざんばらに叩きのめした。

「な、何なんだ手前は——、ぐえッ」

最初の一撃は一番厄介そうな、頭髪の薄い男に向けて放った。

こいつさえ無力化してしまえば、後は恐らくどうにでもなる。

「ななな、何だあつ？」

事実、贅肉の目立つ大男——、ああ、めんどくさいな。デブで良  
いか。

デブは、まともな体の使い方も知らず、ちよつと足を引っかけただ  
けで動けなくなつてしまふ。

「ひええッ」

チビは得物の使い方も心得ておらず、無暗に振り回すばかりだつ  
た。

匪賊に身をやつしている者の大半がただの食いつぱぐれである  
は風の噂で耳にしていたが、どうやら正しい情報であつたようだ。

都では平均より少し上程度の腕前でしかなかつたそれがしが、こ  
うも簡単に無双できてしまふ……。

正直、心地よくないと言えば嘘になつた。

……決め台詞とか言うべきであろうか？

「——狩られる立場になつた気分はどうだ？」とか、「覚悟は良いか？

それがしはできている」とかそういうの。

都でまさし君にかつこいい決め台詞を教わつたときには、まさに心  
が震え立ったものであつた。

ただ、そういう台詞は本物が言うからこそクソかつこいいのであつ  
て、「もぶ」の放つものではない。

ここで運悪く本物の達人と出くわせば、ただの赤っ恥である。やは  
り無言に徹することにした。

こうして、最後の一人を打ち倒した後、それがしはゆつくりと残心  
をとり、深い息を吐く。

都で学んだ武術がまともに通じて、本当に良かった。

「あ、あわわわわわ……」

さて、狼藉を働いていた者どもの処遇である。

正直殺してもよかったのだが、今回は生かしてとっ捕まえることにした。

街の官吏に引き渡して、就職の糸口とするためだ。

悲しいことにそろそろ路銀が尽きかけており、どこかで労働にいらしむ必要があったのだ。

……ああ、嫌だなあ。働くの。

ただでさえ、人間関係に疲れて河南を逃げ出してきたっていうのに、また上司にへこへこしななければならないのか。

「この愚図男」とか「あんた、二十歳にもなって、まだ伴侶いないの」とか「ほんと男つて汚らしいわね、近づかないで、妊娠するから」とか日常会話に織り込まれるのか……。

……嫌だなあ。

それがしの吐息が悲嘆のそれに代わったところで、

「あ、あのっ」

悪漢の魔の手から解放された桃色髪の美少女が、豊かすぎる胸に手を当ててこちらに声をかけてきた。

何処か、ぽややんとした空気を漂わせる娘だ。

白地と緑地に染め上げられた装束は金の縁取りがされており、白磁のように透き通った肌を、より一層に映えさせている。

恐らくは上等な絹を使っているのだろう。ただの平民ではなく、県令か何かの令嬢なのかもしれぬ。

太ももの見える短袴たんばかまは、阿蘇阿蘇でも紹介されていた”すかあと”だと思われるが、詳しいことを思い出そうとすれば頭がずきりと痛んでくる。おのれ、伯母上。

……丈が短いなあ。眼福だなあ。

視線を悟られぬよう、それがしは少し薄目の状態で彼女と向き合った。

「無事で何より。昨今は治安が乱れておりますから、一人旅なぞ関心

いたし——」

「あ、貴方はもしかして天の御遣い様ですかっ？」

「ヌツ？」

ものすごい空色の瞳を輝かせながら問いかけられた。

これは間違いなく、まさし君の言う「ひろいん」の風格を持ち合わせておられる。

もし、彼女に「私のために大將軍になって」と請われれば、喜び勇んで何進様の首を取りに行き、返り討ちに合ってしまうかも知れない。……つて、妄想でも勝てないのかよ、と己の非才に驚愕した。

しかしながら、と思ってもみなかった言葉に首を傾げる。

御遣い、御遣い……。

何処かで聞いた覚えがあった。

しばし記憶を巡らせてみたところ、

『このままでは世界が減びますぞー！』

と道端で叫んでいた似非占い師の幼女を思い出す。

「ああ、管輅なる少女の占いですか」

「そうです！……あ、管輅ちゃんのことを知っているなら、地上の人ですよね。多分……」

そうですよねー、あはは、と少し肩を落として桃色少女は力なく笑った。

いわゆる曇り顔という奴だ。

まさし君などは、「曇らせたい、その笑顔」と道行く少女に向かって真顔で言っていたことがあったから、一部の層には需要のある表情なのかも知れない。

ただ、んー。それがしとしては、やはり美少女には笑っていてもらいたいのよなあ。

笑顔こそが眼福の極み。

少し、頬が赤らんでいるとさらに良し。

それがしは彼女の顔を明るくすべく、こほんと咳払いをして問いかけた。

「天の御遣いなるお方を、何故探しておられるのです？」

「えっ?」

「いや、それがしも旅のみそらですから。何か役立てるかもしれないせんで」

そう申し出ると、曇りがちだった彼女の表情に、ぱあつと明かりが射しこんでくる。

「あ、ありがとうございますっ!」

ころころと表情が変わる、良い娘だった。

「ええつと。私、天の御遣い様にこの大陸を救ってもらいたいんです」  
「ふむふむ」

大陸とは大きく出たもんだ。

例えば、税の重い地域では、役人の課す税を納められない民草が大きな街まで逃げてきて物乞いをするとはあると聞いている。

そういった場合でも、彼ら彼女らが他人に対して望むものは、”自己の保身”か”身内の保身”であろう。

だが、この娘は”大陸を救って欲しい”と言った。

あまりにも重たい望みだと呆れもするが、それと同時に敬意も覚える。

この娘は、この大陸に住む人々のすべてを身内のように慈しんでいるのかもしれない。

「今の世の中は、お役人様がたくさん税金を取って、好き勝手していますし、盗賊もいっぱいいて弱い人をいじめていますよね」

「確かに。都では宦官にいろいろを贈って、猟官活動をすることがさも当たり前のようにまかり通っておりますな」

「そう! そうなんですよつ。皆が働いて得たお金が、いろいろに消えちやうせいで、暮らしがちつとも楽にならないんです!」

耳の痛い話である。

河南で仕事に就いていた時には意識していなかったことだが、こうして幽州くんだりまで来てみると、今の治世にひずみが生じてきていることがよく分かった。

じゃあ、それがしに何かできるのか? というのもできない。

だって、無職だもの。

無職の吐く気焔は、酒家で吐く親父の吐しや物に良く似ている。要するに、まるで意味がないということだ。

「私、力ない人を守りたくて。でも、どうすれば良いか分からなかったところに、管輅ちゃんが御遣い様のことを教えてくれたんです！」

「それで御遣いを探していたと。なるほどなあ」

立派な心掛けだと心から賛辞を送りたい気分であった。

常に上司の顔色を窺い、日々の潤いは上司の机に彼岸花を生けることだけであった以前のそれがしが耳にしたら、この場で跪いてしまいうまくない、綺麗で壮大な志である。

しかも、ちゃんと行動に移しているのだ。

似非占い師の言うことであるし、御遣いなどというものが本当にいるとは到底思えないが。

この娘はよほど環境に恵まれたのだろう。

だからこそ、豊かな心と大きな胸がここまで育ったのだ。

うん、素晴らしい。何処がとは言わないが。

残念ながら、それがしは御遣いの居所を、それどころかこの世に存在しているのかすら知らなかったが、出来得る限りの手助けをしてやりたいと思ってしまうくらいには、彼女のことを気に入ってしまった。

清らかであれ、この笑顔。

「力のない人を守りたいのですよね」

「はいっ！」

彼女は拳をぎゅつと握り、力強い声で答えた。

少し動いたたびに、ばるんつとしておられる。何処がとは言わないが。

「役人の不正は平民にどうにかできるものではありません。役人は政まつりごとに関わっており、平民は関わっていないからです。そして歪みの根源は中央のお偉いさんにあるわけですから……、いかに御遣いが力を持っていても、それを正すのは難しいかもしれません」

「ううっ、そうですね……」

「ただ、匪賊の横行については解決することができると思います。そ

れこそ、御遣いに頼らずとも、我々一人一人の力によって、です」  
「——っ、本当ですかっ？」

彼女はそれがしに詰め寄り、ほっそりとした指でそれがしの手を強く握りしめてくれた。

あー。

うん。

あー、これは。

無慈悲な都での生活にささくれ立ったそれがしの心に、凄まじいほどの癒し効果がある。

行き遅れとか、肉食系とか、あからさまに男を馬鹿にする上司とか。そう言う輩とは一線を画した、氣立ての良さがここにある。

彼女の笑顔えがわ力を浴びた今なら、山賊の一万や十万くらい退治できるかもしれない。敵に涼州弁を話す女とかがいなければ、何とかなる……、氣がする。いや、氣のせいかな？

それがしは高鳴る心臓の鼓動をごまかしつつも、極力平静を装って彼女に言った。

「例えば、匪賊の被害を憂う者たちで義勇兵団を立ち上げます。匪賊は群れるからこそ、弱き者を蹂躪できるのであり、それはこちらも同じです。つまり、匪賊に対抗するためには、こちらも群れてしまえば良いのです」

「そっか！ あっ……、でも。それってお金がかかるんじゃないですか？ 私、お友達からお金を借りている身で……」

恐る恐るといった風に俯きながら言う少女に対し、  
「いやいや。確かに貴女は元手を持ち合わせていないのかもしれないかもしれませんが、少なくとも貴女がここで声を上げたことで、一人は匪賊を打ち倒すべく立ち上がりましたよ」

とそれがしは、精一杯の笑顔を浮かべて返した。

「えっ？」

「やらない善より、やる偽善とでも言いますか。こんな乱れた世の中です。綺麗ごとの一つも聴きたいじゃありませんか。少なくとも、それがしは今貴女の志を聞いて、『よーし、やるぞ』という気になります」



たよ。明日には、匪賊を一人くらい退治しているかもしれません。世の中も、一歩くらいは良い方向に向かったんじゃないやありませんか？」  
それがしなりのかつこつけである。

無論、本心から来る言葉ではない。

たとえ、平平凡凡とした能力しか持たないそれがしが馬鹿正直に匪賊狩りを始めたところで、いずれは志半ばで倒されてしまうだろう。かといって、一から義勇兵団を募らんと呼びかけたところでまともに集まるとも思えない。

だから、本心の七割くらいが適当に吹いた法螺である。

ただ、残り三割くらいは「マジで頑張ってみてもいいかなあ」くらいに思っていた。

今ここで目の前の少女からの尊敬を勝ち取ることは、今後それがしの未来にある、いかなる事柄よりも大事だと思えたのだ。

……後、正直な事を言えば、しばらくはまともに仕事をしたくない。「そんな……」

少女は口元に手を当てて、いたく感銘を受けていたようであった。それがし会心の演技である。

後はこの場での尊敬を勝ち取れるだけ勝ち取り、格好良く立ち去って、しばらくは彼女の笑顔をおかずに幸せの余韻に浸りつつ、適当に手近にいる盗賊に喧嘩を売りながら、飽きたあたりで「我、器にあらず」と活動を止めれば、完璧だ。

まさしくくんが、「もらとりあむ」は大事だといっていたからな。

「もらとりあむ」って何だろう。

しかし、事態は少女の一言によって思わぬ方へと向かってしまう。「わ、私もお手伝いしますっ!」

「フアツ!?!」

この申し出には仰天してしまった。

予定が狂い、混乱するそれがしに対し、彼女は畳みかけるようにして言うてくる。

「やらない善より、やる偽善。すつごく良い言葉だっと思いましたが！  
力ない人たちのため、今はどんな些細なことでも行動に移さなきや

いけないんですよね！」

ふんす、と力みながら鼻息を荒くする少女。

「二人よりも皆で。何時かやってくる幸せな未来のため、一緒に、弱い者いじめをする人たちを懲らしめちゃいませうツ!! 義勇兵団を、立ち上げるんですっ！」

え、貴女も戦うの？

盗賊に捕まって、いやらしいことをされてしまう未来しか見えない……。

「家の方が心配なさるのでは——」

「既に家は出ていますっ」

この流れは、この流れはまずい……! !

「あ、あいや。待たれよ。お待ちを——」

「待ちませんっ! !」

それがしは「ひろいん」の厄介さを改めて思い知った。

この手合いは一度こうと決めると、絶対に初志を貫徹するし、謎の覇気によつて周りを従えてしまうのである。

事実、それがしは心が屈服しつつあった。

少女は、それがしに向かって白い手のひらを向けて笑う。

「私……。今この瞬間、天の時と人の和を得ました。人の和は貴方ですっ! !」

「お、おう」

五台山に降り注ぐ、静かな上弦の月明かりを浴びて、少女がきらきらと輝いている。

「私、劉備つて言います。劉玄德。幽州啄郡、楼桑里ゆうしゅうたくぐんの生まれですっ」

「あ……、ご丁寧にどうも。それがしは陳留郡の呉懿ごい、呉子遠と申します。それで流石に義勇兵団というのは——」

彼女は、まったく話を聞かない。

「私の真名……、子遠さんに預けます。桃香つて言うんです! ! これから二人で力ない人のため、頑張りませうねっ」

ああ、駄目だ。

真名まで預けられては逃げ出せない。

この大陸において、真名は忌み名より尊く、一度名を預けた相手を未来永劫信頼しなければならぬという意味合いがあるのだ。

しかも男と比べ、女の、美少女の真名はすさまじく価値が高い。

これで「やっぱり怖いから不参加で」とか「飽きたから義勇兵団を辞めます」などと言いだしたら、それがしの悪名は大陸中に知れ渡ることだろう。

道行く人に「クソ男」とか「あんた、二十歳にもなつて、まだ伴侶いないの」とか「喋らないで。アンタの息で妊娠するから」とか言われてしまうに違いあるまい。

最早、義勇兵団に参加するより他に手はなく、まともな職に就くことはできない――、

「……待てよ、むしろ就く必要もないんじゃないか?」

「どうしました? 子遠さん」

「いやいや、こちらの話です」

そもその話、上司の嫌みを笑顔で受け流し、へいこらする日々に嫌気がさしたからこそ、前職をほっぽり投げたのだ。

冷静に考えて、玄德殿と一緒に働くという前提で、前職と義勇兵団を比較してみよう。

それがしはきらつきらと輝く玄德殿の笑顔を見る。

まずは同僚についてだが、

何進様の私兵　：　そびえ立つクソ

義勇兵団　　：　大きい

次に給金についてだが、

何進様の私兵　：　左団扇

義勇兵団　　：　大きい

最後に最も慎重に考えるべき、命の危険についてだが、

何進様の私兵　：　戦になれば決死隊

義勇兵団　　：　大きい

んんんんんんっ? 悪くない待遇じゃないか、これは?

すべての面において、義勇兵団の魅力が勝っているように見える。

これは……、これは、決意すべき時なのかもしれない。

「玄德殿」

「はい！」

満面の笑顔が花咲いている。

「それがしの才は、人並みに過ぎません。一騎当千の働きはできませんから、玄德殿をがっかりさせてしまうかもしれませんよ」

それがしの言葉を聞いた劉備殿は、大きく頭かぶりを振って答えた。

「ううん！ 私だって、一人じゃ何もできないもんつ。でも子遠さんと一緒なら、もっと、もーつと世の中のためにできることが広がる気がするんです」

玄德殿は、両手を星空に向かっていっぱい広げた。

無邪気な彼女の展望には、きつと輝かしい未来しか見えていないのだろう。

しかし、それで良い気もする。

まさし君が、「ふあん」は「あいどる」を見るだけで幸せな気分になれるとか言っていた事があったのだが、今のそれがしはまさに玄德殿の「ふあん」になってしまったのかもしれない。

それがしは、決意した。

「わかり申した。今このときより、それがしは玄德殿を支えることといたしましょう」

「やったー！」

感極まって抱きついてくる玄德殿が柔らかくて。

もう、今後のこととかどうでもよくなってしまふ。

あつ。いや、今後の展望はやっぱり必要だ。

それがしは心配性なのである。

「げ、玄德殿」

「はい！」

「今後のことですが……」

「はい！」

良い返事だ。聞いていると心が浄化されていくようである。

「とりあえず、義勇兵団を立ち上げるには資金が必要になると思います」

「えっ？ でもさつきは声を上げるだけでいいって……」

「こてんと首を傾げる玄德殿。可愛い。」

「それがしと二人だけで匪賊退治を続けようとするならそれでも良いのですが、やはり義勇兵団の規模を大きくしようとするならば元手が必要なのです」

「そっかあ、でも私……、お金あんまり持ってないんです」

「しよぼんとする玄德殿。可愛い。」

「日々の糧も稼がねばなりませんし」

「んー……」

どうしたら良いかと、おとがいに指を当て、うんうん唸る玄德殿。可愛い。

「それがしに秘策があります」

「どんな秘策ですかっ？」

目をきらきらとさせる玄德殿。可愛い。

「匪賊の身ぐるみをはいで、路銀の足しにしていきましょう」

「えっ？ それじゃあ匪賊と一緒になっちゃうんじゃない……」

「いえ、彼らの財は元は力ないものから奪った財です。だから、匪賊の身ぐるみをはぐことは、民草に財を返すということに繋がるのです」

正直に言えば、まともに働きたくないだけであった。

上司にへこへこするくらいならば、匪賊相手にカツアゲをしていた方がマシである。

「なるほどー！ 子遠さんが言うなら、そうかもしれないねっ」

玄德殿が納得するのとほぼ同時に、縛って放置していた匪賊三人組はガタガタガタガタと震えだした。

「お、鬼！ 悪魔っ！」

「乱世を正すためだから。というわけで、持ってるものはすべていただくぞ。デブ、チビ、ハゲ」

それがしが真顔でそういうと、三人組の顔色が青くなった。

「あ、あわわ」

「ひええ」

「俺、まだ禿げてねえよー！」

そんな様子を流石に哀れに思ったのか、

「力ない人を守るためなの。ごめんね……、デブさん、チビさん、ハゲさん」

すぐく悲しそうな顔で頭を下げる玄德殿。可愛い。

最早退路を立たれたと思ったデブとチビは魂が抜けたようにへたりこんでしまう。

だが、ハゲは違った。

「お、俺。貴女様の、玄德様のお志にいたく胸を打たれました！ どうか、俺を家臣にしてくださいー！」

「えっ、私の？」

ちらつと、それがしのことを玄德殿とハゲが見る。

ハゲの発案に活路を見出したデブとチビまでが地べたに頭を擦り付ける勢いで懇願してきた。

「お願いします！ お願いします！」

「お願いします！ お願いします！」

あー、うーん。

「子遠さん……」

ここまでされて、許さないというのも玄德殿の心を傷つけかねない。

また何かしでかした時に、身ぐるみをはいで、官吏に突き出すか荒野にでも転がしてやればいいのだ。

それがしはため息をつき、苦笑いを浮かべた。

「じゃあ、有り金はすべていただくとして、身ぐるみだけは許してやりましょう。これからは誠心誠意、玄德殿のために働くように」

「へへっー」

こうして五台山の竹林にて立ち上げた、玄德殿とそれがし、そしてデブ・チビ・ハゲのみのささやかなる義勇兵団は、夜明けと同時に世直しの旅を開始した。

匪賊を襲い、身ぐるみをはぎ、匪賊を襲い、身ぐるみをはぎ、たまに仲間に加えたりもし、匪賊を襲い、身ぐるみをはぎ、匪賊を襲い、身ぐるみをはぎ……。

半年ほど経ち、何か強面な部下がわんさか増えたあたりでそれは気づいたのだ。

あっ、それがしたち、何か想像していたものと違う——。と。

「副頭領、どうしやした？」

「いや、何でもない」

次なる街へ向かって行軍中、新たに加わった頬に傷のある部下からかけられた一言で、それがし夢から覚める思いであった。

副頭領、これは義勇兵団の団員につけられる名称なのだろうか……？

ちなみにデブ・チビ・ハゲは最古参のくせ、あっという間に下っ端落ちしている。

都で磨いた文武の腕が、それがしを辛うじて副頭領たらしめていた。

「子遠さん、どうしたのー？」

「ほら、玄徳のお頭が呼んでいやすぜ。さっさと行きましようや」

くいつと親指で玄徳殿を指し示す様が何ともたくましい。

ちなみに彼は、前の前の街の周辺で、匪賊の親玉をやっていた男であった。

「なあ」

「へえ、何ですかい」

「それがしたちって何だったかな」

「泣く子も笑う、劉玄徳とその一党じゃないですか。ほんと副頭領は頭の出来が違いますわ。なんせ、匪賊相手に”稼業”すりゃ、官吏にしよつ引かれることもなく、街の連中には感謝されるんですから。ぼろい商売ですよ」

「あ、うん」

それがしはそつと顔をそらした。

## 第二回 劉玄德、股肱の臣と愛馬を得、王佐と出会う

北郷一刀が関羽雲長、張飛翼徳と桃園の誓いを立てた同日、劉備玄德は呉懿子遠らと月下竹林の出会いを果たした。

時に鉅鹿郡では張角という人物が南華老仙より太平要術の書を与えられ、各地を渡り歩いては人々の病を癒し始める。

南華老仙は書を与える際、「くれぐれも術の悪用を避けるように。もし私欲をもって悪用すれば、いずれ身を滅ぼすであろう」と張角を強く戒めたが、人々の声望を得た張角は増長し、

「天下欲しいなあ。蒼の世は終わったことだし、そろそろ黄色わたしの世がきてもいいんじゃないかな。今年は縁起も良いからね」

と篡奪者の如く振る舞った。

因果応報、または昨今付き合いの始まった西洋由来の言葉に「ふらぐ」というものがあるのだが、張角の顛末はまさにそれで説明できよう。

もし、彼女が人々を救うだけに留まっていたのなら、希代の聖女として名を残していたに違いあるまい。

……だが、残念なことに彼女は当初の志を忘れてしまった。

張角のことを慕う者は、かの者をまるで王のように崇め、やがては五十万を超え、ついには国を脅かすようになる。

一人の女性の善意は、史上かつてない規模の百姓一揆へと発展してしまつたのだ。

彼らは当時、黄色い頭巾を好んだことから、黄巾賊と呼ばれていた。余談だが、彼らを単なる張角やその妹たちの「ふあん」とする説もあつたりするのだが、ここでは取り上げないで置こう。

黄巾賊の跋扈により、大陸を暗雲が覆い隠し、温徳殿には一本足の怪鳥が舞い降りて呪詛を吐く。

都には雹が降り注ぎ、人々は天変に恐怖した。

世の異変を感じ取った時の大將軍たる何進は、早速帝に上奏し、將軍を各地に派遣すると同時に広く義兵を募り始める。

各將軍たちの幕下には曹操や孫堅といった英傑たちが軒並み名を



連ねていた。

後世に悪名高い董卓もまた、この時はまだ官軍として勤めている。北郷一刀が正史に顔を出したのも、この騒乱が最初であった。

彼は義兵の呼びかけに応え、わずかな私兵を率いて、公孫サンのもとに馳せ参じたと伝えられている。

劉備玄德が簡雍、田豫、廖化ら三人の腹心を手に入れたのも、恐らくはこの時期であろうことを考えると、黄巾賊の反乱こそが、三国の英傑が相争うきっかけを作り上げた最初の事件なのではないだろうか。

そう。乱世という火の粉が放った熱は、世にある多くの英雄、梟雄の種を育んでしまったのだ。

……余談だが、廖化は顔に傷のあるたくましい大男であったと伝えられる。

人並の身長しかない呉懿子遠は、彼と並ぶことを大変嫌がり、廖化の方は逆に彼と並ぶことを好んだそう。

信憑性の疑われる逸話ではあるが、もし事実であると筆者的には大変おいしい。

そこはかとなく一方通行の矢印が見てとれる。

やっぱり歴史上の英傑は最高だ。現実の男性なんか必要ないと思えました。まる。



「お願えますすっ！ これを盗られたら、あつしら生きていけねえんです！ お願えますすっ！」

轟々と炎の立ち上る山賊砦の片隅で、両腕を縛られた匪賊の一人が咽び泣いている。

確か、ここの親玉であった男だったとおもうのだが、今や往事の凄みはすっかり消え失せてしまっていた。

涙でぐしゃぐしゃになった顔を地べたにすり付けながらの懇願である。

すごい。

あまりにもムサイ熊男の醜態に、流石のそれがしも「うわあ」と引き気味になってしまう。

「……ごめんなさい。でも、悪いことをした人は罰を受けないと。野放しにしたら、悪いことをする人が増えちゃうんです」

護衛の強面に守られながらも、心底悲しそうな顔をして、「そうだよね?」とこちらに上目遣いで窺ってくる玄徳殿、可愛い。

「その通りですぞ、玄徳殿。過ちを繰り返させてはなりません」

それがしは玄徳殿の悲嘆を和らげるべく、自信満々に答えたが、それでも彼女の顔に陰った曇りを晴らすことはできなかった。

彼女は誰にだって優しいし、可愛いし、大きいし、大きい。

彼女に降った食いつぱぐれ者やごろつきどもが、あつと言う間に彼女の信者になってしまったのも、彼女の人徳(大きい)を考えれば極々当然の帰結であろう。

こんな乱れた世の中だ。

人は、癒し(大きい)を求めているのである。

そんな玄徳殿が核になっているからか、我らが義勇兵団の団員はそんじよそこいらの賊徒に比べれば比較的優しい(と思う)。

更正の余地がありそうな匪賊相手には、最低限の糧は残してあげる程度の侠気が、我らにはまだ残されていた。

今回の匪賊に対して我々が容赦がない仕打ちを与えているのは、彼らがつい最近村を一つ滅ぼしてしまっているからなのだ。

うん。そりやあ……、許されんわ。

「オラッ、さつさと街でお大尽といきてえんだからよ。手前等、ちんたらすんじゃねえ!」

「ひ、ひえっ!」

ちらりと。

頬に傷ある大男が、義勇兵の尻を苛立たしげに蹴り上げながら指図している様が横目に見えたが、それは幻だと思う。

我々は優しい。

優しい、優しい。

うん、優しい。

……尻を蹴られた男が、義勇兵団最古参のチビであったように見え  
たのは、恐らく気のせいだろう。それがしの目には何も映っていない  
のだから。

それがしは、今晚匪賊どもの胃袋に入るはずだった豚足の丸焼き  
を、たき火跡から拾い取ってかぶりついた。

折角の食料を、火加減を間違えて炭に変えてしまったてはもったいな  
いものな。

ほら、今のたき火は山賊砦が薪だから……。ちよつと火力が強すぎ  
るものな……。

「しよっぱいなあ」

「どうしやした、副頭領」

「いや、なんでもない」

そんなやりとりを玄徳殿の護衛としてしていると、

「くそがっ……、くそがっ……！ こつちが下手に出ているつづうの  
によお。噂通り、てめーらの方がずつと鬼畜じゃねえか！ クソ  
女あつっ！」

再三繰り返される懇願の叫び声が段々と乱暴なものへと変わって  
いった。

それがしは思わず、「あっ」と声を上げてしまう。

この義勇兵団において、玄徳殿の罵倒は御法度だ。

やべえ……、と思いつつ、それがしが”ある者たち”に目を向ける  
と、

「……あん？」

案の定とばかりに彼ら彼女らの瞳に殺意の灯火が宿っていた。

「……副頭領。あのクソ野郎、うるせえんで黙らせて良いすか？」

「あ、うん」

金目の物漁りを一端止め、ずいつと進み出てきたのは少年兵のとり  
まとめ役をやっていた青年であった。

烏桓うがんという異民族の出身で、名前は確か居……、居……、なんだつ  
たかなあ。

しかし、” おやじ” って、絶対父親って意味じゃないと思う。

「くれぐれも、くれぐれも殺さないようにな。生かして官吏に引き渡すんだから」

「うすっ」

青年はやたら渋い声で返事をする、泣き叫んでいた匪賊を、鞆のように蹴り飛ばした。

「みんなから奪った金をよおつ、何で手前のもんみたいにほぎいてんだ。ああっ!？」

青年が匪賊を蹴飛ばすたびに、悲鳴が小さくなっていく。

「弱い者いじめしといてよお、手前だけが奪われずにいられるなんて、スジが通らねえよなあっ！」

青年の言葉に、少年兵たちから喝采があがった。

「おう、兄弟。やったれ、やったれ！」

「兄いっ。誰が一番遠くまで蹴飛ばせるか勝負しようぜえっ」

……少年兵たちの誰もがたくましくなりすぎて、それがしもう直視できない。

彼らは、元は匪賊によって住むべき場所を滅ぼされたり、人買いに売られた者たちであった。

玄徳殿が救い出さなければ、そのまま乱世の露と消えていた身の上であつたからか、彼らの玄徳殿に捧げる忠誠心は、そんじよそこいらの忠臣よりも厚い。

一つ。弱きは助け、強きは皆殺しにしましょう。

一つ。舐められたらこの家業は終わりなので、舐めくさつた敵は原則皆殺しにしましょう。

一つ。お頭はみんなのお母さんです。悲しませる奴は皆殺しにしましょう。

以上のことが守れない奴は匪賊に違いありませんので、皆殺しにしましょう。

……何時の間にやら少年兵の間で自発的に作られた血と鉄の決まり事らしい。くろがね

得意げに少年兵の一人がそれがしに聞かせてくれた時、目玉が飛び

出そうになってしまった。

「みんな……、私は何とも思っていないから、降伏している人に乱暴はしちや駄目だよお……」

「でも、あいつらつらつて殺しても良い人たちなんですよ？」

十歳にも満たない荷物運びの少年兵が、きよとんとした顔で玄徳殿に尋ねる。

すると、玄徳殿は頭を抱えるようにして、

「違うよ……、この世に死んでも良い人なんていないんだよ」

「お頭はやっぱ優しいや。俺たちのお母さんだ」

子供の育て方に悩みまくっておられた。

分かりすぎるほど、分かる。

この子たちは乱世の理不尽に当てられて、少し、ほんの少し歪んでしまっていたのだ。

優しい玄徳殿のことだから、子供たちが積極的に匪賊狩りに参加していることも、本当は良く思っていないに違いあるまい。

だが、現実問題として我々は匪賊狩り以外のまともに大人数を養う方法を知らないし、他に金を稼ぐ技術も持ち合わせていなかった。

我々にできることは、この不幸な少年たちを最低限のタガが外れないよう辛抱強く見守るのみである。

「おい、ガキどもおッ！」

はしやぎ始めた少年兵に対して、頬に傷ある大男が一喝し、少年兵がびくりと硬直した。

彼は一団を取りまとめていた経験があるため、少年たちの取り扱いにも慣れていようだ。

彼という存在は、少年兵たちの心に課せられた数少ないタガであり、それがしも大いに期待している。

ただ、ただなあ……、

「……帰って、街であつたけえ飯食うんだからよ。さっさと仕事片づけな。クズどもで遊ぶのはそれぐれえにして、お頭を悲しませねえようにしろや」

「うす、叔父貴っ！ お頭あつ、ごめんなさいっ！」

少年兵の育ち方……、明らかにこのオツサンの影響を受けているようにも思えるんだよなあ……！

「廖化さん、ありがとうございます。私、子供を叱るのってまだ慣れていなくて……」

「いえ、ガキの躰にや慣れてるんで。任せてくださいませ」

あの、もう少し。品行方正にお願いできればと、思うんですけど……。

「どうしやした、副頭領」

「いえ、何でもありません」

それがしのそむけた目の先では、気を取り直した少年兵たちがせつせと稼業を再開していた。

「匪賊はみんな」

「全殺し」

「俺たちや」

「正義の義勇兵」

略奪稼業にいそしみながら、調子の外れた少年兵たちの合唱が廢墟寸前の山賊砦に響き渡った。

「お頭ー、副頭領ー、金目になるもんは大抵詰め込みましたぜー。クソ野郎どもは縄つけて引きずっていきます。早く飯食いに帰りましょー」

「あ、うん……。んじや、そんな感じで」

「うすっ」

流れるような仕事ぶりである。

もう何処の裏社会に出しても恥ずかしくない、立派な盗賊団であった。

焼け焦げた砦の桁ががらと崩れ落ちる音と、地べたを引きずられてすすり泣く匪賊の声がやけに耳に残る。

うん、帰って酒飲んで、嫌なことは忘れよう……。

仕事はしたくないけど、帰りたいなあ……。都！

◇ 「鬼きの囊様だ……」

「匪賊狩りの鬼囊様だ」

何やらものすごい風評被害を受けつつも、

「桃香ちゃん、ご無事ですか!? こいつらに変なことされてませんか?」

幽州上谷郡のとある街まで帰ってきた我々を出迎えたのは、こう……、友人であるまさし君が見たら「すげえ、ちっこい委員長だ!」と奇声をあげそうな見てくれをした少女であった。「いいんちよう」って何だろう。

姓名は田豫、字は国讓。

彼女は日銭に困っていた玄徳殿を半ば養うようにして付き合っていた親友の一人であった。

「撫子フズちゃん、ただいま!」

撫子というのは彼女の真名らしく、当然ながら我ら泣く子も笑う義侠集団はその名を口にするのを許されていない。

そう、それがしも立派な一味である。

というか、玄徳殿をそそのかした張本人扱いであった。

なるほど、確かに。

否定、できない……。

「ただいまじゃないですよ。もう、啄郡に帰りましょう? お母さん、絶対心配してますから。心配しすぎて、病気になっちゃってるかも……。ねえ、帰りましょう?」

啄郡と上谷郡はどちらも隣り合っているものの、その治安の差は歴然としている。

幽州で辛うじて治安が保たれているのは州都のある広陽郡と、玄徳殿たちが暮らしていた啄郡くらいなもので、代郡や漁陽郡、そして上谷郡といったその他の辺境地域は、漢朝の移民政策が崇って、修羅の国もかくやという様相を呈していた。

国讓殿の懸念もむべなるかな。

では何故そのような危険な地域に我々盗賊、いや義勇兵団が出張つ

てきたのかというところ……。

「ううん。撫子ちゃん……。確かにお母さんは心配だけど、匪賊に困ってる人が近くに住んでるのに、放っておくなんて私できないよ。今は私たち一人一人が行動しないといけないのっ！」

国譲殿の肩に手を置き、優しく語りかける玄徳殿の姿たるや、まさに天の――、

「……子遠殿、何厭らしい目で桃香ちゃんを見てやがんですか……！」  
それがしは慌てて目をそらした。

ちなみに玄徳殿はああ言っておられたが、もう少し内実に沿って言い換えたならば、「啄郡の賊を全部狩りつくしてしまった」が正しい。獲物が、いなくなってしまったのだ。

賊を求めて延々と移動を繰り返しては、その規模を増大させていく様はさながらイナゴのようでもある。

これ、どっかで歯止めをかけんとあかんのとちやうか……。

「そういえば、梅花ちゃんは？」

玄徳殿がもう一人の親友の名を口にすると、国譲殿はあからさまに困った顔をした。

「え、ええと。ご飯の準備をして、あそこで伸びています……！」

「え、伸びてる？」

「行けば分かり、ます」

彼女に促されるまま街の中を進んでいくと、酒家の軒先には広めの宴席が設けられていた。

今の義勇兵団は非戦闘員も含めれば五百人以上の大所帯になっており、とてもではないが、家屋を借りて食事ができる環境にはないのだ。

そんな大所帯が居座っているというのに街中に大きな混乱がないのは、ひとえに玄徳殿の人徳と国譲殿らの住民に向けた説得、そして官吏からのお墨付きを得ていたことが大きい。

何と今回の仕事は護烏桓校尉という、れっきとした官吏から頼まれた仕事なのであった。

よほど自分で仕事したくないんだろうな。



修羅の国の治安維持なんてなあ、ぐうの音が出ないほど分かる。

「へへー、一番乗りーっ」

と少年兵たちが我先にと宴席に陣取るその先、家屋と家屋の隙間に妙齡の女性がうずくまっているのが見えた。

——おろろろろろろろ。

吐しゃしておられる。

「あはは……、梅花ちゃんらしいなあ」

大方酒を呑み過ぎたのだろう。

彼女の姓名は簡雍、字は憲和。

玄德殿を養っていた親友の一人であった。

憲和殿は実家が酒家と深い付き合いをしていたらしく、商人たちとの折衝に長けている。

玄德殿のご乱心(?)を人づてに聞いた彼女は、せめて玄德殿が無謀なことをしでかさないうようにと義勇兵団に同行する道を選んだ。

国讓殿と比べれば我々に対して隔意を持っているわけではないし、十人中十人が振り返る美人でもあるのだが、

——おろろろろろろろ。

吐しゃしておられる。

「梅花ちゃん、大丈夫?」

「桃香……、天国が見える。水を、水を——」

彼女はとにかく酒癖がすこぶる悪いのだ。

一日の内、四半日は酔っぱらっており、もう四半日は二日酔い、後の半日を人生に費やしているような女性であった。

「酒を楽しめない奴は人生の半分を損している」とは彼女の言であるが、本当に人生の半分の酒に捧げる必要はないと思う。

——というか、後に残る酒はあれだ。

『何やあ、あんたが差し入れてくれた酒やろ。ほれ、飲めい、飲めい。ウチの酒があ、飲めへんちゅうのか。にやはははははははははは!』

前職を思い出して、あれだ。

『はあ? 何で、アンタがこの酒家使つてんのよ。お気に入りだったのに。ちよつと汚らわしいから近寄らないで。人を呼ぶわよ』

頭が、ずきりと痛んでくる……。

うん、それがしは現状に十分満足しているぞ。

「副頭領ー、早く飯食いましようぜー」

「あ、うむ。それじゃあ、ご相伴に預かろうかな」

と少年兵たちのもとへ向かおうとしたところで、

「子遠殿の席はあっちです」

と国譲殿に座席を指定された。

彼女の小さな指が指し示す先は、んー……。

んー……？

それがしの目がおかしくなったのかしら？

縁の低い丸井戸の上にむしろが敷いてある。

あれはどう見ても井戸だ。座れば落ちる、蛙が大海を知らぬ井戸以外の何物でもない。

「国譲殿。あんなどころに座ったら、それがし井戸に落ちてしまいますぞ」

「良、い、か、ら、座りなさい」

「アツハイ」

だよなあ。それがし、玄德殿をたぶらかした張本人だものなー。

仕方ないわー。これは仕方ないわー。

それがしはあつて無きが如き井戸の縁に腰掛けながら、運ばれてくる料理に箸をつけた。

まさし君が言っていた、「空気椅子」とはこのような体勢を言うのであろうか。

確か足を組みながらやると「くーる、くーらー、くーれすと」であると言っていたな。

よし、やってみるか……。

「それにしても、何で匪賊はいなくならないのかな……。みんなと笑いあつて暮らすことはできないのかな……」

「お頭あ……」

「ねえ、子遠さんはどう思う？」

団全体がしんみりとする中、それがしは答えた。

「ぬうううん……！ 大元を辿れば、中央政治の腐敗が原因なのでしようが、くううううう……！ こればかりは我々にはいかんともできません。ぐぬううううう……！ ただ、もつとも直接的な要因は、匪賊を取り締まる校尉こういなどの警察官吏がうまく機能していないことでしょうな。ぬおおおおお……！ 歯止めというものがないから、匪賊の悪行が烈しいものになってい、くううううう……！」

「官憲が？ 何で？ というか、どうしたの子遠さん……、すごい汗だよ？」

玄徳殿の疑問に対して、それがしは前職の経験を交えて説明を始める。

「お、おお、お気になさらず。それがしも河南にて治安を預かっていたから分かるのですが……、うぐぐぐ……。仕事をうまく回すコツは上司の機嫌を取ることなので、すううううん……！」

上司の機嫌を良くするために、さりげなく流行りの甘味を買って行ったり、さりげなく机の上に花を生けてみたり、芝居の入場券を献上してみたり、噂を聞きつけた他部署の人間にも笑顔で甘味をおごつたり、机の上に花を生けてみたり、芝居の入場券を献上してみたり……。

それがしは元々周りに好かれていた方ではなかったから、直接的な金子を渡すというような下品な手段は使わなかったのだが、それでも思い出すだけで頭がきりきりと痛んでくる。

説明役に徹するそれがしは、さぞかし世を憂う、苦悶に満ちた表情をしていたに違いあるまい。

「機嫌って、仲良くするってこと？ それより、本当に大丈夫……？」

「い、いえ、具体的には付け届け——、つまりはわいろですな。コオオオオオ……、何処何処でこういう仕事をしましたと報告するよりも、わいろでも贈って鼻痕をしてもらった方がよほど出世がしやすいのです。スオオオオオオ……、そうになると、実務能力よりもわいろを送る能力の方が重要視されるようになります……、ンアアアアアッ！」

それがしの雄たけびに皆がびくりと体を震わせた。

国讓殿などは何か信じられないものを見たかのような目をして  
いる。

「はあっ、はあっ……。それが恐らくは職務の怠慢と治安の悪化の一  
因になっているのだらうと思われます」

飽きたので体勢を戻す。

意外にこれ、鍛錬になるかもしれない。

まさし君はやっぱりすごいなあ。

「そ……、そうなんだ」

実際、河南の某部署では、まともに働いている人材がたった一人だ  
けという悲惨な事態に陥っていた。

外回りでは仕事を効率的に回すためにも他陣営の人間にまで付け  
届けを行い、

『む、何進殿の。ほう、くれるのか。かたじけない。それでは姉者と二  
人で分け合って頂くとしよう』

事務仕事に帰っては、延々と一人で竹簡の束を数えてため息をつく  
作業に終始し、

『はい、これ。朝までにやっときなさい。アンタみたいな無能男でも  
これくらいの量は一人でできるでしょ。後の無能と変態どもはどう  
せ働かないんだから、一人でこなしてみせなさい』

上司の世話、同僚のご機嫌取りに至るまで何でそれがしが一人でせ  
にやならんのか。

お陰で一人だけ帰宅する時間帯がいつも真夜中なのだ。何で？

繰り返すけど、何で？

思い出すだけで、胃がまたむかむかしてきた……。

それがしの話を聞いた玄徳殿は、都でまかり通っている常識にいた  
く驚いているようであった。

「ね、子遠さん。もし体の調子が悪いのなら言ってくれると嬉しいな。  
私、心配だよ……」

慈母のように玄徳殿は柳眉を歪ませて、それがしのもとへやってき  
ては隣に座ろうとした。

「あっ、お待ちを」

「えっ？ きやっ——」

何と言うことだ。

それがしの座っている場所が井戸であったことに気付かなかった  
玄徳殿は、体勢を崩して井戸の中へと落ちてしまう。

「玄徳殿ッ！」

「桃香ちゃん！」

「お頭ーっ！」

それがしは玄徳殿に真名を預けられた身の上である。

当然、身を呈して彼女を引き上げようとするが、

「……あれ？」

意外にも彼女の落下はごくごく浅い場所で止まってくれた。

何やら、井戸に大きな何かが詰まっているようだ。

「あいたたた……、何だろ？」

事情がよく呑み込めない玄徳殿を引き上げて、それがしはむし  
ろを剥がしては、井戸の中へと目を落とす。

すると、中にはやたらと大柄で毛並みの良い、まだ息のあるロバが  
荒縄で縛られ、沈められていたのだった。

「桃香ちゃん、大丈夫ですか!？」

玄徳殿のことは国譲殿に任せて、それがしはロバを義勇兵たちと  
もに引き上げることにする。

お、重たい……。

これはロバの体じゃ絶対ないだろ……!!

ひいこらひいこら、ばひんばひん、と。

それがしたちが何とか井戸から引き上げると、地獄の悪酔いから復  
帰した憲和殿が目を丸くして言った。

「……驚いた。張世平さんのてきろ的盧じゃない」

「的盧、ですか？」

それがしは義勇兵たちに的盧なるロバに絡みついた縄を取るよう  
指示しながら問いかける。

すると、憲和殿は口元に手を当て、考え込むようにして続けた。

「この辺りで有名な馬商人の飼っていたロバよ。決して人に慣れよう

とはせず、邪な心を持った者が近づくと蹴り殺してしまうと専らの評判ね。以前、張世平さんの馬を奪い取ろうとした賊徒どもを軒並み蹴り殺したことから、大秦国の悪霊の名を借りて、破瑠破斗守はるぼとすとも呼ばれているわ」

——バルバトス。

何だか知らないが、すごい強そうな名前だ。

恐らくは生半可な匪賊どもでは到底相手にはならないに違いあるまい。

そんな、良く分からない”凄み”を感じる。

「何故、井戸の中に沈められていたのでしょうか」

「張世平さんは、お守り代わりに的盧を大層可愛がっていたそうだから、大方敵対する商人の仕業じゃないかしら。撫子、このロバはずっとこの状態だったの？」

話を振られた国譲殿はびくりと飛び上がったかと思えば、

「……ごめんなさい。最初からむしろが敷いてあったので、良く調べもしていませんでした。いたずらに使ってごめんなさい」

と頭をぺこりと下げてる。

ええんやで。

都で受けていた嫌がらせに比べたら、この程度はただのじゃれ合いよ。

そんな意図を込めた暖かいまなざしを送っていると、国譲殿から気味悪い目で見られた。解せぬ。

「……すごい、綺麗なロバだね。井戸に沈められちゃうなんて可哀想」

縄の解かれたバルバトスに近づいた玄德殿は痛ましげに毛並みの整った背中を撫でた。

息も絶え絶えといったバルバトスも、薄目を開けて玄德殿を見ながら、されるがままになっている。

抵抗をしないところを見ると、もしかしたら玄德殿はバルバトスのお眼鏡にかなったのかもしれない。

「……張世平さんには一応報告しとかなきゃね。お礼とかもらえるか

もしれないし」

憲和殿の言葉に、それがし目が覚める思いであった。

——お礼！

そうだ、お礼である。

大商人らしき御仁のお礼ならば、それなりの額が期待できよう。

うまくやれば、もう直接匪賊狩りなどせずとも左団扇で暮らしていけるかもしれない。

それがしは期待にうち震えた。

……が、それははかない望みであった。

後日、涙を流して感謝する張世平殿から頂いた報酬はバルバトスそのものと、義勇兵の武装一式であった。

贈られた、いずれもが前線に立つための道具ばかりである。

いや、その。

現金を、いつもニコニコできるような現金を頂けないかと……。

玄德殿は翡翠色の戦装束と、立派な拵えが為された雌雄一対の剣を贈られ、それがしと頬に傷のあるオッサンは、やはり立派な槍と青竜刀を贈られた。

「これでもつとみんなの役に立てるねつ、子遠さん！」

「似合ってますぜ。お頭あつ、副頭領つ！ これでもつと匪賊どもをぶち殺せますねっ！」

大商人の邸宅の前で、バルバトスに乗った玄德殿が双剣を天に掲げると、義勇兵たちがわあつと沸き立った。

「何だ、何だ」

「鬼囊様のご一党じゃ」

「また匪賊どもを退治に行かれるのか」

「ありがたいことじゃ」

そんな民衆の声を背中に受けて、張世平殿も涙ながらに頭を下げておられる。

「最近、冀州で怪しげな大集団が言葉にもできぬ悪事を働いておるそうです。この大陸は、最早乱世の内にあるのやもしれません。劉玄德様……、皆々様。どうか、力なき我らを、これからもその武でお守り

くださいますよう」

まるで劇か何かの一幕のようでもあった。

玄德殿は当然主役であり、

「はいっ。みんながともに笑い合えるような世の中のため、私頑張りますっ！」

と笑顔の花を咲かせて、民衆に答える。

慈悲の中に確固たる強い意志を秘めた、まこと英傑らしいお姿であつた。

何よりも大きいのが素晴らしい。何処がとは言わないが。

「副頭領殿も、ささっ」

「あ、はい……」

今の今まで空気に徹していたそれがしも、場の雰囲気にもまれて部下たちに押され、民衆の前へと素っ首を晒すことになる。

「あー、ええと」

民衆から投げかけられる期待のまなざしに、それがしの胃がきりきり痛む。

「鬼囊様の右腕、呉子遠様じゃ」

「立派な槍じゃのう」

これからも匪賊との激しい戦いは続いていくのだろうか。

……嫌だなあ。面倒くさいなあ。

玄德殿の前で良い格好をしたい、それがしの功名心と、生来の無精と臆病風が心の内でせめぎ合っている。

優勢に立っているのは、目下のところ小心者陣営のようだ。

正直さ。都、帰りたいんだ。

帰ろうぜ？

帰っちゃおうよ。

今なら、伯母上も謝れば許してくれるって。

しかし、この場でそのようなことを言えば、身内から民衆から肉体的にも精神的にもぼこぼこにされてしまうことだろう。

それがしの持つ邪な心は空気も読める、できた子なのである。

だから、それがしはひきつった笑顔で贈られた槍を高々と掲げた。



——おおおおおおおつ！

義勇兵団の雄たけびがそれがしに合わせて巻き起こり、民衆の歓声が降り注いだ。

「副頭領！ 副頭領！」

「お頭！ お頭！」

そんな興奮のるつぼを切り裂くようにして、

「あぁーっ!!」

かねてより聞き知っていた懐かしき声が場に響いた。

「ファッ!? こ、この声は……?」

「……やっど、見つけたわよ！ この無能、根性なし男ツ!!」

「ヒエツ!」

金輪際会いたくなかった、恐ろしい上司との邂逅である。

ひいひいと、何か変な呼吸になってきた。

やはり、都には帰りたくない。

### 第三回 劉玄德、王佐の才を幕下に加える

王佐の才、荀イク文若という人物は稀代の英傑、劉備玄德を語る上でまさに欠かすことのできない存在といえるだろう。

事実、正史・家伝を紐解き、劉備一党の足跡を辿っていくと、まず散見できるのが彼女の輝かしい功績の数々だ。

儒家の名門——、荀家の出身でありながら、当時は何処の馬とも知れなかつた劉備率いる義勇兵団に客将の身分で参加し、大陸最高峰の知謀をもって、主と仲間の窮地を華麗に救い、その立身出世を手助けしていく……。

何故、彼女が突如都の文官職を辞して、幽州なんぞに流れていったのか。

何故、面識すらなかつた劉備一党に手を貸したのか。

未だ解決されておらぬ謎も多いが、それだけに彼女の生き様は下手に潤色をせずとも英雄伝として既に完成されており、今も現代人の心を惹きつけて止まない。

その人気ぶりは、つい先頃に彼女自身を主人公とした大河講談（恋愛色多め）が発表されたことから窺えよう。

いや、単に大河脚本家がネタ切れにあえぎ、物珍しさを求めただけなのかもしれないが。

余談だが、大河に恋愛は不要だと筆者は思う。

とにかく絶大な人気の彼女のことだから、拙作においても有名な逸話を二、三程度紹介しようとは思っている。

——ただし、あくまでも二、三程度だ。それ以上、掘り下げるつもりは毛頭ない。

この羅貫中、女と男の絡みなんぞに興味はないのであった。やっぱり、男と男の絡みは最高だと思いました。まる。

各界の圧力、著作発禁知ったことか。その時は地下に潜ってやる。二次創作とは、本来自由な叙述が許される場なのだ。

公権力なんてクソだわ、コノヤロー！

◇  
ずかずかと、修羅が間近に迫ってくる。

深い英知を湛える新緑の瞳は、凄まじいまでの怒りに燃え上がっており、心なしか浅黄色の短髪も怒髪天を衝いているように見受けられた。

彼女の被る、獣の耳を模した頭巾は最早忘れることなどできぬ。

あれは上司殿などではない。虎だ。

虎に違いない。

ああ、ああ。巨大な竹簡が攻めてくる。

「こんの、根性なし男……!」

決済用文書は保存用と合わせて二枚作成だつて言ってるでしょ。

何で作った奴をそのまま上司殿の決済箱へ置いてきちやうかな、まさし君。

え、ええ？ 他の書類も？ 一緒に？ めんどくさかったつて？

せめてそれがしに見せて頂戴よ……。あの上司殿は不完全な書類を見るときわめて不機嫌になるんだよ……。

上司殿のところへ謝りに行こう。一緒に、ね？

え、ええ？ 肥だめの世話で忙しいつて？ 何でそんなにウンコの

収集に力入れてんの、まさし君。

嫌いな言葉は泣きつ面に蜂。

これから聞きたくない言葉は七転び八起きなのです。

「聞いてんの、この馬鹿っ!」

ひいひいひいひい。朝が夜で、夜が朝で、睡眠は起床で、起床は通勤で。

上司殿が、上司殿が。

怒つて、おられる……!」

「聞いてんのつて、この私が聞いているんだけどっ!」

「あ、あいだだだだだだだだだだだだだだだだだだっ!」

自分の耳が引っ張られる段になり、ようやくそれがしは平静を取り戻した。

いや、正確に言えば平静を取り戻せてはいないのだが、少なくとも

聞く耳は（強制的に）持たされた。

「おい、何だあの猫耳」

「あの副頭領をいとも簡単に……」

ざわざわと広がっていく義勇兵たちの動揺を煩わしく思ったのか、上司殿はギロリと周囲を睥睨へいげんなさった。

すると、まるで引き波のように人の群れが上司殿とそれがしの周りから遠ざかっていく。

先日、匪賊を蹴って遊んでいた無頼漢どもがこれである。それがしは改めて上司殿の怖さを思い知ったのであった。

——あ、いや、訂正しよう。

皆が黙って引き下がったわけではなかった。

「ようようようようっ！」

まず、最古参の三人組が上司殿に向かって立ち向かっていった。

大方ここでそれがしに恩を売ること、底辺から幹部組へ、一か八かの立身出世を図ろうという腹積もりであろう。

見え透いた下心ではあったが、確かにそれがしのことを救ってくれたら、色々と擁護をしてあげないこともない。

それがしは、チョロいのである。

頼むから。頑張ってくれ、デブとチビとハゲ……！

「副頭領にあんまナメた口聞いてっつと——」

「——ハア？ 腐れ男が私にナメた口聞くんじやないわよ。精液からやり直して出直してきなさい」

「……ようよう白くなりゆく日差しが眩しいぜ」

上司殿の怒気をまともに受けたデブとチビとハゲは、眩しそうに回れ右すると、そのまま人の波へと還っていった。

絶対許すつもりはないよ、それがし。

「……チツ、相変わらずのビビリどもだ」

三人組に向けて舌打ちをしつつも進み出てきたのは、少年兵たちを取りまとめている烏桓族の青年であった。

名前は居、居……、やっぱり思い出せない。

浅黒い肌と特徴的な前髪だから、顔だけは忘れないんだけどなあ。

「なあ、姐さん。一体、オヤジに何の用だ？ 堅気に手を出す俺らじゃねえが、事と次第によつちや、黙って見ているわけにやいかねえんだ」肩で風を切りながら、威嚇するように問う青年の圧力に、さしもの上司殿も、

「――部外者は黙ってて」

……全くもって効いていなかった。

一瞬の沈黙。

青年は苦笑いを浮かべ、前髪をいじりながらため息を吐いては言った。

「……オヤジ。ここで姐さんに手を出すのは簡単だ。だが、それじゃあスジが通らねえ。俺らの仁義って奴は、オヤジが教えてくれたように、何時だつて民と共にあるはずだ。違うか？」

かつこいいことを言っておるようだが、それがしの目はごまかせん。

青年は、凄い手汗をかいていた。

なまじ少年兵たちの失望を買わないよう、小賢しく立ち回っているあたりが余計に憎らしい。

絶対許すつもりはないよ、それがし。

最早頼みの綱は、義勇兵団の最高戦力たる、頬に傷を負ったオッサンだけであった。

オッサンは、そのたくましい両腕を組みながら、それがしと上司殿を黙して交互に見ている。

独特の緊張感が場に漂う。

オッサンが組んだ腕を解き、こちらに拳を突きつけた。

……一体、何をするつもりだろうか？

もしや、オッサンが隠し持っていた奥義、武術流派とかであろうか。そうであったなら、今この瞬間にでも副頭領の座を譲り渡す所存である。

オッサンは口の端を持ち上げ、

「ごゆっくり」

小指を立てて、そう笑った。

絶対許さあーぬうーかあーらあーなあー……!

「やっ」

邪魔者どもを追い払った上司殿は、それがしの耳を引つ張りながら、据わった目つきで睨んでくる。

その圧力に耐え切れず、それがしは例の如く目をそらした。

「……目を背けてんじやないわよ」

「ヒエッ!」

それがしの目は泳ぎに泳ぎ、大海原を泳ぎ回り、救いを求めるようにして玄徳殿の姿を探した。

玄徳殿は、あの上司殿の圧力すらも柳に風と受け流し、遠のいた人の群れからポツンと浮き上がるようにして、バルバトスに騎乗しながらポカンとしておられる。

どうやら、あまりに急転直下な展開に、訳が分からず困惑しておられるようだ。困っている顔も、やはり可愛い。

「……釈明しなさい」

「は、はひっ?」

自分でも間の抜けた声が出たと仰天する。

上司殿は吐き捨てるようにしてまくしたてた。

「アンタが何で仕事放り出して、こんな人前で粹がっているか。理由を、この私に説明しろって言うてんの。こうやって私が来た時点で分からないの? この無能男っ!」

上司殿の拳がゆっくりと、そしてぐりぐりとそれがしの腹に沈み込んでいく。

「ず、ずびばぜんっ……!?!」

あまりの恐ろしさに空で返事をしたものの、理由なんぞ説明できるわけがない。

都の人間関係と、仕事自体がだるくなつて逃げましたなんて、言い出せるはずがないではないか。

後、上司殿が怖かったからとも。

それがしも竹のこぎりで首を刎ねられたくないのだ。

「ぐっ」

「え、ええと——」

「理由は？」

言外に込められた圧力が、ただただ恐ろしい。

「その、ですな——。そうだ。お一人で良くぞここまでいらっしやいましたな」

「ケダモノの跋扈する荒野を女一人で旅できると思ってるわけ？ 首から上をどっかに忘れてきたの？ アンタ。幽州までは河南の元部下に護衛させたし、幽州に入ってから何か青い髪の武人に護衛されたわ。もうどっか行っちゃったけど」

苦し紛れの一言を、上司殿の言葉が容赦なく斬って捨てる。

彼女の顔は、まさに不愉快の一字に占められているとあってよかった。

……なるほど、確かに上司殿の着ている衣服のあちらこちらにかな土埃がついており、その長旅を思い起こさせてくれる。

下手な話題そらは逆効果のようだ。

それがしは素直に謝罪した。

「申し訳ない」

「……どう？」

謝罪はできるが、理由は言えぬ。

仕方がないので、それがしは瞑目し、貝めいもくになった。

海中深く、物言わず、ただ静かに暮らす貝の如き精神をひたすらに望み、貝になった。

嵐が過ぎ去るまで、物言わず、とにかく殻に引き籠もろう。

「白状しないと、アンタの小汚い部分を竹のこぎりで切り落とすわよ」

「白状いたします」

引き籠もれなかった。

それがしは宦官になどなりたくないののである。

崖っぷちに立たされたそれがしは、とにかく誠心誠意、今までの経緯を説明した。

温徳殿に大蛇が現れ、凶星が空に垣間見えたとの儒教的な釈明もふんだんに盛り込みながら、とにかく自身の情状酌量を勝ち取るべく、

必死に舌の根を動かしたのである。

話が天界に住むという西王母の浮気話にまで進んだところで、上司殿は疲れた面持ちで額に小さな手を置いた。

「……要は仕事と人間関係が辛くなつて逃げ出したと。成り行きに任せていたら、義勇兵団に参加していたと。根性なしのアンタらしい顛末ではあるわね」

大した読心術であると感服を覚える。

ようやく耳を離してくれたので、それがしは激痛に痛む耳をさすりながら、平に謝罪した。

「申し訳ございません」

「別にアンタの根性になんて期待はしていないからどうでもいい。それじゃ、帰るわよ」

と納得した上司殿は颯爽ときびすを返して、ずかずかとやって来た道を帰ろうとする。

——が、待つて欲しい。

現在のそれがしは義勇兵団の副頭領なのである。

彼女は“元”上司殿なのである。

「ああ、いや。そのですな——」

「何よ」

上司殿の瞳はいつも以上に不機嫌をあらわにしておられるなあ……。

怖いから目をそらしておこう。

「あ、あのっ！ ちよつと良いですか！」

だが、生来小心者のそれがしに代わつて、バルバトスを降りた救いの女神が擁護に回ってくださった。

降りた拍子にばるんとしておられる。その凄まじい母性に、それがしの目は釘付けになった。

「……誰よ、アンタ」

「あ、私。劉備、劉玄德と言います。今は子遠さんと一緒に義勇兵団を立ち上げて、匪賊退治をしています！」

「フウン」



上司殿は値踏みするようにして玄德殿をねめつけて、

「……大きいわね」

と忌々しげに舌打ちした。

この小柄な上司殿は、母性大なる御仁に対して、割とこういう態度をとられるのである。

大は小を兼ねるといふのに、彼女は何故このような刺々しい態度をとられるのであろう。

それがしは上司殿の平坦な大地へと目をやり、

「ンアアアアアアッ!?!」

思いきり足を踏みつけられた。

「えっ?」

「何でもない、気にしないで。私は荀イク。荀文若。先月までは何遂高のもとで文官として働いていたわ」

「働いていた、ですか?」

きよとんとする玄德殿に対して、上司殿は苛立たしげに答える。

「この馬鹿が仕事放り出して逃げだしたから、一旦暇を貰って探しに来ているのよ……!」

えええ……。

驚愕の事実であった。

そりゃあ、まあ勝手に河南を飛び出してきた身の上だ。

面目を潰された伯母上あたりが嫌がらせに人を差し向けるくらいは覚悟していたが、まさか上司殿自らが職を辞してまで追いかけてくるとは思わなかったのである。

「文若さんは何でお一人で子遠さんを追いかけてきたんですか?」

玄德殿が物怖じせずになぞと、上司殿の顔がこれでもないかというくらいに不快げに歪んだ。

「……捨て置いたら、私の出世に響くでしょう。何遂高のところそつこうで働いているのはあくまでも足がかりに過ぎないのよ。私には曹孟徳様そうもんとくという、お仕えしたいお人が既にいるの」

孟徳殿というのは、上司殿が憧れておられる御仁である。

仕事でちよくちよく付き合いのあつた孟徳殿のご家来が言うには、

『華琳様はなあ。それはもうお美しくてだなあ。見つめられただけで、こう心の臓がバクバクと高鳴ってしまうのだ。おい、聞いているか？ 兵庫番』

と大層な美貌をお持ちらしいが、残念ながら未だに会ったことがない。

上司殿も含めて、皆が口々にお綺麗というからには、あるいは凄まじい母性にお目見えできるのでは……？ と淡い期待を抱いているのだが、今のところ会ったことがないのだ。

本当に残念である。

「出世に響くんですか？」

「当たり前でしょうが！ わいろを取らない、清流派に属する官吏っていうのは評判が命なのよ。部下に逃げられたっていうのはね。はつきり言つて汚名なの。こいつつては無駄に顔が広いから、下手をすれば悪評で門前払いされちゃうかもしれないのよ！」

玄德殿は「へえ」と無邪気に感心されている。

「やつぱり、子遠さんはすごいんだあ」という呟きが、それがしの心に突き刺さった。

期待が、期待が重い……！

「それに、いくらナメクジよりも価値のない馬鹿男って言ったって、私にはこいつの面倒を見る義務が一応あるしね」

「又ツ？」

良く分からないことを上司殿が仰られたため、それがしは思わず首を傾げる。

「又ツ？ じゃないわよ……。アンタ、私の格好見て思うところはないわけ？」

髪を掻き上げ、服をぽんぽんとはたきながら上司殿は問うが、正直いつもと変わったところがあるようには思えなかった。

「いつも通りの御恰好ですぞ」

「そりゃあ、そうだ。……ホント、察しの悪い男ね。この上着。上着の色っ」

「フムン」

まじまじと上司殿の羽織る上着を見ようとすると、ぎろりと睨みつけられた。

「まじまじとケダモノみたいに見ないで。視線が精液臭い」

「それは何とぞ無体な」

仕方がないので、横を向き、口笛を吹きながら薄目でちらちらと上司殿を窺う。

「私が見かたがいちいちエロい。目を使わずにこちらを見なさい。このエロ男」

「それは何とぞ理不尽な！」

それがしは懐から手鏡を取り出し、鏡越しに彼女を見た。

彼女は仕事の時にいつも目にしてきた、青く灰色がかつた上着を羽織っているようだ。

女性らしい飾り裾すそのついた短袴も含めて、お洒落すてというものに余念のない可愛らしい服装である。

かといって、「いつも通りの可愛らしゆうお姿です」とおべつかを貰いたいわけでもないのだろう。

以前、まさし君の発案で試しに世辞を言ってみたところ、一週間は口を聞いてくれなかった。

「上着の色、アンタには何色に見えるのよ」

「相思鼠色そうしねずでしたな」

何時の頃からか、上司殿が好んで着るようになった羽織の色だ。

『アンタくらい脳が無くとも、相思鼠色くらいは覚えておきなさい。どう？ この私に結構似合っている色だと思うのだけれど』

大量の竹簡と格闘している時に、ちらちらと念を押されるようにして教え込まれた色の名だ。

いやでも記憶にこびりついていた。

「分かってるじゃない。それが答えよ」

「ん？ んん？」

何がなんだかさっぱり分からなかった。

「あつ」

と玄徳殿は何故か合点がいったようだが、それがしに読心術の心得

はない。

しばしして、色好い返事が返ってこないことに業を煮やした上司殿は鼻息荒く、さらに続けられた。

「秋ごろになると。何時も私の机にアンタが飾ってた花の名前！」

「彼岸花、ですな」

「違う！ ヒガンバナって聞いたこともないわよ。あれは相思華そうしはなって名前でしょうが！」

「ん？ んん？」

正直、花の名前には詳しくなかった。

彼岸花のことだって、まさし君が「ゴイ君、上司の机に飾っておくと心が晴れやかになるゾ」と教えてくれたから実践していただけなのだ。

「宦官の馬鹿息子と婚約させられて、いつそのこと流浪の旅にでも出ようかと思っていたところに、相思華を飾ってくれたのはアンタでしょうが！ 『葉は花を思い、花は葉を思う』の言葉通り、そこまで慕われているならと、花であり儒家の末裔である私も自分の信条に目をつぶって、アンタの面倒見ていたんだけどツ！」

驚愕の事実であった。

まさかとは思いますが、今までやたらに仕事を押し付けられていたのも、”デキる上司に目をかけられる部下”的な立ち位置から来るものであったのだろうか。

それがしは絶望する。

まさし君は何も教えてくれなかった。貝になりたい。

ひとしきりまくし立てられた上司殿は、荒い息をつきながら、目を見開き、唇を震わせて言った。

「まさか……、アンタ……、意図もなく相思華を飾っていたんじゃないでしょうね……？」

「ぎくり」

胸ぐらが引っ張られた。

瞬間、それがしの身体が宙を舞い、背中から盛大に落ちたかと思えば、さらにながつくんがつくん揺らされる。



「……どうもしないわよ。こんなゴミクス。適当に捨てて、私だけ都に帰って適当な豪族の下である程度経歴を積んだら、孟徳様のところへ向かうつもり。南皮も近いし、袁紹のもとに身を寄せてもいいわね」

今項羽ではなく、それがしはゴミクスであった。

上司殿のその答えに、玄徳殿はあからさまな安堵の息を吐く。

「ああ、良かった……」

「良かったって何がよ。私が恥をかかされたことが？ 喧嘩なら買うわよ」

「い、いえ！ そうじゃなくって……。子遠さんが連れていかれなくって、良かったな……。なんて」

愛の天使が如き、はにかみようである。

それがしの身体は一瞬にして癒された。

癒されたそれがしの腹を、上司殿がぐりぐりと踏む。

癒され、踏みにじられ、癒され、踏みにじられ、しまいには踏みにじられることについても若干の喜びを覚えるようになったそれがしの精神は、より強靱なものへと練り上げられていく。

「……変な声出さないで。気色悪いから」

「はっ」

上司殿はそれがしを一顧だにせずそう吐き捨てると、訝るようにして玄徳殿に問うた。

「こんな鬼畜男の身柄を惜しむなんて、頭どうかしているの？」

「べっ、別にどうかしていませんっ！ 私、いえ私たちは……。子遠さんからいくら返しても返しきれない、恩を受けているんですよ！」

そう言っつて、玄徳殿は豊満すぎる胸に手を当て、ここではない何処かを見ながら語り始める。

「……私は子遠さんによつて匪賊の手から救ってもらいました。もし、あの時に子遠さんと出会うことができず、その志を聞かされていなかったら、義勇兵団なんて立ちあげられなかったと思うんです」

言っつて、玄徳殿はそれがしとの出会いを身振り手振り、事細かに説明し始めた。

買いかぶりすぎだと、それがしは思う。

何故なら、玄徳殿の志は月下竹林の五台山で出会った時点で完成されていたように思うからだ。

あの時玄徳殿を襲ったデブ、チビ、ハゲだって別段大した連中ではなかった（それがしは恨みを忘れない）のだから、玄徳殿はあの場を無事に逃げだして、別の誰かと義勇兵団を立ち上げていた可能性もある。

……だから、それ以上は止めてください。玄徳殿。

あの時、大いなる母性に目を奪われていた罪悪感が、罪悪感がすごいのです。

「自惚れるわけじゃありませんけど、私たちは今までにこの手で少ない人たちを救うことができたと思います。それは一人一人が独力でできることじゃなく、私たちが団結できたからこそできたことなんです！ そのきっかけを作ったのが、子遠さんなんですよ！ だから、私は真名だって預けたんですっ！」

おお、と何時の間にやら玄徳殿の演説を聞こうとして、聴衆が辺りを取り囲んでいた。

「アンタの真名を？」

「はいっ？」

「ちなみにこいつの真名は預けてもらった？」

「あ、いえ。それが……」

玄徳殿が残念そうに縮こまる。

真名を預けられた夜、それがしは何かを期待する彼女に対し、平に謝りながら真名をお返しできぬ理由を語った。

いや、単に母上が幼くして死んでしまっただけで、自分の真名を知らないだけなのだが。

まさし君曰く、「もぶなら仕方ないゾ」と教えてくれたので、そんなもんかなあとも思っている。

「……ふうん」

上司殿は玄徳殿に対し気のない返事をして、やはり気のない風に再度問いかけた。

「珍しく、このうすら馬鹿が善行を為したということとは分かった。それで、普段はこいつをどう使っている”わけ?”」

「使っている”……、ですか? 子遠さんは大事な仲間だから、そんな顎でこき使うような真似はできません」

玄徳殿の答えに、上司殿は大仰なため息をつく。

「分かってない! アンタ、玄徳は曲がりなりにも一団の長なのよ。どんな目的で団を立ち上げたのか知らないけど、組織の力を用いて目的を果たそうとするならば、効率の良い人の扱い方は学ぶべきだわ」「人の扱い方?」

「例えば、この馬鹿男の場合は可能な限り忙しくて、一人では到底運営できないような部署に叩き込むのが一番正しい扱い方よ」

ちよつ、何ということを抑えるのか。

「じよ、上司殿——」

それがしは慌てて抗弁しようとするも、

「アンタは黙ってなさい」

「はい、黙ります」

積年の上下関係を覆すことはできず、それがしはまな板の上の鯉になる。

鯉ではない。貝になりたい。

上司殿は鼻を鳴らすと、つまらなそうに続けた。

「こいつは文武のいずれもそれなり程度にしか働けないのだけれど、何故か予算不足、人手不足で火の車と化している部署を生き永らえさせる才覚にだけは異常に長けているわ。もし、アンタたちが義勇兵団としてそれなりの仕事をこなせていたというならば、その何割かはこいつの働きがあったからね」

玄徳殿が、「そう言えば……」と考え込むようにしてつぶやいた。

「そのせいか、都では便利屋扱いされていてね。」煮ても食えない走狗”なんてあだ名で呼ばれていたほどよ」

「まさし君には、”じむかすたむ”との二つ名をいただきましたぞ。

それがし、そちらのほうが入っております……」

「あの、無駄に厠を爆発させる変態の話はやめなさい!」



「はっ」

上司殿は玄徳殿の顔に理解の色が浮かんだことを認めると、肩をすくめて冷笑を浮かべる。

「普通、旗揚げ直後の義勇兵団なんてものはまともに働けないの。実績も元手も組織運営力もないのだから……。余程の幸運か、人材に恵まれてもしない限りはね」

「あ、それは分かります。うちにも旗揚げしたは良いものの、結局どうしようもなくなつた同業者の人たちが、仕事を求めてたくさん合流しに來たりしました。そっか、私たちが匪賊と戦っていたのも、子遠さんのおかげだったんだ」

玄徳殿の言葉に、団員の一部が申し訳なさそうに俯いた。

自分たちの非力さに恥じ入っているようだ。でも、それがしは許さない。

「理解してもらえて何よりよ。……だから、こいつには一瞬の休みすら与えず、竹かごの中で走り回っている鼠のようにひたすら仕事を与えるのが適切ってわけ。分かった？」

言い終えた上司殿は、ちらとそれがしを見下しては、

——にやり。

と凄まじく暗い笑みを浮かべた。

あつ、まずい……。

頭ではなく、それがしの本能が彼女の意図を正確に理解した。

これは上司殿なりの、それがしに対する復讐なのだ。

彼女を勘違いによって無駄にやきもきとさせた、それがしに対する復讐なのである。

何とかしてごまかさなくては……。この義勇兵団までもが息の詰まる、午前様勤務地となりかねない。

それだけは絶対に嫌だ……！

それがしは勇気を振り絞り、上司殿のおみ足を優しく押しつけてはその場に立ちあがった。

「力ある者が力なき者を率いる組織を、作ろうとしては……。なりませぬ」

「子遠さん……う？」

それがしは齒を食いしばりながら続ける。

上司殿の胸ぐら揺さぶりで、もしかしたらムチ打ちになったかもしれない。

「御再興を遂げた漢王朝が栄えて四百年。今や中央政治は、帝の詔勅を私欲のために用いるような佞臣ねいしんの手に委ねられております。良いですか？」

それがしは手をかざし、いかにも大げさな仕草をとって一喝した。

「——組織というものは、いずれ腐るものなのです！」

おお、と聴衆がどよめく。

それがしは続ける。

「我々は、力なき民のために立ち上がりました。ですが、戦に勝ち、名を上げれば上げるほど、その身は膨れ上がっていき、やがては一つの組織——、ただの軍閥と化してしまうやもしれません」

「えつと……、ぐめんなさい。難しくてよく分からないよ、子遠さん……」

玄徳殿にはそれがしの言っていることがよく分からなかったようであった。

ちなみにそれがしも良く分かっている。

口から出まかせを、繋げているだけなのである。

「いずれは力なき民に理不尽を命じるだけの存在にまで落ちてしまうやもしれませんということですよ、玄徳殿！ 多分っ！」

「そつ、それは駄目だよ！ 絶対に駄目っ！ それじゃあ私たちが頑張っている意味がなくなっちゃうもん！ えつ、多分？」

玄徳殿の心を掴んだと確信したそれがしは、間髪入れずに結論を述べた。

「そうしないためにも、常に後進を育てようとする姿勢こそが大事なのです。我々の間違いを正してくれる存在を育むのです。麦穂を刈り取るのではなく、種を播くことこそが大事なのですぞ、玄徳殿！ 多分っ！」

後進に仕事を投げるために——。

それがしは必死の思いで、口から出まかせを絞り出した。  
「な、なるほどっ?」

完全に勢いに呑まれた玄德殿。

最早、それがしの勝利は確実であった。

上司殿がいなければ――。

「……良いこと思いついた。玄德、アンタ私を雇いなさい」

「フアツ!? じよ、じよじよ、上司殿。何を仰られるか!」

それがしの抗弁など聞いていない風に、上司殿は続けられる。

「良く考えたら、己が才覚を世間に誇示するならば、所属する勢力は弱ければ弱いほど良いじゃない。この天才軍師を雇ったなら、アンタたちみたいな弱小集団だって大躍進間違いなしよ?」

といつて、こちらを見ては相変わらずの暗い笑みを湛えていた。

絶対、あの人それがしのことを働かせ殺す気だ……!

戦慄して動けずにいるそれがしとは対照的に、義勇兵団の面々は思わぬ申し出に動揺を深めてざわついていた。

「おい、軍師だつてよ」

「軍師って何だ? 俺たちに必要なもんなのか?」

「お頭はいつも良いこと言うなあ」

そして、上司殿の言葉を聞いた玄德殿は、呆気に取られたようにぽかんと口を開けておられた。可愛い。

「文若さん……」

「どう? 悪い提案じゃないと思うんだけ――」

上司殿は最後まで言葉を続けられなかった。

溢れ出る母性の塊が、上司殿に突撃してきたからだ。

「大っ歓迎ですよっ、文若さん! 私、文若さんと仲間になれてすつごく、すつごく嬉しいですつ! 文若さんと一緒なら、もつと色んなことができる気がするよっ!」

「そ、そうっ…」

あれほどまでに気圧されている上司殿も珍しい。

やはり、母性が勝ってしまったか。敗北を知りたい。

「私の真名、桃香って言います! 力ない人のため、これから一緒に頑

張りましようねっ」

「あつ……、か、勘違いしないでよね！ あくまで私は客将の身！ そのうち孟徳様に士官するつもりなんだから、変な慣れ合いはよして頂戴っ。それにアンタは、何か知らないけど、こう甘っちょろい感じが苦手なのよ！ もっとこうシャキツとしなさいっ。一団の長ならばねっ」

「しゃ、しゃきつと？」

「そう、シャキツと！」

そんなやり取りをしばらく交わしながら、二人の相手に対する呼び名は、段々と気安いものへと変わっていく。

「うう、難しいよおー……。桂花ちゃん」

「難しくてもやるの！ アンタ、力ない人を守りたいんでしょっ。周りに情けない姿を見せてどうすんの！」

「わ、分かった！ 頑張るね、桂花ちゃん」

「少なくとも途中で見捨てたりはしないから、やるだけ頑張ってみなさい。とにかく頑張るの！」

こうして、我らが義勇兵団に凄腕の軍師が加わってさらに数か月――

「敵は囷に食いついた。手前ら、合図を送れっ！ お楽しみ時間だ！！」

匪賊をより効率よく殲滅するために、少ない戦力で相手を釣り出しては伏兵で叩きのめす戦術が板につくようになりました。

響く匪賊の悲鳴と、義勇兵の怒号。そして笑い声。

心なしか、各将兵の顔つきも余計に物騒になってきた気がする。

兵団の陣容も随分と厚くなったようで、玄德殿もご満悦だ。

義勇兵団の旗頭は、当然ながら玄德殿。

その舵取りと部下の教育は、上司殿。

武力の要は傷のオッサン。

商家との折衝は、憲和殿と国譲殿。

戦場の囷、被害担当部隊を率いるはそれがし。

兵站の管理もそれがし。  
部下の管理もそれがし。

……ん？

……ん？

それがしは天に広がる青空を仰いだ。

## 第四回 劉玄德、広陽にて御遣いの右腕と出会う。

さて、北郷一刀の四半生はおよそ謎に包まれている。

その出自は東西南北いずれかの蛮族と推定され、身分も恐らくは諸王族に準じるものであろうと考えられているのだが、なにぶん史料の散逸と、当時の人間らしからぬ思想の逸脱によつて、未だ世にいる歴史家たちは彼の全体像を解き明かせずにいた。

——天の御遣い、仁愛の人、漢中王、破天荒大将、三国一の種馬、エロエロ大魔神、やたら不気味な筋肉ハゲ男を引き連れた変態など、彼につけられた二つ名にも一貫性が見られず、彼が一体どのような人となりをしていったのかについては正直もつて良く分からない。

現在、もつとも説得力を持った推論が「彼は実は未来人だったんだよ！ 西洋人の進出など、彼の遺した様々な予言が、この大陸の危機を表している!!」などという眉唾話であることも、北郷一刀について調べることの困難さを端的に示していよう。

ゆえに拙作では史料に残された彼の言動をできうる限り崩さぬように引用し、その心中については詳述を避けたい。

——とはいえ、実のところ筆者には彼の謎めいた心中について、ある一部分においてのみおおよその推測ができているのだ。

むしろ何故、世の歴史家たちは正史・家伝にかくも重要な記述が遺されていることに気づかないのかと不思議にすら思う。

彼につけられた二つ名によ——く着目してほしい。

” やたら不気味な筋肉ハゲを引き連れた変態”。

筋肉ハゲ男。

筋肉、男。

男を連れている。

——北郷一刀は男色家だったんだよ！ 間違いない！

北郷一刀男色説に立脚すれば、今まで通俗的な見方をしていた三国志の中に、色鮮やかで薔薇色の世界が見えてくるのではないか！

呉子遠や廖化、華佗など、三国志には男だつて少なからずいるんだもの！

いや、むしろ女武将の男体化とかどうだろうか。凄く新しい気がする！

筆者はこの閃きに、天啓を感じた。

拙作を書き終えた暁には、自作ぱろでの『ウホッ、漢だらけの漢中王演義』を世に出してみよう。

たとえ、どのような困難が待ち受けていようとも。

◇

「みんな、どいてえええええっ！」

幽州の荒野にて、切羽詰まった玄德殿の声が左から右へと凄まじい速度で流れていく。

「ぬ、ぬわああああああああっ!!」

「な、何じゃこりやああああああっ!!」

彼女が通り過ぎた後に木霊こだまするのは、伏兵の突撃に部隊の横腹を食い破られ、宙へと舞った匪賊どもの声であった。

「ぐわああああああっ!!」

「あびやああああああっ!!」

大小様々な野太い悲鳴が、一直線に続いているのが恐ろしい。

玄德殿の駆るバルバトスが、行く手を塞ぐ匪賊の一党を軒並みはね飛ばしているのだ。

ロバとは思えぬ巨大な体躯が、玄德殿を乗せて縦横無尽に駆け回る様は「賊でなくてマジで良かった……」と震え声になるくらい心胆寒からしめる迫力があつた。

見よ、あの大人の腰回りほどもある太い脚を。

大地を一蹴りするたびに、それだけで一軍が足踏みしたかのような粉塵が舞い上がっているではないか。怖い。

長いたてがみの間から覗くバルバトスの両目は、獲物を視界に捉えるたびに怪しい輝きを放っていた。

匪賊をはね飛ばし、馬首を返して再び突撃。

匪賊をはね飛ばし、馬首を返して再び突撃をひたすらに繰り返す。

その様は肉食動物が獲物の群れを狩る様によく似ていた。ロバなのに。普段は草を食んでいるはずなのに。

一応、玄徳殿の後方には烏桓族の青年を隊長とした騎馬部隊——、血と鉄のきまりごとを持つことから鉄血団などと自称している——、も続いているのだが、追いつくだけでも手一杯のようである。

馬の格が違いすぎるのだろうか。

いや、バルバトスはそもそも馬ですらないのだが……。ロバなんだよなあ……。

あれは本当にこの世の生き物なんだろうか……？

何か別の世界の生き物なんじゃないだろうか？

これからは”さん”を付けて呼んだ方が良いんじゃないかな。無駄な怒りを買わないためにも。

それがしは、果敢にもバルバトスさんに立ち向かつては蹴散らされている一部の馬鹿に心からの賞賛を送り、逃げまどいながらもやっぱり蹴散らされている残りの連中を心の底から哀れんだ。

「……アンタたちといると驚かされてばかりだけど、あれはその際たるものね」

と呆れ声を発したのは、今回の戦いで囮部隊のお目付け役を買って出っていた上司殿であった。

「破格ですか」

それがしの問いに上司殿は頷く。

「私は孫陽じゃないから大したことは言えないけど、少なくとも今までにあんな凄まじい馬は見たことがないわ」

上司殿のいう孫陽とは秦の穆公ぼくこうに仕えたという孫伯樂のことである。

何でも、馬相を見る目に優れていたらしい。

それがしは一瞬考え込み、答えた。

「そりゃあ……。まあロバですから……。…」

「馬鹿、茶化すな」

上司殿の機嫌が急激に悪化していくのを肌で感じたそれがしは、その場から逃げ出すべく、短槍を構えて部下に号令した。



「よ、よおし、とどめの突撃いくぞ。呐喊とっかんっ！」

「手前ら、クソどもを血祭りにあげんぞ。臆病者はここで死ねっ！」  
それがしと頬に傷のあるオツサンの声が続いて、それがしたちの後ろから割れんばかりのときの声が発せられた。

彼らは囷役をこなす遊撃兵と正面戦力を担う重装兵を合流させた歩兵部隊だ。

張世平殿という大商人の支援を受けているおかげで各兵の装備も充実しており、玄徳殿が率いる騎馬部隊ほどの突撃力はないが、それでも十分な突撃力を備えている。

後は適当に騎馬部隊と連携して敵部隊に突っ込めば、この戦いは勝利で終わることだろう。

実際、すぐに終わった。蹴散らした。

何というか、上司殿が加わってから義勇兵団の錬度が凄まじいことになっており、そんなじよそこいらの賊徒では相手にならないのである。

「勝利だ！ 手前ら、ときの声をあげろオツ！」

「イイエアアアアアアアアツ!!」

まさに匪賊絶対殺す軍団とでも呼ぶべき仕上がりになり、それがし恐怖を抱かざるを得ない。

前に官軍とすれ違った時などは、官軍の将がこちらを一目見た途端、俯いて見ない振りを始めてしまったため、それがしも「あっ……」といったたまれない気持ちになってしまったものであった。

「よおし、金目のものはさっさと回収。死んだ奴は身包み剥いで放置、生きてる奴は簀巻きにして馬に牽かせろ」

頬に傷のあるオツサンが放つ無慈悲な命令に匪賊たちから絶望の聲が上がる。

必死に命乞いをする彼らを、義勇兵たちがてきぱきと処理していくまでがいつもの光景であった。

「いくわよー」

「そーれ」

少年兵が、物騒な蹴飛ばし遊びを始めるのもいつものことである。

それがしが殺伐とした光景を遠い目で眺めていると、

「子遠さーん、疲れたよおー……」

あぶみを足場にしてバルバトスさんから降りた玄徳殿が、巨体を引いてとぼとぼと帰ってきた。

バルバトスさんは比類なき戦力ではあったが、とにかく乗っているだけで凄まじく疲れるらしい。

そりやあそうである。

あんな巨体が飛んだり跳ねたりしていれば、当然背に乗っている人間の負担だって大きいはずだ。

ちなみに巨体とともに玄徳殿の母性も飛んだり跳ねたりしておられるため、まじまじと見ているとこちらの負担まで大きくなるというおまけ付きだ。二段構えで隙が無い。

では玄徳殿の代わりに体力自慢が乗ればいいという考えに行き着くのだが、残念なことにバルバトスさんは玄徳殿以外が自らの背に乗るのを頑なに認めようとしないのであった。

とても気むずかしい御口バ様だと呆れもするが、それと同時に「乗ってもらうならば確かに玄徳殿が良いよなあ」と合点も行く。

あの御口バ様とは意見が合うような気がしないでもなかった。

ともかく、バルバトスさんが認めない以上、戦闘が続けば、どうしても玄徳殿が出ずっぱりになってしまう。

本当はこまめに休んでもらいたいところなのだが、一騎当千のバルバトスさんは、休ませるには惜しい戦力であった。

無暗に戦力を出し惜しみして、団の被害を増やしたくはないのである。

そしてそのことは、玄徳殿も重々承知しておられた。

「いつもお疲れ様です。玄徳殿」

疲労が色濃く見える玄徳殿に、それがしは手持ちの水筒を差し出す。

戦のあとにはいつも交わしているやり取りだ。

玄徳殿は笑顔で水筒を受け取ると、

「えへへ、ありがとうー！」



待って。痛い。それ、洒落にならないほど痛い。

「仕事をしろ、ぐうたら男」

据わった目つきで上司殿にこう言われてしまえば、それがしは従うより他にない。

彼女との上下関係は最早、染みついた習性のようなものである。

それがしは荷馬車に積んだ竹簡を引っ張り出しては、匪賊どもから奪った戦利品を帳簿に記し始めることにした。

ああ、命のやりとりの後は単純作業のお出ましだ。

仕事したくない。この場から逃げたい。

でもなあ……、真名まで頂いた玄德殿は流石に見捨てたくないんだよなあ。

あと、上司殿が入団されたことでそれがしの仕事量が激増したとはいつても、前職にはあつた同僚やら他の仕事仲間からの嫌がらせが、この職場にはないというのは大きかった。

人間というものは対人関係さえある程度良好ならば、意外にひどい仕事量でも耐えられるものらしい。

やはり、もう少し頑張ろう。

それに……、下手に逃げだして捕まったら、今度こそ上司殿に殺されそうだし。

それがしは怠け心と良心とを葛藤させながらも何とか作業を終え、上司殿のもとへ向かった。

「とりあえずの整理は終わりましたぞ。追って清書してご報告いたします。そろそろ街へと移動いたしますか？」

「ん、ありがと。清書は要らないから、そのまま頂戴。移動は、そうね。ちよつと待ってなさい。今、桃香が”依頼人”と話をしているから」

荷台に座りながら書き物をしていた彼女に、何故か待機を命じられた。

「およう。」

義勇兵団の中列、荷台の並ぶ輜重隊しちゆうたいのさらに前方で、玄德殿が現在護衛中の交易商人と打ち合わせをしていた。

商人はぺこりと貴人に対する礼をとりながら、恭しく今までの感謝

を述べている。

「玄徳様。長旅の護衛まことにありがとうございます。もう少しすれば幽州に着きましようから、今の内にお礼をばと思いい、伺いました」  
「えっ、もうそんなに移動したんですかっ！ 意外に解<sup>かい</sup>州<sup>けん</sup>から幽州<sup>ゆうしゅう</sup>つて近かつたんですね」

商人の言葉に驚きの声を上げる玄徳殿。

対する交易商人は上機嫌な面持ちで答えた。

「いえいえ、普段ならば半年以上はかかる道のりですよ。皆さんのお力添えがあつたからこそ、こうも順調に旅ができたのです。命の安全は安くありませぬでな。玄徳様には儲けさせていただきました」

「えへへ、どういたしましてっ。それは頑張った甲斐がありましたー！ 照れくさそうに頬をぽりぽりと掻く玄徳殿を見ながら、それがしは今までの道中に思いを馳せる。

何故、我ら義勇兵団が交易商人の用心棒なんぞをしているのかというと……、実は上司殿が義勇兵団に参加してから間もなくして、幽州西部土着の匪賊が”全滅”してしまつたからなのだ。

『子遠さん、みんな……、どうしよう……。お仕事なくなっちゃつた』  
玄徳殿にそんな泣きごとを言われて呆氣に取られてしまつたのは、今から三か月以上前のことであつた。

◇

団のお抱え軍師に任じられた上司殿は、その知謀を余すところなく発揮した。

まず、彼女は義勇兵団をいくつかの部隊に分け、その活動範囲を大幅に広げるよう指示を飛ばす。

次に、殲滅力の落ちた各部隊を効率よく運用し、各地の匪賊どもを追い立てては、幽州のとある箇所へと集結させた。

そして、小集団を率いる匪賊の頭領たちが仲間割れを始めるように流言を仕掛け、命令系統をずたずたにしたところで、

『我が策成れり』

と囹部隊を投入し、ぞろぞろと囹に釣られた一団を、伏兵によつて一網打尽にしてしまったのだ。

最後の指示を発する時、

『馬鹿は扱いやすくて良いわね、やっぱり』

などと事もなげに仰つた上司殿の顔は忘れない。この人には絶対逆らわないでおこうと改めて認識した瞬間であつた。

さて、話は玄徳殿の泣きごとに戻る。

手近な匪賊を見事に壊滅させてしまった我らが義勇兵団は、地元の崇敬を勝ち取つたのと同時に、匪賊退治という日々の生業を失つてしまつた。

五百人から倍増えて、千人にも及ぶ無職の爆誕である。

匪賊も、略奪はしなくていいからもう少し粘れよと苦情を言いたい。近頃の匪賊は根性が足りないんじゃないか。

一応、義勇兵団が縄張りとしている地域以外にも、幽州には手つかずの地域があつたのだが、そちらでは遼西郡の長史をやっている公孫伯圭殿という將軍と、北郷一刀殿という御仁が率いる別の義勇兵団が活躍しているために獲物の取り合いになる恐れがあつた。

さりとて、このまま上谷郡に居座り、惰眠をむさぼるというのもまづい。

……いや、それがしとしては大歓迎なのだが、英雄に対する世間の目というものは厳しかったのだ。

絶体絶命の窮地に瀕した我らに、救いの道を示したのは上司殿であつた。

「桃香。アンタ、少しは自分で考える癖も身に着けなさいよ。でも、そうね——」

彼女の提案をかいつまめば、以下のようなになる。

曰く——、匪賊退治は鹿狩りのようなものである。獲物がいなくなれば途端に困窮してしまう。

ここは一つ、獵師から別の職に転じる必要があるのではないだろうか——？

上司殿のこの提案に、憲和殿が「そう言えば」と声をあげた。

「張世平さんに仕事の口利きを頼んだら？ あの人、仕事の仲介屋もやっているでしょ」

「賛成です。それなら、バルバトスの件もありますし、私たちの頼みを無碍にすることもなさそうです」

国讓殿が憲和殿の意見に賛同を示したことで、団の方針はとりあえず偉い人に丸投げしようという流れで定まった。

それがしも当然大賛成した。

自分で物事を考えるのは嫌いだったからである。

「分かった！ 私、早速張さんに仕事がないか聞いてくるね！ 子遠さんもついてきて！」

「え、あ、はい」

こうして我々は意気揚々と州内の大店へと向かい、稼業を切り替える旨を張世平殿に切りだした。

「えっと、義勇兵団のみんなを養えるような、おつきな仕事ってあったりしますか……？ やっぱり難しかったりしますか……？」

「千人を養える大仕事……。ふむふむ、ありますぞ。ありますぞ！ 貴女方にうってつけの大仕事がつ！」

「ほんとですかっ？」

張世平殿は、最初こそ顎肉を揺らして悩んでいたものの、すぐに都合のいい仕事が思い当たったのか、手紙をしたためて、依頼人を紹介してくれた。

一体どんな仕事だろうか？

半分の期待と半分の不安を胸に秘め、それがしと玄德殿が依頼人の住む小さな店へと足を運ぶと、

「いらっしやい」

そこは市井に塩を格安で売る張氏の系列店であった。

張世平殿の斡旋してくれた仕事とは、洛陽の西にある塩湖えんこから良質の私塩を”密かに”運び出し、北方の騎馬民族や民草に対して、格安で塩を提供する、塩商人たちの護衛であったのだ。

なるほどなあ、商人の護衛かあ。大変なのかなあ……。などとぼんやり考えていたそれがしであったが、

「エツ？」

すぐさま、そのきな臭さに勘付いた。

「分かりました！ 私たちに任せて下さ——」

「えっ、ちよつ、玄德殿！」

「——むぐつ？」

二つ返事で答えようとする玄德殿の口を慌てて塞ぐと、それがしたちは答えをいったん保留として、その場を静かに立ち去った。

何故なら……、張世平殿の斡旋してくれた仕事は、要するに”密売商人”の用心棒であったからだ。

一応、張世平殿が悪徳商人というわけではなく、むしろ貧しい人々に仕事や富を分配するような義侠心の強い御仁であることはそれがしも重々承知している。

やたら腹とか出ているし、顔も明らかに悪人面なのだが、その性根は街の浮浪児を引き取っては育てるくらいに優しく、徳の高い人なのだ。多分。

そんな御仁が、果たして私欲を満たすためだけに法を犯すような要求を他人にするだろうか。いや、するまい。多分。

「ちよ、ちよつと子遠さん！ 急にどうしたの？」

しかし現実問題として、塩の流通は今の治世において、一定の手続きを踏まなければ違法になってしまう分野であることに違いはない。

私兵暮らしの長かったそれがしはあまり詳しくないのだが、例えば塩の生産地には塩官という官吏が赴任している。

塩官の仕事は、塩の生産業者に仕事道具を貸し与え、生産した量に応じた税を課すことだ。

ここで課税された塩が官塩。

課税を逃れるべく、生産量をごまかした塩が私塩である。

私塩を取引するような輩が、国法においては罪人に区分けされることとは言うまでもないだろう。

「……この仕事は少々危険が伴いますから、一度皆で相談すべき案件だと思いませんぞ」

「あつ、なるほど。確かに匪賊退治の代わりだもんね……。危険がな



いはずがないもん。流石、子遠さんだあつ」

玄徳殿にはこう説明したが、それがしはぶつちやけこの仕事を引き受けるつもりはなかった。

だって、後ろ手に枷をかけられたくはないんだもの。

だから、フンフンと楽しげに鼻歌を歌う玄徳殿の手を引き、皆のもとへと飛ぶようにして戻ったそれがしは、それはもう皆に訴えた。必死に。

ねえ、やめようよ。まずいって。

皆さんだつて、国法というものを知っておるでしょう。

危険だよ。お上に逆らっちゃ、いけませんよ。もうちよつと真つ当でコツコツとした仕事を探しましょうよ、と。

だが返ってきた反応は実に空しいものであった。

「え、塩は市井の塩商人から買うものじゃないの？ お母さんは張さんのところでいつも買っていたけど……」

とは玄徳殿の言だ。さらに、

「密売といえは確かにそうだけどねえ。はつきり言つて、官塩なんて正直高すぎて、幽州じゃほとんど出回っていないよ」

「そもそも、官塩は中央の官吏や兵が利用するものですよ。子遠殿は塩を一般のお店で買ったことがないのですか？」

と憲和殿に国議殿。

皆が皆、お前は何を言っているんだ？ という顔をしている。

官塩がほとんど民間で出回っていないなんて、それがし都暮らしの私兵育ちだったから知らなかったよ……。

まさかの民間人代表三人組より反対意見が出されたことで、それがしの立場は窮地に陥ってしまう。

そうして不利に傾いた形勢を決定づけたのは、頬に傷のあるオツサンの正論であった。

「副頭領、塩商人の安全を守るとは、ひいては民のためになるんじゃないですかい？」

……うん、そうだね。

塩商人の護衛は、民のために生きるといふ我ら義勇兵団の大義を、

それはもう見事に満たしているね……。

「……アンタ、変なところで生真面目というか世間知らずよね。ずっと私兵暮らしだったんだから、分からないでもないけど」

と、いつもの上司殿にしてはとても優しい御言葉をいただいたところで、それがしは完全敗北を喫した。

こうして、洛陽西部の解県まで隊商とともにはるばる赴いた我々は、紆余曲折を経て幽州へと舞い戻ってきたわけなのだ。

◇

途中、黒山賊とかいうやたら数の多い賊徒の襲撃を何度も受けるなど、危うい局面もあったのだが、そういった過去は忘却の彼方へと葬った。というか、思い出したくない。

何で匪賊が一万も二万も都の近くでのうのうと暮らしているんだろう。

塩の取り締まりは良いから、官軍仕事しろ！ お陰で何度も囫部隊として生死の境を彷徨う羽目になったんだぞ……！

それがしが絶対許さないとばかりにひたすら恨み言を呟いていると、呆れ顔の上司に胸をコツンと叩かれた。

「……桃香の話、終わったわよ。アンタも人前ではしゃんとしときなさい。ただでさえ能が無いんだから、見てくれくらいは強そうに見えること」

「アツハイ」

僥倖なことに、幽州に入ってからには賊の襲撃もぴたりと止んだ。どうやら、まだ獲物となる匪賊どもは繁殖していないようである。

日が暮れるまでには、何とか州都にたどり着こうとした我々は、昼飯もそぞろに幽州と冀州きしゅうの州境を出発した。

いくつかの宿場を素通りして、ひたすらに歩いて半日ほど。

西日が中原と夷地を隔てる峻嶮しゅんけんな山々の向こう側に隠れるや否やといった頃合いに、我々の行く手に大きな街壁がひよつこりと姿を現した。

幽州の州都、広陽である。

「お帰りなさい、皆様様！ これでしばらくは塩っ気のある料理が贅沢に食べられますな」

そんな熱烈といって差し支えない衛視の歓迎ぶりを目の当たりにして、それがしは羞恥心のあまり顔を覆いたくなくなった。

「はい、はい。お仕事お疲れ様です。なるべく早く卸しますので、楽しみに待っていてください」

「護衛の方々も御苦労様です」

「あつ、どうも……」

……本当に黙認されておるのだなあ。

まさし君の言う、いわゆる「どや顔」で国法を語った以前のそれがしを、助走をつけて殴りたい気分であった。

うーん、うーん。きりきりと締めつけられるように、胸が痛い。羞恥心が痛い。

「どうしたの、子遠さん？」

「いえ、黄砂が目にしみて……」

「大変！ 水筒の水、あげようか？」

玄徳殿の優しさも心にしみた。

「それでは、いつものように壺の中身は”小麦粉のような何か”ということで」

「はい、はい。”小麦粉のような何か”で。それで宜しくお願いいたします」

衛視が苦笑いを浮かべて言った言葉に、商人が揉み手でにこやかに返す。

なるほど、密輸した塩はそのままでは聞こえが悪いため、”小麦粉のような何か”と言い張るんだなあ。覚えておこう。

もう恥ずかしい思いはしたくないし……。

それがしが苦々しい思いで、彼らのやり取りを見守っていると、  
「待たれよつ、そこなる衛視殿！」

馬に乗った女武芸者が、通行手形に印を押そうとしている衛視と商人の間に颯爽と割り込んできた。





羞恥地獄を慮つての幻痛だからである。

「あ、いえ。急に胸が痛み始めて……、お構いなく」

「そ、そうか。しかし、胸は駄目だろう。命に障るといけないから、安静にしておくように」

どうやら彼女はツンとしてはいるものの、違法な取引を行う容疑者に対しても慈悲を見せる、優しい性根をお持ちのようであった。

「えっと、だな……」

仕切りなおそうとして、雲長殿はどうしたものかとおろおろとし始める。

そりゃあ、折角ビシツとかっこよく名乗りを決めたというのに、こゝうも話の腰を折られては勢いが削がれてもおかしくはない。

「ええと。とにかく、壺の中身を検めさせてもらいたいのだが」

「んん……、そうですね。はい。貴方様方にはこの近隣の治安をお守りいただいておりますから、特別に中身を見せて差し上げましょう」ともつたいぶって言う商人の顔は、まるで芝居の悪役然としたいやらしい表情になっていた。

「う、うむ」

雲長殿は荷馬車に積まれた壺の中身を検分し、それが確かに塩であることを確認する。

そうして「これはどういうことだ」と厳しい表情になったところで、官民が合同で懇切丁寧な解説を始めた。

「あ、う……」

それからの雲長殿は実に百面相といって良かった。

目を見開いて驚いたかと思えば、段々と表情が暗くなり、しまいは真つ赤な顔で「申し訳ない」と頭を下げ、街壁のほとりに座り込んでしまう。

「もし、雲長殿」

一団の通行許可が下り、仲間たちが街中へと繰り出していく中で、それがしは黄昏る雲長殿に声をかけに行った。

何せ、ある意味同志である。

このまま捨て置いては、胸がさらに痛みそうだった。

「……何だ」

雲長殿は俯き、膝を抱えて座り込みながらこちらを見ずに言った。「いえ、やっぱり今まで塩を自分で買ったことがなかったのかなあと疑問に思いました」

「……村にいた頃は、兄様が用意してくれていた。それに村では塩が採れたから……」

少し涙声なのが心に響く。

「その、自分で料理をされたりとかは」

「……ない。何時か覚えようとは思いますが、今はそれどころではない」

西日の向こう側に、カラスが群れなして飛んでいった。

「ところで、北郷殿の右腕とのことですが、お味方は一体どちらに？」  
「……慌てて貴殿らを追いかけてきたので、ご主人様とは離れてしまった。今は黄巾賊を警戒すべく、冀州との州境に陣を張っておられると思う」

しばしして、南方から誰かを呼ぶ声がかすかに聞こえてきた。

「愛紗ーっ。返事をしてくれーっ」

「愛紗ーっ、一体何処にいるのだー！」

それはまだ若さの残る青年の声と、幼い少女の声だった。

## 第五回 劉玄德、太陽と出会い苦悩する

劉玄德と北郷一刀。

共に三国時代を代表するこの二人の英傑は、生まれこそ違えどもその思想から立ち位置に至るまで、まるで鏡写しのように良く似ていることが、古くから多くの歴史家によって指摘されていた。

時代を隔てた他人にすら指摘できることが当人に分からぬ訳もなく、面白いことに二人は正史・家伝の中に互いが互いを強く意識しているかのような言行を数多く遺している。

昨今は、こうした「二人は互いを意識している」という記述のみを曲解して「劉玄德をめぐり、三国一の美男子である北郷一刀と三国一の忠臣である呉子遠を交えた三角関係があったのだ。クソ萌える」などとする三文劇作が巷には溢れかえっているが、筆者はこうした風潮を嘆かわしく思う。一言で言えば、そびえたつクソだ。

二人が持ち得た感情は決して恋愛のそれではない。

恐らくは目指す理想を同じくしているという共感に、互いに立ち位置が似ているからこそ生まれる憧憬、そして……、嫉妬。

そんな華やかさとはほど遠い、もつと暗くじめじめした感情を二人は互いに抱き合っていたのではないかと思われる。

そうでなくては、彼らが共同戦線をとった際に、彼女が取った”冒險的行動”の意味が理解できなくなってしまうのではないか。

それに、北郷一刀様は呉子遠様と両思いだし？

この二人の組み合わせに付け入る隙なんてないし？

いずれにせよ、劉玄德は北郷一刀と出会ったことで、何らかの大きな影響を受けたことは想像に難くない。

あ、主人公の女が好きな男を男に寝取られる展開だけは認めても良いのではないかと、最近思うようになりました。まる。





雲長殿を迎えにきたらしい義勇兵団の将——、北郷一刀殿は彼女から事情を聞くや否や、それがしに向かつてぺこりと頭を深く下げた。

「あの。愛紗が御迷惑をおかけしたみたいで。すいません！」

何処か浮世離れた、不思議な雰囲気を持った青年だ。

偉ぶっているわけでもなく、強者に媚びへつらっているわけでもなく、何と言うか自然体で謝っている。

多分、世間ずれをしていない、相手の身分を気にしない素朴な人となりをしているのだろう。

今も単純に自分たちに非があると素直に思っているからこそ、ああも直角に頭を下げているのだ。

そういった手合いは地方出身の武官の知り合いにもいくらかいた。

ただ……、多くの場合、素朴は粗野と紙一重であるはずが、彼の場合は素朴さとともに何故か気高さまで感じられるのだ。

彼の見てくれば男だというのに、まるで今まで仕事という仕事をしたことがないのではないかと疑問に思うくらいに整っているし、着ている物も市井に一回っているような代物ではない。

キラツキラしておるのだ。

キラツキラ。

ぬおお。ま、眩しい。

それがしが眩しそうに半目になっていると、

「ご、ご主人さま……っ。そのっ、これは私の落ち度ですから……っ  
！」

雲長殿があからさまにうろたえ始めた。

どうやら、主の面目を潰してしまつたとても思つたらしい。

そして、かの黒髪美人が羞恥と情けなさで赤く縮こまるほどに、それがしまで居心地の悪さを感じていた。

何せ彼女の仕出かした間違えというのは、下手をすればそれがしもやりかねなかつたものであつたからだ。

……羞恥心の痛みって長く続くものなんだなあ。

「ううう……、それならば、私もっ」

しまいには古傷(比較的新しい)にもだえるそれがしに向かつて、雲

長殿まで再び頭を下げ始めてしまう。

やめて！ ほんとに、居たたまれなくなるから！

上から見える母性の谷間は確かに眼福ではあるが、マジでやめて！  
いい加減に耐えかねたそれがしは、北郷殿の平身低頭に対して知識  
人然とした風を装い、曖昧にはに cand 応えた。

「……いえいえ、お気になさらず。雲長殿は知らなかったことを知ることができた。我々も特に損害を受けたわけではない。何も問題はないじやありませんか」

完璧な答えである。

雲長殿の座る針の筵を取り除き、それがしを苛んでいる羞恥心の雨  
あられを払う、全てが丸く収まりそうな受け答えであった。

「あ、ありがとうございます！」

それがしの言葉に北郷殿はキラツキラと笑顔を見せる。西日も相  
まっつてくつそ眩しい。

眩しいけど、これで万事うまくいったかな？

それがしはほつと息を吐く。

……が、彼はこちらが雲長殿の落ち度を水に流したことに対して、  
さらに頭を深く垂れ始めた。

「ですが、やはりこちららも迷惑をおかけした身ですから——」

「エツ？ いえいえいえ……、雲長殿は国法を守らんとしたわけです  
から。義に従っただけですぞ。義によって動いた者に、仁をもって応  
えぬというのも儒の道より外れてしまいます。むしろ義の範を見せ  
てくださいった雲長殿には、我々もかくあるべしと——」

「あ、あの……、その持ち上げられ方は、羞恥心が痛くて——」

もじもじと雲長殿。

「ありがとうございます。ですが、そういうわけにも……」

あくまでも北郷殿。

そうして三人で互いにぺこぺこ。身分の別なくぺこぺこぺこ  
……。

……何だこれ。

これは都でも経験したことがない、新感覚だ。

それがしはただ困惑する。

お金か物でも迷惑料として貰えばいいのだろうか？

だが、義勇兵団という稼業はある意味で人気商売であり、へたなことをして自分たちの評判を下げるのはまずい。

我々から評判を取り払ってしまえば、ただの暴力団体に成り下がってしまうではないか。

いや、それはもうほんと。勘弁して下さい……。

延々と続くかに思われたペこぺこ空間を打ち破ったのは、北郷殿の隣であくびをしていた赤髪の少女であった。

「なあなあ。愛紗は何か悪いことしたのだ？　もし、悪いことしたなら、ごめんなさいして、鎧のお兄さんに許してもらっておしまいじゃないのかー？　鈴々はいつもそれで許してもらっているのだ」

「いや、鈴々。そういうわけにも——」

「その通りですぞっ！」

それがしは勝機を得たとばかりに強い調子で言い放った。

適当なほらを吹いて相手を煙に巻くことは、それがしの数少ない特技である。

それがしは、崑崙山に封じられた仙人の失敗談から西王母の浮気話にまで至る壮大な展開の物語をまくし立てては、彼らを無理やりに説き伏せることにした。

「——というわけで……、あっ！　そもそも、北郷殿は一軍を預かる代表者でありますぞ！　部下の手前、みだりに頭を下げてはなりませんぬっ」

「あ、はい。えっと。心遣い、ありがとうございます……？」

「いえ、いえ！　では、これで水に流したということ。これで！」

「あ、ちよつと待って下さい！」

まだ何かあるの!?　とそれがしが泣きそうな顔になると、北郷殿もすまなそうな顔になって続けた。

「あの、劉備さんの部隊の方ですよ？　長旅のところ申し訳ありませんが、是非劉備さんと一緒に俺たちの陣に来てくれませんか？　上司の公孫サンさんという方が会いたがっているんです。何でも、昔馴

染みの学友だそうで……」

「はて——？」

まさかの提案にそれがしの首はコテンと傾いた。

「玄德殿の、<sup>ッ</sup>学友？」

「はいー」

公孫サン殿とは、遼西郡の伯珪殿のことだろう。

長吏をやっている將軍であるから、一地方を軍・政ともに束ねているような御仁である。

「そのような出来物と、玄德殿が……？」

「はい……！　って、何で疑問系なんですか？」

「……この案件につきましては、一旦ご提案を受け取らせていただく形で、後日返答させていただきたいと思えますぞ。こちらにご連絡先を、お願いできますかな」

「えっ、あつ、はい……。　って、何で急に役人口調？」

それがしは、北郷殿の連絡先を受け取るや否や、その場より脱兎の如く逃げ出した。

確認しなければいけないことができたからである。

街門をくぐり、州刺史である劉伯安様の御殿へと続く大通りを走り抜け、途中でチンピラがたむろしている裏道へと駆け込み、怪しげな商売をやっているゴロツキどもを押し分け、我ら玄德殿と物騒な仲間たちが天幕を張っている流民街へと辿り着く。

……街の人々を怖がらせるという理由から、ここしかまともに駐屯が許される場所がなかったのだ。

「あつ、子遠さんおかえりなさい！　血相を変えて、どうしちゃったの？」

玄德殿は、少年兵たちと一緒に夕飯の支度をしていた。

流民の放置したごみの悪臭をかき消すようにして、薪をくべられた炊事場から、腹を刺激する香りが立ち上っている。

「ちよつと、アンタたち塩の配分間違えないでよー」

炊事場からは上司殿が幼年の団員を叱責する声も聞こえてくるが、今は特に重要な情報ではないため捨て置くことにしよう。

暢気な声をあげる玄徳殿に、それがしは息を切らせながらも問いかけた。

「……公孫伯珪殿とお知り合いなのですか？」

「白蓮ちゃんど？ うん、風鈴先生——、えつと盧植様の私塾で一緒に勉強したお友達だけど」

「はえー、なるほどなー。」

盧植様の私塾で共に学んでいた間柄と。

なるほど、それなら納得も……、

「いやいやいやいや！ ええええええつ？ 何故、義勇兵なんぞをやっておるのですか……っ!？」

納得できねえ！

それがしはその場に崩れ落ちながら、呆れ声をあげた。

◇

盧植子幹とは当代随一の学者であり、わいろを受け取らない政治家

——、つまりは清流派の士大夫として持て囃される大人物である。

……というか、現在進行形で国政に携わる宰相だ。

それがしも都で一度だけお目見えたことがあるが、一目見ただけで「すげえ、でけえ……」と感服してしまうほどの英傑であった。

人に歴史ありとは言うものの、我らが首魁たる玄徳殿がそのような御仁のお弟子様であったとは……。

長旅を終えて人心地ついたそれがしたちは、天幕の前で炊き出した飯を車座になって掻きこみながら、玄徳殿の昔話に耳を傾けていた。

曰く、昔はいじめられっ子だったとか。

白蓮ちゃんと仲良くなつてからは友達もたくさん増えたとか。

色々話を聞いた結果、上司殿が五歳に満たない団員たちにご飯を手づから与えながら、呆れ声で問うた。

「アンタ、何で官職を得なかったのよ？」

彼女の疑問はもつともなものであった。

今日の社会において学歴はとて大きな意味を持つ。

例えば、都か地方で官職を得たければ、都の大学を出るか、高名な

学者に師事する、または地元の名士の推薦を受ける必要があるのだ。そう考えると高名な学者の教えを受けた玄徳殿は、官職を得る条件を当然ながら満たしているのであり、ふらふらと手に職をつけず、義勇兵などにその身を落とす必要がない身の上であった。

だというのに、それがしと出会う前は何故天の御遣い探しなんぞをしていたのだろうか？

お母さん、今頃泣いているんじゃないだろうか……？

「そうなんですよ、桃香ちゃんは本来こんなことをしていちやダメなんです！」

国議殿がここぞとばかりに鼻息を荒くして、「家に帰りましょうよ」と叫び始める。いつもの発作であった。

常ならば憲和殿が途中でなだめる形で沈下するのだが、彼女も今日は「また始まった、また始まった」とげらげら笑うだけで、国議殿の暴走を止めようとしめない。

見れば、憲和殿の周りには既に酒樽がいくつも転がっていた。あつ……。

まあ、長旅からの帰還だしなあ……。

そんな三人の様子に苦笑いを浮かべながら、玄徳殿は申し訳なさそうに答える。

「あ、あはは……、別に隠していたわけじゃないんだよ。それに私、塾でもあまり勉強ができた方じゃないし」

「腐っても鯛でしょ。勉強の出来不出来は、官職を得た後の立身出世に影響はしても、官職を得ることに影響しないわ」

したり顔でそう返す上司殿に、ご飯待ちの幼年団員たちが「まんまと抱きついてきた。」

「ああ、もう……。順番くらい守りなさい。今の内に儒の教えをしっかり身につけなくては、あそこのクソみたいな恩知らずになるわよ」  
流れ矢が深く刺さった気がしたが、ここは気にしないでおく。

意外なことに、上司殿は五歳未満ならば男女の別なく世話することができるのだよなあ。いつ見ても信じられぬ光景である。

「……何よ」

「いえ、別に」

上司殿に凄まれたため、慌てて目をそらす。

玄徳殿は自信なさげに笑って、さらに続けた。

「うーん、実際官職を得る道もあつただけだね。仕官するちよつと前に、故郷でちよつとした失業者をめぐつた騒動が起きて、騒動を起こした人たちとお話をする機会があつたの」

「お話、ですか」

「うん、お話自体は何でみんなが反乱まがいの騒動を起こしたのかとか、今の大変な環境とかそういうお話」

それがしの相槌に玄徳殿が頷く。

「それでね。政って民の陳情を聞いて、その暮らしを良くしていきやならないでしょ？ でも、民の不満を改善するにはとても長い時間がかかっちゃう」

「確かに。それは、その通りですな」

それがしは頷き、現在我々が居座っている流民街の景色を見まわした。

善政を布いていると専らの評判である、幽州刺史の劉伯安様ですらお膝元の街に税を払えぬ貧困者と失業者を抱えてしまっているのだ。

これは本人の力量不足というよりも、行政というものの本来の腰の重さが影響しているように思われる。

行政は原則として上意下達で動いており、いくら民の声を下級官吏が聞き届けて、行政を改革しなければと発憤したところで、上司が重い腰を上げなければ、反映されることはない。

さりとて、長が直接に民の声を聞こうとしても、当人の仕事量が膨大なものになってしまい、やはり行政が行き届かなくなってしまう。

民の声を可能な限り迅速に反映させるためには、地盤と鞆を持った役人の存在が不可欠だ。

正義ではなく利益を説き、上司の決断を促すためのうまみを用意し、行政改革によって良かれ悪しかれ影響を受けるであろう他方への調整に奔走する。

そんな役人が何人もいて、初めて迅速な行政は成り立つものなの

だ。

あるいは長が常に民と寄り添うことができるよう、雑事をすべて丸投げでき、滅私奉公を誓ってくれる有能な宰相がいれば話は別なのかもしれないが、そんな者は探すだけ無駄だろう。盲亀が浮木に入ろうとするよりも稀な存在を不可欠として求めるなど、あまりにも都合の良い妄想だ。

しかし、いずれにしたって手間と時間がある程度かかってしまうことは避けられない。

今苦しんでいる民に、いくばくかの我慢を強いる必要があった。

「でね。お役人様に私、騒動を起こした人たちと一緒に県政の改善を頼んだんだ。私のお父さん、昔県令をやっていたから、顔見知りのお役人様もたくさんいたし……」

「ふむふむ」

どうやら玄德殿は鞆はどうあれ、地盤は確固たるものを持っていたようだ。

聞けば聞くほど、地方の役人になった方がいいんじゃないかと思えてくる。ていうか、県令で。

えらい父上だなあ。やはり、お嬢様であった。

「でもね。お役人様は快く返事をしてくれたんだけど、中々みんなの職が見つからなかったの。政の改善がすぐに始まらないのは分かってはいるけど、その日を切り詰めて生きている人たちに、その日の職がないのは大変でしょ？ だから、何とかしよう！ ってことで、私は失業者のみんなと一緒に職探しを始めたんだよね。豆屋さんのお手伝いとか、肉屋さんの売り口上役とか、どぶ掃除とか。筵織りなんていうのもやったかなあ。そうしたらね——」

「あー……」

役人経験者であるそれがしと上司殿は、ほぼ同時に納得の声を漏らした。

これは十中八九、職内派閥に関わる揉め事が始まる流れだ。

現在の失政を、先の県令の娘が告発し、先の県令閥であった下級役人が現職に進言する。



これだけでも面白くない話だというのに、さらに先の県令の娘が行政のまったく関わらない場所で、民の陳情を聞き入れて活動を始めては、現職の面目が潰れてしまう。

恐らくは当時も、そしてこれからも現職の県令が玄徳殿たちの陳情を受け入れることはないだろう。

それどころか、進言をした下級役人まで首を切られていそうだ。他人事ながら恐ろしい……。

「それでケチがついたから、官職を得ようとしなかったってこと？」

上司殿が問うと、玄徳殿は頭を振った。

「そうじゃなくて、何て言うのかなあ……。陳情を聞いてくれたお役人様が悔しそうにしているのを見て、私が官職を得ても、すぐに力ない人のために何かできるわけじゃないあつて、そう思ったの」

「そんなの仕方がない話でしょう。改革は急に成り立つものではないわ。ある程度は民にも我慢してもらわないと……」

至極常識的なことを憮然として言う上司殿に対して、玄徳殿はきつぱりと返した。

「でも、今、辛い」って思っている人たちの気持ちは本物だよ？ 見

捨てたりなんて、できないよ」

「むう……」

玄徳殿の瞳はまっすぐ民に向かっておられた。

重税や国政の乱れによって生まれた民の苦しみを、行政が救いきれぬ民の声を、彼女は何とか救おうともがいていたのだ。

なるほど、それならば彼女が役人の道を志さなかったことも理解できる。

仮に役人になってしまえば、行政の上意下達機構に組み込まれてしまいうわけで、今までのような「困っている人がいるから、助けに行こう！」と軽い気持ちで動くことができなくなってしまう。

これでは彼女の美德を潰してしまうに等しい。

同じことを思ったのか、上司殿は玄徳殿を見て、とても齒がゆそうな顔になってしまっていた。

「私は勉強もあまりできないし……。私より役人に向いている人が

いっぱいいるんだから、違う道を目指してみようって思ったんだけど。やっぱり駄目かな？」

「むむむ」

「アンタの志は、まさに賢王、仁君の体現よ。間違っているとは言わなければ、無位無官には性急すぎる。けど……」

上目遣いでそれがしたちを見る玄德殿に、それがしと上司殿は上手く言葉を返すことができなかった。

何やらえらい感動した面持ちでうんうんと頷く強面の皆さんのことは、とりあえず無視しておく。

「ところで、何で白蓮ちゃんの話になったの？」

「あっ」

大事なことを伝え忘れていた。

玄德殿の目指す道については追々考えることとして、それがしはとりあえず北郷殿から言われたことをかいつまんで説明することにする。

かくかくしかじか。

「白蓮ちゃんと会えるんだ！ 嬉しいなっ。北郷さんの陣を訪ねればいいの？ そういえば、同じお仕事をしていたのに北郷さんとも会ったことがなかったなあ。どんな人なんだろ？」

笑顔の花咲かせる彼女を見て、それがしも上司殿と同様にもやもやしたものが胸に湧き上がってくるのを感じた。

うーむ、玄德殿の進む道か。

彼女のために何かできることがあるといいのだが、特に何も思いつかない。

◇

後日、北郷殿のお招きを受けることにした我ら玄德殿と愉快的仲間たちは、こぞって幽州の州境に構築された陣地へと足を運ぶことになった。

「むぐむぐ。お兄ちゃん、もう食べて良いか？」

「まだダメだよ！ 今日のお客さんは劉備さんたちなんだから――」

「、って何でももう食べてるじゃん!? 行動と時制が一致してないよっ!」

「北郷殿。メンマはまだでございますかな? 酒のつまみが切れてしまっています」

「星さんっ、まだ始まったもないのに、何で酒樽一個あけているんですか! あー、もう!」

陣幕の中には、それなりに豪勢な宴席が設けられていた。

流石に軍の糧食を饗しているために、街の酒家で振る舞われる料理には見劣りするが、それでも要所に来客に対する心配りがうかがえる。

宴席の配置も車座で、無礼講を強く意識しているようだ。

ところで、赤髪と青髪の少女に振り回されては右往左往している北郷殿……、大変そうだなあ。

「こんばんわー、お招きに応じて参上しました劉玄德ですけど……」

「ああ、いらっしやい劉備さん! ……って、やっぱり女性なのかあ」「はい?」

良く分からない反応に、きよとんとした顔で玄德殿が目をぱちくりとするが、北郷殿は齒にもものが詰まったような表情を浮かべるだけであつた。

「いえ、どうぞこちらに座ってください。公孫サンさんと呼んできますね」

言うが早いか、伯珪殿のもとへ向かおうとする北郷殿を、

「御主人さま、私が」

柔らかな声が呼び止めた。

ふりふりのついた給仕服を着た、紫髪の女性だ。

零れ落ちんばかりの大層なものをお持ちのようで、それがしも眼福である。

あ、お——?」

「子遠さん、あれって都で流行ってるっていう”メイド服”? だよな。フワフワした感じでかわいいなあ。かわいいよね、服」

「……モノ好きの金持ちくらいしか、あんな服の女を侍らせていない

けどね。あの北郷って男はモノ好きってことかしら。ところでアンタ、今何処見ていたの？」

それがしは玄徳殿と上司殿の問いに答えられなかった。

両脛に感じた凄まじい幻痛によって、しばし頭の中が真っ白に塗り固められていたからである。

悲鳴をあげなかっただけ、それがし偉いと思う。

一体何が起こったの？ それがし何もわからないよ……。ねえ……。

それがしの異変に北郷殿は気付く由もなく、ただメイド服の女性の登場に驚いておられた。

「ええっ!? 美花ミコフアいたのかっ?」

「私はご主人様のためにあるメイドですから、寝る時もお風呂に入る時も、厠に入る時もずっととお傍に侍ることが仕事ですよ」

「厠までずっと傍に? 怖いよっ!」

どうやらメイド服の女性は大層偏った性癖をお持ちらしい。

北郷殿はひきつった顔で彼女に伯珪殿のもとへの遣いを命じると、彼女は優雅に一礼した後、やはり優雅な足取りで陣幕の外へと出て行かれた。

「はあ」

北郷殿の漏らす小さなため息を認めたそれがしは、涙がちよちよぎれる思いであった。

……うん。すっげー、忙しそうだ。

何というか、ほのかに親近感が沸いてしまう。

「ん、アンタは……」

それがしが生暖かい目になっているところで、ふと上司殿が驚きの声をあげた。

その視線の先には青髪の女武芸者が酒瓶を片手に着席している。

女武芸者はにやりと人を食ったように口の端を持ち上げると、上司殿に対して酒瓶をふらふらさせて言った。

「およ。また会いましたな、文若殿。どうですか、宴席が始まる前に一献」

「……遠慮しておく。というか、主の手を煩わせてるんじゃないわよ」「これはしたり。ですが、この場に私の主はいないのですよ。私は伯珪殿の客将ですから」

どうやら上司殿と女武芸者は知り合いのようだ。

好奇心がうずいたために「何処でお知り合いに？」と尋ねてみると、「アンタを探す時の護衛」とどすのきいた声が返ってきた。

完全なるやぶ蛇である。

「探し人は見つかったようで」

「……お陰さまでね」

ふふんと悪戯小僧の顔になる女武芸者と、とてもご機嫌が宜しくなくなる上司殿。

あの組み合わせは……、まずい。

何がまずいって、それがしにやつあたりが飛んできかねないのだ。事実、脛に幻痛が起きていた。

それがしが話題そらしのネタを探そうとして、周りをきよろきよろしている、

「はわわ」

「あわわ」

陣幕の影に隠れるようにして、大きな帽子をかぶった少女が二人ほど我々の様子を伺っていた。

どう見ても怯えていらっしやる。なにゆえ？

「あ、あれが匪賊狩りの鬼囊さん……」

「匪賊殺しの愚連隊……」

なにゆえもクソもなかった。どう考えても風評被害である。

いや、正当な評価というべきだろうか。

警戒を和らげるべく、何か声をかけようかとも思ったが、やめた。

口を開こうとした瞬間、少女たちがびくりと身体を震わせたこともその一因にあったが、一番の原因は脛に感じた竹のこぎりの痛みである。見下ろしてみると、特に異常はない。

いつもの如く、幻痛であった。それがしの脛、どうなっちゃったの……？ 怖い！

思い切り顔をしかめながら、辺りを見回すと先日ぶりのツンとした母性、いや顔があった。

関雲長殿である。

雲長殿もこちらに気がつくのと、恥ずかしげに目を伏せながらぺこりと挨拶してきた。

「これは。先日振りになるか、ええと……」

「呉子遠です。雲長殿、どうかお見知りおきを」

挨拶を交わしながら足元を見下ろすが、脛に痛みは走らなかった。

……まったくもって、基準が分からない。

「随分と兵が集まっているのですな」

それがしは陣幕の出入り口から外へと目をやりながら、言った。

州境に築かれた陣地には、どう少なめに見積もっても六千以上の兵が駐屯している。

公孫の牙門旗がたなびくあたりは正規兵であろうが、中には義勇兵も混じっているのだろう。

「そうだな。伯珪殿の兵が四千。ご主人様率いる義勇兵が二千の連合軍だ」

少し誇らしげにいった彼女の言葉に、それがしは感嘆の息を漏らした。

「それは……」

多いなあ。というか、多すぎる。

伯珪殿の私兵の半分も義勇兵が集まっているというのは、それだけ北郷殿にかかる期待が大きいということなのだろうが、同時に伯珪殿との器の違いも顕著になってしまっていた。

思えば、伯珪殿の客将だという青髪の女武者も北郷殿の陣幕で待機しておられるようだし、伯珪殿も内心穏やかではいられないのではないだろうか。

そんなことを考えていると、雲長殿は少し言葉を選ぶようにして問うてきた。

「呉子遠殿」

「はい」

「いや、玄徳殿の兵は何処に？」

ああ、はいはい。

彼女の懸念は良く分かる。

我々は、言葉は悪いが商売敵なのだ。どちらかが稼げば、片方の取り分が減る関係なわけで、両者の兵が互いの顔突き合わせてもろくなことにはならない。

よくよく考えてみると、彼らと今まで直接相対することがなかったのも、そうした縄張り意識が影響しているのかもしれない。

「……大部分は広陽に駐屯させたままですな。ですから、ご懸念の事態は起こらないかと」

「ご配慮、痛み入る」

雲長殿とのやりとりが落ち着いたところで、陣幕の外から馬が駆けてくる音が聞こえてきた。

お、玄徳殿の昔馴染み殿の登場であろうか。

それがしの予想は的中し、程なくして白金色の姫鎧を身にまとった、活発そうな女性が飛び込んできた。

「桃香！ 来ているのかっ？」

「白蓮ちゃんっ、久しぶり！」

「ああっ！ 久しぶり、だ……？」

後ろで一つにまとめられた赤髪を嬉しげに揺らし、にこやかに答えた伯珪殿らしき女性のまなざしは、まず玄徳殿を見て、その次に玄徳殿の後ろに控える明らかに柄の悪い強面どもへと向けられた。

「お頭のダチってあの方ですかい」

「ウス」

「姐さん、ちっす！ よろしくオナシヤス！」

我らが愉快的な強面どもが思い思いの反応を見せる。そのどれもが、彼らなりに友好的なものだ。彼らなりに。

伯珪殿らしき女性は強面の姿を認めると、目を丸くして大口を開けた。

「桃香が、桃香が、不良に、うーん、うーん……」

しまいには白目を剥いて、その場に倒れこんでしまう。

「えええええっ!! 白蓮ちゃんっ、どうしたのっ? しっかりしてええっ!」

それがしは色を失って駆け寄る玄德殿の後姿と、伯珪殿を見て安堵した。

良かった。あの人、常識人だ……。

◇

呼び主の一人がいきなり倒れてしまうなどの問題は発生したものの、宴席自体は別段問題もなく開かれた。

とはいえ、愚連隊と商売敵、それに正規兵の饗宴だ。よく分からない緊張感が、場に漂っている。

何はともあれ、自己紹介であった。

「劉玄德です! 子遠さんたちと一緒に義勇兵団をやっていますっ。最近では張世平さんのところで隊商の護衛なんかをやっていました!」  
主客を代表して玄德殿が口火を切ると、北郷殿や伯珪殿の陣営の方々が驚いたように口を開く。

「まさか、あの少女が」

「……匪賊殺しの首魁があのような少女だったとは」

やっぱり合わないよなあ。それがし、今ぼやいた御仁らの隣へ移動して「坊主、気が合うじゃねえか!」と酒を飲み交わしたいところであった。坊主じゃないかもしれないけど。

「あ、あの……」

おずおずと帽子をかぶった金髪の少女が、疑わしげな面持ちで玄德殿に問うてくる。

「ん、どうしたの? ええつと……」

「しよ、諸葛孔明でしゅつ! あ、あう……。え、えつと、玄德さんが義勇兵団を率いているというのは本当なのですか?」

孔明殿という御仁の言葉に、玄德殿の傍に控えていた烏桓族の青年が顔をしかめた。

うちの少年兵は血の気が多く、玄德殿のことになると見境がない。



鉄血団の掟は、今もなお条文増加中であった。

確かもう五十一カ条くらいあったはず。御成敗とか土道不覚悟って何だろう。

「なあ、嬢ちゃん。それはうちのお頭がアタマ張る器に見えねえってことか——?。」

「ひっ」

「あ、ロウハン君駄目だよ。そういう怖い顔しちや駄目!。」

孔明殿に噛みつきこうとする褐色肌の狂犬を、玄德殿が優しく制した。

「……うす」

事実、彼らは抜き身の刃のぶるとき危うさがあるが、玄德殿の言うことは飼い犬のように大人しく聞きいれる。

後、皆が明らかに玄德殿の母性を意識していた。

玄德殿がにつこり笑うと、あの烏桓族の青年はいつも顔を赤くするのだ。

怒らせたなら怖いので、みだりに指摘するつもりはないが、いつかそれをネタにからかってやろうとも思う。

それがしは、以前見捨てられた恨みを絶対忘れないよ。

「んと、孔明ちゃん。私は勉強もできないし、武術も得意じゃないけど、一応義勇兵団の代表者をやらせてもらってるよ。というのも、立ち上げた当初は子遠さんと私、数人しかいなかったから、かな? 言いだしっぺも私だし……」

「な、何故、義勇兵団を立ち上げられたのですか?。」

続く問いに、玄德殿はきっぱりと答えた。

「匪賊に困ってる人がいるんだもん。助けたいなあ、って思ったからじゃ駄目?。」

孔明殿は玄德殿の答えを聞いて、「あっ」と声を漏らした。

「あう、大丈夫でしゅ……」

申し訳なきように縮こまる孔明殿であったが、その表情は柔らかかった。

もう一人の三角帽子をかぶった少女も、少し口元が綻んでいる。

雲長殿も、赤髪の少女も、その瞳に宿る感情は決して悪いものではなかった。

要するに、玄徳殿は彼女らの抱く志を同じものを抱いていると判断されたのであろう。

「それでね、私の大事な仲間がね。子遠さんと、桂花ちゃんと、ロウハシんくんと、廖化さんと——」

だが、玄徳殿の紹介を受けた団員の顔ぶれを見て、再び彼ら彼女らの顔がひきつっていく。

「どうもどうも、呉子遠と申します」

「荀文若」

……までは良いとして、

「ウス」

「廖化だ、宜しくな」

団員の大部分が、匪賊よりも性質の悪い相貌をしているからね……。仕方ないね……。

特に頬傷のオッサンは笑顔すら恐ろしい。

当人はニツコリやったつもりなんだろうが、他陣営の方々との間にドツカリと大きな溝が生じたのが良く分かったよ、それがし。

他と違う反応を見せたのは、青髪の武芸者と北郷殿だけであった。

青髪の武芸者は平気な顔で酒瓶をぐびりと呷っており、北郷殿は何故か上司殿を見て驚いておられる。

ちなみに伯珪殿は寝込んでおられた。

青髪の武芸者は上司殿の護衛を務めていたそうだから、ある程度こちらの事情にも通じているのかもしれない。

ただ、北郷殿の反応が分からなかった。

何故、強面じゃなく上司殿に反応するのだろうか？

「あの、文若さんは——」

「何よ」

上司殿の男嫌いは、北郷殿が相手でもいかに発揮されておるようであった。

北郷殿は少し、たじろぐも言葉を続けようとする。肝っ玉太いな

あ。

それがしは雲長殿が不機嫌そうな顔になっただけで、びくびくしているというのに。

「曹操さんの陣営に士官する予定はなかったのですか？」

「……ヌツ？」

北郷殿の言葉に、それがしは首を傾けた。

曹孟徳殿といえ、上司殿が都で心酔なさっていた御仁であり、それがしが未だ母性を拝めていない人物でもある。

何で、会ったばかりの彼が上司殿の孟徳殿に注ぐ親愛の情を知っているのだろうか？

「初対面のアンタが何で私のことを知っているのか本気で解せないんだけど……、私にだって付き合があるのよ」

そう答える上司殿の顔はとても機嫌が宜しくない。

多分、男に自分のことを見透かされたというのが気に入らない一因であろう。

「あ、すいません。やっぱり……、”俺の知ってる歴史”と違うんだ」

慌てた様子で謝罪した後、独り言のように呟いた彼の言葉を聞いた瞬間、それがしは目を見開く。

「アイエツ、まさし君!!」

「ちよつと、アンタ……」

上司殿の制止がかかるも、それがしの確かめずにはいられなかった。

「あの。も、もし。北郷殿」

「え、あ、はい？」

それがしは深呼吸して、問いかける。

「――肥えだめは至高の”内政ちーと”である」

「ん、あ？ 肥えだめ、ですか？ 肥料を作るための。というか、内政チートって……、ズル？ 何で、ズル？」

肥料！ 肥えだめと聞いて、すぐに肥料という言葉が返ってきた！

震える声で、それがしは続ける。

「<sup>あぶみ</sup> 鐙を発明すれば、天下を取れる」

「え、あ？ 鎧ですか？ 鎧って馬に乗りやすくするための道具ですよ。確かに騎馬隊の利便性は上がるかもしれないけど……」

む、これは期待した答えが返ってこない。

まあ、まさし君が都で鎧を発明した後、上流階級を中心に利用が広まっちゃっているものな。知っている人は知っている。

むむむ、それでは……、

「火薬は最強の——」

「あの厠を爆発させる妙ちくりんな術の話はやめなさい！」

これは上司殿の不興を買ってしまうため、やっぱやめることとする。

むむむ、後は小粒なネタしかないんだけどなあ。

「武田の騎馬隊は存在しなかった」

「武田!?! 何で、三国時代に武田っ!?!」

「山本勘助も実在しなかった」

「いや、それは諸説あって……。何で風林火山の人っ!?!」

「三段撃ちは眉唾である」

「そもそも、この時代鉄砲ないんでしょ?! そりゃ、そうだよっ!」

それがし、感動を隠せなかった。

こんなに話の合う御仁は、まさし君以外に他にいなかったのだ。

彼の話す天界の歴史物語は、とても刺激的で新鮮であった。

織田信長。徳川家康。あと、エロザル？ あと……、何か色々。

もしかして、彼の話していた内容は、作り話の類ではなく、何処か異郷の神話であったのだろうか。

それで、目の前の北郷殿とは同郷と。

うん。それなら、話が繋がる気がする。

「上司殿……」

上司殿に目をやると、彼女の北郷殿を見る目はすっかり変わっていた。

「ああ、アンタもあの変態の仲間なわけだ……」

「ちよつと待って！ 俺、今すごい風評被害受けてる気がする！ちよつと待って！」

北郷殿が必死な顔つきで、名誉の毀損を訴えてくる。  
不名誉なことなど何もないのに、不思議な反応であった。

しばしして、北郷殿が何かに思い当たったように固まる。

「あれ……？　もしかして、呉子遠さんの言う”まさし君”て俺と同郷なのか？」

「北郷殿の故郷がどこかは知りませんが。まさし君は異民族の出ですぞ。良くそれがしに、不思議な異郷の知識を教えてくださいました」

「その、故郷の名前は聞いていますか？」

「東のほうの島国だとか？　ニッポン？　ニホン？　そんな感じの名前だったように思いますが」

それがしの言葉を聞いた北郷殿は、ぽかんと口を開けた後、

「そっか」

少し俯き、その身体を震わせた。

「御主人様……」

雲長殿が労わるように声をかける。

顔をあげた北郷殿の目は、何故か涙で潤んでいた。

「あ、いや。気にしないで、愛紗。俺、この時代に一人ぼっちじゃないかもしれないって……。そう思ったら……。何だか嬉しくなっちゃって」

そんなに、まさし君の存在が嬉しかったのか……。

それがしも思わず涙ぐんでしまう。

「良く分からなかったけど。北郷さんが一人ぼっちじゃなかったみたいで、良かったね」

とそれがしの袖を引っ張って涙ぐむ玄徳殿。可愛い。

「御主人——」

しみりとした空気の中、主人を慮る雲長殿の言葉は、ふよんふよんした突風によってかき消された。

「ご主人様は一人ではありません。今宵は、それはもうぬっちょぬっちょと一人ぼっちではないことを確認いたしましょう？」

先ほどの紫髪のメイドであった。

「なあっ、おい。美花っ！　この御主人様に気安く触れおってからに

……！」

顔を真っ赤にして怒る雲長殿の非難に貸す耳もなく、メイドはひたすら北郷殿をその母性で労わろうとする。

ふよんふよんした身体が、母性がくんずほぐれつして、ああ、大變に羨ましい——。

「あ、あいでででででででででででで?！」

見えた! 見えたよ、それがし!

今一瞬、凄まじい速度でそれがしの脛を二つの竹のこぎりが行き来していたのがっ!

でも、犯人までは分からなかった。

両隣にいるのは、玄德殿と上司殿で、二人とも竹のこぎりなんか持っていない。

どうということなの……。

「……コホン」

すったもんだの場を斬り捨てたのは、あまり機嫌の宜しくない孔明殿であった。

「御主人様、玄德さんたちが自己紹介してくれたので、私たちも名乗りませんと」

「そうですね。傍から見ている分には、面白い見世物ではありませんが、折角の肴が冷めるのもまずい」

孔明殿の指摘に、青髪の武芸者が追従する。

ちなみに武芸者はああ言っているが、既に肴にも匙と箸を付けているため、冷めるも何もなさそうだ。

我に返った北郷殿たちは恥ずかしそうに顔をそらすと、そそくさ自己紹介を開始した。

「それでは私から。関雲長と申す。先日はその、失礼をいたしました」

「鈴々は鈴々なのだ。一応呼び名は張翼徳? 燕の生まれ! なあ、お兄ちゃん。もう食べていいか?」

「孫公裕です。御主人様のメイドを務めさせていただきます」

「あわわ、ホウ士元でしゅ……。ぎ、義勇軍の軍師をやっていますしゅ」  
「およ、流れ的には私もか。趙子龍。伯桂殿の客将なんぞをやってお

りますな」

……華やかだなあ。

それがしは身内の強面どもへと目をやり、すぐさま目をそらした。と、上司殿からぐいぐいと脇を小突かれる。

「あの帽子の二人。諸葛孔明に、ホウ土元。水鏡女学院の秘蔵っ子よ」「え、あの子達がですか？」

上司殿はこくりと頷く。

水鏡女学院はは荊州にある名門女子校のことである。

数多くの有能な文官を輩出していることで有名で、あそこの生徒というだけで経歴に下駄がつくほどに各地で高い評価を受けていた。

実際、玄徳殿も上司殿の話聞いて「水鏡女学院の子なんだ、すごいなあ！」と素直に驚いておられる。

ちなみに盧植様の私塾と学歴の格はあまり変わらない。

「上司殿から見ても一角の人物なのですか？」

「間違いなくね。この私には負けるけど」

相変わらずのすごい自信だ。

無敵といっても過言ではない。

「……それよりも、あっちの武人連中よ。只者でないのは分かるけど、私に武人の目利きはできないの。教えなさい」

「そうですなあ」

それがしはひよいひよいと諸将を値踏みしていく。

まず雲長殿が目映った。

ツンとした母性の話をする、酷い痛みが襲ってきそうなので、はじめに立ち居振る舞いからその実力を推測する。

「ええと。まず、雲長殿ですが……。それがしが十五人ほどいれば足止めできるかもしれないほどですな」

「そりゃあ、とんでもなく一流だ。他は？」

次に張翼徳殿。

ん？ あー、あれは……。

「張翼徳殿は、それがしが百人いても勝てません。容易く蹴散らされましやう」

「この場にいる誰よりも強いということ？　にわかには信じがたいわね……」

「いえ、相性の問題です。恐らくは関雲長殿とあの少女がやりあえば、互角の戦いになるでしょう。ただ、有象無象には滅法強そうなんですよね……。あの手合いは」

正直に言つて雲長殿はまだしも、翼徳殿とは絶対に戦場で相対したくない。一瞬で殺される自信がある。

あれはもう、生き物としての格が違いそうだ。

「公裕殿は多分、武術のほうはあまり得意ではなさそうですね？」

本当に身の回りのお世話だけなのでしょう。子龍殿は難しいところですが……。恐らくは雲長殿と比肩するかと」

「なるほど、基本英傑ばかりがああ男のもとへ揃っている、と」

上司殿の言葉にそれがしも「ヌウ」と唸った。

あの北郷殿の周りには、智勇双方の英傑が揃いすぎているのだ。

これならば、伯桂殿の株を奪うような義勇兵の集まり具合も理解できる。人は勝ち馬に乗りたいたいものだからなあ。

そして、彼女らを取りまとめる北郷殿であるが……、

「えっと、自己紹介最後になっちゃったか。俺は北郷一刀って言います。大陸の生まれではなくて、その。周りからは天の御遣いなんて言われています」

「エツ？」

玄德殿とそれがしの声が合わさった。

天の御遣い……。実在したというのか。あれは絶対管輅殿の出まかせだと思っただけに。

それにつけても待ち望んだ御遣いの到来である。

玄德殿をちらりと見ると、彼女は何故か何とも言いがたい複雑な表情を浮かべていた。

「管輅殿の予言にあった、あの天の御遣いですか？」

「はい。管輅さんとは直接面識はありませんが、一応そうみたいです」なるほど、天界の出身として改めてみると、身にまとっている衣服のキラキラも、やたら神々しく見えてくる。



……いや、待て。そうになると、同郷らしいまさし君も天界の人間だということに。

まさし君は神仙の類だった……？ 無いな。  
彼はそれがしの親友である。

ただうんこを集めるのが大好きな、それがしの親友であるはずだ。

「……天とは我々中原の人間にとって、特別な意味を持つ言葉よ。大言壮語を吐くだけの覚悟がアンタにはあるのかしら」

「……くっ、御主人様は——っ！」

上司殿の喧嘩口調に、雲長殿が憤りを見せる。あの二人はやたら相性が悪そうだ。

北郷殿は雲長殿を制止すると、苦笑いを浮かべながら上司殿に言った。

「あー、うん。俺自身、何か取り柄があるわけでもないし、偽者と指摘されるとぐうの音も出ないんですよね。ただ、ちよつと御遣いを名乗るのだけは辞められないんです」

「何故」

この問いに、北郷殿は迷いのない瞳で即答した。

「俺が御遣いであることを望む、沢山の人たちが今感じている”辛さ”が本物だと思うから」

「え」

思わず、隣の玄德殿を見てしまう。

今のそれがしは恐らく玄德殿と同じような顔をしていることだろう。

彼の言った、民の感じる”辛さ”を慮ろうという志こそが、まさに玄德殿が持っている志と同じものであったからだ。

玄德殿は驚いたように目を見開き、次にそれがしや上司殿、そして強面どもへと目をやった。

彼女の瞳は何かを恐れるように揺れていて、しまいには憂いを帯びた表情で俯いてしまう。

「玄德殿——」

「うろたえない。今は素知らぬ風を装いなさい。呉子遠」

何か声をかけようとも思ったが、北郷殿を静かに見据えたままの上  
司殿に制される。

「太陽から目をそらせば、受け入れたも同義。」呑まれるわよ」  
その言葉にごくりと喉を鳴らす。

太陽と月のように、異なつた二種の光は共存も可能だ。互いが互い  
を際立たせ、そこに諍いは起こらない。

だが、太陽が二つあつたならば……？

どちらか一方の光に弱い光は呑みこまれてしまう。

先日、玄德殿が語ってくれた話がふと脳裏に浮かびあがつた。

現職の県令が玄德殿の案を頑なに拒んだ理由がまさしく、今の状況  
と酷似している。

彼女と彼は、一体どちらの光の方が強いのだろうか――。

「えつと、劉備さん。どうしましたか？」

「えつ、いやつ。何でもありません！ すつごい、素敵なた志ですよ。

私、感動しちゃいましたっ！」

ぐつ、と気丈に振舞う玄德殿が、それがしにはとても痛ましく思え  
た。

「良かった……」

北郷殿は玄德殿の言葉に安心したようで、ほつと胸を撫で下ろして  
いた。

「この時代に飛ばされた当初は、劉備玄德の代わりを務めなきゃいけ  
ないのかと半ば覚悟していたけど……、本人がいるなら、その必要は  
ないもんな。よし……！」

彼は何か意を決したように玄德殿を見る。

玄德殿がびくりと震えた。

「劉備さん」

「は、はい」

北郷殿は、頭を深く下げこう続けた。

「俺たちを……、劉備さんの仲間にして下さい!!」

「エツ?」

「エツ?」

「ちよ、ちよつと! 御主人様……!?!」

……逆じゃね?

今の流れなら、絶対に「俺たちの仲間になってくれ」といわれるものかと、それがしは覚悟していた。

……逆じゃね?

だが、当人は大真面目だ。

「いや、いや。だって、実際に劉備玄德がいるんだよ? 蜀漢を立てる三国時代の英雄の。愛紗や鈴々だって、本来は劉備さんと家臣だし、朱里しゅりに至っては後半の主役だ。あちらの呉懿子遠さんとタッグを組む感じでさ」

「ヒエツ?」

何故かそれがしに矛先が向いた。マジで何故だ……。

孔明殿もぼかんとした顔でそれがしを見ている。上司殿も、強面どもも見ておられる。

「あの、呉懿さん。後でサイン、いただけませんか?」

「サ、サイン……?」

「はい! 俺、三国時代初期の成り上がりストーリーも好きなんですけど、どちらかという蜀漢末期の生きざまの方が好きなんですよね。元々戦国時代でも真田幸村とかが好きだったし。呉懿といえば、蜀漢最強の大將軍じゃないですか! 王平子均という有能な副将を得て、最大勢力の魏軍相手に奮闘! かつこいいい!」

え、えええ……?

何だ、これ。良く分からない。

「最強……?」

と北郷殿の右腕たる雲長殿はあからさまに対抗意識を燃やしておられるし、子龍殿も何か玩具を見つけたような顔になっておられる。こちらの陣営とはいえば、

「子均って、何進のところまで育てられている娘のことよね。何でここで名前が出てくるのよ」

と上司殿の機嫌が凄まじい勢いで悪化していた。  
とぼつちりすぎる。

「つつちもさつつちもいかなかったところで、雲長殿が大声をあげた。」

「いい、いい加減にして下さい、御主人様！ 我々は、貴方様が主君だからこそ、こうして今まで付いてきたのです。だというのに、いきなり玄徳殿のもとに降るなど……、御主人様は我々を見捨てるおつもりですかっ!？」

北郷殿の陣営から、次々に賛同の声が上がった。

「あ、ええつと……う？」

戸惑う北郷殿に、意外な方向から追い討ちがかけられる。

玄徳殿であった。

「あつ、あのつ。北郷さん！ 今まで一緒にやってきた仲間は大事にしなきゃいけないと思うんです！ だから……、北郷さんと一緒にやっていくのは、その……。ごめんなさい！」

それがしは驚いていた。

いつも我々の意見に喜んで耳を貸す玄徳殿が、「みんなで一緒に頑張る」という提案を退けようとしているのを見て、それがしの胸にある

初めて彼女が我を通そうとしているのを見て、それがしの胸にあるもやもやは一層大きくなっていく。

それからの饗宴は至極あたりさわりのないものであった。

互いの智勇を誉め讃え合い、ようやく覚醒した伯桂殿と玄徳殿が感動の再会を果たし、昨今冀州に集結しているという黄巾賊を共同して撃破することを誓い合った。

そのどれもこれもが玄徳殿にとって望ましい話であるというのに、彼女の顔には翳が落ちたまままだ。

そうして、宴もたけなわとなり、我々が広陽へと戻る段になって、「あはは……。ちよつと酔っちゃったかも。ちよつと寄り道をして、夜風に当たってから広陽に帰るね」

と一人、バルバトスさんを駆って幽州の荒野へと走り出してしまった。

茫然と彼女の背中を見送るそれがしのふくらはぎを、上司殿が蹴り飛ばす。

「甲斐性くらいは持つべきよ」

「又、又ツ？」

「追っかけなさいって言うてんの！」

「は、はひっ！」

それがしは玄徳殿を追って夜の荒野を駆けだした。

バルバトスさんが走り、それがしが走る（徒歩で）。

バルバトスさんが走り、それがしが走る（徒歩で）。

あれ、これ追いつけるかなあ……？

## 第六回 呉子遠、主を励まし策を与える

それがしは激おこであった。

何でよりによってバルバトスさんはこちらの状況を酌量せずに全速力で駆けているのかと。絶対後ろが見えていないはずなのに。

むしろ、それがしの姿を認めた後、さらに足を速めた気さえする。もしやすると、それがしの走りがバルバトスさんの誇りを傷つけてしまったのだろうか。

おこななの？ ねえ、おこななの？

いや、もうほんと限界ですから……。

少し。手心を、くわえてはいただけませんか……！

息を切らせ懇願しつつも、それがしはひたすらに走り続けた。

「玄德ど、げほっげほっげほっ——！」

呼び止めようとはするものの、バルバトスさんの駆け足が盛大な土煙をまきあげているため、煙すぎて息をしていられない。

どうやらバルバトスさんは後方を走るそれがしに手心を加えるつもりはないようだ……。くそう、四足の獣めっ！ あ、いや。言いますぎました。お四足のお口バ様め……！

いつぞやに玄德殿と出会った頃のような星空が広がる荒野を一里駆け、二里駆けて、それがしは肩で息を吐きながら、豆粒大になってしまった玄德殿の背中を必死に見据える。

くっ、目が霞む……。

前に見えるものがせめて正面から見えるお姿ならば……！ 大いなる母性の躍動によって、それがしももう少し頑張れる気がするのだが！ だが！

……まずい、流石に頭が朦朧としてきた。

ふと、竹馬の友であるまさし君の姿がぼわぼわと脳裏に浮かび上がる。

今こうしてバルバトスさんの背中を何とか追隨していられるのは、ひとえにまさし君との特訓のおかげであった。

まさし君の知識はまこと多岐に及んでいて、一頃は「隙を生じぬ二

段構え」な抜刀術や、「縮地」なる神仙の御技を共に再現しようとしたものである。

残念ながら、まさし君自身はものの三日で飽きてしまったが、あの時の鍛錬はこうしてそれがしの血肉となつて確かに生きているのだ――。それがしは内心、郷愁の念に駆られてむせび泣いた。

さらに三里、四里駆けて、それがしは五台山の頂が見える高台にまでたどり着く。

「玄徳殿は……」

先を見上げると、上り坂の先にバルバトスさんの筋骨隆々とした背中が覗いていた。

どうやら玄徳殿はここで下馬をしたらしい。

「よっし、よっしよっしー」

ついに、ついに追いついてやったぞ……！

思わずドヤ顔で勝ちどきをあげてしまうくらいの高揚感がそれがしの体を包み込んだ。

しかし、この偉業の達成はいくつもの幸運の上に立つものである。決して驕つてはならない。

例えば途中、偶然にも夜を徹して旅を続けていた大秦国の隊商と出会わなければ、今頃こうして追いつけていたか……。恐らくは、途中で力尽きていたに違いあるまい。

確かマラトン殿にメロス殿と仰ったか……。

彼女らは疲労困憊のそれがしを哀れに思ったのか、

『平たいかお族にもズツ友がいたんだ。。。わたしの水筒かしてあげる。。。』

と手持ちの水を与えて下さったのだ。

平たい顔族とは何なのか良く分からなかったが、本当に助かった。いつかこのご恩は返さねばなるまい。

しかし、今は他にすべきことがあった。

「玄徳殿」

彼女は高台の斜面に腰をかけ、五台山の天辺に浮かぶ白い星空を眺

めておられた。

彼女から少し離れた場所で足を休めているバルバトスさんが、露骨に不愉快そうな面もちでそれがしを威嚇し始める。マ、マジでおこな  
の……？ 嫌われる理由が思い当たらない……。

「子遠さん」

振り向く彼女の表情は、おぼつかぬ月明かりを差し引いても明るい  
ものでは決してなかった。

だから、それがしは努めて明るい表情で返す。

「上司殿も、皆も心配しておられますぞ。あまり夜更かしなさっては  
お身体に毒です。帰りませんか？」

しかし、玄徳殿はそれがしの言葉に応えようとはせずに、膝を抱え  
てうずくまり、頭を振るばかりであった。

「ごめんね」

「玄徳殿……？」

……何故、この場で謝罪の言葉が口に出るのだろうか？ 良く分から  
ない。

「どうなさったのですか？」

答えは返ってこなかった。

うーん……、困った。

それがしはにっちもさっちもいなくなつて、その場で彼女の復活  
を待ち続ける。

玄徳殿はたつぷりと一刻、下弦の月が東の果てから南へと上つてい  
くまでは顔を上げようとしなかった。

「北郷さん、とっても良い人だったよね」

ようやく口を開かれたかと思えば、話題に出されたのは先刻まで交  
流していた御仁のことであった。

「ああ、はい。そうですなあ」

それがしは答える。

北郷殿の志は、「みんなが仲良く暮らせる世の中を目指す」という玄  
徳殿が掲げる理想と寸分違わず合致していたように思う。

出会い方次第では良き仲間か君臣の間柄、あるいは友人か恋人の関



係になれていたのではなからうか。

例えば……、もし仮に彼女が五台山の麓でそれがしとではなく北郷殿と出会い、助けられていたのなら、今頃は何の疑いも覚えずに北郷殿に付き従っておられたに違いあるまい。

それがしにはその様子が容易に想像できた。

まず、中心に天の御遣いたる北郷殿がいて、その周囲を玄德殿や雲長殿、翼徳殿や軍師の二人が固める。

たまに公祐殿が北郷殿に色を仕掛け、玄德殿が素直な好意を示され、他の面々がやきもきする。

うむ。

何だ、これ。すごいうらやましいぞ。

……でも、女性たちから引つ張りだこというのも気苦労が耐えなさそうだなあ。

鼠よりも小さな心臓を持つそれがしでは、女性たちから発せられる圧迫感に耐えられず、死んでしまうかもしれない。

うむ。

やっぱり、うらやましくないぞ。いや、うらやましいのは確かなんだが、別に代わりたいたいと思えない。変わりたいのは貝である。それがしは貝になりたい。

そう内心で「ご愁傷様です」と北郷殿と天界の神々に祈りを捧げていると、玄德殿は辛そうに言った。

「……北郷さんね。夢に見ていた天の御遣い様とそっくりだったんだ」

「そうだったのですか」

彼が彼女の理想を体現していたというのは、それがしも納得のできることである。

玄德殿は空を見上げて、さらに続けられた。

「夢の中ではね。御遣い様は、みんなが抱えてるどんな辛いことも解決してくれるすごい人で、周りには頼りになる仲間たちがいっぱいいたの」

「……まさしく、北郷殿そのものすなあ」

実際に雲長殿を筆頭として、北郷殿の周りには明らかに英傑が集結しつつある。

その内、世にいる英傑たちを軒並み仲間にしてしまうんじゃないだろうか。そうなれば、もう事実上の最高権力者だ。天下を取ったも同然である。

ただ、そのいずれもが妙齢の女性であった場合、北郷殿を巡って取り合いが始まる可能性が……。おお、違った意味で乱世再開。男で救世主で傾城とか、これももうわかんねえな……。

つい思考が脇道に逸れてしまうそれがしとは対照的に、玄德殿の声色は固かった。

「多分……、ううん。きっと、北郷さんはこの乱れた世の中を良くしてくれると思うんだ。私にはそのための準備もちゃんと進めているように見えた」

「それがしの目にも、そう見えませんでしたぞ」

「あ、やっぱり？」

実際、北郷殿の陣営を訪ねてまず気がついたのは、義勇兵たちの規律の整い方であった。

何と言うか……、正規兵の整い方に良く似ているのだ。

河南で軍事に携わった経験上、それがしは兵の規律が彼らの所属している軍の影響を強く受けることをよく知っている。

例えば、遠征を主とする騎馬隊の兵ならば、おおらかで刹那的な快楽を求める性格に染まりがちだ。

あるいは戦の先陣を切る決死隊ならば身内同士の結束が固くなり、町の警邏を主とする兵ならば性格までお固くなるか、態度がでかくなることが多い。

他にも水軍ならば声がやたら大きくなるとか、兵科の数だけ個性がある。

ちなみに河南の兵たちは、怠けることとそれがしを苛めることに特化していた。訴訟も辞さない。

以上を踏まえた上で、北郷殿の兵を見てみると、民兵の緩さと憲兵のお固さが入り混じった、何とも中途半端な立ち居振る舞いをしてい

るように見受けられる。

これは恐らく、急造の義勇兵団に憲兵寄りの規律を叩き込んでいたためであろう。

手本としているのは伯桂殿の正規兵だろうか？

にわか仕込みであるからか今は流石に頼りなくも見えるが、いずれは何処に出しても恥ずかしくない精兵に生まれ変わるだろうとそれがしは見ている。

武人の強弱とは違い、兵の錬度に個人の才覚は関係ないからだ。

ただ……、問題となるのは北郷殿が何故ただの民兵に正規兵並の教練を施しているか、なのだよなあ。

単に匪賊を狩っているだけならば、そのような手間暇をかける必要などない。

義勇兵などというものは、最低限に隊伍長の言うことが聞けて、敵を前にしても逃げ出さず、よそ様に迷惑さえかけなければいいわけで、事実それがしたちは戦で必要な最低限度の規律と「玄德殿を悲しませない」という不文律を守る以外にはすこぶる自由気ままに過ごしていた。

いや、流石に少しは規律も整えた方がいいんじゃないかなあとも思うのだが……。

「私にはすごいことをしようとしてるとしか分からなかったんだけど、子遠さんには北郷さんが何をしようとしているのかわかって分かる？」

それがしは少し考え込んで、答えた。

「……恐らく、”上”を目指しているのでしょうか。出世をして、何処ぞに領地を得て、自分たちの理想を具現化するために」

「それって朝廷から官位をもらうってこと？」

玄德殿の問いにそれがしは頷く。

「北郷殿は……、好都合なこと”天の御遣い”という大きな看板をも背負っておられます。ゆえに彼が民を守り名声を得ている間は、”天子”様を絶対権力者として頂く中央の官吏たちも彼を悪いようにはしないでしょう」

「何で？」

「自分たちの人気取りに利用できるからです」

それがしは断言する。

そもそも匪賊が増えた原因は、各地にかけられる重税などの失政にあるのだ。

ここでいたずらに北郷殿を処罰してしまえば、「じゃあお前らは我々に何をしてくれるんだ」と朝廷への反感が募りかねない。

だったら、北郷殿を自陣営に組み込んで「あいつは俺たちの命令で動いていたんだから、俺たちに責任はない」と言い張った方が自分たちの利益になるだろう。少なくとも、それがしならそうする。

「多分、匪賊の被害があらかた治まったあたりで中央に招へいされるのではないかと思います。飼い殺しか、重用か、どの程度の官職と領地が与えられるかまでは流石に分りかねますが……」

そうして領地を治めるようになった時、はじめて彼に付き従う者の質が問題となるわけだ。

中央向けの失点を防ぐためにも、外向けの看板をこしらえるためにも、文武ともに信頼の置ける家臣はいればいるほどありがたい。

それと同時に、領内の治安を守るほど規律の行き通った私兵たちは、北郷殿にとっても領民にとっても、心強い存在となるだろう。

それがしがそのように説明すると、玄徳殿はため息交じりに口を開いた。

「そこまで分かっちゃうんだ。やっぱり、子遠さんは凄いなあ……」

玄徳殿が他人を誉める時は、いつも心の底から偽りのない気持ちで称賛する。

だから、誉められれば嬉しくもあるし、こそばゆくもなるのだが、今回の称賛はいつものそれとは少々毛色が違って思えた。

何と言うか、少し自己嫌悪の色が混じっておられるかのような……。

それがしは慌てて言い繕う。

「いえ。都暮らしが長かったためです。上司殿なら、もう少し正確な予測ができるんじゃないかと」

「あはは。桂花ちゃんもすごいよね。私たちが手こずっていた匪賊退治をあつという間に終わらせちゃうんだもん……」

玄徳殿はそこで一旦尻切れトンボに言葉を詰まらせたが、それがしには続く言葉が分かるような気がした。

——それに比べて、私は。

と仰りたかったのではなからうか。

だが、何故自虐されるのか。

玄徳殿はよくやっておられる。あの縦横無尽に悪漢暴漢を駆逐する怖い人集団を、その人徳と母性で大いに統率しておられるではないか。それがしには到底できぬ所業だ。というか絶対にやりたくない。貝になりたい。

「玄徳殿——」

彼女はそれがしのかけようとした言葉を遮るようにして、続けられた。

「北郷さんは、領主様になって今よりもっとたくさんの人たちを幸せにするつもりなんだよね」

「それは、恐らくはそうかと」

「だったら……、私も”天の御遣い”って名乗っちゃおうかな？」

それがしは仰天した。

「えっと、それはどうい——」

”天の御遣い”を名乗ってみんなのために頑張ったら、朝廷から官職がもらえるかもしれないんだよね？ そうすれば、もっとたくさんの人を助けられるようになるはず。私の考え、間違ってる？」

それがしは返答に窮した。

彼女の発想は、単純な理屈としては確かに間違っていない。

幸い玄徳殿は漢王朝に連なる劉姓をお持ちであるから、やりようによつては北郷殿より高い位を手に入れることは可能であろう。

ただ、ただなあ。うーん……。

それがしは脳裏に浮かんだ、とある懸念を彼女に問うた。

「以前、玄徳殿は”不自由になるから、官職には就かなかつた”と。そう仰いましたな。お心変わりなさったのですか？」

彼女は役人の上意下達に縛られ、今この瞬間困窮する人々を助けられない事態に陥ることを厭ったからこそ、今の立場に甘んじておられるのだ。

仮に官職を得たとしても、理不尽や不自由を押し付ける上司の存在に彼女はきつと苛まれるに違いない。

玄德殿はそれがしの指摘を受けて、とても悔しそうな表情を浮かべられた。

「だって……、しょうがないもん」

「しょうがない、とは」

「……私が頑張って助けた人の数の何倍も、何十倍も北郷さんは幸せにしちゃうんだよ。北郷さんを慕う義勇兵の数を見れば分かる。北郷さんの思い描く理想を形にしてくれる軍師がいて、悪い敵をやっつけてくれる凄腕の武人がいて……、それで、それで、みんなにも慕われているもん……」

ここに至って、それがしは彼女の抱えている感情の正体にたどり着くことができた。

玄德殿は、北郷殿に嫉妬の感情を抱いておられるのだ。

自分と同じ志を持ちながらも、自分よりも要領よく理想を実現しようとしている彼を心底羨み、自己嫌悪に陥っておられるのだ。

——自分たちは頑張っているようで、実は頑張っていないんじゃないだろうか？

——困っている人たちを助けているつもりが、じつは大した助けになっていないんじゃないだろうか？

そういった不安の数々が、自分と同質の存在と向き合ったせいで顕在化した。

もしやすると、先刻に彼の提案を拒んだのも嫉妬心が邪魔をしたせいなのかもしれない。

それがしは、彼女が負の感情を抱いたことにとても驚いていた。

玄德殿は、いつだってどこでだって誰にでも優しくできる、まさに聖女然とした心の持ち主だ。

不用意に人を嫌うことなどあるわけがなく、もし嫌うことがあった

としても、それは相手が悪人である場合に限られている。

そんな彼女の横顔に人並みの感情が透けて見えることが、それがしには意外で仕方がなかった。

見誤っていたのかもしれない。劉玄德という人物を。

彼女は誰かに認められたい、褒められたい、勝ちたいといった人並みな感情を持ち合わせた、ただの女の子でもあったのだ。

それがしが呆然とする中、きゅつと下唇を噛みしめた玄德殿は、震える声を絞り出した。

「北郷さんがみんな救ってくれるなら、多分……、私、要らない子だも  
ん」

あ、それは――。

「いえ、それはいいです」

そのお言葉だけは流石に即答でぶった切る。

それがしのあまりの即答ぶりに拍子抜けしたのか、玄德殿は涙に濡れた目をぱちくりとさせ、こちらを見ては固まっておられた。

「……え、え、何で？」

「いや、何でと仰られても」

それがしは膝を抱えていることで、むにゆりと変形しておられる大いなる母性を拝んだ。

ああ、いや。駄目だ。イの一番に思い浮かんだこの答えは、紛うことなき真正のクズ発言である。

体の良い理由を絞り出そう……。

「玄德殿と出会わなければ、それがしは今頃放浪の旅を続けていたんじゃないかと思うわけです」

「うん」

「玄德殿と出会わなければ、頬傷オツサンも、奇抜前髪の褐色ムツツリ青年も今の稼業に精を出していなかったでしょう。というか、一部は普通に命を落としていたのではないかとすら思いますぞ」

「うん」

「ほら、このように玄德殿と出会わなければ、不幸になってしまう者は山ほどにありますな。その全てを北郷殿が代わりに救えたとは到底

思えません。どんな仁徳の者でも、救うことのできる人の数は限られているのです」

そんな風に言い繕っていくと、何だかんだで自分の考えがまとまってきた。

そうなのだ。

玄徳殿の資質に問題などあるはずがない。

もし、玄徳殿を卑屈たらしめている原因があるのだとするならば、それは彼女の考え方であり、それがしたちの至らなさであろう。

「よそはよそ、うちはうち。人を救おうという気持ちに貴賤はない」という当たり前の事実を受け入れられずにいるのは、確かに玄徳殿の幼さかもしれないが、同時にそれは我々が至らなかつたせいなのだ。

我々が「貴女は今のままでいいのだ」と伝えてこなかつたせいなのだ。

伝えねばならない。

だから、今すぐ伝えることにする。

「我々には、他の誰でもない玄徳殿が必要なのですぞ」

玄徳殿はそれがしの言葉を聞き、

「子遠さ、ん……」

ぼたりぼたりと地面に大粒の涙を落としながら、泣き出してしまった。

ああ……っ、いや、待って！

泣かれるのは本当に困る……！

”ひろいん”に涙は似合わない。そして、何よりも得も知れぬ圧力を発し始めたバルバトスさんがすごい怖い！

焦りに焦ったそれがしは、大仰な身振り手振りで叱咤激励しはじめた。

「ここは涙を流すところではありませんぞ！ 成る程、そうか。よし、やるぞと奮起するところなのです」

「うん、うん……。そうだね。ありがとう、ごめん」

玄徳殿は両手で目をこすり、にへらつと笑顔を見せられた。うむ、”ひろいん”らしくなってきた。



彼女は「よおし」と握り拳を作って、ふんすと鼻息を荒くする。

「自分のやってきたことと、他の人のやってきたことを比べるよりも、もっと大事なことがあるんだよね」

「その通りですぞ。北郷殿や他の方々が救えない者を玄德殿が救う。我々に救えない者たちを、他の方々が救う。何も問題はございませぬ」

「うん！」

それがしたちの至らなさが彼女に嫉妬を抱かせたのであるからして、反省せねばならぬ。

彼女が今後不安を欠片も抱かぬように、励まねばならぬ。

それがしは、およそ趣味以外の領域で強いられる努力が大嫌いな性根の内に、何やら燃えるものが灯ったのを自覚した。

饒舌になったそれがしの口が、思考を放棄して太鼓持ちを始める。

「天下にあまねく百の相、百の将、百の姓が思い思いの世直しをすればいいのです。我々にだって、我々にしかできないことがあるのです」「そっか。そうなんだ……。えっと、私たちに何ができるかな？ 私たちにしかできないことって、何があるのかな？」

「エッ？」

「うん？」

彼女は身を乗り出して、前のめりにこちらを見ている。

白磁の頬を濡らしていた涙は既に乾いているようであった。

それは本当に良かったのだが……、

「我々にしかできないこと、ですか？」

「うん！」

それがしは内心、自分の無駄に回る浅はかな口に対して罵詈雑言を投げつけていた。

だって、北郷殿や世にいる英傑を出し抜いてできることなんてすぐには思いつかないもの。そんな簡単に出し抜けるなら、それがしは英傑の仲間入りである。左団扇である。

ええと、我々のような”ならずもの集団”にだけできること……、できること……。

「ひ、匪賊のカツアゲ？」

「え、それは今までやってきたことだよな？」

「あ、そうですぞ！ 今までこつこつやってきた稼業も、民の役に立っていたことを再確認したのです」

「なるほどっ！」

玄德殿は合点がいったと手を叩き「続きを聞かせて？」とでも言わんばかりに更に身体を寄せてきた。

え、えええ……。他に？ 他に？

うーん、うーん……。

悪徳商人や役人への嫌がらせとかどうだろうか？

我々にもできそうで、尚且つ一部の民から喝采を浴びそうだが、玄德殿の理想を体現しているとは言いがたいんだよなあ。

こう、英雄的でどーんと世に名声が轟くような偉業でない、我が“ひろいん”殿の笑顔を保つことはできないだろう。

北郷殿への劣等感を一気に振り払ってしまうような偉業……。偉業……。

必死に頭を働かせた結果、それがしは先刻北郷殿より提案された内容を思い出した。

「そういえば……。黄巾賊なるものどもの鎮圧ですが」

「えっと、北郷さんが共闘しようって提案してきたお話だよな？ 確か、冀州で蜂起した賊で、その退治に朝廷も広く義勇兵を募り始めたとか」

「はい、はい。それです、それ」

北郷殿が仰るには、何やら黄色い頭巾を被った連中らしい。

それがしたちはまだ黄巾賊とやらと遭遇したことがないが、密売商人の護衛中に襲ってきた中にそういった輩が混ざっていなかったことを考えると、あまり武闘派な集団というわけでもないのだろう。例えば、黒山賊みたいな。黒山賊の連中は絶対に許さないよ。

「朝廷が関わっているなら、黄巾賊の首領の首は大層価値がありそうですね」

「うーん。それはそうかもしれないけど、黄巾賊って何十万人もいる

んだよね？ そんな大軍を相手に、他の人たちを出し抜けるのかな？」

どうやら玄德殿の懸念は、黄巾賊そのものよりも手柄を競う共闘相手にあるようであった。

賊軍相手に自分たちが後れを取るなど、欠片も考えておられないようだ。

まあ、うちは当千の将こそいないものの、兵自体はやたら強いからね……。

最近は中小規模の匪賊を見ると半ば“餌”と認識してしまうくらいになつていたからね。しょうがないね……。

いずれにせよ、彼女の中に確固たる自信が芽生えていることを、それがしは内心嬉しく思った。

一年余り続けてきた、匪賊狩りの日々は決して無駄ではなかったのだ。

それがしは口の端を緩めて、続ける。

「我々、玄德殿一党と共闘相手の違いは何処にあると思いますか？」

「えつと、大事な人たち？」

人差し指を顎に添えて、こてんと首を傾げる玄德殿可愛い。

「もう一声」

「みんな根はとっても良い人ばかり」

あの愚連隊連中を「根は良い人」の一言で片付けられる玄德殿可愛い。

「でも外見は？」

「えつ、外見？ それは、うーん。うーん……」

玄德殿が答えに詰まったところで、それがしはさも知恵者然とした身振りを交えて結論を述べた。

「我々の利点はそこにあるのです。とりあえず抜け駆けしませんか？

討伐作戦が始まる前に」

## 第七回 呉子遠、天啓を得る

……暑い。

照りつける太陽の下、それがしの陣取る冀州のとある場所には、人々の熱狂が渦巻いていた。

ざわざわざわと周囲で暑苦しくもひしめき合っている者たちは皆、頭に黄色い頭巾を巻いている。

巷では黄巾賊と呼ばれている者たちだ。

世を騒がせた大逆人として、頭目の張角とともに討伐対象にまで認定されている彼らではあったが、今はこぞって仮設の舞台を見つめている。

彼らの中に、よこしまな思いを抱いている者は存在しない。

皆が皆、きらつきらしておられる。

曇りないまなこで見つめる舞台は、川辺で咲き誇る季節の花で彩られ、純白の布で覆われていた。

もうじき、あの生娘のように華やかな舞台に”彼女たち”が上るのだ。

「——まだか」

ごくりと、隣の男が生唾を飲み込んだ音が聞こえた。

「まだなのか」

「うるせえ、黙って待ってる……!!」

それがしは、耳障りなつぶやきを繰り返す隣の男に殺気混りの睨みを利かせる。

「ヒエツ……」

待ちわびているのは誰だってそうだ。それがしだって、そうなのだ。

今も女神の名前が記された手製の扇を握りしめ、武者震いをしながらも彼女らの降臨を切望している。

ああ、付け髭が本当暑苦しい。

いつそのこと取ってしまいたいけど、人相がばれるのは避けたいのだよなあ……。

「ほあ、ほあつ……」

「ほああつ……」

いい加減に痺れを切らしたところで、壇上に煙幕が立ちこめた。煙幕の中には三人娘の影がゆらゆらと見えている。

来た！

何処かから聞こえてくる楽器の演奏を背に、三人娘がそれがしたちの前へと姿を現した。

「ほあああーっ！っ！ ほあああーっ！！」

彼女らの降臨を喜ぶように、それがしたち観衆は狂喜乱舞する。

そんな観衆の反応を満足げに見回した三人娘たちは、手に持った短杖を口元へと近づけた。

きらびやかな宝石が先端に埋め込まれた木の杖だ。

先端を娘たちがトントンと指で叩くと、ブツツ、ブツツと虫の羽音にも似た妙な音が辺りに響きわたる。

さらに聞こえてくるのは、どういう原理だか皆目見当がつかないが、彼女たちの息づかい。たぎる。

左には、青髪を一つに結わえた平たい胸の少女。

右には、紫髪を短く切り揃えた理知的な風貌の少女。

そして、中央に……、

「みんなー、集まってくれてありがとうおーっ！」

桃源郷はここにあった。

慈悲深さを感じさせながらも瑞々しい母性の谷間を露わにしておられる桃色髪の美少女が、それがしに笑いかけておられる。それがしに。

感極まったそれがしは声を枯らさん勢いで叫んだ。

「てええんほおおうちやああーんっ!!!」

冀州の大地にそれがしたちの声が遠雷の如く轟き、

「それじゃあ……、私たちの新曲、聞いていってね！ 黄夫当立っ！」

至福の時は始まった。

◇

二刻にも及ぶ三人娘たちの演唱会は、万雷の拍手をもって無事に閉

会を迎えた。

いやあ、扇の振りすぎで腕が上がらない。

喧噪冷めやらぬ群衆の中、身体から全ての熱が絞り出されたかのよ  
うな心地の良い脱力感に身を委ねながら、それがしが水筒の水を浸け  
た濡れ黄巾で顔を冷やしていると、

「それがし”、”それがし”ではないか！」

都で良く耳にした、凜々しさと暢気さが入り交じった女性の声が耳  
に届けられる。

「んお？」

何で、こんな場所で聞き知つたる声が……？

怪訝に思いながらも声のする方に目を向けると、そこには粗末な平  
民服と黄色い頭巾を身に纏った、二人の姉妹が立っていた。

「久方ぶりだな、それがし。今日初めて知つたことだが、お前に髭は似  
合わんらしい」

くすりと一方の女性が口元に手を当てる様を見て、それがしは目を  
丸くする。

「妙才殿、元讓殿っ！ 何故、ここに？」

困惑気味の問いかけに、長い黒髪の女性——、元讓殿は鼻高げに口  
の端を持ち上げた。

端正で愛嬌のある顔の造りも相まって、粗末な格好が全く似合つて  
いない。お互い様である。

「何故も何も、冀州こしごは我らの縄張りからすれば目と鼻の先だぞ？ だ  
から、こうして潜入——」

「姉者」

元讓殿の続く言葉を短い青髪で片目を隠した女性——、妙才殿が  
遮った。

「むっ、そうだった。すまん、秋蘭。気をつけねば」

「ああ、そうしてくれ。この喧噪の中ならそう注意することもないだ  
ろうが、念には念を入れねばな」

そう釘を差す妙才殿の表情は柔らかい。

相変わず、この姉妹は本当に仲がよろしいなあ、とこちらまで和

んでしまうような慈愛に満ちた表情であった。

ふと、彼女らと初めて出会った時の記憶が臉の裏に浮かび上がる。

夏侯一族の烈女・才女として名高い元讓殿と妙才殿とは、たびたび仕事上の付き合いがあったのだ。

出会い頭に元讓殿が放った一言が、

『むう、湿気った顔をしているなあ。男というのは皆こうなのか。シャンとしろ！ シャンとっ！』

と握り拳を作りながらの叱咤であったことは今も印象に残っている。

いや、確かに当時のそれがしはまるで死んだ魚のような目をしていただけでも……。

だつてなあ、延々と同じ書類を書き移す作業はなあ。同僚が遊び歩く中で、一人ぽつんと作業をし続けるのはなあ。それでいて、締め切りは待ってくれない。挙げ句の果てには「使えない奴」やら「面白くない奴」などと同僚にはなじられて、明日が見えない毎日が続き、ああ、仕事が、仕事が——！

「おい、戻ってこい。それがし」

——はっ！

危うく発狂しかけたため、それがしは慌てて回想を止めた。

それがしが妙才殿に礼を言うと、彼女は肩をすくめて周囲の様子を窺った。

「場所を変えないか？ 情報の交換がしたいのだ」

「んお、お安いご用ではありますが、お二人が欲しがらる情報をそれがしが持っているとも思えませんぞ」

お二人は曹孟徳殿に仕えているはずだから、身分も暮らしも安定しており、黄巾賊に加担する理由がない。

とすれば、恐らく主から潜入操作を命じられている最中なのだ。

何故密偵に任せず、彼女らが手ずから情報を探っているのかは分からないが、欲しがっている情報については大方見当がついた。

恐らくは兵糧庫の場所だ。

黄巾賊は有象無象の集まりだが、有象無象だけあつてとにかく数が

多すぎる。

真つ当な軍略家ならば、正面から戦おうとせずに絡め手でその力を弱めようとするだろう。

察するに、討伐に参加している諸侯から先んじるために情報戦において抜け駆けでもしようとしているんじゃないだろうか。

でもなあ……。

こちらが知っている情報なんて、彼女らならば容易く入手できているはずなんだがなあ。どういうおつもりなんだろう。

意図が分からず首を傾げていると、妙才殿は片目を細めて、悪戯っぽい笑みを向けてきた。

「いや、何。別段有益な情報を持っていなくとも良いんだよ。ただ近況を聞かせてくれるだけでも構わない。……それともお前は知己に心配をかけておいて、何も説明をしない腹づもりだったのか？」

「アツ、ハイ」

それがしの良心に妙才殿が放った矢が突き刺さる。まったくもつて、ぐうの音も出なかつた。てくてくてくと。

降参したそれがしは、お二人とともに黄巾賊の天幕がひしめく界限から離れるようにして移動を始める。

「我々も黄巾賊が怪しげな儀式をしているという報告を密偵から聞いてだな。真偽を確かめるべく直接偵察に出向いたというわけだ。いや、しかし……、張角があのような女子であつたとはなあ」

「それがしも、その点には驚かされましたぞ」

歩きながら発せられた元讓殿のお言葉にそれがしは同意する。

巷で流れている噂に従うならば、黄巾賊の頭目というのは十尺もあるひげもじやの大男であるはずで、あのような素晴らしい母性を持った美少女であるはずがないのだ。

それに怪しげな宗教儀式がただの演唄会であるという事実も、実際目にしなければ分からない情報だろう。

我らも大いに計算を狂わされた。当初の予定では山賊に扮装して、いや扮装する必要もなかつたのだが、とにかく黄巾賊入りをすること



で、密かに頭目を始末する予定だったのだよなあ。

本当、大いに狂わされた。

あんな瑞々しい母性を、この手に掛けるなど……、それがしには……っ！

と握り拳を固めていると、元讓殿に額をこつんと小突かれた。

「お前は相変わらず、人の話を聞かずに考えごとをする奴だなあ」

「おっと、これは失礼をば」

それがしの言葉に、元讓殿はわははと笑い声をあげる。

いつも楽しいげにしておられるのよな。彼女は。

こんな彼女が、戦場では鬼の表情で縦横無尽に駆け回るといふのだから、世の中分らないものだ。

それにしても、

「良くそれがしに声をかける気になりましたな」

「ん、何故だ」

きよとんとする元讓殿にそれがしは続ける。

「いえ、潜入捜査中に顔見知りと再会するというのは色々と問題があるわけではありませんか？ それがしがまことに黄巾賊入りしている可能性もあるのですから」

「ええ？ それはなからう。お前が？ 黄巾に？」

ないないと手を振る元讓殿の反応を見るに、それがしは妙な信頼を得ているようであった。解せぬ。

「なあ、それがし。お前は沈む船に乗り込むような男だったか？ む

しろ、さつさと逃げようとする男だと記憶しているのだが」

続く妙才殿の補足で疑問がそっくり氷解した。

うん、それがしの心の弱さは筋金入りだからね……。仕方ないね……。

そうこうしている内に、背の高い葦が生い茂る川辺が前方に見えてきた。

この辺りなら良いだろうか？

流れる川のせせらぎと葦が擦れ合うざわめきが、上手い具合に我々の会話音をかき消してくれるはずだ。

「ちよつと失礼」

それがしは腰にはいた剣を抜き、周囲の葦を一部だけ切り払った。  
うん、大丈夫かなあ。

人目も水を汲みにくる者が少々遠くに見えるだけで、近くに気配も感じられない。

恐らくは問題なからうと踏んだそれがしは、お二人の方へ振り返ると深く、深く頭を下げた。

「申し訳ございません」

謝罪の一手。これに尽きる。

元讓殿はそれがしがいきなり頭を下げたことに、しばしばかんと口を開けられていたが、

「あ、そうだ！ お前は本当にどういうつもりだっ！ 何かあったら、イの一番に相談しろと言っていただろうが！」

すぐに何に対する謝罪か理解したらしく、不満げに口を尖らせた。

「いやあ、その」

彼女らとは、それがしが上司殿の部下になる以前から付き合いがあり、居心地の悪かった前々職より上司殿のおられる部署へ配属される際にも大変世話になったのだ。彼女らの住む方角に足を向けて寝られないほどには、大きなご恩があった。

ただ、だからこそ彼女らには相談できなかつたのだ。

万が一に上司殿と彼女らが対立する事態にでもなつたらと思うと、恐怖で足が震えてくる。

「……嫌がらせする輩は異動前に潰したと思っていたのだが、もしや異動後も続いていたのか？ お前の上司に問い合わせても『アンタたちには関係ない』の一点張りだったのだが」

まずい、両者はすでに接触を果たされていたのか。

お二人に詰め寄せられた上司殿の剣幕が、それがしには容易に想像できた。

自身の顔から血の気が引いていくのを自覚しながら、慌てて上司殿の弁護を始める。

「ああ、いや。違うのですぞ。上司殿は本当に嫌がらせをするお方で

はないのです。何というか、それがしの不徳の致すところというか……」

口が裂けても言えない……。

心が擦り切れていたところに、上司殿の持ってくる仕事量はちよつときつすぎただけだなんて。

しかも上司殿と再会してから得た情報を勘案するに、別に仕事をよこしたことについては悪気はなかったらしい。むしろ目をかけて下さっていたようであったというのが余計に心に突き刺さる。

というか、今のお言葉で上司殿がそれがしを追っかけてきた理由に合点が行った。

これから仕えようとしている御仁の腹心から「お前、何で部下を虐めてんの？」などと直接問いつめられれば、そりゃあ汚名を返上したくなる。

それがしは内心で上司殿に平伏した。彼女が今も秘めているだろう怒りがひたすら恐ろしい。

しくじったなあ。

お二人のところへ「探さないで下さい」とでも文を送っておけば良かった。いや、それはそれで角が立つような気も……。

何と説明したものと、それがしが言いづらそうにしていると、妙才殿は小さく息を吐いて、問うてきた。

「……まあ、お前なりに事情があることは分かった。それで、今は幸せか？」

「幸せか、と聞いてますと」

抽象的な問いかけであった。

それがしが鸚鵡返しに答えると、妙才殿は形の良い眉を寄せて続ける。

「都にいた頃よりも不都合はないか？　ということだ。お前には、日頃の甘味や仕事上の礼もある。行く宛がないなら、我々の陣営で便宜を図ったって良いんだぞ。これでも、お前に立場を与えてやるくらいのア斐性はあるつもりだ」

「うむ、うむ。秋蘭は良いことを言う。私も同じ気持ちだな。恩知ら

ずになるつもりはないのだぞ」

「妙才殿に倣って、元讓殿も我が意を得たりとでも言わんばかりに大きく頷く。

ああ、もうこのお二人は。

お二人の声色に、嘘偽りは感じられない。

むしろ、彼女らなりの打算のひとつかけらもない善意だけがそこにあつた。

……やはり、このお二人は癒されるのだよなあ。

別段お二人の母性に目を奪われているわけではなく、一日八刻もあつた仕事時間のうち、貴重な半刻もの休み時間をとる名目になつてくれていたからでもなく。

それはそれとして、お人柄がこう……、好ましい。

彼女らに、それがしはかなりの好感を抱いているのだ。

もし目の前にある人生の分岐を転換し、彼女らのもとへ赴いたとしても、それがしはそれなりに幸せな人生が送れることだろう。噂の孟徳殿がお持ちの母性も気になるし。

——ただ、それがしは丁重に謝絶した。

「仰ることはありがたく。しかし、今のそれがしは自分で自分が幸せだと思いませんぞ。巡り合いというものを得ることができたのです」

心に浮かび上がったのは、玄德殿のお姿であつた。

今のそれがしは、天下に二つとない母性を存分に拝む機会に恵まれているのだ。

それがしを「大事な仲間である」と言つてくれる彼女と出会うことができたのだ。

これ以上の待遇を望むなど、”もぶ”たる身には過ぎた欲であるう。

仮に彼女が何処ぞに身を寄せるといふ選択肢でも選ばない限りは、今の境遇を捨てる気にはなれなかつた。

それに今の仕事量も忙しくはあるが、前に比べて殺人的というわけでもないし？ これ以上の鞍替えは上司殿が怖すぎるし？

それがしの言葉を聞いた妙才殿は「そうか」と少し寂しそうに笑つ

た。

その笑顔に、それがしは「おや？」と目を丸くする。

「……疲れておられるのですか？」

上弦に細める彼女の目の下には化粧では隠しきれない隈があった。「む。やはり、それがしも気づくか。お前も秋蘭に言っつてやっつてくれ。根を詰め過ぎても良いことなどない」と

妙才殿の変貌は元讓殿の懸念でもあつたらしく、元讓殿は非難めいたまなざしを妙才殿に向けた。

「ええつと……。仕事量が多いのですか？」

自分で問うてみて、ありえないなと自覚する。

孟徳殿は人の才を好む御仁とは聞いていたが、才を使い潰す御仁とは聞いていない。そもそも、女色家との噂も立っつておられるし、いたずらに腹心の美貌を損なうような仕事量を与えるとは思えないのだ。

それがしの問いかけに、妙才殿の笑顔は苦笑いへと変わっつていく。

「いや、何ということもない。ただ最近、妙に才知豊かな者たちばかりが挙つて曹家の門戸を叩くのだ。私も寵愛だけで華琳様のお側にいるわけではない。流石に負けてはおられんと思っつてな」

そう言っつて妙才殿は肩をすくめ、「こうして手ずから偵察にも赴いているわけだ」と締めくくつた。

「才知豊かな者たちですか」

こう言っつてはなんだが、気の回しすぎのようになしか思えない。

元讓殿の刀術は洛陽でも右に出る者がおらず、妙才殿に至つては千人に一人の弓の才に加えて、事務仕事まで得意なのだ。繰り返しになるが、事務仕事まで得意なのである。

そんなお二人を上回るような人材がほいほいと野に埋もれているわけがなく、仮に存在していたとしても各門閥がさっさと囲っつてしまふため、在野として留まることはないだろう。

だから大量に、それも有能な者ばかりが集まっつてくるという話はちよつと、なあ。

それがしが「考えすぎなのでは？」と妙才殿に返すと、彼女は「やはり、そう思うよなあ」とでも言いたげな表情を浮かべられた。

「武才は姉者に追従し、智謀も並々ならぬものを持っている将など、ごろごろと居るはずがない……。やはり、そう思うよな。明らかにありえない話だ」

「む……。だが、奴らが私に負けぬ武を持っているのは確かだぞ。いつぞやなどは並み居る匪賊の頭を踏み台にして、まるで空を翔るように頭目の首を取りに行っておったではないか。『だが俺の身体は空を飛んでそのまま匪賊の本陣へと向かう』とか叫んで。秋蘭もその目で見ていたろう」

「はっ」

思わず間抜けな声をあげてしまう。

いくら十把一絡げの匪賊といえども、数が集まれば脅威となる。それを物ともせず立ち回れるとあらば、確かに妙才殿の話も大げさというわけではなさそうだ。

それに台詞もすごくかっこいい。だが、

「そんな化け物じみた英傑が、何人も挙って？」

ありえない。

呆れた声で困惑をあらわに返すと、

「ああ、その顔だ。良かった。私の常識は間違っていないなかったのだな。ちなみに訂正するならば、何十人も……。だ」

妙才殿は疲れたようにため息を吐かれた。

「英傑は路傍の石ころではない。華琳様は御身の天命を良くご存知だが、同時に天が甘くないことも知っておられる。何なのだろうな、彼らは。華琳様は彼らの素性を『何処か異境の国が滅んで、この中原へと流れ着いた難民ではないか』とご推察なさっていたが……」

「異境」

……。何だろう。

妙な既視を感じる。

「一応は気を許さぬよう重用せずにいるのだが、それでも手柄は立てていくのでな。私自身、少々焦っているのは自覚しているさ」

つい最近似たような話を耳にしたような……？

あんぐりと間抜け口を開けながら空を仰ぎ見る。空に浮かび上

がってきたのは、孫公裕殿の柔らかな母性に顔をうずめて苦しそうにしていた、北郷殿のお顔であった。あな、うらやまし。

「あつ。もしやすると、その者たちというのはニツポン？　ニホン？　そんな名前の国からきたのではございますまいか？」

「知っているのか？　それがし」

がばりと食いつくようにして、妙才殿の目の色が変わる。

それがしは戸惑いつつも、答えを続けた。

「いえ、つい最近似たような境遇の御仁と出会いました。幽州の義勇軍、北郷殿と仰るのですが。彼も異境から流れ着いた方でありました」

「ニツポンとはどのような場所だ」

「北郷殿の話聞いた限りでは……、まさし君の語る理想を体現したような国と」

とここまで説明した途端、妙才殿がぴたりと硬直する。

「妙才殿？」

「まさしとは、あいつか？　都で一番の変態の。あの”めいど服”に

”対魔忍こす”、”ばにいがある”を広めた……」

「そう、そのまさし君ですぞ。ご存知でしたか」

妙才殿の表情に、理解の色が見えてくる。

そして両腕で自らを抱きしめると、耳まで真っ赤に染めながら、震える声を絞り出した。

「奴のいやらしい発想に感銘を受けた華琳様に、私は何度辱められたことか……！　いや、華琳様に蹂躪されることは構わんのだ。その発想の一端に！　奴のスケベ心があったことが気に入らんっ……！　華琳様の美しいお顔に、奴のスケベ顔が透けて見えるようで……！」

お？　おお……？

驚愕の事態が判明した。どうやらまさし君は、孟徳殿と知己の関係であったようだ。羨ましい。どんな見事な母性をお持ちなんだろう……。きつと大海の如く大きいのだろうか。

「ああ、ああ！　納得がいってしまう！　すっと腑に落ちてしまつた！　よくよく考えてみれば、奴らの知謀に光るものを持ちながら

も、知性が足りていない言動の数々があの変態にそっくりだ！ ちくしょうっ！」

「みよ、妙才殿。お、おちついて」「それがし！」

妙才殿はそれがしの両肩を掴むと、据わった目で問いかけてきた。「……北郷とやらも、”同類”なのか？」

それがしは北郷殿の姿を思い浮かべ、ほんのりと胸に灯った温かみに従って答えた。

「まるでまさし君と話しているかのような、心の安らぎをそれがしは感じましたぞ」

「よし、華琳様に進言しよう。幽州から来ている共闘の要請ははねのけるべきだと」

「ん、えっ——？」

妙才殿の目には強い決意がこもっており、何時の間にもやら眼の下のクマは吹き飛んでしまっていた。

気力が充実している証拠である。

ただ、あれれ？ 雲行きが怪しいぞ？

「むう……。少々当てと違ったが、秋蘭が元気になったのなら何も問題はないな。ならば、よし！」

まさし君も北郷殿も良い御仁なのだがなあ。

満足げに腕組みをしてうなづく元讓殿が最後の最後まで変わらぬままであったのが、救いと言えるような、言えないような。

それがしは内心、二人の心休まる知己に詫びを入れながら、遠くを見据えて何かを誓う妙才殿から目を背けた。

◇

「さて、定時報告。アンタの所感を述べなさい」

玄徳殿が待つておられる愚連隊の天幕へと戻ってきたそれがしは、仲間の視線を受けながら、そして膝にかかる岩の重みを感じながら、上司殿の言葉に対して神妙にうなずいた。

「あの、上司殿。その前に……」



「何よ」

折りたたみ椅子に腰掛けた上司殿の目は、大変据わっておられる。大変怖い。

「何故、それがしは岩を抱いておるのでしょうか」

上司殿は不機嫌そうに手持ちの扇を爪で弾きながら、ちらりと烏桓賊の青年を見た。

ちなみにあの扇には「天和ちゃんは三国無双の愛天使」と書いてある。それがしお手製の品であった。

「ロウハン、こいつの偵察中の素行。もう一度説明なさい」

青年は戸惑いながらもこれに答える。

「……うす。オヤジの扮装は完璧でした。黄巾賊になりすまし、『天和ちゃん』とそれはもう他の面々よりも熱心に応援をしてやした」

「天和とは何?」

「恐らくは、頭目の真名じゃねえかと……、アツ」

青年が何かに気づいたようにして、ばつの悪そうな表情を浮かべた。

「オヤジ、すまねえ」

「桃香、裁定」

「……うん。頭目の張角さんって妖術で人心を引きつけるんだよね。多分、子遠さんは術にかけられちゃってるから、正気に戻るまでは岩を抱いてもらおう」

何だと。

それがしは術にかけられていたというのか。

いや、そんなはずはない。それがしは単純にあの瑞々しい母性に見とれていたただけであって、

「定時報告」

「アツハイ」

それがしは神妙に報告を始めた。

「まず、黄巾賊の構成ですが……。単純に三姉妹を慕う輩と、混乱に乗じて悪事をやらかす山賊あがりの二種類がおりますな。今まで周囲に悪さを働いていたのは多分後者でありますよう」

「全員が悪い人たちではないってこと?」

玄徳殿の疑問に、それがしはうなずいて答える。額が岩にゴツンとぶつかり、少し痛かった。

「中には食いつめて合流しただけの民もおりました。ただ、今後どうなるかまでは分かりませんが」

「それは大多数の意見に流されて、朱に染まってしまうということかしら」

上司殿のお言葉に、それがしは少し考えてから答えを返す。

「……というよりは、頭目の言葉に従うがゆえでしょうか。信じる者の言葉は何よりもの指針になるでしょうから」

「そこまで続けたところで、上司殿が解せないという面持ちで遮ってきた。」

「ちよつと待つて。以前の調査で、三姉妹はただの旅芸人であったという結論が出ているはず。だからこうしてすぐに首を取りに行かず、事の経緯を調査し続けているわけでしょう。彼女らに野心が芽生えたとしてもいうわけ?」

「いやあ、多分なんです。黒幕がいる気配がするのです」

愚連隊の面々がざわめく中、それがしは自らの所感を述べる。

「三姉妹の歌は、それはそれは素晴らしいものなのですが、歌詞にですね。何というか、漢王朝への反逆を煽るような箇所が散見されるのです」

「なら、彼女らが野心を持っているということじゃない」

「いえ、歌詞が明らかに一人だけの手によるものではないのです。上司殿ならお分かりになると思うのですが……、まさし君の開催した歌合わせを覚えておりますか?」

上司殿は見るからに嫌そうな表情を浮かべながらも、「ああ」と納得の声を漏らした。

それがしは目を瞑り、屋敷の庭先で並みいる文化人に囲まれたまさし君の姿を思い出す。

かつて桃の木の下にいた文化人がしたり顔で

『桃のようようたる、灼灼たり、その華』

と古の歌を引用すれば、

『桃尻と騎乗位、驚異の親和性』

とまさし君はそれにちなんだ彼なりの見解を語ってみせ、また別の文化人が音韻を重視した新作を披露すれば、

『びるびるびるびるびるび』

と斬新な音の歌を返していたものであった。

……懐かしいなあ。

結局、びるびるなんたらは何だったのだろうか。

浅学なそれがしにはよく分からなかったが、きっとあの歌の中身には深い意味が隠されていたに違いあるまい。

ただ、そんな見事な歌を詠める彼にも不得意なものが一つだけあった。それが歌の付け合いである。

付け合いとは複数の作者が一つの歌を作り上げる遊びなのだが、まさし君はとにかくこれが下手なのであった。

恐らく彼の発想が常人から逸してしまっていることが原因なのだろう。

何を題材に読んでも、連続して詠むと繋がりが悪くなってしまい、合わせる人々がつじつま合わせに大変な苦勞を要してしまう。

そして、この繋がりの悪さというものが三姉妹の歌にも見受けられたのだ。

「何と申しますか、三姉妹の歌には音韻の素晴らしい箇所と政治的な意図が込められた箇所があります。全く噛み合っていないのです。張角殿も恐らくは気づいているでしょう。歌っている時に、時折歌いにくそうな、不満そうな表情を浮かべられておりました」

例えば、三姉妹の新しい歌には「突き進め下克上」なる歌詞が盛り込まれていた。大部分の箇所で、好きとか嫌いとか言い出したのは結局誰なのかを論じているというのに、これはあきらかに収まりが悪い。

それがしの推論を聞いた上司殿は口元に手を当てて考え込み、忌々しげに表情を歪めて口を開いた。

「……理解したわ。つまり、三姉妹をどうにかしただけではこの騒動

の元凶を絶つことはできないということか」

「残念ながら」

恐らく、黒幕が三姉妹に表舞台を譲っているのは、いざという時に責任を全てかぶせて逃げだせるようにしているからだろう。

ずる賢いというか、何と言うか。どうやら、かなり頭の回る者が背後にいるらしい。

上司殿ががちりと爪を噛む。

「まずいわね……。私たちにはあまり時間が残されていないかもしれない」

「どういうことですか？」

国議殿が眉根を寄せて問う。いつもなら今ぐらいの時分には酔っぱらった憲和殿の介抱をしているはずなのだが、今日は早めに酔いつぶれてくれたために、こうして会議に参加しておられた。

彼女はこの愚連隊において理性的で常識的な考えを述べられる貴重な人材だ。

彼女の理解が及ばぬということとは、この場にいる誰もが理解できていないということであり、上司殿は肩をすくめて国議殿や他の面々に向けて答えた。

「黄巾賊は既に討伐軍によって包囲をされつつあるの。恐らくは各地にある兵糧庫への奇襲が始まるのも時間の問題ね。討伐が始まれば、いかにその黒幕が頭の回る奴だとしても黄巾賊の敗北は揺るがない。地力というものが違うのだから。そして……、敗色が濃厚になれば黒幕は逃げ出すはずよ。また何処かで再起を図るために」

……つまり、黒幕を捕らえるためには討伐が始まる前に勝負をかけなければならぬ。

上司殿がそう締めくくったところで、がたりと椅子を蹴飛ばす音が天幕内に響いた。

「それって……」

玄德殿だ。

「それって散々張角さんたちを利用するだけ利用して、見捨てていっちゃうってこと？ そんなの酷過ぎるよ……！」

玄徳殿のお言葉に、「そうだ、そうだ」と頬傷オツサンをはじめとする愚連隊の面々が膝や机を叩いて口々に賛同を表明した。

うーん、まずい流れだ。

この強面どもは、玄徳殿に負けず劣らず筋が通らないことをひどく嫌う。

その証拠に、彼らの表情が口よりも物を語っていた。

もう「いかにして黒幕を白日のもとに引きずり出し、制裁を加えるか」にしか眼中にない感じだ。

ただ、ただなあ……。

それがしは彼らに冷や水を浴びせた。

「皆さん、冷静に。信者と情報交換を重ねても、全く尻尾を掴ませないような輩が相手なのですぞ。相手は相当に慎重を期しています。今から黒幕を探し出すというのなら、大変な困難が伴うことでしょう」  
高まった熱が、すうっと冷えていく。

皆が無然とした顔つきになる中、国譲殿が手を挙げた。

「今は忍び働きに適した者を選びすぐって内情を調べていますよね。それで手が足りぬのなら、他の面々も総動員をかけて調査すれば良いのでは？」

「いや、そこまで大々的に嗅ぎ回れば、我々が相手を探っていることがばれてしまいます。やはり、逃げられる可能性が高いです」

「でも、だったら……」

それがしの答えを聞いても、彼女はまだ何かを言いたげに口を動かしていた。

彼女も何だかんだ言つて、一年以上も愚連隊の一員として活動を支えてきた蓄積がある。

合理的で平民的な安定志向の中に、筋の通らぬことをやりこめてやりたいという、反骨精神のようなものが育ちつつあることが容易に見て取れた。

天幕の中に沈黙の帳が下される。

既に愚連隊の目的は「玄徳殿のために何かでつかいことをする」ことから、「黒幕を何とかしてぶっ潰す」ことに取って代わられつつあつ

た。

だが、それでは駄目なのだ。

我々には事を成すための手段がない。

当初の目的が「玄徳殿の名声を高める」ことである以上、二兎を追って一兎をも得られない事態だけは避けねばならなかった。

それがしは上司殿へと目配せをする。

すると上司殿も流れがまずいことに気づいておられたのであろう。こくりと頷き、周囲を見回し手を挙げようとした。

んー、罪もない三姉妹の首を取るといふのは流石に玄徳殿が悲しむだろうから、兵糧庫を焼き討ちして逃げる策にでも切り替える感じかな。

元讓殿らには不義理をしてしまうが、我々も手柄は欲しいから仕方がないね。

こうして、もやもやとした袋小路に追い込まれた我らの方針に妥協案を提示しようとしたその時、

「……やっぱり、張角さんたち可哀そうだよね」

上司殿が言葉を発するよりも先に、玄徳殿の声が天幕内に響いた。

「……と仰ると?」

「私ね。旅芸人として彼女たちが歌を披露してきたのは、みんなに自分たちの歌を聴いてもらいたかったからなんじゃないかって思うんだ。だって、歌ってみみんなを笑顔にするためのものだもん」

両手を胸元におき、玄徳殿は物憂げに息を吐かれた。

「このまま、歌が反乱の道具にされちゃうのは何か嫌だな……」

やっぱり優しいのだよなあ。

彼女の眩きが、それがしの思考に新たな道筋を敷いていく。

妥協案よりもっと輝かしい、玄徳殿らしい優しい道だ。

「歌が、反乱の道具に」

む?

むむ……??

「ん、あー」

「どうしたの? 子遠さん——、って。もしかして!」

玄徳殿の表情が、ぱあつと晴れ渡っていく。

それがし、まだ何も言っていないのに。

「また何か思いついたの？」

「いや、大した着想でもないのですが……」

しり込みするそれがしを見て、頬杖をついた上司殿がため息を吐かれた。

「良いじゃない。アンタは小細工でその場をしのごうことにかけては一丁前なんだから。ここはアンタの案に乗って見るのも手だと思っわ。背水の陣というわけでもなし、方向転換は容易だしね」

ご意見番の太鼓判が押されたところで、それがしは退路を失った。

といつても、本当に大した案じゃないんだよなあ。

「いや、そのすな。黒幕を探すことは難しくても、黒幕の思惑を潰すこと自体はできるやもしれません」

「どうやってっ？」

それがしは岩を抱きながら、さも知識人めいた風を装って続ける。

「歌は世界を救うのです」

「ん？」

皆が、ぽかんと口を開けて何のことだか分からないと言った表情になる。

それがしは続けた。

「いや、ですから。歌は世界を救うのです。人々の心には、あいどる”が必要なのですぞ」

「この大陸の言葉で話しなさい。アンタのまさし語は生憎理解できないの」

「むむむ」

ふてくされたように口を尖らせる上司殿が発する謎の圧力に負け、それがしは、無い知恵を絞って案の形を整えていく。

「ああ、なるほど……」

「へえー」

それがしの腹案は幸いにして「大筋では良い案である」と皆の賛同を得ることができた。

ただ……、策を実現させるための下準備が厄介なのだよなあ。何と言つても、我々には時間が足りなすぎる。

まともに準備をしていては、討伐軍が動き出してしまいうだろう。手つとり早く、人心の注目を集めるには……。

さらに打ち合わせは紛糾し、上司殿は頭を抱え、玄徳殿は苦い顔になった。

それでも残された時間の無さはいかんともしがたく、結局荒療治の出たとこ勝負を通すことで、皆の意見が統一されることになる。

「とりあえず、明日からの数日間が勝負です。……各々方、心して役割を演じられますように」

「うん、子遠さんもだからね。自分の身は大事にして。みんな仲良くが一番だけど……、私は子遠さんたちが辛い思いをするのも嫌だから」

そのお言葉だけで、三年間は戦えそうである。

その日、それがしは驚くほどぐっすり眠ることができた。

自分でも現金なものだと、呆れざるを得ない。

◇

翌日、それがしと主立った愚連隊の強面連中は黄巾を頭に巻くこともしせず、肩で風を切りながら、いかにも自分たちは匪賊であるという顔をして演唱会場へと足を運んだ。

一行の中に玄徳殿はいない。

そのことに少し寂しさを感じつつも、それがしは目の前に広がる人の群れを凝視する。

会場は、今日も大した盛況ぶりであった。

人、人、人、人……。数え切れないほどの背中を越えた先に、三姉妹のために設けられた舞台がぼつんと見える。

ううむ、予想通りというか遠い。

このように徹夜で場所取りをしていないと、ムサイ男たちの背中が壁になり、まともに彼女らを見ることができないのだ。

先日までは、天和ちゃんの母性を間近で拝見するために随分と苦勞をさせられた。



何せ、うまい具合に場所をとつても、開演までに時間がかかる。当然ながら人間として当然催すべきものが催すのだが、用を足しに場を離れて戻るだけで場所取りを巡って揉め事が起きるのだ。知人や隣の者に確保を頼んでも、である。

黄巾賊に身を潜ませてから、今まで一体何人の好敵手と揉めたことか。

”天和ちゃんを愛で隊” 四天王の五人衆ども……。 ”地和ちゃんに朝起こしてもらい隊” の昼青龍殿……。 ”控え目に言つて人和ちゃんのお腹をツンツンし隊” 第六天魔王の筆頭殿……。

彼らのような強敵との争いを避けるためには大小便を我慢するか、飲食を控えるしかない。一度挑戦したこともあったが、このまま貫徹すれば神仙にでもなれるんじゃないかと思うくらいには苦行であった。

……それを思えば、今日は気が楽だ。

だって、邪魔者は皆蹴散らしてしまえばいいのだから。

「二人とも。お願いしますぞ」

「へい、任せてくださいえ」

「……うす、ちよろい仕事だぜ」

頬傷オツサンと褐色青年が、それがしの前にずいっと出た。

そして、これみよがしに舌打ちをしたかと思えば、前方を塞ぐ人の肩を掴み、強引に引き倒す。

「おう、どけやくソども」

「はア!? 俺たち”地和ちゃんに踏まれ隊” の席を奪い取ろうなんざ……、はい。どうぞ」

「後ろは譲つてやるから、演唱会を楽しみな。おう、道を開ける手前等！ 最前列は俺らのシヨバなんだよ!!」

時には威圧して、時には暴力沙汰まで起こしながらも、我々強面連中は強引に最前列へと向かっていく。

たとえ殺意のこもった視線を向けられようとも我々はひるまない。

それはくぐってきた修羅場が違うということもあったが、彼らが恐らく実力行使には出ないだろうということも大きかった。

乱闘をいたずらに起こして、演唄会を台無しにしたくないのだ。同じ三姉妹を愛する同志として、彼らの思いは痛いほどに良く分かった。

「悪いなあ」

と、声には出さずに心の内でのみ頭を下げる。

彼らの良心を手玉に取り、我々は傍若無人な振る舞いを続けなければならぬ。

最前列の中央を確保して、三姉妹の登場を我が物顔で待つ。

「おう、酒を取ってくれや」

「うす。肴は？」

「くれ、くれ」

胡座をかいて座り込んだ頬傷オツサンが酒瓶を盛大に呷る。

「かーっ！ うめえ、もう一本くれ」

飲み終えた酒瓶を後列に放り投げて、誰も文句を言う者はいなかった。

うーん……。まったくもって、堂の入った親分面だ。流石に元匪賊の頭目だけあって、周りに理不尽を強いることに慣れておられる。

それがしも身内でなければ、演唄会に支障が出なければ、こうして彼らの隣に座ることはなかっただろう。

可能な限り距離を取って、無駄な荒事に巻き込まれないよう心がけたいに違いあるまい。

「オヤジ……」

オツサンとは打って変わってピリピリしているのが、褐色青年を筆頭とする若衆であった。

「どうしたの」

青年に対して、それがしは舞台をぼけつと眺めながら答える。決して、仲間たちの無体な振る舞いが直視できなくなったわけではない。「いや、俺たちは何時だってお頭のためにヤバイ橋を渡ってきた。けどよ、今回みてえなヤマは初めてだ。ただ人をぶっ飛ばすだけじゃねえ目論見なんざ……。果たして成功するのか、と思ってよ」

いや、玄徳殿のことを思うなら、まずはすぐに人をぶっ飛ばす素行

から改めようぜ……、と思わないでもなかつたが、よおく考えてみると、事のきつかけはそれがしである。

こつこつとまともな仕事をしたくないからと言って、「それじゃあカツアゲでもしようか」と安易に始めたそれがしの責任であった。ゆえに黙認する。

ギギギと青年の方を振り向いて、まるで全てを見通しているかのごとく、にっこりと微笑み、とぼけた声を青年に返した。

「上司殿が太鼓判を押してくださったから、多分大丈夫だと思うよ」  
実際、それがしだけの案であつたならば、予期せぬ落とし穴で破綻することもあつただろうが、今回は上司殿や皆と共に細部を詰めている。

だから、大丈夫なのだ。

それがしは策の成功を確信しているし、一人で責任を受け持たなくていいため、気も楽である。

あと、大小便を我慢しなくて良いというのが何よりも大きい。

「それでももし失敗したら」

青年は不安をぬぐえないようだ。

でもでも、だっては男らしくないんだよなあ。

それがしは軽い調子で続けた。

「そりゃあ、適当に暴れて逃げ帰ればいいんじゃないの」

逃げ帰る途中に兵糧庫を燃やすだけで、少なくとも当初の目標は達成できる。

ぶつちやけて言えば、「玄德殿の名を高める」だけなら、今回はそこまで困難ではないのだ。

三姉妹を救おうとするから、こうして危うい綱を渡る羽目になる。

いや、不満はないけどね。それがしだって、天和ちゃんたちを助きたいし……。

「そう気負う必要もないさ。でえんと構えていればいいの。でえんと」

「俺は、オヤジみてえに凶太くなれねえよ……」

「え。凶太くないよ、全然」

むしろ、肝が小さいからこそ今の境遇に流れてきたというのに、青年はてんで合点が行かないという風に息を吐いた。

それがしの凶太さについてはさておいて、彼の落ち着きの無さは、まるで初陣を控えた新兵のようである。

何か不安を取り除けるような気の利いた一言でも投げかけられればいいのだが、生憎何も思い浮かばない。

何かないかなあ。例えば、うーん……。

「流されていけば、その内終わるよ」

却下。望まれぬ結婚の初夜か。

「終わった後の休暇を妄想すれば、頑張ろうって気になれるよ」

これも却下。我々に休暇はない。自営業だもの。

「根性が足りないんじゃないの。みんな頑張ってるよ？」

……駄目だ、思いつく言葉のことごとくが官畜ぶいっくのそれだ。

分かった！　それがしは上司になっては駄目なんだな。これ以上悲しみを連鎖させないためにも、まともな職につくべきではないのだなど思いました。まる。

「始まりやすぜ。副頭領、準備を」

取り留めもないことを考えていると、突如頬傷オツサンの表情が陰しいもの変わった。

眼前の舞台に煙幕が立ちこめる。

いよいよ、演唄会が始まるのだ。

いつも通りの演出と客の歓声が轟く中、三姉妹が颯爽と姿を現す。

黄色い衣装に包まれた、瑞々しい、瑞々しい、ああ、天和ちゃん。あ

あ、天和ちゃん……！　相変わらずの瑞々しい――、

「アイエツ!」

臍に痛みを感じたため、慌てて母性から目をそらした。

馬鹿な……。いつもそれがしの臍を竹のこぎりが行き来する時には、上司殿か玄徳殿が傍におられるはず。

だというのに、今この場に彼女らはおられない。

不可思議だ。理不尽だ。

もしや、古傷が痛むような錯覚なんだろうか。それとも妖術の類な

んだらうか。

何なの、一体。まるで分からない。やだもー！

「……どうしやした？」

青年に心配されたところで、それがしはコホンと咳払いをする。

「何でもないよ」

よくよく考えてみれば、今のそれがしは心を鬼にせねばならぬ。

お手製の扇を振っている場合ではない。やらねば、ならぬことがあるのだ。

「天和ちゃん、すまぬ……。すまぬ……」

脂汗を流し、心の内で血涙を流しながらも、それがしは精一杯に息を吸い込み、叫んだ。

「ようやくのお出ましか！ 脱げ、脱げえええええええ！ ケツと胸を見せろおおおおお！」

——しいんと。

にわかには沸き立つた熱狂が、あつという間に鎮まった。

次いで最前列を奪った時に向けられた怒気とは比較にならない重圧が我々に襲いかかる。

三姉妹も、今までにかけられた声援とは別種の言葉をかけられたことで、いささか混乱をしておられるようだ。

ああ、天和ちゃんが困ったようにこちらを見ておられる。

ごめんなさい、ごめんなさい。

でも、仕方がないので。

良心がずきずきと痛んだが、ここでしり込みしてもいられない。

我々は勢い良く酒をかつ食らって、考えうる限りで最悪の客を演じ続けた。

「おーい！ 姉ちゃんたち、こつち来て酌をしてくれや！」

「誰かもつと酒持ってねえのか。酒が足りねえ！ 酒が！」

こういう時、頬傷オツサンは本当に頼りになる。

何処からどう見ても、性質の悪いやくざ者だ。彼らの熱演によって会場は最早一触即発の状態にあった。

四天王の五人衆が、昼青龍が、第六天魔王がが、数万とひしめく観衆が、演唄会を台無しにされたことで怒り心頭に発している。

うーん、もうひと押しかな？

仕上げにと彼女らの歌を適当にこきおろそうとしたところで、

「も、もうやめてー！」

観衆の最後列から、玄徳殿の良く通る声が聞こえてきた。

静まり返ったところに彼女の声は良く響く。

観衆のまなざしは自然と玄徳殿のもとへと集中した。

うむ、黄巾を頭に巻いていても玄徳殿は可愛い。

天和ちゃんと見比べてみても、それがしの中では玄徳殿の母性が僅かに勝るな……。

「ここは、歌と踊りを楽しむ場所だからっ！ みんなで仲良く歌を聞こうよっ……！」

彼女の声色はそれがしも目を丸くするほどに切迫しており、見事な演技とあってよかった。

事実、観衆は玄徳殿の熱意にすっかり参ってしまった。

「おい、ありやあ誰だ……？ あの胸は一体……」とざわめく男たちの様子を見て、それがしはほっと胸をなでおろした。

自らの悪感情を代弁してくれる、何処からどう見ても美少女が突如現れたとしたら、人は一体どういう思いを抱くであろうか。

答えが今、目の前に提示されている。

「あの嬢ちゃんの言うとおりだー！」

「てめーら、ふざけんじゃねえぞ！ 俺たちはいやらしい気持ちでこの場にいるわけじゃねえんだ！ 帰れ、帰れえ！」

「人和ちゃんのおっかけは遊びじゃねえんだぞ！」

「下郎ども、根切りしてくれるわ！」

どうやら、策の第一段階である、“玄徳殿という御仁を黄巾賊に認知させる”ことにはひとまず成功したらしい。

「オヤジ……、こっからどうすれば」

「できうる限り情けない感じに撤退しよう」

「……うす」

それがしたちは彼女の言葉に委縮した風を装って、罵声と嘲りを背に受けながら、すたこらとその場から逃げだした。

◇

前の職場でもそうだったのだが、一度関係性やら流れやらを作り上げてしまえば、その後はトントン拍子にうまくいくものだ。

それがしたちは、演唱会が終わったあたりで黄巾の連中のもとへと挨拶伺いにまわった。

謝罪行脚を開始したのである。

「ちよいと皆さん」

「あつ、テメーらは……」

「いやいや、先ほどはどうも失礼をば……」

謝罪内容は相手によつて手を変え品を変えるものの、大筋では統一する。

要約すれば、「先ほどの叱咤で我々も目が覚めた。これからは我々もちゃんと歌を楽しむ同志になりたい。あと、あの時に叱咤してくださいました女性に素晴らしい方だと思えました。彼女にも是非謝りたいので、貴方から仲介してもらえないか」とでもなるだろうか。

面白いもので自らに大義があり、こちらが下手に出ている間は彼らも驚くほど居丈高に接してくる。

「誠意が足りない」と言われれば、更に頭を深く垂れ、「出すもんを出せ」と言われれば、手持ちの酒を彼らに振舞う。

気分の良くなった連中の中には、それがしたちの頼みをきっかけに玄德殿のもとへ会いに行く者たちもいることだろう。

ここまですれば、我々の目論見も半ば完成したようなものであった。

そう——、”玄德殿と黄巾の連中を良い形で交流させること”こそが策の第二段階なのである。

玄德殿に悪意なく接した者は、皆が好印象を持つはずだ。

何せ、彼女は可愛いし、大きい上に大きい（大きい）。

母性に満ち溢れた彼女の人徳をもつてすれば、同じ三姉妹の歌を聞

く同志という共通項がある連中を骨抜きにすることなど、赤子の手をひねるよりも容易いことであった。

一つ懸念があるとすれば、

「おい、貴様。先ほどのあれは一体いかなる仕儀であるか」

などとそれがしに問いつめてくる、何で黄巾賊に混ざっているのか分からない猛者や顔見知りの取り扱いであったが、

「良い胸であった。耳元で頑張っつて言われたい」

基本話せば分かってくれたため、問題はなかった。

そして、慌ただしい謝罪行脚を済ませて一日を終える。

玄德殿の人気は時を置くごとに高まっていき、演唄会より二日と経たずに黄巾の連中から第二の精神的支柱として持ち上げられるようになった。

「玄德ちゃああああん！」

初日に性質の悪い客を演じた関係上、我々には遠巻きに眺めることしかできないのだが、時には演唄会の合間に三姉妹の曲を「歌ってみたり」「踊ってみたり」しているようで、時折今のような黄ばんだ声が聞こえてくる。

どうやら評判は上々のようだ。

今は「踊ってみた」の時間かな。

「こつち向いてくれええええ！」

豆粒大にぼつりと見える玄德殿のお姿に、それがしは齒ぎしりせざるを得ない。

ああ、くそ。くそつ、くそつ！ 三姉妹を模した衣装を着た玄德殿が母性を弾ませている様を間近で見られないのが、とにかく心残りだ……。悔しすぎる。

でも、謝罪詣では口の回る人材が必要だったんだよなあ。

憎い。それがしの無駄に回る口が憎い……！

ところで、何故上司殿が玄德殿の隣で屈辱に耐えかねるといった顔で踊っておられるのだろうか……？

確かに玄德殿お一人では三姉妹の歌と踊りを完全に真似することはできない。



三姉妹の踊りは、母性と、眼鏡と、平たい胸が醸し出す魅力の相互作用によって初めて完成されるのだ。

となれば、上司殿は――。

「ヒエツ!？」

上司殿と目が合った。四半里は離れているというのに何と言う勘の鋭さだろうか。

やばい……。それがしの考えていたことが悟られていた場合、身の破滅である。後で謝罪の言葉を考えておかねば……。

「つて、さつきから臍が痛いんだけどおっ!」

ぱっと見下ろせば、褐色青年が竹のこぎりを片手にそれがしの臍を引いているところであった。

「いや、姐さんに言われててよ……」

それがしは無言で青年を蹴りとばすと、再び「踊ってみた」の舞台へと目をやる。

……上司殿は仕方ないとして、何かおかしな御仁が混じっているように見受けられるのよなあ。

三姉妹の眼鏡枠。

それがしから見て右の位置に立って踊っている御仁は、国譲殿でも憲和殿でもなかった。

いや、よくよく考えてみれば眼鏡枠なのかあは……?」

青い短髪を楽しげに揺らしながら、踊る女性の顔には蝶を模した仮面がかけられていた。

つて、眼鏡じゃなくて仮面枠じゃねーか!

青髪の蝶仮面をかけた女性は、こちらを見るとにやりと口の端を持ち上げて口を開いた。

――後で、そちらに伺います。

読唇術を会得していない、それがしにも分かる程はつきりとした口の動きであった。

あれつて、伯桂殿のところにおられた子龍殿だよなあ。

何でこんな場所におられるのだろう……?」



「いやはや。子遠殿は韓信かんしんの生まれ変わりとしても言うべき御仁ですな」

日も沈んできた時分に、天幕で休んでいたそれがしのもとへやってきた子龍殿は開口一番にそう言った。

「はあ、韓信ですか」

それがしは生返事をして、彼女を見る。

韓信とは漢の高祖を助けた名将として知られた英傑だ。

ただ、この韓信という人物。後に高祖から叛心を疑われ、肅清されてしまうのだ。

いかに名将といえども、引き合いに出されて嬉しい人物ではなかった。

「ちなみにそれがしの都にいた頃のおだ名をご存じであったり？」

「いんや？　もしや耳にたこができておられましたか。ならば、申し訳ない」

といい、子龍殿は持参した酒瓶をぐびりと傾ける。

ううん、彼女は一体何をしに来られたのだろうか？

そもそも、玄德殿とそれがしたちの繋がりが黄巾内に広がっては都合が悪いため、可能な限り接触をしないよう心がけていたのだ。

だから特に理由もなく、策を台無しにされては困るのだが……。

そんなそれがしの懸念が透けて見えたのか、子龍殿は人を食ったような笑みを浮かべて、細い指を三本立てた。

「私が子遠殿のもとへ参った理由は三点あります。まず一点目は玄德殿。あの御仁から言伝を頼まれたからです。ほら、私ならば変装をしておりますから、子遠殿のもとへ足を運ぶにも都合がいいでしょう？」

何だと。

子龍殿のあの仮面は変装のつもりだったのか……。

それがしはてつきり、眼鏡と仮面を勘違いしていたのかと……、いやそれもありえないな。

咳払いをして、それがしは問う。

「して、玄徳殿からの御伝言とは？」

「もう大丈夫だから」。つまり、謝罪行脚を止めるようにとのお願いですな。あまり、女性を悲しませるものではありませんぞ？」

「あー……、もしかして玄徳殿は悲しまれておりましたか」

「それは、もう」

子龍殿の答えに、それがしの良心がずきりと痛む。

玄徳殿は今回の策に最後まで反対なさっていたのだ。

三姉妹は助きたい。でも、そのために身内が傷つくのも嫌だ。でも、やっぱり三姉妹は助きたい……。

そんな葛藤に苛まれていた彼女を、理をもって説き伏せたのが上司殿である。

『良い？ 桃香。何かを成し遂げるためには、何かを犠牲にする覚悟を持たなければならぬ。物事には優先順位をつけなさい』

『でも、どちらかなんて決められないよ……』

『アンタの優しさは美德よ。でもそれだけじゃ駄目。もし、どうしても決められない場合は、犠牲になる覚悟がある者に頼めば良いの。アンタのためなら、骨を折ることを厭わない連中が、うちには山ほどいるでしょう。それに今回は命がけの仕事ってわけでもないんだから、笑って送り出してやれば良いのよ』

その場では渋々了承した彼女ではあったが、いざ実際に罵倒される我々を目の当たりにしたところ、耐えられなくなってしまったらしい。

玄徳殿らしいというか、何というか。

「上司殿は何と？」

「事は九割九分成功したから、仕上げを悠々待っている、と」

「ああ、成る程」

確かに玄徳殿はもう黄巾賊の中でかなりの発言力を獲得したわけであるから、後は三姉妹の安全をお題目にして一旦の解散を諭してあげばいいだけだ。

もしくは三姉妹に直接会い、今がいかなる窮地にあるかを知らせて

あげても良い。

今回の大目標となる”黄巾賊の反乱を、事が動く前に鎮圧してしまう”ことの達成は、既に目の前に見えている。

要するに我々の担わねばならぬ仕事は終わったということであった。

肩の荷が下りた気分である。これでそれがしの責任はなくなった。変装をして天和ちゃんの演唄会を見に行こう。

「ただし、貴殿の正体がばれることから、万が一に繋がる恐れもあり得るため、三姉妹の演唄を見に行くことは禁じる、と」

「……はい」

上司殿の千里眼にはぐうの音も出ない。あの人ホント怖いよ……。

子龍殿は声を上げて笑って、指を一本折り曲げた。

「それで二つ目の理由ですが、私からご忠告を」

「はて、忠告ですか?」

何だろう。

三姉妹に入れあげすぎるなという話であろうか。だとすると、もう手遅れなのだが……。

「……黄巾の将に手練れの者が混ざっております」

「それは、昼青龍殿や第六天魔王殿のような……?」

「いや、その御仁等は分かりませぬが」

真顔で問うそれがしの言葉に、子龍殿は困惑気味な表情を浮かべられて続けた。

「私は白蓮殿に頼まれて、玄德殿の護衛に参ったわけですが……、彼女に殺気を向ける者がおります」

「——なっ!?!」

第六天魔王殿たちは既に玄德殿のことを「見事である」と認めておられていた。

少なくとも表だって姿を見せしている猛者たちに、玄德殿へ悪感情を向ける者はいない。

……となれば、暗躍する猛者。つまりは黒幕が玄德殿を狙っている可能性があった。

「玄德殿についてはご心配めされるな。この趙子龍が武名に誓ってお守りいたしましょう」

「心強いお言葉です」

「ただ、心配なのは子遠殿たちです。狙いが玄德殿だけならばいいのですが……。もし、貴殿等までも狙いに入っていた場合、本陣を守る私では助太刀に行けませぬ。敵は私に正体を掴ませぬほど、隠行に長けた人物……。くれぐれもご注意めされるよう」

子龍殿でも感知できない手練れかあ。

強そうだなあ。最低でもそれがし五人分から十人分くらいの実力はありそうだ。

基本、単独行動は避けるとして……。相手が徒党を組んできた場合は逃げの一手で良いだろう。

勝てない戦に首を突っ込む趣味は持ち合わせていなかった。

「貴重な情報、痛み入りますぞ。周囲には常に警戒を払っておくことにします」

「そうしなされ。ああ、それと……」

子龍殿はためらいがちに天幕の外へと目をやった。

……誰か、外に待機しているのだろうか？

「子龍ちゃん、もう良いかしらあん」

口調は淑やかな女性のものであったが、その声色はやけに野太く感じられる。

というか、都で聞き覚えがあった。

「このお声は……」

「おや、もしかすると顔見知りですか。貴殿にお会いしたいとあちらの天幕へやってきたので、こうしてお取り次ぎに伺ったわけですが」

「うーん、顔見知りというか」

子龍殿の問いかけに、それがしは唸った。

別段、それがしは彼（彼女？）と面識があるわけではないのだ。

彼（彼女？）は良くも悪くも都では有名人であり、一方的に見知っているだけに過ぎない。

だからこそ、わざわざそれがしに会いに来る理由というものに思い当らぬわけなのだが……。

とりあえず、お会いしてみれば分かることであろう。

それがしは、天幕にお呼びする形ではなく、自分が天幕から出ることによって彼（彼女？）を出迎えた。

彼（彼女？）のお姿は、ちよつと仲間たちには刺激的すぎるんじゃないかなあと思つたからである。

「ようこそ、おいでくださいました。貂蟬殿」

「そう言えば、はじめましてになるのかしらねえ。お互いに顔と名前は一致しているみたいだけれども。これって運命なのかしら？」

三つ編みにしたもみあげを揺らし、女子供の腰ほどもあるたくましい二の腕をきやるんとさせて、裸同然の姿をした貂蟬殿が顔を赤くされる。

何時見てもすごい威圧感だ。およそ同じ生き物とは到底思えぬ。

「貂蟬殿も顔見知りであるというのなら、私にそう言ってくれても良いだろうに」

「ごめんなさいねえ。お話したことはなかったから、ちよつと自信がなかったのよおん」

「はは、言葉を交わしたことがないというのに、顔見知りとは面白い話ですな」

子龍殿は貂蟬殿相手にも全く尻込みする様子を見せない。

都にもここままでまともに彼（彼女？）と会話できる者はほとんどいなかったというのに、まこと肝が据わっておられるなあ。

ほお、と感嘆しながらも、それがしは貂蟬殿に声をかけた。

「どうなさいますか？ 天幕をご用意いたしましたようか。そのお姿ではお寒いかと思われますし」

「あらやだ、優しい！ でも心配は御無用よん。漢女おとめは鍛えているから、この程度の寒さなんてなんでもないわん」

こんな風に、と腕に力を込めて見せると、女子供の腰ほどの太さであったものが、大の大人の腰ほどの大きさにまで膨れ上がった。ふええ、怖え……。

だが、そんな様子を目の当たりにしても子龍殿は「ほう、お見事」と目を細めるだけに留まっておられる。

分かった。この人、人を筋肉とか強さで凶つてしまう人なのかもしれない。

都でよくすれ違っていた、涼州弁の御仁を思い出す。

よし、これからは無言で道をお譲りすることとしよう。この手合いの絡みは、生傷が増える。

「長居をするつもりもないから、ここで良いわよん。人の目も少ないし」

「すぐに旅立たれるのですか?」

「ええ、幽州に。このままだと都に留まる意味がなくなりそうだから、

”御主人さま”のもとへ行こうかと思つてねん」

「御主人さま?」

それがしが首を傾げると、貂蟬殿は頬を赤らめ、いやいやをしながら嬉しそうに語った。

「御主人さまは、御主人さまよん。天の御遣いで、とつてもイケメンのカレ」

「北郷殿でしたか」

北郷殿すげえ。あの御仁の人徳は、貂蟬殿までも心酔させてしまうのか。

流石まさし君と同郷の方だなあ。

それがしが勝手に納得をしていると、貂蟬殿は何故かそれがしを値踏みするようにしてじつと見つめてきた。

「んー、当てが外れたかしらん?」

「何がですか?」

「知多屋、呉学究」

ん? 貂蟬殿の仰っていることが分からぬ。

それがしが困惑を深めていると、さらに貂蟬殿がそれがしの顔を覗き込んでくる。

「他人の空似かしら。」キャラクター”の再配置かしら。しらを切っている様子ではなさそうねえ……」

「呉学究という方と、それがしに何か」

「ああ、気にしないです。もしアナタが知多星でないというのなら、私はアナタに語る言葉を持っていないから」

「……貂蟬殿。その言い方は子遠殿に失礼であろう」

表情を険しくする子龍殿を見て、貂蟬殿は再びきやるんと身体をくねらせる。

いや、まあ、うん。貂蟬殿については失礼とかそういうのは求めていないから良いんだよな。

だって、都でお見かけしたときから謎の御仁として名を馳せておられていたし……。

きつと、それがしには分からない考えをお持ちなんだろうと思う。

貂蟬殿はしばし考え込むようにして口元に手を当てられると、意を決したように口を開いた。

「呉子遠ちゃん。私は今から独り言を言うから、アナタなりに解釈してねん」

「ん、はい？」

それがしの反応を無視して、彼（彼女？）は続けられる。

「世界」というものは人の想念の数だけ沢山あるの。だから、劉備ちゃんのもとにアナタが存在しない世界もあるし、そもそも劉備ちゃんが誰かの下についている世界だってありえる。例えば、御主人様の愛人におさまっている世界なんてものだってあるのよん」

むむむ……、いきなりぶっこんでこられたぞ。

ええと、たられれば話の話をしておられるのだろうか。そして、たられれば話は現実のものとして、どこかにあって……。やばい、良く分からない。

「まさし君や、北郷殿の仰るニッポンとは違うのですか？ あれは天のお話だったと思いますが」

苦し紛れに発したそれがしの問いかけに、貂蟬殿は目を丸くされた。

「ああ、そういうこと……。御遣いの相対化によるバタフライ現象を狙った神仙がいるということなのねん。于吉ちゃんか、左慈ちゃんか



……。 ” そういう ” 方向性なら、私が動く必要性もないわねえ」  
ば、ばたふ……？

まるで言っていることが分からんぞ。一を聞けば十が分からなくなる。

どうやら、本当に彼（彼女？）は独り言を言っているだけなのかも知れぬ。

もう解釈するのを諦めなくなってきた……。だが、彼（彼女？）が発した続く言葉にそれがしは飛び上がってしまう。

「この外史はおそらく、劉備ちゃんをいじめるためだけに作られた世界なのねん」

「は、え——？」

玄德殿をいじめるため……。それはつまり彼女の天命が、彼女に不幸しか与えないということなのだろうか。

それがしは玄德殿と初めて出会った夜のことを思い出した。

あの時、彼女は賊の手に落ちておられた。

不幸といえば、不幸なのだろう。未だ匪賊狩りに身をやつしておられることも不幸。自分なりに努力をしてきたというのに、北郷殿という自分とよく似た存在と出会ってしまったことも不幸。思い当たる節は山ほどにある。

「忘れたくない、離れたくない」と切に願った、とあるオトコノコの活躍が正史の観測者の想念を生み出した。彼らの活躍をもっと見ていたい。彼らのこれからはどうなるんだろう。いや、別のルートも興味がある……。こうして、数多の外史が生まれていき、更なる外史を生み出していったわ」

貂蝉殿はそこで言葉を切り、悩ましげな表情を浮かべられた。

「でも、想念とは必ずしも良いものだけがあるわけではないの。例えば、気に入らないやつを酷い目に合わせてやりたい。あいつが女を独占するのは間違っている。そもそも歴史的にはこんな物語、ありえない。そんな風にして物語を否定することによって生まれる世界……。外史もあるわけ。私たちは、そんな外史を『アンチ外史』なんて呼んでいるわ」

「あんち、外史？」

「アンチ外史」では概ね誰かが不幸になることが多い。不幸になるためのお膳立てが、天命によって定められている場合が多いの。まあ、それも外史のあり方の一つなんだけれどねん。他人の不幸は蜜の味、というから。そういう楽しみ方だつてあつていい。少なくとも私は認めるわん」

言つて、貂蟬殿が苦笑いを浮かべられた。

「この外史は劉備ちゃんにとって”アンチ外史”であつたはずなのよ。酷い目にあい、観測者を楽しませるための」

達観というか、諦観というか、彼（彼女？）は天命をまるで他人事のように語っておられる。

まるで、神仙のような立ち位置だ。

いや、あるいは本当にそうなのかもしれない。

「けど、どうやら横槍が入つたらしいわねえ。”アンチ外史”に引つ張られて、正史に影響が出ることを恐れた者たちがいた。アナタのいう”まさし君”がこの世界に存在することも、その一環ねん。主人公でもないアナタが、こうして物語を左右できる存在にまで変容してしまつたことも、彼らの仕業かもしれない」

「それがしが……。ええと、それがしが玄徳殿と出会つたことによつて、天命が変わりつつあるということでしょうか」

貂蟬殿はにっこりと微笑まれた。

「呉子遠ちゃん。アナタはこの外史で何を為したい？」

「何を、というのは」

「世に居る英傑と肩を並べて戦つたり、時には出し抜いたり……。外史の突端から影響を受けたアナタならば、ある程度の願いはかなうはずよ。だから、どうしたい？」

それが少し考え、答えを出した。

「ひろいん」に涙は似合わないのではありませんまいか」

その答えを聞いた貂蟬殿はしばしきよとんとした後に、

「……于吉ちゃんも、左慈ちゃんもたまには良い仕事するじゃない。私、この方向性のお話も好きだわん」

満足げに頷いて、話は終わったとばかりに背を向けた。

「聞きたい話は聞けたから、私は御主人さまのもとへ向かうわねえ。頑張りなさい、呉子遠ちゃん」

見返りながら、手を振る貂蟬殿。

それがしの疑問はあまり解決しておらぬのだけれど……、いくら考えてもまともに理解できそうな気がしない。

うん、めんどい。それがしは考えることを止めた。

「あ、そうそう」

「んお、はい？」

「外史の突端……、つまり転生者の取り扱いだけでも。基本、物語の”もぶ”であったアナタがまともにかなう相手ではないわ。もし出し抜きたいのならば、頭を使いなさい」

「んー？ 分かりました？」

いや、まったく分からないんだけども。

分からなくても分かりましたと返すことが、それがしなりの処世術であった。

貂蟬殿は苦笑いを浮かべられると、今度こそこの場を後にした。

……うん。まじめに良く分からなかった。

でも、玄德殿のために頑張らなければならぬことだけは分かった。

”ひろいん”に涙は似合わないものな。頑張ろう。

## 第八回 呉子遠、奮闘する

貂蟬殿がお帰りになられた後、それがしは改めて彼（彼女？）の残した言葉について考えてみることにした。

例えば、

『物語の”もぶ”であつたアナタがかなう相手ではない。出し抜きたいのなら、頭を使え』

とは一体いかなる意味なのであろうか？

まるで、それがしと”てんせいしや”とやらの直接対決が間近まで迫っているかのような物言いである。

”てんせいしや”なあ。”てんせいしや”って結局何なのだろう。ええと。確か、この世には神仙と”てんせいしや”なるものが存在しており、天の理を操っておられるとか……。

そして、まさし君もそういった存在の一人であつたという。まさし君、すげえ。

まさし君の例を踏まえると、”てんせいしや”というのは天の国であるニツポンからやってきた御仁であると考えるのが自然であるように思える。

ふむふむ、北郷殿も”てんせいしや”。

妙才殿の仰っていた、孟徳殿の新参配たちも”てんせいしや”

……。

つて、”てんせいしや”多いな！ ありがたみが無いぞ！

「……ん、待てよっ」

もしかして、そんな御仁らとそれがしが戦わなくてはいけないのだろうか？

いや、いや、いや。

無茶ぶりが過ぎるだろう。

確か妙才殿の話によれば、彼らは皆が智勇に優れていたはずだ。

そんな連中と、渡り合えと？ 何故だ、解せぬ。戦う意義が見出せない。

貂蟬殿が適当なことを仰った可能性は……、ないだろうなあ。

天の理をそらんじるがごとき彼（彼女？）のお言葉であるから、そのお言葉には何らかの根拠があるはずで、一から十まで口から出任せというわけでもないと思う。

となると、直近で玄徳殿と利害が対立している者がいるのかもしれない。

真つ先に疑われるのは黄巾賊の連中だ。

黄巾賊の中に”てんせいしゃ”なるものが混ざっていると仮定して……、ああ、そうか。

ここで子龍殿の仰っていた輩、つまりは今回の黒幕と繋がるわけか！

それがしはまず、天和ちゃんの母性を思い出し、次に三姉妹の歌や踊りを思い起こした。

よくよく考えてみると、あれら三姉妹の売り出し方はニッポンにあるという”あいどるぷろでゅーす”の在り方と酷似している。

「まえ」と歌うべきところを「生きることは己との戦なのだ」とか歌つちやっていたり、ところどころで妙な男くささを推していたりもするのだが、それでも方法論自体は音に聞く例とそう変わらないように思う。

うん、納得した。十中八九、黒幕は”てんせいしゃ”と見て良さそうだ。

ただ、ん？ んんー？

「子龍殿」

待て、おかしいぞ。

今回の黒幕ならば、上司殿と我々が詰めた策によつて完封できるはずだ。わざわざ虎の尾を踏みに行く必要があるとは思えない。

もしかして、起死回生とばかりに黒幕の方から仕掛けてくるということだろうか？

直接的な襲撃か、それとも搦め手で来るのか。

現段階の一手で大勢が動くとは到底思えないが、いずれにせよこちらとしては敵の襲撃に備えなければならぬだろう。

そうになると、武力面でこちらが対抗できる手札が子龍殿だけという

のが痛いなあ……。

妙才殿のお話から察するに、数を頼みに迎え撃つというのはあまり賢い選択とは言えないだろう。

有象無象を用いたところで、『だが俺の体は空を飛んでそのまま愚連隊の本陣へと向かう』をされるだけの気がする。

一応、上司殿は黒幕の反撃をも織り込み済みで策を詰めておられたはずだが、敵の力が未知数な以上、どこまで効力を発するか微妙なところだ。

かといって急ごしらえで新たな備えを築き上げるというのも難しいだろうしなあ。うーん、うーん……。

「子遠殿、聞いておられるか？ 子遠殿」

というか、頭を踏み台にして飛ぶってどういう状況なんだろう。

天の国に伝わる”がんだむ”みたいなものだろうか。確かあれも頭を踏み台にして戦った甲冑武者であったと記憶している。果たして”じむかすたむ”が勝てる相手なのか。

「おおい、し、え、ん、どのー」

そもそも、頭を使えといわれてもなあ。

頭を使うのは”てんせいしや”の方じゃないか。踏み台として。ん？ つまり、それがしも相手の頭を踏み台にすれば……。

それがしの頭を踏み台にした敵の頭を踏み台にして……。

いや、いや、駄目だ。まるで意味が分からんぞ。

どんな状況なのか想像すらできない。

うーん。うーん。

「ああ。これが音に聞く、何も聞こえない状態か。ふむ……」

思考の海に沈みこんでいたそれがしであったが、突如意識を引き上げられる。

それがしの耳に、何やら生暖かい何かがふうつと当たったのである。

「お、お、う、ッ!？」

こそばゆいようなぞわぞわとした感覚が全身を駆け巡っていく。たまらずそれがしは仰け反った。

何なの？ 今の何なの……？ コワイ！

「正気に戻られたか。ふむ、まるで生娘のような反応をするのですなあ」

口を魚のようにパクパクさせながら、それがしは子龍殿を睨みつける。

彼女は悪戯が成功した悪童のような顔つきで、にやにやと笑っておられた。

「子龍殿、今一体何を――」

「んう、そうまでしてお聞きしたいというならば、私が今何をしたか事細かく白状しなければなりません」

「あ、いえ。やっぱ良いです」

しなをつくる彼女のもつたいぶりように身の危険を感じたそれがしは、周囲に竹のこぎりがないかを確認した後、彼女と距離をとった。「おや、つれない。北郷殿なら、もう少しからかう余地があるのですが」

「いい加減、臍の痛みが馬鹿にならないのです」

「臍……？ まあ、それはさておき」

一瞬首をひねった子龍殿であったが、すぐに武人の顔になって続ける。

「先ほどの貂蟬殿のお話。どうか、よくよくご配慮を。恐らくあの者の言う”てんせいしゃ”とは、私の申し上げた輩のことであると思われれます」

「ああ、はい。そのことですかあ」

どうやら、子龍殿も同じ結論に行き着いていたようだ。

彼女は「既にお気づきでしたか」と前置いた後、顎に手を当てて窺うようにこちらを見る。

「隠行の冴えを見るに、敵の実力は恐らく私に匹敵しましょう。その上、いかなる策を用いてくるか分かりませぬ。捨て置いては危険……。貴殿に妙案はございますかな？」

「うーん」

そんな簡単に妙案など思いつくはずがない。

そもそも、英傑をそんな簡単に出し抜けるなら、それがしこそが英傑である。左団扇である。

「うーん……」

ひたすらに考える。

そもそも敵が単騎で襲撃してくるのか、数を揃えてくるのかもわからないのだよなあ。

幸いなことにほとんどの黄巾賊が玄德殿に好意的な感情を示しているが、それでも争乱のおこぼれに預かろうとした賊や黒幕の手駒が援軍として控えている可能性は否定できない。

敵戦力が未知数な以上、最適な戦術など立てられるはずがないのだ。

それがしは考えに考え、答えが自分では見出せないことを理解した。

「逃げる準備だけしておきましょう」

「逃げる……。迎え撃つのではないのですか？」

子龍殿の問いにそれがしは頷く。

「今回の策において失敗とは、玄德殿の御身が危険に晒されることで。仮に現段階で我々がこの場から引き揚げたとしても、予定通りに黄巾討伐が始まるだけです……。正直な話、別に策が失敗しても構わないのです。上司殿の築きあげた備えも”逃げ”と”予防”に徹したものでありましたから、要らぬ横やりで道筋を崩さぬ方がよいでしょう」

「それは少々弱気なようにも思えますが。乱世に臨む将星ならば、もつと志を高く持つべきでは」

それがしの説明に、子龍殿はあくまでも難色を示された。

うーん、この意見の食い違いは恐らく、互いの人生観が異なっているがゆえに起こっているのだらうと思われる。

子龍殿の考え方は、さながら天性のぼくち打ちのそれだ。

成功すれば万々歳。たとえ失敗したとしても、死しても名を残せば良い。

そんな英傑特有の覚悟が決まっておられるのだ。



無論、それがしにそんな覚悟はない。英傑ではないんだもの。

それに「万人を笑顔にしたい」と仰られた玄徳殿が命をかけるべき時は、今では無いとも確信している。

だって命をかけて、笑顔になるのがムサイ男どもというのは、ちよつと……。

だから、それがしはこう答えた。

「生きてこそその物種ですぞ」

それがしの結論を聞いた子龍殿は目を丸くして、何事かをぶつぶつと呟き始める。

「対決はしない……。及び腰と断ずるのは安易。ここは慎重と捉えるべきか。いや、臣は主君に似る。仁徳を進む主と同じ道をとられるということか。ならば、玄徳殿にも深いお考えが……？ 成る程、高祖の故事を考えるに——」

「子龍殿？」

「成る程」

何が成る程なのだろうか。何やらものすごい深読みをされたような気がする。

これ絶対後々で面倒くさくなる流れだ。

「子龍殿が何を早合点されたのか分かりませんが、それがしは——」

「いや、いや。みなまで申されるな。私には分かりませぬぞ」

慌てて補足しようとするも、子龍殿は手のひらで壁を作り、一人合点の行ったしたり顔で話を打ち切ろうとする。

「ただ、力を振るうよりも険しい道のりを進む貴殿の勇姿を……、私はしかとこの目で見させていただきますゆえ」

「はあ……」

頭の回転が速い御仁は、得てして会話が成り立たないのだよなあ。

しかも予想が違っていた時は、こちらもあちらも気まづくなってしまうというおまけまでついてくる。

「はあ……」

「子龍殿。そう情けないお顔をされますな。飛躍に臨む臥龍鳳雛の相は、自信に満ち溢れた笑顔にこそ宿るのですよ」

「はあ……」

結局、この後子龍殿はそれがしと酒を飲み交わし、我々の所蔵していた酒を片っ端から胃袋に納めた後、玄徳殿のもとへと帰ってしまわれた。

風のような……、いや夕立か嵐のような御仁だなあ。

何というか、すごく疲れる。

◇

翌日。

寝ぼけ眼で顔を洗いに近隣の小川へと出向くと、黄巾の中でも特に嗜好きの連中が何やら集って井戸端会議にいそしんでいた。

それがしは「ああ、はじまったか」などと思いつつ、川の水をばしやりとやりつつ、耳をそばだててる。

「……それでよ。俺たちがこのまま冀州に居座ると、天和ちゃんたちに危険が及ぶらしい」

「何でだよ。国の連中が潰しにかかるっていうのか？」

「ああ、そもそも……」

彼らの語る噂話の内容を要約すると、大体以下のようなになる。

『我々がこの地に集まっているのは、実は官匪の策略なのだ。奴らは三姉妹を生贄にして、王朝に忠誠を誓わぬ輩を片っぱしから殲滅しようとしているのだ。玄徳ちゃんはそのことを知り、三姉妹を救いに来てきた愛天使。俺たちも三姉妹のために何かやらねばならぬではないか』

概ね、かねてより上司殿が準備を重ねてきた流言通りの内容であった。

「ただ、予定より少し早いのかなあ」

黄色い頭巾で顔を拭きながら、思案する。

本来はこの流言策も、黒幕をいぶりだすためにできる限り足のつかぬよう数日かけてゆっくりと浸透させていく予定であった。

それが今日になってこうも大っぴらに噂を広め始めたということ、上司殿も策の完成を急ぎ始めたということなのであろう。

多分、玄徳殿の御身を案じてのことであろうなあ。

「身内の中に敵がいるっていうのかよ。同じ追っかけに不屈き者がいるとは思いたくねえなあ」

「いや、いたじゃねえか。この前の、ほらあそこにいる……」

連中から悪意のこもったまなざしを向けられ、それがしは素知らぬ風を装って、川の水でうがいをした。がらがらがらから。

これからは彼らのように上司殿が流した噂を真に受けて、隣人に対して疑いの目を向ける者が増えていくだろう。

互いが互いを監視し合う状況は、集団の結束を弱め、黒幕の暗躍をある程度防いでくれるはずだ。

さらには勝ち馬に乗ろうとしていたごろつきどもの中に、旗色の悪さを嗅ぎとって逃げ出す者も出てくるであろうし、玄徳殿に危害を加えようとする輩に対するけん制としては十分な効力を発揮するものと思われる。

思わず苦笑いを浮かべてしまう。

玄徳殿のために、攻めの策を守りの策に換えてしまうくらいなのだから、なんだかんだ言っても上司殿はお優しいのだよなあ。

後はその優しさをそれがしにも向けてくだされば、言うことないのだが……。

「おい、手前」

「あ、顔洗いも水汲みも終わりましたので、それがしは退散いたしますぞ。ごゆっくり、どうぞ」

顔を洗い終え、水桶に水を汲み終えたそれがしは黄巾連中に難癖を付けられるよりも早く、寝泊りをしている天幕へと逃げ帰った。

両手に水桶を提げながら、考える。

今のところ、我々の策は最善とは言わないまでもほぼ理想に近い流れで進んでいた。

ただ、こうなるとやはり黒幕の悪あがきが怖くなってくる。

それがしは小心者なのだ。

やはり先日子龍殿に語った逃げる手筈だけは整えておく必要があるだろうなあ。

万が一の事態が起こった時、怖いのはやはり黒幕の武力である。

もし、『だが俺の体は空を飛んでそのまま愚連隊の本陣へと向かう』をされたらどう対処すればいいんだろう……。

子龍殿だけではやはり不安だ。

それがしも来る日に向けて準備をしておかないと……。

ぼおっと空を見上げながら、天幕の裏手にたどりついたそれがしは、水のなみなみ入っていた桶を食材置き場の傍らに置く。

置き場には大きなむしろが敷かれており、その上には今日の朝飯となる小麦や根菜が積まれていた。

「ん、根菜かあ……」

そういえば、まさし君が「隙を生じぬ二段構え」な抜刀術にからめて、根菜を使った技についても語っていたことがあったなあ。確か、達人になるための特訓に使うんだとか……。よし。

「下手の考え休むに似たり。それがしの発想よりも、まさし君の言葉を信じてみようかな」

よくよく考えてみれば、それがしはいつもそうやって、まさし君のおかげで急場を凌いできたのだ。

いつもいつも頼ってばかりというのも心苦しいが、今回ばかりは玄徳殿の身の安全もかかっている。

それがしは意を決して、根菜の一本を掴みとった。

◇

「オヤジ、何をしてるんで？」

朝飯の準備でもしに来たのか、欠伸混じりに天幕の裏手へとやってきた褐色青年が、それがしに胡乱げなまなざしを向けてきた。

青年の疑問も無理はない。

何故なら、今のそれがしは地元で採れた根菜と、愛刀を手に持って精神統一をしていたのだから。

「特訓だよ」

「特訓で……。手に持った野菜をどう使うんだよ」

「ちよっと待ってる。気が散る」

しばらく黙想して、ゆっくりと目を開ける。

……うむ。良い感じだ。

今なら、まさし君の仰っていたあの技も再現できそうな気がする……！

「きえいつー」

それがしは無造作に根菜を放り投げ、くるくると回転する根菜の中心部めがけて、愛刀を大上段から振り下ろした。

白刃が閃き、確かな手応えが手のひらへと伝わってくる。

刃が通り過ぎた刹那の後に、根菜は空中でパカリと真つ二つに分かれ、そのままトスンとむしろの敷かれた地面へと落ちた。

「おー……」

青年の感嘆を背に受けて、それがしは無言で根菜を拾い上げる。

切り口は……、悪くない。

ささくれのない綺麗な断面になっている。

だが、果たしてできるものか……？

ごくりと唾を飲み込んで、それがしは二つに分かれた根菜の断面と断面を再びくつつけようとした。

……が、当然ながら元通りにはならない。

「やはり駄目か」

「何が駄目なんで？」

ため息まじりに、それがしは青年に答える。

「昔、まさし君が言っておったのだが、両断した根菜を再びくつつけることができれば、何か奥義が開眼するらしいのだ」

「んな無茶な」

「無茶でも今はやるしかない」

「何だよ」

「何でも」

呆れ声に適当な返事をして、二本目の根菜を宙へと放り投げる。

「きえいつー」

だが、くつつかない。

「ちえすとおっ」

だが、くつつかない。

「どうりゃっ」

だが、くつつかない。

って結構疲れるな、これ……！

「オヤジ、この斬り分けた根菜は飯にしちまって良いのか？」

「お。おう、もったい、ないから……。それで」

ぜえぜえと荒く息をつき、玉の汗を浮かべながらそう返すと、青年は根菜の一つをぽんぽんとお手玉にしながら、根菜の山を処理すべく、仲間たちを呼びにいった。

それがしは額の汗を黄巾でぬぐい、さらに特訓を続けていく。

もしかしてかけ声は悪いんだろうか。よし……！

「破あーっ」

くつつかない。

「殺あーっ」

くつつかない。

「斬っー」

くつつかない。

「おお、ほんとだ。副頭領がまた妙なことをやってやがる」

「オヤジ、何の遊び？ それ」

「良く綺麗に二つに分けられるもんだなあ。これ、芸になるんじゃないか？」

何時の間にやら、強面連中が物見に集るようになってきた。気が散って仕方がない。

心がささくれだったそれがしは、むすつとした顔で周囲の面々を睨み回した。

一睨みで彼らのほとんどは「くわばらくわばら」と蜘蛛の子を散らしていったが、褐色青年と頬傷オツサンだけが難しい顔をして、根菜の断面を矯めつ眇めつしている。

「廖化の叔父貴。こいつあひよつとすると……」

青年に声をかけられた頬傷おっさんが、腕を組みながら重々しく頷く。

「ああ……、モノになるかもしれねえ」

二人は一体何を呟いているのだろう。

それがしが怪訝な顔つきをしていると、おっさんは思いも寄らぬ事を口にした。

「なあ、副頭領。ただ真つ二つにするだけじゃ芸がねえ。」もつと先の景色”を見てみたくはありやせんか？」

何だと。

まさか、頬傷おっさんは”てんせいしゃ”に対抗できるような秘奥義を持っていたのだろうか。

もし強力な奥義だとするならば、それがしのような”もぶ”でも一発逆転の切り札を手に入れることができるやもしれぬ。

それがしは目を瞑り、心に玄徳殿の笑顔と母性を思い浮かべた。

彼女の御身を守るため、有用な切り札はあればあるほど良いだろう。

それがしもただの”もぶ”を脱却しなければならぬ時が来ているのかもしれない。

「……見てみたいと、思いますぞ」

だから、それがしは覚悟を決めてオツサン——、いや頬に傷のある黒々とした雪のような光沢を持つ髭をお持ちの師匠に是と答えた。

黒雪髭師匠は満足げに笑みを浮かべ、顎をさすりながら続ける。

「それでは真つ二つにするのではなく、もつと細かく。それでいて均等に斬り分けるようにしてみてくださいえ」

「細かく、均等にですな—」

それがしの心に灯がともった。

ただ、ひたすらに愛刀を振るう。

二分割を四分割に、四分割を十六分割に。百二十八分割に！

黒雪髭師匠はその様子を傍らで見ながら、むしろの上にならず高く積もった細切れの根菜を手にとつては容赦のない罵声を浴びせてくる。

「全然均等になっておりやせんぜ！ もつと正確無比に斬るんでさ！」

「応—」

それがしは叫び、さらに愛刀を振るった。

一刻振り続け、さらに一刻、休憩を挟んで更に二刻、休んで更に二刻。

太陽が月に成り代わっても、月が太陽に成り代わっても、それがしは刀を振り続けた。

山ほどの量、根菜を斬っても師匠の目は厳しく、一向に「良くなった」という太鼓判はもらえない。

むしろ、彼のもたらす試練の難易度は激化する一方だ。

「ほう、あの一振りでも十七分割してみせるかよ……。だが、根菜の瑞々しさを損なってはいけません！」

「応！」

それがしは応えた。

「斬った瞬間、根菜のかけらが宙を舞って綺麗に列をなすように斬ってくださいえ！」

「応！」

それがしは応えた。

「次は炒ツアオに挑戦しやしよう。まずは斬り分けた根菜を油通しするんです」

「応！」

それがしは応え……。うん？

特訓を開始してから二日ほど経ったあたり、鍋を片手に根菜を炒める段になって、それがしはようやく我に返った。

これは本当に秘奥義を開眼するための特訓なのだろうか……？

恐る恐る師匠を見てみると、彼は油通しされた細切れの根菜を感慨深げに見つめていた。

「何と見事な刀工……。こりゃあ、酒の良いつまみになりやすぜ」

手に持った箸の先に細切れの根菜を高く積み上げながらの一言であつた。

当然、それがしは無言でオッサンのケツを蹴り飛ばした。

◇

「何と見事な刀工……。これは、酒の肴になりますなあ」

そんなことを玄徳殿の連絡役としてこちらに来ていた子龍殿が



言った。

車座になり、強面連中と膝を向け合い、酒を飲みながらの発言である。

もう完全に、彼女はこの愚連隊に溶け込んでおられた。

どうでも良いことかもしれないが、その箸の先に切り揃えた根菜を積み上げる仕草は流行っているのだろうか。疑問だ。

「あまり護衛役が玄徳殿のもとを離れていては、まずいではありませんか」

無駄骨を茶化されたように感じたそれがしが口を尖らせ苦言を申し出るも、彼女に応えた様子はない。

「ふむ、確かにあまり長居はできませんなあ。しかし、これも敵を釣り出す策なのです。文若殿の許可は貰っております。ああ、この豚肉と根菜の黒酢煮は本陣に持ち帰っても？　玄徳殿たちが食べたがつておりました」

むしろ楽しみに笑っておられた。

……こう何度も酒を交わすようになると、子龍殿の性格が見えてくる。

彼女は言うなれば、怠け癖のある山猫のようなものだ。性格は善良で義にも厚いのだが、とにかく自由に動き過ぎる。

きつと口が達者で、要領も良いから世の中を上手く立ち回っておられるのだろうか。

その点が同じ怠け者という共通点を持つそれがしと彼女の違いであろう。もしそれがしが同じことをすれば、同僚には嫌みを言われ、野良犬には手を噛まれ、通りすがりの女性には暴言を吐かれ、上司殿は激おこ間違いなしである。

ただ、誰とでも仲良くなってしまう一方で、誰も彼もに気を許しているのかというと微妙なところであった。

その証拠に、彼女は玄徳殿たちとそれなりに接しているというのに、未だに伯桂殿以外の真名を口にしようとしなない。

多分、彼女なりの線が引かれているのだ。

空に浮かぶ雲のように浮ついてはいるものの、決して尻軽や節操無

しというわけではない。彼女の持つ誰からも親しまれる愛嬌と信頼感、そんな八方美人と一本気の絶妙な兼ね合いが作り上げているのだと、それがしは考える。

「……私の顔に何か？」

「いえ、羨ましいなあと思ひまして」

「はあ」

そんなことを話しながら、目の前の大皿に盛られた豚肉と根菜の黒酢煮を、強面たちとともに箸でつつく。

むむむ、シヤキつとした歯触りが意外に酒と合う……。奥義は会得できなかったが、料理技術が上がったことは収穫であったのかもしれない。

「子遠殿はメンマを使った料理もできるのですかな？」

むぐむぐと口を動かし、子龍殿が問うてくる。何でメンマ？

「いや、そもそもまともに料理をしたのは玄德殿の仲間になってからで……。都では買い食い専門でしたな」

それがしは答えながら、都での日々を思い出した。

お気に入りの屋台。お気に入りの酒家。

何故か上司殿とお気に入りの店がかぶることが多かったのだよなあ。

上司殿はそれがしとお気に入りがかぶると途端に機嫌が悪くなってしまう。

それで選択肢がなくなったところに見つけた店が、”和食屋”なる酒家だった。

後で知ったことだが、あそこはまさし君のお気に入りの店でもあったようだ。”おにぎり”に”みそ汁”、”かれらいます”……。どれも都の味付けとは一風変わっており、思い出すだけで生唾を催す。まあ、一月もしないうちに上司殿が出入りするようになっちゃったけど……。

そうだ。今度”和食屋”の料理を再現してみよう。

確か、塩の運び屋をやっていた時に米や”みそ”も仕入れていたはずだから、材料自体はそろっているはずだ。

作り方は良く分からないが、多分見よう見まねで何とかなるだろう……。

もつしやもつしやと飯を食べながらそんなことを考えていると、子龍殿がわざとらしい悲嘆の声を漏らした。

「それはもつたいたい。是非ともメンマ料理を身につけてください。その出来如何では妙齡の美しい武人を獲得できるかもしれませんぞ。ああ、メンマ料理があつたならば、一考の余地もあるのだがなあ……」  
「食い物で釣られる武人というのもいかなものかと。というか、何でメンマなんです？」

「メンマだからですな」

良く分からないことをいって、彼女は酒に酔ったかのように頬を赤くして笑った。

といつても、その立ち居振る舞いはしつかりとしており、臨戦態勢を解いてはいないことは一見して分かる。

先ほど仰った「上司殿の許可をもらった」というのは本当なのだろう。あの人、そういうのすごく厳しいし……。

それがしが上司殿のお姿を思い出して戦慄したところで、子龍殿はふと料理をつつく箸を止めた。

「明日、玄徳殿が三姉妹とお会いになります」

「明日ですか」

「左様。三姉妹からお呼びがかかったのです。つまり、貴殿らの策は明日には完成を見ることになる」

これで報われましょう、と微笑む彼女の言葉を受けて、それがしはほつと息を吐く。

ようやくかという思いであった。

もう肩の荷は下りた。果報は寝て待て、とばかりに平気な顔をしていたものの、何時討伐軍が動き出してしまいかと胃がきりきりと痛む毎日であったのだ。

いや、折角ここまでお膳立てをしたのだから、成功して終わらせたんじゃない。

安堵するそれがしに対して、子龍殿は表情を引き締めて言葉を続け

られる。

「ゆえに貴殿らも準備をしていたいただきたい」

「敵に対する備え、ですな。分かりました」

うーん。結局、まさし君の言っていた奥義を開眼することはできなかった。

特訓の仕方が悪かったのだろうか。”もぶ”たるこの身がいけないのだろうか。

まさし君が間違ったことを言っているとも思えないんだがなあ。

それがしが喉に小骨がつかえたような気持ちの悪さを感じている中、子龍殿は険しい表情のまま口元に手を当てる。

「玄德殿と三姉妹の会談は、黄巾賊の乱を火種の内に鎮圧するための重要な鍵……。それに三姉妹は黒幕の素性を知っている数少ない人物であるはずです。もし、私が乱を起こそうとする黒幕であったならば、玄德殿と三姉妹が出会う前に何とか妨害を試みます」

……この御仁は本当、お茶らけた時と真面目な時の落差が激しく急であるのよなあ。

彼女の急な変貌に戸惑いながらも、それがしは成る程と領いた。

いくら黄巾の連中を流言によってお互い監視させ合っているとしても、所詮は烏合の衆である。

例えば、何らかの策を用いて彼らの統制を乱してしまえば、その隙に乗じて玄德殿に危害を加えることもできるかもしれない。

ただ、危害を加えてその後はどうする？ といったところが良く分からないのよなあ。

正直、黒幕の目的が全く読めない。

例えば、真面目に漢王朝に対して反乱を試みるならば、もっと三姉妹との連携を密にするべきだった。

歌詞の中に反乱を煽る内容を盛り込むだけではなく、三姉妹に直接漢王朝の腐敗を説かせるだけでも信者たちは団結は一層強くなっただろう。

また、三姉妹自身に反乱の意思がありさえすれば、我々も対象を直接説き伏せに行くなどという方策を取ろうとはしなかった。黒幕が

真に乱を起こそうとするなら、いの一番にすべきことは三姉妹の思想を誘導することであつたのだ。

なんというか、中途半端なのである。

こう、思いつきをその場でぽつと口に出しては、後のことを放置してしまうような……。

今一瞬、まさし君の顔が脳裏に浮かんだが、彼は軽はずみな行動を決してしでかさぬ、深謀遠慮の御仁である。

それがしは頭を振って余計な考えを振り払うと、子龍殿に答えを返した。

「分かりました。明日は玄德殿の退路を確保すべく、遠巻きに待機しておくこととします」

「近衛ではないのです？」

問われて、先日川辺で出会つた連中を思い起こす。

我々が黄巾連中の目に留まるような動きは避けた方がいいだろうなあ。

「我々は黄巾連中から嫌われておりますから。流言によつて身内を疑っている彼らをあまり刺激してしまうと、かえつて黒幕の隠れ蓑になつてしまうやもしれません」

それがしの答えに、子龍殿が「そう言えば」と思いだしたように苦笑した。

「貴殿らは悪漢扱いでしたな。ならば、玄德殿のお側は本陣の面々でお守りするといたしましょう。いざという時には我々が身を呈して玄德殿をお守りする道を作ります」

「くれぐれも、お頼みいたしますぞ」

「心得た」

この日、我々は不寝番ねずのばんの数を増やして、敵の暗躍に備えることにした。

面倒なことに空は新月を迎えており、星明かり以外の明かりが乏しい。

それがしは黄巾連中の寝泊まりする天幕を監視できるよう、天幕の一つを解体して即席の小さなやぐらに仕立てあげた。

黄巾の天幕は驚くほど静かだ。

欠伸を噛み殺しては、星空を仰ぐ。

明日の今頃には玄德殿の進退もある程度定まっていることだろう。果たして、今回の乱を無血で収めた大徳者として名を馳せるか、はたまた討伐軍の一将に収まるか……。

できれば前者でありたいものだ。

前者ならば、そんじょそこいらの諸侯にも比肩する名声が得られる。

名声は力だ。

「誰も彼もが笑顔でいられる世の中を作る」という玄德殿の理想を實現するためにも、力はあるだけあった方がいいんだよなあ。

といっても、諸侯に目を付けられて敵対視されない程度という但し書きはつくが。

いや、世に数多い軍閥・英傑としのぎを削るといえるのは、恐らく玄德殿にとって不幸しか生まない気がするのだ。

昨日の敵は今日の友どころか、今日の敵すら本当は戦いたくない彼女の心を傷つけぬためには、どんな立ち位置が望ましいんだろうなあ。

うーん、誰からも尊重されつつ、利害の対立が起きにくい立場……。そんなものがあるんだろうか。

それがしがうつらうつらしていると、東の方がほんのりと明るくなってきた。

払暁だ。

それがしは涎を垂らしながらいびきをかいている、褐色青年の頬をぺしぺしと叩いた。

「……もう交代か」

「おう、それじゃあそれがしは仮眠をとるから。くれぐれも居眠りしないようにね。絶対だからね」

「安心してくれよ、俺あそんなダサイ男じゃねえ」

起き抜けの褐色青年と交代して、それがしはやぐらの床に寝転がる。

結局のところ、我々の感知できる範囲では夜中に黒幕が動くことはなかった。

本当に何を考えているんだろう、敵さんは。

釈然としない思いを抱きつつ、それがしの思考は闇に落ちた。

◇

目が覚めると、第一に聞こえてきたのは強面たちの慌ただしい声であつた。

もしかして、事態が動いたのだろうか。

それがしは眠い眼をこすりながら、目を開けたまま意識を失っている褐色青年の背中を蹴飛ばし、険しい表情でやぐらの上から眼下を見下ろした。

「おうい、どうしたあ」

大急ぎで槍を運んでいた若衆に声をかけると、彼は何所か困惑した面持ちでこちらへ振り向いた。

「ああ、オヤジ。起きたんだ。本陣の周りに黄巾の奴らが集まり始めてさ。今日お頭が三姉妹と話し合うってのは、連中にも知らされてあることなのか？」

「黄巾賊が？」

「どういうことだろう？」

黄巾連中の注目を集めて黒幕へのけん制に使うというのは、そういう悪い策ではない。

ただそんな策を用いるのなら、先日の時点で我々に知らせてくれないはずだ。

あの如才ない上司殿が、この大事な局面で連絡の不備を見逃すだろうか？

それがしはしばし考え、若衆に答えた。

「……とりあえず臨戦態勢。様子を見に向かおう」

「得物は？」

「一応、携帯。ただし黄巾賊が武器を持ち出さない限りは使用しないように」

「分かった。みんなに伝えておく」

それがしは元氣よく答えた若衆の背中を見送り、朝日にしみる目を細めては、ざわざわと三姉妹の天幕と我々の本陣を取り巻くようにして集結した黄巾連中の様子をじっと睨みつける。

うーん、殺氣立った感じではなさそうだ。

多分、彼らも事情が良く呑み込めていないのだろう。

判断に迷うな……。

「オヤジ、敵襲か？」

「それ、不寝番の言葉じゃないからな。お前さんは今日の晩飯抜きで」「そいつはスジが通らねえよ。ひでえ！」

悲嘆する褐色青年に「不手際の返上は仕事で返せ」と言い放ち、それがしはやぐらから飛び降りた。

急ぎ強面たちを取りまとめ、黄巾連中を遠巻きに陣取る。

彼らはざわざわとひしめき合い、本陣の様子を窺っていた。

「あつ。手前ら、何しに……、きやがったんだ？」

我々の到着に気づいた黄巾の一人が警戒心をあらわに睨んでくる。だが、彼はこちらを睨んでくるだけで、ことさら食ってかかるつもりはないようであった。

まあ、流石に武装した強面集団に喧嘩を売る度胸はないよなあ。それがしが彼の立場でも委縮する。

それがしはいつも通りの低姿勢で、彼に事の顛末を問う。

「いえ、皆さんが玄德様の天幕に集まっているのが見えまして。何かあつたんですか？」

「……何もねえよ。ただ、天和ちゃんが玄德ちゃんと話したいらしくて天幕に呼んだって聞いたから、こうして見物に来ただけだ」

「どちらから聞いたので？」

「黄巾の情報通から……、って何でそんなこと手前に言わなきゃなんねーんだ」

うーん。

もし上司殿が玄德殿を守るために噂を流したのならば、「官匪の策略を打ち砕くため」やら、「三姉妹を守るため」などと大義名分を盛り



込む気がするんだよなあ。

それがしは小声で比較的強面ではない若衆の一人に「ちよつと上司殿に確認取ってきて」と命じると、ことの推移を注意深く見守ることにした。

いや、多分これが異常事態なら上司殿もこちらに伝令送ってくださいとは思うんだけども。

しかし、本陣との連絡が繋がるよりも先に事態は大きく動いてしまふ。

「お、玄徳ちゃんが出てきたぞ」

にわかに活気づく声に従い、それがしも遠目で見てみると、玄徳殿が外の様子を窺うようにしてお姿を見せられた。

——ん？

何やら、服装がいつもと違って見えるような……？

一瞬の困惑の後、彼女が何を着ているのかに気づいたそれがしの思考がピキリと音を立てて凍りつく。

……ほとんど裸にしか見えない、ぴっちりとした衣服。

でえんと強調された母性は、恥ずかしげに胸を隠そうとする腕の圧力を受けて、むにゆりと形を歪めており、何と云うかとても艶めかしい。

むっちりとした太もも「少しは隠して下さい」とこちらが赤面するくらいに露出しており、”すかーと”を模したひらひらの腰巻きは、あまりにも短すぎて本来の役割を果たせていなかった。

それがしは震える。

手足の網かけといい、あのギリギリを攻める股の露出具合といい……。形が丸わकारいの母性といい……。

あれは、あれは、あれは……。

「う、うわあああああああああつ！ た、たいまにんコスだあああああああつっ！」

ナンデ!?

たいまにんコス、ナンデ!?

天使のような笑顔の玄徳殿がしている格好じゃないよ!!

それはそれとして、むによんむによんむによん。  
久方ぶりに見た母性は、むによんむによんむによん。

都でも名高いたいまにんコスと相まって、むによんむによんむによん。  
ん。

それがしは前屈みになった。

あれは、まずい……。。

それがしが前屈みになると同時に、黄巾連中も動き出す。

「げ、玄德ちやああああああああああああああああああああああああああああああんっつ!!」

理性を失った野獣どもが玄德殿の本陣へと殺到していく。

慌てて本陣の近衛が人の壁を作って押し返そうとするも、何千何万という圧力を受けて瞬く間に押し込まれていった。

まずい——、と思ったその瞬間、

「うわあああああああああああああああつ!!」

第一陣を槍の一振りで蹴散らしたのは子龍殿であった。

流石の武勇、多勢を鎧袖一触だ。

たいまにんコスを見たことによる衝撃から覚めたそれがしも、彼女の奮闘を目の当たりにして号令をかける。

「野郎ども、玄德殿を救え！ 呐喊ッ！」

強面連中から「応」と一齐に声が上がった。

敵は武装をしていない、背中を見せているような連中だ。槍を捨て、強面らと陣形を組み、黄巾の人壁へと飛び込んでいく。

黄巾を蹴散らし、蹴散らし、蹴散らして、まるで雪を溶かすようにして突き進む我らであったが、

「オヤジ！ こいつあ骨が折れるぜっ」

そもそも本陣を取り巻く人の数が多すぎた。人壁の厚さが災いして、一向に本陣へとたどり着ける気がしない。

この何時まで経っても終わらない感は、都の事務仕事を彷彿させる。

「オヤジ！ 顔が真っ青だぞッ」

「お、お、おおお落ち着け。そ、そそそそれがしは正気だ！」

「説得力ねえよ！」

そんなやり取りを交わしながら、それがしは本陣から吹き飛ぶ黄巾の数が減っていることに気がついた。

……まさか、子龍殿がやられてしまわれたのか……？

不安がどんどん膨らんでいくが、本陣の様子を確認しようにも黄巾どものムサイ背中が災いして、こちらからは全くうかがえない。

あー、もう！

「オッサン、ロウハン！ ここの指揮はお任せした！」

「副頭領、何を——」

答えを聞き届けぬ内にそれがしは黄巾の背中に足をかけ、勢い良く上へと駆け上がる。

”もぶ”たる身の上で敵の頭を踏み台にすることは難しいが、無抵抗の背中ならばどうということもない。

それがしはひよいひよいと黄巾の背中から背中へと足場を移し、今までは比にならぬ速度で本陣へと向かう。

”それがし”！ これは一体何が起きているっ!?”

途中、元讓殿たちが配下に守られながら集団の中で立ち往生していたところに出くわしたが、

「申し訳ない。説明は後ほどっ！」

と言つて駆け抜ける。

最早一刻の猶予も残されていないことが分かっていたからだ。

それがしは視点が高くなったことで判明した本陣の様子を窺い、ごくりとのどを鳴らす。

そこでは子龍殿と第六天魔王殿たちがすさまじい死闘を繰り広げていた。

「ぬうううん」

「ハアーツ!!」

第六天魔王殿が獣の如く吠え、子龍殿が裂帛の気合いをもって迎え撃つ。

翻る銀閃。

徒手空拳と、槍の柄がぶつかりあつては金属のきしむ音を立てる。

戦いの趨勢は、恐ろしいほどに拮抗していた。

「そこを退けッ！ 玄徳ちゃんのおみ足をちよつとペろペろさせてくれるだけで良いのだツツ」

「受け入れられるか、そのような戯言！」

幾たびも響く剣戟、いや槍肉の音。

「こちらは本気だ！」

「尚更悪いわあッ!!」

恐らくは単騎のぶつかりあいならば子龍殿の勝ちも揺るがぬのだろうが、今や本陣は多勢に無勢のせめぎ合いに陥ってしまっている。

特に第六天魔王殿と肩を並べて猛突撃を繰り返している昼青龍殿がヤバイ。

「ハングリーせんしんみなぎるよ。昼様のぶちかましや！」

「また意味の分からぬことをつ！」

それがしと席取りの諍いをしていた彼らが、まさかここまでの強さを見せるとは……。

人は美少女にスケベなことをするためならば、どこまでも強くなれるということなのかもしれない。全く尊敬できねえ。

ともかく、早く子龍殿に加勢せねば！

それがしは全速力で駆けに駆け、本陣めがけて跳躍する。

「玄徳殿おーっ！」

おろおろと子龍殿の奮戦を見守られていた玄徳殿が、それがしの存在に気がつき、お顔を上げられた。

「子遠さん……っ！」

「玄徳殿！」

宙にてくるりと体勢を整え、地上の位置関係を把握しながら落下する。

落下予想地点は子龍殿と押し寄せる男たちの間。

厄介な第六天魔王殿たちも色欲に目がくらんでこちらに意識を向けていないようであるし、うまくいけば不意打ちのけん制くらいもできそうだな。

ん？



「むしろ、第六天魔王殿は何故このようなうつけ事を」

「単純にペろペろしたかった」

「成る程」

それがしは本陣へと落ち、第六天魔王殿は黄巾の群れへと落ちていく。

地面へと激突する瞬間、ふによんとした何かにそれがしの身体は抱きとめられた。

「子遠さん、大丈夫……っ?」

それがしを抱きとめてくださったのは、玄德殿の母性であった。

あ、まずい。

それがしは前屈みになった。

「ぐわあああああああああああああああああああつ!」

同時に黄巾の連中から次々に断末魔の叫びがあがっていき、にわか  
に人波の圧力が弱まっていく。

ついでに昼青龍殿も子龍殿にはたき倒された。

一体何が起きているのかさっぱり理解できないが、とにかく、

「な、何故そのような破廉恥な格好を……」

「え、ええつと……。朝早く黄巾の人がやってきて、張角さんたちのお話のときにはこの服を着るようになって……」

それがしの問いに玄德殿は顔を赤らめながら答えられる。

やはり相当恥ずかしいようだ。

「どど、どうしよう。やっぱり元の服に着替えてから張角さんたちのところへ行った方がいいのかな?」

「そんな時間はないわ」

逡巡する玄德殿に、息を切らせて駆け寄ってきた上司殿がゆったりとした上着を放り投げながら言った。

「一度混乱した烏合の衆はよほどのことがない限り、元には戻らない」

「桂花ちゃん……」

「あいででででででででっ!」

上司殿はぴつと人差し指を立てて、続けられた。

「でも一つだけ混乱を簡単に沈める方法があるわ。張角たちの使うと

いう、” 声を拡大する妖術”よ」

「えっと、それを使ってみんなに落ち着いてもらうよう頼めばいいの？」

「あいでででででででででっ!？」

ところで、何故さつきからそれがしは上司殿に組み伏せられているのだろうか。

以前に会得なさっていた投げ技と締め技を巧妙に組み合わせた、良く分からぬ奥義を受けつつ、それがしは苦痛でのたうちまわる。

何故それがしがこのような目に。解せぬ。

「呉子遠。アンタが先頭を切って、桃香を張角のところまで送り届けなさい」

「は、ははははい!」

「ただし、守るにしても緊急時以外指一本桃香に触れないこと! アンタに傷ものにされちゃ、桃香が浮かばれないわ!」

「あの、私は別に——」

「良い、分かった!？」

玄徳殿のお言葉を上司殿が大声で遮る。

上司殿の命に、それがしは「はい」か「わかりました」で答えなければならぬ。この関係性は今後とも変わることはないだろう。

「わ、わかりましたぞ!」

「よし、行って来い!」

「は、ははははい!」

それがしは雄たけびを上げて、三姉妹の天幕への道に立ちふさがる黄巾どもを必死の思いで蹴散らしていった。

「玄徳ちゃああああ——んっ! よくも手前玄徳ちゃんのやわ肌を

——っ!」

「ちやーんちやーん、うるせえ、黙ってる!」

口から泡を飛ばし、飛びかかってくる男の顔に全力で拳を叩き込み、

「お前ー、お前——っ!」

「お前が何だ! 大陸言葉をしゃべれよっ!」

上半身裸で飛び込んでくる男を、全力で蹴り飛ばし、

「な、何で、モブ兵が桃香に抱き寄せられ……、そういう需要ねえから！ 計画が。胃が、胃が、心が、心が痛い……！ タケダ・ヒロミツ時空か！ ヒゲナムチ時空か！」

「大陸言葉しやべれよう！」

何か勝手に苦しんでいる男を投げ飛ばして、一気に好色漢の群れを踏み倒していく。

だが、いかんせん黄巾の数が多すぎる。

業を煮やしたそれがしは、このままでは玄德殿を無事に送り届けられるか不安に思い、後ろを振り返った。

すると、ぼるんぼるんぼるん。

女の小走りではぼるんぼるんぼるん。

上着で肩を隠しながらも、たいまにんコスで強調された母性がぼるんぼるんぼるん。

それがしは前のめりになりつつ、

「玄德殿、ぐっ無礼を！」

「えっ？ きやつ——」

彼女のお姿を野獣どもの視線に晒さぬよう片手で抱き抱えた。

「ぐわあああああああああああああああああああつ!!」

再び断末魔の叫びが周囲から轟き、人波の圧力が一層弱まる。

「あ、あの。あの。子遠さん……」

黄巾連中をちぎっては投げ、ちぎっては投げて天和ちゃんたちの天幕へと向かっていく途中で、肩に担がれた玄德殿が恐る恐る声をかけてきた。

「どうなさいましたか！」

それがしが黄巾連中の腕を振り払いながらそう返すと、玄德殿が細かい声で続けられる。

「この、格好で……、抱きかかえられると、その……、今更だけど、恥ずかしくて……」

「これは思い至りませなんだ！」

そのお言葉にそれがしはハッと我に返り、抱きかかえるのではな





うにと努める。

そうして、ようやく木柵で覆われた天和ちゃんの天幕へとたどり着き……、

「玄徳殿、後はお任せいたしますぞおーっ！」

「……うん、分かった！ 行つてくるっ」

背を降りた彼女が天幕の中へと駆け込んだ瞬間、それがしの理性はぷつんと途切れ、その場に倒れこんでしまう。

あ、いや。うつ伏せは、まずい……！

大地の感触を下腹部に受け、

「あー」

凄まじい解放感とともに、賢者の静寂がやってくる。

うん。

……うん。

「ちよつと大丈夫っ？」

崩れ落ちたそれがしのもとへ、心配そうなお顔をしてやってきた御仁があつた。

上司殿だ。え、上司殿？

「いや、上司殿は玄徳殿とご一緒に天幕の中へ……」

「倒れ込んでるアンタを見つけて、そんなことできる訳ないじゃない！」

未だ四方八方で怒号が轟く中、上司殿のお言葉はとても凜とした響きをもって、それがしの心に染み入ってきた。

でも、今はまずい。

「お手柄だわ、呉子遠。この騒動の中とにかく桃香を傷物にせずに済んだ。何処を怪我したの？ 私に見せな……」

それがしの傍らに膝をつき、介抱しようとなさった上司殿であったが、案の定というべきか怪訝そうなお顔で鼻をひくつかせていらつしやる。

「何この臭い？」

「な、何でしょう」

「血でも汗でもないのよね。もつと違う生々しさが……」

しばし首を傾げていらっしやっただものの、それがしの下腹部が上司殿の目に留った途端、彼女の表情がどんどんどんどんと険悪なものになっていく。

「もう一度問うわ。何、この臭い……」

それがしは逡巡し、恐る恐る口を開いた。

「ここは一つ、心の汗ということ……」

「汗なわけあるかぁー！ いやあああぁあつ！ 鼻から妊娠させる気なの、アンターっ！」

言った瞬間、顔や耳を真っ赤にした上司殿によって水筒の水をかけられた。

ああ、この水は。恐らく、それがしが傷をこしらえていたら洗い流そうとなさったのだらうなあ。

申し訳ない……。洗い流すのが、その。アレが、その……。

「川！ 川行つて！ 早く！ ここにアンタの悪臭を残さないでっ！」

ぐうの音もでねえ。

それがしは立ち上がり、前屈みのまますごすごと川のある方へと歩き始めた。

『みんなー、暴れるのはやめてー。天和からのお願いだよー』

妖術によつて拡声された天和ちゃんのお言葉が、黄巾連中を鎮めていく。

と併行して、周囲の連中の表情がいつも夜にかぎ慣れた青春の香りに気づいた者から次々に変化していった。

うん、分かるよ。

誰だつて他人のそういうの、嗅ぎたくないよね。

……分かるよ。

それがしは近隣の小川にたどり着くと、袴とふんどしを脱いで、涙ながらに洗った。

## 第九回 呉子遠、悔しがる

夕焼けの照らす道なりに、ぽつりぽつりと影法師が広い間隔で伸びている。

ぞろぞろと故郷への帰路についているのは、先だつて黄巾賊であることを辞めた者たちであつた。

彼らの後ろ姿を見ることで、それがしの中にも「終わったのだなあ」という感慨が湧いてくる。

何とか大きな戦を起すこともなく、余計な血を流すこともなく、無用の悲しみを生み出すこともなく、我々愚連隊は黄巾賊の討伐という争乱の火種を消すことができたのだ。

よくやつたなあ、それがしたち。

頑張つたなあ、それがしたち。

でも、ふんどしをはかずに服を着ていると……、風でスースーするんだ……。

この風、少し寒々しいの。

しみりとしながら川辺で料理の支度をしていると、ふと背中から声をかけられた。

「急転直下でいまいち理解しかねるのだが……、結局お前たちは何をやらかしたのだ？」

元讓殿に、妙才殿であつた。それに供回りが数人ほど控えている。

うーん。身なりといい、武装といい、やはり孟徳殿の兵は強そうなのが多い。

ちなみに愚連隊の連中は強そうというよりも、恐そうという感想を抱かせる。

それがしは若干の羨望を抱きながらも、先刻彼女らを袖にしたことを思いだし、お二人に頭を下げた。

「先程はどうも失礼をば」

ぺこりとやって彼女らを見上げたところで、お二人は口元をひきつらせた。

それがしの顔に何か？

「……お前、そのぼこぼこに腫れ上がった顔はどうしたんだ？」  
言われて、今更気がついた。

今のそれがしは、畑に埋まった芋のような顔をしていたのである。  
それがしは「ああ」と声を漏らして、彼女らに答えた。

「事が終わった後、黄巾の強者にこそぞつて殴られました」

「何故、そこで反撃しない」

「いや、それは。皆が皆、血の涙を流しておられたので  
だつてなあ。」

第六天魔王殿たちの浮かべた辛そうな表情からは、「ここで反撃するのは空気の読めていない所行なのではないか……？」と思わせる悲哀が容易に読みとれたんだもの。

まあ、どちらにしても一人の上にもふんどしをはいていないところを  
囲まれたから、どうしようもなかった。

あれをぶらぶらさせながら戦えるほど、それがしは武術に精通しておらぬ。精通していれば、戦えるものなのか……？

「血涙……？ 何でだ？」

「いや、それが良くは分かりませなんだ。ただ『茶釜持って爆発しろ』  
と」

「茶釜？ 爆発？ ううん、良く分からんなあ」

本当何なんだろう……。

ただ、爆発と言えば天の国の松永久秀なる武人を思い出す。

もしかしたら、何か関係が……？

あ、彼らもニツポンから来た”てんせいしや”なのではなからう  
か。

んー、んー。

いや、仮に”てんせいしや”ならば黒幕と行動を共にしていてもお  
かしくはない。

黄巾の解散をこうも容易に受け入れているということは、黒幕と無  
関係と考えるのが妥当であろう。

となると……、これはまさし君による伝道が進んでいるという確固  
たる証拠なのかもしれぬ。

すごいな、まさし君！

それがしがそのような推測をつらつらと並べ立てると、お二人は「また始まった」とでも言いたげに肩を竦めて、「それより先程の質問に対する返答が欲しいのだが」と話を本筋に戻すよう促してきた。

「ああ、すいません。それで我々のやったことでしたな……」

それがしは頭をぼりぼりと掻きながら、ことが起きた背景と我々の作り上げた策を彼女らに白状することにした。

「我々が黄巾に混じって何を目論んでいたのかというと、それは未然に反乱の芽を摘み取るためだったのです」

それがしは身振り手振りを交えながら、当初は敵の懐に潜り込んで頭目を暗殺するつもりであったこと、黄巾賊の成り立ちを知り、三姉妹の人柄を知って、我が主たる玄德殿が何を考え、何を目指したのかを事細かに語っていった。

無駄に古典籍やまさし君名言録を引用し、興が乗ったところでは誇張まで交えてしまうそれがしの説明に、妙才殿と元讓殿は「ほうほう」や「成る程」、それに「おい、話を盛るな」と相槌を打ちながら、的確な質問を投げかけてくる。

迂遠な説明をもともせぬ、一を聞いて十を知る勢いであった。

「黒幕は結局捕らえられたのか？」

「いえ、取り逃がしてしまいました。三姉妹ならば顔も知っているのでしょうが、既に姿をくらませてしまっていて……」

「では、これから風潰しに探していくということか」

「それも難しいかもしれません。何せ、母数が母数なので……」

そもそもお二人は地の頭からして、凡百のそれとは作りが違う。特に物事の本質を掴む力は頭抜けていて、一通りの説明が終わった後に元讓殿の漏らした一言には、語り部であるそれがしをして、「あつ……（察し）」と腑に落ちるものを感じさせた。

「しかし、あれだな。おおむねニッポンから来た輩が悪いと言うことか」

元讓殿の総括を受けて妙才殿へと目をやると、彼女のお顔がやたらに黄昏れておられた。

「ニッポン……。ニッポン……。ふふっ、内にも外にもニッポンか……。」

「あの、妙才殿？」

呼びかけても返事がない。ただただ、「ニッポン、ニッポン」と繰り返すばかりである。

彼女はまさし君との繋がりが深かったそうであるから、色々と思うところがあるのかもしれない。

「おうい、秋蘭。しゅうらあん」

元讓殿が妙才殿の肩をがつくんががつくん揺らす段になって、「はっ」

と彼女はようやく意識を取り戻し、魂が抜け出そうな長いため息を一度だけついた。

「少し思うところがあつただけだ。気にするな」

「アッハイ」

瞳に宿る剣呑な光といい、一見して何かをやらかしそうにも見えるのだが、追求するのも怖いので深くは考えないで置こう。

「それにしても火種を元から消してしまうとはなあ」

「はい、無事に終わって玄徳殿も喜んでおられたと伺っています」

「ん、お前は玄徳とやらの腹心なのだろう。直接は聞いていないのか？」

元讓殿の問いを呼び水に、それがしの内に悔しさが煮えたぎる。

「……玄徳殿と三姉妹の会談も、その後の解散宣言も、それがしは川でふんどしを洗っていたため、人づてにしか聞いていないのです」

天和ちゃんと玄徳殿が並んでいるお姿を拝見できないとか、それがし一生の不覚だよ……。

最近、愚連隊の幼年組の中で背比べが流行っているのだが、それがしとしては母性比べが見てみたい。

「ふんど、なんだって……？」

「はい、ふんどしですな」

この子細までは知らないのだが、元々三姉妹も反乱なんぞに命を懸けるつもりはなく、現状の窮地を悟った瞬間、玄徳殿のお言葉を二

つ返事で受け入れたらしい。

「いやいや。何故、そこで下着が出てくるのだ？ 戦闘で返り血を浴びたわけでもあるまいに」

「汚してしまったからですな」

それがしは川でふんどしを洗っていたため、ことの子細を聞いていないが、その後の黄巾連中説得もすこぶる順調に進んだそうだ。

三姉妹の拡声妖術を用いて、まずは玄德殿が現状を訴えかけ、それに対する三姉妹各人が意見を述べ、最後に揃って黄巾党の解散を宣言した。

黄巾の連中も、この宣言を驚くほど素直に受け入れてくれたと聞いている。間接的に。いや、それがしは川でふんどしを洗っていたから……。

「汚したって、汗か何かか？」

「心の汗なのは間違いありませんな」

何てだったって、かくと爽快な気分になるし！

それがしがちらりと物干し用に立てた木の棒を見やると、白いふんどしがひらひらとたなびいていた。

「ふうん」

元讓殿は返事をするものの、いまいち合点の行っていない様子であった。妙才殿は若干の心当たりがあるようであったが、取り立てて追求するおつもりもないようだ。それがしとしても非常に助かる。

そんな妙才殿が咳払いをした。心なしか頬を赤らめ、ふんどしから目をそらすようにして。

恐らくは話題を変えようという合図である。当然、これ以上ふんどしネタを引つ張られても困るそれがしに否やはなく、全面的に乗っっていく。

「つと、妙才殿申し訳ありません。話がそれてしまいましたな」

「いや、別に構わん。大体の事情は掴めたからな。お前の主は中々の大人物らしい」

「玄德殿ですか」

それがしが聞き返すと、妙才殿が首肯する。



成る程、確かに彼女は大きい。

「うむ。弁が立つわけでもなく、腕っ節が強そうにも見えぬ。だが、何というかな。先の演説に立ち会って、まず感じたことは器の凄まじい大きさだ。あれならば、お前の巡り合わせを感じたという言もそれなりに納得がいく。無論、華琳様の方が優れていることは言うまでもないが……、それこそ出会った順、巡り合わせなのだろう」

「ん、あー」

全面的に乗っていくと前のめりになったものの、まさかの話題に、それがしは声を詰まらせた。

巡り合わせ。

いや、確かに妙才殿の仰る通りなのだが、そうはつきりと先日勢いで吐いた言葉を反芻されると、なにやら気恥ずかしく感じられるのだ。

「しかし、何故彼女は“対魔忍こす”なんぞをしておったのだろうか。全く、あのようにふしだらな……」

「それについてはそれがしも分かりかねまして……、何やら黄巾の者に是非着るようにと勧められたとかで」

「ふうん、不屈き者もいるものなのだな」

それがしは目を瞑り、彼女の姿を思い起こした。

結果として大騒動になってしまったものの、幸か不幸かあの“対魔忍こす”を見た瞬間、確信したこともある。

それは玄德殿の母性こそ、いつまでも見ていたい母性なのだということであった。

眼福とはまさにこのことで、天和ちゃん、天和ちゃんと舞い上がったのはいたものの、やはり玄德殿の母性は三国一と言っても過言ではないのかもしれない。

ぷるんとしていて、ぽよんとしていて、つんとしていて、確かな重み……。その結果がそれがしのアレなのかと問われれば、ごめんなさいと言うより他にない。

それがしが瞼に浮かぶ玄德殿のお姿を舐め回すように堪能していると、妙才殿が訝しげな声を上げた。

「……まさか、あの見てくれに惚れて、ふしだらな巡り合わせを感じたのではあるまいな?」

「え、い、いいいや、そそそ、そそんなわけがっ?」

いやいやいや! け、決してやましい気持ちだけではないし? 彼女の尊い志にも共感を覚えるし? 何よりも目を離すとすぐに何か事件に巻き込まれそうで怖いし?

急な問いかけにそれがしが目を泳がせていると、妙才殿が笑い声を漏らす。

「冗談だ。第一、英傑に美貌は必要な要素なのだから、別に見てくれから惚れ込もうと全く問題はない」

「そんなものでありますか」

「ただし、当人がどう思うかは知らんがな。見られることを良しとしない女も、案外に多いのだぞ」

「ヒエツ!」

男のそれがしには想像もつかぬ、衝撃の事実であった。どうしよう……。玄徳殿から「いやらしい目で私を見ないで」とか言われたら……。いや、それはそれで気持ちが高ぶるような気がしないでも……。

狼狽するそれがしを見て、妙才殿は腹を抱えた。

「冗談だ」

「何処から何処までが冗談なのですか?」

どうにも手玉に取られている感があり、それがしは話題を本筋に戻そうと半眼で皮肉を口に出した。

「全く、討伐軍の皆様には悪いことをしてしまいましたな。我々が手柄を立てる機会を潰してしまったようなものですから……。その、孟徳殿にも」

恐らくは此度の争乱を出世や立身の足がかりにしようと考えていた者は多いはずだ。特に孟徳殿は上昇志向の強い御仁という噂だから、殊更に悔しがっているに違いあるまい。

あ、北郷殿にも悪いことをしてしまったなあ。いや、彼の場合は「余計な血を流さずに済んだ」と喜ぶかもしれない。むしろ、残念がると

したら孔明殿たちかな？ たった一度の出会いであったが、どうにも彼女らはほわほわとしているようで、抜け目のないところがあるように見受けられた。

次会った時に恨まれていないと良いなあ……。復讐の落とし穴作戦くらいで済めばいいけど。落とし穴なら、上司殿で慣れているし……。

そんなことを考えていると、妙才殿がきよとんとしたお顔で目をしばしばとさせて考え込まれ、すぐに合点のいった表情を浮かべられた。

「もしかして、お前は華琳様のお世にけちが付いたとでも思っておるのか？」

「違うのですか？」

それがしが目を白黒させると、妙才殿は更に続けられる。

「何故、他の諸侯はともかく、我々が手柄が立てられないと考える？」

「いえ、だって戦は無くなってしまったではないですか」

それがしの指摘を受け、妙才殿はにやりと口の端を持ち上げられた。

ああ、これは――。

「勲功とは、何も戦に勝つことだけが全てではない」

「有事の武功が官職を得るには一番手つとり早いというのは確かだがなあ」

「そうだな。その通りだが、ちよつと黙っていてくれ姉者」

「うむ、分かった」

前髪をいじりながら、妙才殿は「良いか？」と続けられる。

「まず有事に動けるといふ信頼を中央より得ることが一つ。この点については素早く派兵した時点で他の諸侯を出し抜けている。今回、誰よりも素早く黄巾に対応しようとした諸侯は河北の公孫家に江東の孫家……。そこに我々が入るだろうか。まあ、この三勢力は中央の期待に応えられたと見て良い」

「成る程」

確かにいつ討伐軍が動き出すかひやひやししながら、周辺の情勢を

探っていた時、まず最初に名前が挙がったのがその三勢力であった。

特に孫文台殿などは討伐軍の召集に呼応して、地元の豪族たちを糾合して各地の賊を鎮圧しながら北上していたと聞く。

はつきりいつて、おっかない限りである。

官軍やその他の諸侯の腰が重いことも相まって、それがしは日がな南に向かって「本気を出さなくていいのよ？ 進軍遅れる、遅れたまえ」と怨念を送っていたほどであった。

「次に後処理だ。争乱が表沙汰にならずとも、そこには確かに問題が存在する。問題がなければ争いは起きぬからだ。ならば、食い詰めた民草をいかんとする？ うちの領内で働き口を紹介してやれば、我々の領地を栄えさせる原動力へと変えることができるのではないか？ 領地が豊かになれば、自然と兵力も充実しよう。つまり、今後のことを考えれば、戦の後も疎かにはできんのだ」

「それは……」

このお答えには流石に息を吞まざるを得なかった。

元々黄巾賊の進路については、我々愚連隊の頭を悩ませる案件であつたからだ。

方々に散っていく者たちには一応、兵糧庫に残っていた物資や我々から当座をしのげる蓄えを支給してはいるものの、今後の生活を考えれば微々たる量に過ぎないであろう。恐らくは一週間も持たないかもしれない。

我々は確かに戦を未然に防ぐことができた。

……だが、困窮した民を導くまでには手を回すことができなかつたのだ。

そんな我々にできなかつたことを、彼女は軽く解決してみせると断言しておられる。

先頃、玄徳殿とともに頭を悩ませた問題を思い出す。

あの時は確か――、行政の本質的な腰の重さを、徳に満ちた役人か、徳王と有能な宰相が揃うことで改善できると結論づけたはずだ。

恐らく、彼女らは失政に喘ぐ民を救う地盤を、既に領内で築き上げておられるのだろう。

志では決して負けておらずとも、厳然たる地力の差が我々と彼女らの間にはあった。

「……羨ましいか?」

「は、え?」

いきなり問われて、困惑する。

それがしが、彼女らを羨ましく思っている?

妙才殿は茶目つ気のある笑顔で更に続けられた。

「そんな顔をしていた。都では見なかった顔だ。右から左に仕事をこなすだけであつたというのに、随分と理念を持つようになったのだな」

「はあ」

よく分からない。

だが、とりあえず孟徳殿の陣営が、この騒動の後に飛躍されることだけは容易に想像がついた。

「そこまでお考えとは……、妙才殿には感服しきりですなあ」

「いや、まだだ」

もったいぶった顔つきで彼女はゆっくりとかぶりを振って、

「今までの話程度は、少し目端の利く諸侯ならば誰だつて思いつくことだ。現に北郷軍が散っていく民草を招き入れるような動きを見せているとの知らせが届いている。だから、我々はもう一手先を行こうと思う。……伝手によつてな」

「伝手、でありますか?」

妙才殿が頷かれる。

「それがし、我々と協力関係を結ばんか? 当面、お前たちは我々に元黄巾賊の情報を寄越すだけでよい。誰が根っからの賊で、誰が善良な民草なのか……、我々の調査だけでは些か不安が残るのでな」

「ああ、はい」

成る程、成る程。妙才殿の魂胆が読めた。

確かに誰が賊で誰が無実なのかは頭を悩ませる問題だ。これを迅速に見分けることができれば、今後取れる選択肢が増えるだろう。

例えば、賊を討伐すれば武功になるし、うまく事を運べれば、有望

な将器の青田買いとてできるかもしれない。

更に我々愚連隊にとつてもこの提案は十分に利のある物であった。「確かに……、このままだと我々は一銭の得も得られませんからな」「ん、何故だ。お前たちは無血で乱を鎮圧したのだろうか？ このことが公になれば、戦手柄に匹敵する功になることくらい、私にも分かるぞ」

元讓殿の疑問に、苦笑しながらそれがしは答える。

「我々が黄巾賊を鎮圧したと言い張るためには、公の場に三姉妹を引つ張り出さなければなりません」

「それは、そうだ」

「しかしながら、これができないのですぞ」

「んん？ よく分からん。黒幕の存在をほのめかし、あの娘等に広く正義を説いて解散を宣言してもらえば良いだけではないのか」

腕を組んで、元讓殿は首を傾げる。

成る程。素直なお人柄だと、この辺りの七面倒くさい問題は理解しづらいのかもしれない。

それがしは続けて言う。

「まだ団結して蜂起したわけではないとは言え、黄巾に合流した者の中には、いくつもの村落を焼いた根っからの賊も混じっております。衆目に晒された三姉妹は、恐らく朝廷から罪に問われることになるはずです」

「悪いのは村を焼いた賊なのだから、賊を選んで叩けば済む話ではないか」

元讓殿のお言葉は全くの正論であったが、これについては妙才殿がそれがしを補足する形で差し出口をした。

「いや、姉者よ。賊を無警戒に身内として受け入れた時点で罪になることは違いあるまい。それに折角、朝廷が軍権を地方に委ねてまで、諸侯や義勇軍を募ったのだ。振り上げた拳を振り下ろす先は、できるだけ大きい方がよいのだ。表に出ていない黒幕を捜すよりも、目に見えて殴れる相手の方がよっぽど分かりやすいからな。分かりやすければ分かりやすいほど、『我々にはどうしようもない程の』強大な敵

”が相手であつたため、仕方がなかつた」という言い訳を立ちやすくなるんだよ」

「あの三姉妹が、強大な敵、か？」

眉をしかめる元讓殿。

あくまでも納得がいかないという表情をされていた。

妙才殿は彼女の態度に、目を細めて微笑まれる。

「この辺りの政治的な判断はなあ。分からないなら、分からないで良いと思う。姉者の虚飾を嫌う清廉もまた、美德であるから」

「……ややこしいことは苦手だな」

「苦手でよいと思う。そういうことは、私の領分だよ」

妙才殿のお言葉に、元讓殿は若干の不満顔になる。だが、それがしも全くの同感であつた。

元讓殿のようなお人柄は、手練手管を磨かせるよりもまっすぐに武人としての、将としての才を伸ばした方がよいように思えるのだ。

それがしは胸に微笑ましいものを感じながら、説明を続けた。

「もし我々が三姉妹を朝廷に引き渡すという選択をとってしまったえば、解散を受け入れた黄巾の連中を思惑を裏切ることになります。さらには三姉妹をも騙した形になってしまう……。それは玄德殿の本意ではありません」

「あー、見るからに腹芸のできなさそうな娘であつたものな」

うんうんと元讓殿が頷く。

それがしはといえば、「腹芸」という言葉によって生じたときめきをぐっとこらえるのに必死であつた。玄德殿の腹芸……。何故か大変工口く感じる。

「故に、黄巾連中から財貨を奪つたわけではなく、表だって戦手柄を立てたわけでもない我々は、真つ当に功を主張することができないのですぞ」

元よりそこまで強く利を求めて動き出したわけではないといえ、ただ働きは流石に御免である。

少なくとも領地くらいは……。いや、周辺諸侯とのやりとりや義務が増えるから面倒くさいな。義務が増えるということは仕事が増え

るといふことだ。

それはそれがしの本意ではない。

ならばお飾りの官位や金銭あたりが、一番後腐れがなくて良いかもしれないなあ。

今度の会議で提言しておこう。

前提として、まず我々の働きが功として認められてからの話ではあるのだが。

「お前たちが今回の件で利を得るには、少し絡め手を用いる必要があるだろうな」

妙才殿の補足に、元讓殿が「え？」と声を漏らした。

「三姉妹を表に出さず、利を得る方法があるのか」

「そりゃあ、あるさ。例えば、手つとり早く頭目を別にでつち上げる方法。幸い、頭目の素性は公に明らかにはされていないから、いかようにでもごまかせる。後は元黄巾連中が各地で噂を振りまいたりな。実際に今後大きな争乱が起きないのならば、何故鎮火したのかという理由を朝廷は求めなければならない」

「ふむふむ」

元讓殿がしきりに相づちを打つのに気を良くしたのか、妙才殿の舌が更に滑らかになっていく。

この妹君は本当に姉上が好きであらせられる。

「いずれにせよ、大前提として必要なのは協力者の存在だ。諸侯に」

争乱が鎮圧されたこと”を認める者はほとんどいないだろうからな」

「待て。実際は争乱など起きていないのだぞ？ 何故事実を事実と認めんのだ」

「それは、軍権の問題が絡んでいるからですぞ」

それがしの太鼓持ちに、妙才殿は頷き答える。

「折角、朝廷が諸侯に公の言葉で軍権を割譲してくれたのだ。これを正直に手放す輩は少なからう。野心を抱く者であれば、特にな」

実際、彼女の語る反応をする諸侯は必ず現れるだろう。

何せ、中央の失政で治安が悪化しているご時世である。

どこもかしこも有力者は領内の治安維持のために部曲という私兵



団を養っているのだが、それはあくまでも非公式のものなのだ。

公が私兵を養う権利を自分たちに譲ってくれるのならば、それに越したことはない。

軍権がないと兵をかき集めるのも調練を施すのも大変だからなあ。有事を有事と認める決裁を乞う書類がうず高く積もっていき……、説得する相手が増えていき、わいろとお酒の量も増えていき、うつぶ。気持ちが悪くなってきた。

「それがしは……。いや、お前のところの上司は協力者をどうするつもりだったのだ？ ほら、確かお前の陣営には前職の上司が合流していたろう。玄徳と一緒になって踊っていたから、やけに目立ったぞ」そりゃあ、母性豊かな玄徳殿と並んで踊れば目立つよなあ、などという考えが自然に湧いて出たため、それがしは自分で自分を殴りつけた。

「ど、どうした？」

「いえ、鋸挽きにされないための自戒です」

「そ、そうか」

賢明なる妙才殿は、それがしの返しにそれ以上追及してはこなかった。

それにしても上司殿のお考えかあ。

「確か、伯桂殿と取引をして首謀者をでつち上げるようなことを仰っております。玄徳殿と伯桂殿は昔馴染みで関係も良好ですから、協力関係を結びやすいというお考えなのかもしれません」

それがしがそう語った瞬間、妙才殿の瞳の奥がきらりと閃いた。

「その協力関係に我々も噛ませてもらうか」

「我々を仲介して、伯桂殿とも協力関係を？」

「そうだ。華琳様はこの大陸で並ぶ者のいない先見性をお持ちだが、生憎今は小勢と言って良い。今後の大陸が更に乱れていくと予想すると、当面は「巨象」と相対するための同盟相手を見繕っておかねばならんのだ」

妙才殿のお言葉にそれがしはすぐにピンときた。

「もしかして“巨象”とは汝南の袁本初殿ですか」

袁本初殿は、三公を輩出した名門の出自で中央にも北方にも地方にも顔のきく御仁だ。

とても煌びやかな髪の色と、豊満な体つきが特徴的で、それがしも都ですれ違った時には思わず二度見してしまうほどには威風堂々としたひととなりをしておられた。

それがしの予想を聞き、妙才殿は笑顔をはころばせる。

「どうやら正解であったようだ。」

「察しが良いな。本人の能力はさておいても、財力に兵力、いずれをとつてもアレは無視できぬ地力を持っている。華琳様は本初の独走を防ぐために、対抗馬として従妹の袁公路をかつぎ上げて対立させることも考えておられたが、その際に公路側につく味方は多ければ多いほど良いだろう。無能でない限りはな」

「あー、成る程」

つまり、妙才殿はもうすぐ軍権を委ねられた諸侯同士が相争う時代が到来すると考えておられるのだ。

「確かになあ。」

今、互いに矛を向けあつてはいないのは、あくまでも匪賊という共通の敵がいるからこそなのだ。

もし情勢が小康状態に落ち着けば、余剰兵力を持って余した諸侯たちの矛先は容易く周囲へと向き出すに違いあるまい。

しかし、政治ではなく軍事によつて全てを解決させる時代……。自衛と金策のために矛をとつた我々が言つて良い話ではないのだが、玄徳殿が悲しみそうでもある。

複雑な気分であつた。

「どうだ？ それがし。一考の余地はあると思うが」

「確かに……」

とりあえず、我々と玄徳殿の陣営が協力関係を結ぶ利ははつきりとしている。

何せ伯桂殿と並んで、いち早く黄巾賊の鎮圧に動き出した一角なのだ。伯桂殿と玄徳殿、お二方の後押しさえ得られれば、朝廷にも我々の働きを訴えやすくなるだろう。

問題点としては、下手をすると諸侯の対立に巻き込まれてしまうことくらいだろうか。

妙才殿のお話から察するに、今後は本初殿と公路殿という二つの袁家に多くの諸侯が集う形で、自勢力の伸長を図っていく展開になるはずだ。

となると小勢の我々は強者から捨て駒として遣い潰される危険性もあるわけで、二つ返事で受け入れられる話でもないと思う。

ただ、別段戦に参陣しろと言われてしているわけではないからなあ。

利害を比べてみても利が上回っているようだし、個人的には賛成したいけど……、結局のところは上の判断次第だろう。

特に上司殿には早急に話を通しておかなければならない。

あまりそれがしだけで話を進めてしまうと、絶対に後で独断専行をつつかれる。もう投げ技と締め技を組み合わせた奥義を食らうのは御免なのだ。

そこまで考えて、それがしはふとあることに気がついた。

「これは他勢力との外交にあたるのではありませんか？ 孟徳殿に話を通さずに進めて良い問題であるようには思えません……」

それがしが指摘すると、妙才殿は悪戯つ気のある笑みを浮かべて舌を出した。

「華琳様の大方針から外れていなければ、既に形のできあがった案ほど通りやすかろう。……それこそ新参の案よりも」

そういえば、彼女は先日に一騎当千の新参衆への対抗意識を口にしていたのであった。

この提案を手土産に彼ら（彼女ら？）を出し抜こうというおつもりだろうか。

それがしは妙才殿が先日まで、目に隈をこさえていたことを思い出した。

うう、孟徳殿の陣営は競争が激しそうだなあ。想像するだけで目眩がしてくる。それがしは競争などしとうない。それがしは具になりたい。

「滅私奉公が美德であることは分かっている、私も手柄は欲しいん

だよ」

華琳様の寵愛を更に確かなものへとするためにも、と締めくくる彼女の表情はどきつとさせられるほどに魅力的に見えた。

惜しむらくは彼女の愛情が、孟徳殿という女性に向けられていることであろうか。

まさし君ならば「やっぱり、百合つぷるは最高やな」と喜びそうだが、生憎それがしに女色を眺める性癖はない。

ううむ、妙才殿に愛情を捧げられる孟徳殿という御仁は、一体どんな素晴らしいお方なのだろうか……？

母性が、母性がひたすらに気になる。

それがしはまだ見ぬ孟徳殿の面影を想像しながらも、妙才殿の提案を持ち帰って、上司殿に知らせることにした。

……そういうえば、伯桂殿と同盟する場合は自動的に北郷殿とも深い繋がりを得ることになるんだけど、妙才殿は大丈夫であろうか？

まあ、いいか。

◇

日も完全に落ちた頃、それがしは玄徳殿たちの休む本陣へと向かっていた。

道中、元黄巾賊の一人が物陰に潜んで「あの寝取り野郎……、あの寝取り野郎……」とぶつぶつ繰り返していたのを見かけたのだが、あれは一体何だったのだろうか。

それがし、丁度小便がしたくて茂みにがさごそ入っていたところで背中を見ただけなので、目と目が合ったわけではないのだが、あれは相手にするとやばい気がする。

寄り道をして正解であったと、自分のわがままな膀胱を褒めてあげたい気分であった。

そうして本陣の中、玄徳殿や上司殿の泊まっておられる天幕へとたどり着く。

くんくんくん、もう臭っていないよな……？

何せ、玄徳殿の演説を聞きたい一心で手早くふんどしを洗って舞い戻った時には、

『……まだ臭うじゃないの。もつと真面目に洗ってきなさい』

と上司殿から手厳しいダメ出しを食らって、三往復もさせられたのだ。

畜生……、演説見たかった……。

とりあえず、自分で臭いを嗅いでみた限りでは問題はなさそうであつたため、それがしは天幕の中へと声をかける。

「玄徳殿、上司殿。いらつしやいますか？」

「おや、子遠殿」

返つてきた答えは子龍殿のものであつた。襟元を緩めた装束に、赤くなつた頬とほんのりと香る酒気から察するに、これは一杯引つかけていたのだらうなあ。

いや、もう事は済んだので別に良いのだけでも。

ともかく夜分の失礼を踏まえ、それがしは慌てて頭を下げる。

「先刻はどうも。お二人はいらつしやいますかな？」

「玄徳殿は三姉妹と話し込んでおられますゆえ、今は留守にしておりますよ。文若殿ならいらつしやいますが……」

「それなら、相談したきことがあつて子遠が来たとお取り次ぎ願えませんか？」

「ふむ」

子龍殿はちらりとそれがしの顔を覗いた後、口元に手を当てて何かを考え始めた。

「……いえ、取り次ぎは必要ないでしょう。このまま天幕へあがつてよろしい」

「大丈夫なのですか？」

それがしが問うと、子龍殿は満面の笑みで「大丈夫」と答えられた。……これ、本当に大丈夫なんだろうか？

とはいえ、徒に時を費やすわけにもいかないため、天幕の中へとお邪魔することにする。

天幕は防虫も兼ねて、二重の入り口にされていた。

一つ目の入り口を持ち上げると、二つ目の隙間から中の明かりが漏れ出ているのが見える。



「こんな夜分に一体、何の用だつて言うのっ?」

「そ、曹孟徳殿の腹心の方々とお話する機会があります……、して、協力関係を結べないかと提案されたの、で……」

「え……、孟徳様ですつて?」

組み手の力が弱められ、ふと仰向けへと転がされる。まあ、押し掛かられているのは変わらないのだけれども。

上司殿は体重軽いのだなあ。

彼女はしばしそれがしの上で何かをぶつぶつ唱えた後で、

「事情は理解したわ。話も後で聞いてあげる」

「あ、ありがとうございます——」

「た、だ、しー!」

胸を拳でごりごりと押しながら、上司殿が凄んだ声を出される。やめて、ごりごりして痛い。

「今から私が言うことを復唱し、理解しなさい!」

「は、はひー!」

それから上司殿は息を吸い、声を押し殺して続けられた。

「今のは私の許可も取らずに入ってきたアンタが全面的に悪い」

「そ、それがしめが全面的に悪うございますぞ!」

「私の格好を含め、この天幕でアンタは何も見えていない」

「そ、それがしは天幕で何も見ておりませんぞ……っ」

段々と興が乗ってきたのか、上司殿の声がすごく楽しげな色を帯びてきた。

子龍殿が「おやおや」などと忍び笑いまで漏らす始末である。お二人は楽しいのかもしれないが、今のところそれがしは全然楽しくない。

「桂花ちゃんは三国一可愛い」

「け——、上司殿は三国一可愛いらしい……っ!」

チツと何故か舌打ちを叩かれる。何故だ。解せぬ。

「それじゃあ、次は——」

と上司殿が言った所で、

「何やってるの、桂花ちゃん。子遠さん」

と冷えた声が降り注いできた。

我ら愚連隊の頭領にして、最近黄巾賊の愛天使にまで昇格なされた  
玄德殿である。

それがしは飛び起き、五体投地の姿勢をとった。

この後、玄德殿のご機嫌を直すのにおよそ一刻は費やすことになる。

その間、子龍殿は笑いつばなしであった。おのれー。



## 第十回 劉玄德、道を定める

「成る程……」

うとうととしていたそれがしの思考が、ぽつりと漏れ出た上司殿の一言によつて覚醒へと引き戻される。

「つまりは孟徳様に私たちの政治的な後見人の一人になってもらう、ということね」

翌朝になり、愚連隊の幹部連中に子龍殿を足した面々は急きよ本陣の大天幕にて車座の会議を開くことにした。

議題は当然、今後の方針について——。つまり、妙才殿の提案を我々はどう受け止めるべきなのか、である。

うすぼんやりとした脳内を整理していくと、どうやらそれがしは寝ぼけたまま会議の参加者に向けて、孟徳殿と我々が協力関係を結ぶ利点と欠点をつらつらと説明していたようだ。

……うむ、我ながら何言っているか分からないな。

何で、寝ぼけたまま仕事ができるんだよ……。

この無意識に仕事をこなすという特殊技能は、都で丸一日仕事に追われていた時期に身につけていたものであった。

もしかしたら、忙しい人間なら程度の差はあつても皆が身につけている技能なのだろうか？ そうだったら良いな。世にあまねく幸せと不幸せは、もつと平等であるべきだと思ふのだ。

そんな風に、それがしがこの世に対して無駄な憎悪をまき散らしている、玄德殿が口元に指を当て、会議の場に疑問をふと投げかけた。一瞬で憎悪が氷解する。尖らせた唇可愛い。可愛いは愛。可愛いは正義。やっぱり愛だよな。

「うーん。孟徳さんっていう人はどんな人なのかな？ 人柄が分からないと、こちらの接し方も決められないと思うんだけど」

この疑問については間髪入れずに、上司殿から答えが返ってくる。「お人柄については疑問を差し挟む余地はないわ、桃香。孟徳様はとても明晰で、とても美しく、万事の才に恵まれている、まるで天に愛されて生まれてきたかのような素敵なお方よ」

大した持ち上げられようであるが、上司殿の語られた人物評は概ね都で広まっていた噂と変わらぬものであった。

ただ、「その野望果てしなく、乱世ならばまさに奸雄なるべし。あと頭抜けた女色家である」という評が抜けている。

意図して抜いたのかしら。一応、悪評の類になるものだし。

……いや、多分無意識だなあ。今の上司殿のうっとりとした表情は、まるで恋する乙女のそれである。好きな人物の悪評は、悪評として映らないのかもしれない。

「はえーっ、すっごい人なんだね」

上司殿のお言葉を額面通りに受け取られた玄德殿が、素直な驚きを口にされた。

こういった素直さは、聞き上手に必要な才でもある。事実、上司殿は大いに気をよくして、獸耳の頭巾をふりふりとさせながら孟徳殿の絶賛と宣伝を続けていった。

「ええ、本当に素晴らしいお方なの。それに天性の才にふさわしい誇りもお持ちだわ」

「えつと……、つまり騙し討ちみたいなのは起きないだろうから、協力関係という言葉はそのままに受け取って良いし、先方の悪行を心配するような必要はないって言うこと？」

「その通り。中々頭が回るようになってきたじゃない？」

腕を組み、鼻息を荒くして満足げに頷く上司殿。大層嬉しそうな顔をしている。それに比べて、玄德殿はまだ聞きたいことがある様子であった。

「桂花ちゃんがこうまで言うんだもん。孟徳さんっていう人は悪い人じゃないんだろうね。でも、一般の人々に対してはどんなんだろう……？ 私、黄巾を抜けた人たちがどんな風に扱われるかが心配なんだ」

「あー、商人の噂を聞く限りでは、貴賤の別なく、全ての者に公平であるらしいわよ」

二人の会話に口を挟んだのは憲和殿であった。

彼女の実家は酒家と繋がりが深く、商いの方面に太い伝手を持って

いる。故にこの愚連隊においては実家にいた頃の経験を生かして物資の補給・調達を担当しており、商人との折衝も基本的に彼女を経由して行っていた。

孟徳殿の噂は、商人との折衝中に仕入れたのだろうか。

ちなみに彼女の顔色がやたらに悪いのは例の如く二日酔いのせいである。『過ぎたるはなお及ばざるが如し』という名言を、彼女はどこかに捨て去ってしまったているのだ。

「公平……、ていうことは優しい人なのかな？」

「いいえ。むしろ、誰にでも厳しい人間というのが正しい評価だと思います」

「撫子ちゃん？」

ここで愚連隊の常識と一般論を担当している国譲殿が、今までの情報を加味して持論を展開する。

「他人を公平に見るといふのはすごく難しいのです。誰だって弱い者いじめをされている人を見れば、もやもやした気持ちになってしまいますし、嫌いな人間がいれば厳しい目を向けてしまいますから……。多分、孟徳殿という方は感情を挟まずに領地の運営ができる方なのではないでしょうか？」

「ううん、そっかあ」

国譲殿の見解を聞いて、考え込まれる玄徳殿。

実際、孟徳殿が聖人君子の類ではないということは確かだろう。それは都で良く耳にしていた噂からも、大体察することができる。

曰く、結婚の決まっていた美少女を浚っていき、自らの愛人にしてしまった。

曰く、調子に乗って罪を犯した中央官僚の娘をお尻百叩きの刑に処し、自らの愛人にしてしまった。

曰く、都の有力者の愛人（人妻）に一目惚れし、密かに口説き落とすして寝取ってしまった。

少なくとも道德の面から見てみれば、「ええ……（困惑）」と戦慄するほどの暴れっぷりである。

ただ、孟徳殿の人柄がどうであつても、元黄巾連中が今までより悪

い扱いをされるといふことはないと思う。

「妙才殿のお話を聞いた限り、どうも彼女らは広く人手を欲している節があったからだ。」

「つまりは現状売り手市場ということであり、いくら食いつばぐれの元黄巾連中とてけんもほろろに突き放されることはないだろう。」

「誰にでも厳しい、厳しいかあ……」

しかし、玄德殿はどうにも感情を排した政治理念というものにはいちピンときておられないようであった。

それはまあ仕方がないことだ。

何せ、彼女は三国で並ぶ者がいないほどにお優しい気質を持ち合わせておられる。

だからこそ、心配になってしまふのだ。元黄巾の連中が公平な目で見られて、もし再びはじき出されてしまったらどうしよう——、と。

そんな玄德殿の懸念などお構いなしに、国譲殿は身を乗り出してさらに続ける。

彼女の中で孟徳殿の評価はかなり高いらしい。

「今は身分や力の差による理不尽と不公平がまかり通る世の中なのですから、公平に領内を管理しているというだけで孟徳殿は評価できますよ。だから、私は孟徳殿と協力関係を結ぶことに賛成します。むしろあちらの心証次第では幕下に収まっても良いんじゃないでしょうか」

「後見人の一人として付き合うんじゃないかと、家臣になることを、こちらから願ひ出るってこと？」

国譲殿は、玄德殿のお言葉に我が意を得たりとばかりに手を叩く。「協力関係とは、所詮コウモリのようにふらふらしたものです。何かあった時には手のひらを返されるかもしれません。それならば、もつと保護下に入って深い付き合いをした方が無難ではないでしょうか」「……その心は？」

「私の見る限り、彼女は間違いなく出世しますから、今の内に目を付けておいて、我々も定職につきましよう。やくざな商売を、卒業するのです！」

いつも通りの国譲殿であった。

愚連隊の幹部たちも、「また始まった」という顔になる。

先ほどまでの整然とまとめられた弁論も、やがて「桃香ちゃんは、こんなところにいるべきではないのです！ お母上を心配させるべきではないのです！ さあ！ さあ！」といつも通りの主張に繋がりが、玄德殿も苦笑いを浮かべられた。

ちなみに国譲殿は全く悪くない。

むしろ、やくざな商売が普通と思っている他の奴らの方が全面的に悪い。

ただ、悪いとは思うのだが、国譲殿を擁護する気にはなれなかった。だって、妙才殿の目の隈を見たら、なあ……。

あのあからさまな競争社会に放り込まれるというのは、それがし的には絶対じゃない。

それがしはできるなら週に三日は休日があって、それなりの給料をもらえて、同僚と上司が良い人で、母性豊かな美少女に毎日「頑張れ♪ 頑張れ♪」って言われる職に就きたいのだ。それが無理なら、延々と定職に就かずに玄德殿を愛でていたい。

少なくともそれがしにとっての理想の職場は、玄德殿の幕下ではないと思う。いや、玄德殿の母性次第では状況も変わるのかもしれないが……、でもなあ。

未だ見ぬ母性に夢見て冒険はできぬ。

「桃香を孟徳様の幕下に入れるというのは賛成できないわ」

興奮する国譲殿に待ったをかけたのは、意外なことに上司殿であった。

それがしは「おや？」と驚いてしまう。

上司殿からすれば、孟徳殿は憧れの存在だ。

恐らくは今だって彼女に仕えるという夢を捨ててはおられないだろう。

ならば、玄德殿を通じて自分を売り込むというのはあながち悪くない案のように思える。下積み期間を一気に飛ばせそうだし。なのに、何故……？

「け、桂花さん……」

それがしが解せないでいるのと同じように、国譲殿も上司殿に対して裏切られたとでも言わんばかりの悲しげな表情を向けていた。

「あのねえ、撫子……。桃香の志は知っていますでしょう？ この娘は誰かの下に収まるような器ではないの。せつかく黄巾の鎮圧で今後のとっかかりを得られるかもしれないというのに、自分から小さく纏まろうとしてどうするのよ」

「う、それは……」

呆れたようにため息を吐く上司殿に、上手い言葉を返せないでいる国譲殿。

玄徳殿と上司殿の顔を彼女はきよろきよろと見比べ、やがてしどろもどろで口を開いた。

「……でも、今回の件でも桃香ちゃんは殺気を向けられたと聞きました。これからもっと危ない目にあうかもしれないんですよ？ だったら、無難な領主のもとで戦とは無縁の仕事にさせてもらった方が、ずっと桃香ちゃんのためになると思います」

「撫子ちゃん」

しゅんとして握り拳をぎゅつとつくる国譲殿の手を、隣にいた玄徳殿が優しく両手で覆われる。

「桃香ちゃん……」

「私のこと心配してくれてありがとう。でも、この大陸で辛い思いをしている人たちのためにできることを、私もうちよつと考えていたんだ。勿論危ないことは避けるようにするからね。もう少しだけ、我儘を通させてもらえないかな？」

こうなると玄徳殿一番の親友を自負している国譲殿は弱い。

彼女は歯がゆそうに唇を歪め、「絶対に危ないことは駄目ですからね？」と言ったきり引っこんでしまった。

ちなみにそれがしは玄徳殿が優しく国譲殿を抱き寄せた瞬間、その母性を詳しく見んがために前のめりになった。

「わわっ」

あら、く、玄徳殿の母性がぐにやりと変形して眼福でありますぞ

全くもって、あの二つのぱふぱふは凶器であった。今は同性が相手だから良いものの、ひとたび異性に矛先が向いてしまった場合は即座に相手を恍惚状態へと誘ってしまおう……、そんな魔性の凶器であった。

あ、やばい。先日の感触を思い出してしまった。前かがみの角度を保っておこう。

「子遠殿、何をなさっているのです？」

「いえ、お気になさらず——、って!？」

と右隣の子龍殿に返した瞬間、凄まじいまでの脛の激痛に襲われ、それがしはたまらずもんどり打った。

……馬鹿な！ 上司殿は国議殿とともに玄徳殿の両隣に控えているため、真向かいにいるそれがしの脛に竹のこぎりは届かないはず——。

「あいだあつ!？」

良く分からないが、とりあえず左隣にいる褐色青年をもんどり打ちながら思いきり蹴り飛ばすことにする。

犯行現場は見えていないが、疑わしきは罰するのであった。

忌々しい走狗め。それがしと一緒にもんどり打つが良いわ。

「何やってんの、アンタたち……」

「どうしたの、子遠さん？」

呆れ顔になる上司殿と、国議殿を抱き寄せながら、ちらりとこちらへ目をやる玄徳殿。

ううむ、それにつけても今日はお二人の肌艶と機嫌がすこぶる良いなあ……。

……羨ましい限りである。彼女らとは対照的にそれがしの肌は寝不足でガサガサであった。

何せ、機嫌を損ねた玄徳殿を宥めるためにそれがしは天幕の外で玄徳殿の素晴らしさを讃える漢詩を延々と詠まされたのである。

いや、ただ漢詩を詠むだけならば単純作業に慣れているそれがしにとつてはそこまで重労働ではない。脳は休んで口だけを動かすなど、

無心で書類の写しを作成する作業に比べれば造作もないことである。問題は途中で上司殿が寝ている方から不機嫌そうな咳払いが聞こえてくることであった。

最初は意図がつかみかねたが、成る程眠る時に他人を褒めそやす詩など聴きたくはない。そう思い至ったそれがしが上司殿を讃える歌を即興で作って歌いあげると、

「ゴ、コホンー」

と玄徳殿まで可愛らしい声で咳払いを始めるのだ。

結果としてそれがしは夜を徹してお二人を讃える歌を代わる代わる歌う羽目になり、今の寝不足に繋がるわけであった。

いや、良いんだけどね。お二人の機嫌が良くなるなら……、別に、そんなことを考えているところに、

「ん、桃香。来客みたいだよ」

憲和殿から来客の知らせがもたらされた。

「お客さん？ どちら様だろう？」

国譲殿を抱き寄せながらきよとんとする玄徳殿。

周りをぐるりと見渡した憲和殿が、「どっこいしょ」と億劫そうに車座から立ち上がった。

どうやら、来客の対応は自分が適役だと判断したらしい。

「相手方に足元を見られますから、昨日の今日で孟徳さんのお遣いということはないと思います。黄巾の関係者じゃないですかね？」

「ああ、ということとは……」

玄徳殿に抱かれながら、国譲殿が体面の問題から客の素性を推測する。

くそう、抱かれ心地がよさそうだなあ。

幹部連中の耳目が天幕の出入口へと集中する中、外に出た憲和殿の驚きを含んだ声が天幕内へと聞こえてきた。

「ああ……、はいはい。あなたたち、いらっしやい」

程無くして、憲和殿が再び天幕内へと戻ってくる。

彼女の後ろには、桃、青、紫と色とりどりの髪色をした少女達が続いていた。



そのいずれもが類まれなる美少女であり、母性、平たい、眼鏡の様々な個性を持つている——、つて黄巾賊の精神的支柱、みんなの”あいどる”張三姉妹じゃねーか！

突然の体面に、当然ながらそれがしが「アイエツ」と仰天したのは言うまでもない。

◇

「あれっ？ アンタは……」

不思議なほどに幹部連中が静かであったせいで、一人奇声を上げてしまったそれがしに対し、天和ちゃんの妹殿で平たい方——、つまりは地和ちゃんが訝しげな眼差しを向けてきた。

というか、何で皆は三姉妹の来訪に驚いていないのだろうか。

天和ちゃんだよ、天和ちゃん。こんな近くに天和ちゃん！

口をパクパクさせて理由を探し求めていると、何かを察した褐色青年がそれがしの疑問に答えてくれた。

「ああ、オヤジは知らねえか。三姉妹には今後の身の振り方を相談するため、来てもらう予定だったんだよ」

「なんでそういうのもっと早く教えてくれないの？」

それがしは深い悲しみに包まれた。

もっと早く教えてもらえれば、お手製の扇子に揮毫さいんしてもらうこともできたのに。

いや。よくよく考えてみれば変装していたとは言え、それがしは彼女らに暴言を吐いている。来訪の前にそれとなく席を外すこともできたはずなのだ。

もうため息ついちゃうよ、それがし……。

このままでは、三姉妹もそれがしの正体に気がついてしまうやも……、つて、やたら地和ちゃんからじろじろと見られるな！

地和ちゃんは眉間にしわを寄せて、勝ち気そうな瞳を瞬かせている。

まるで何かを確認しているかのようだ。

そうして、ずかずかずかとそれがしのもとへと歩みより、

「な、何か？」

「……アンタさ、ちいたちの歌を最前列で良く聞いてた奴じゃない？」  
半眼で疑わしげにそう問いかけてくる。

やはり、付け髭など変装の内には入らなかったのだろうか。

先ほどまで探るようであった彼女の眼は、既にぎらぎらと確信の光で煌いておられた。

これは非常にまずい流れだ。

「あの、あれは、その……」

「何々？　ちーちゃん、どうしたの？」

と、ここで天和ちゃんが割って入ってくる。

やめて！　天和ちゃんに嫌われたら、悲しみに生きる気力が……。

地和ちゃんは横で一つに縛った髪を揺らしながら天和ちゃんへと顔を向けると、強い口調で同意を求め始めた。

「天和姉さん、こいつよ、こいつ！　最前列でやたら騒いでた奴っ！」  
「んー？」

しばしきよんとしていた天和ちゃんであったが、次第に何の話か理解し始めたらしく、可愛らしく頬をぷくぷくと膨らませ始める。

「あー、あの時私たちにひどい事言った人ー！」

ああああ……、もう駄目だあ、お仕舞いだあ……。

天和ちゃんのまなざしに耐えられず、それがしは思わず頭を抱えてしまう。

そこに思わぬ声が上がった。

「あ、あの子遠さんは本気で張角さんたちを罵ったわけじゃ——」

「何で、あんな小芝居をしたのよ！　本気でびつくりしたんだからね！」

地和ちゃんからの言葉に、天幕内の誰もが首を「ん？」と傾げた。

「……小芝居でありますか？」

「そうよ。アンタ、ここしばらくはずっと最前列でちいたちの歌聴いてたでしょー！　扇子振りながらっ。姉さんたちも覚えてるでしょ？」

「んー、お姉ちゃんどうでもいいことは覚ええないのよねー」

と顎に指を当てて考え込む天和ちゃん、可愛い。

「……思い出した。何か急に最前列の常連になったと思つたら、合いの手を広めたり整理券を配つたり、勝手に周りを取り仕切り始めた奴じゃない」

眼鏡の位置を直しながら目を見開く人和ちゃんに、地和ちゃんが盛大に肯定の意を唱える。

「そうよ、それよ！ 似合わない付け髭なんて付けちゃってき、一体何処のどいつがお忍びでちいたちの歌を聴きにきてたのかと気になつてたの。それがいきなり訳のわからない暴言吐き始めちゃって！」

「あー」

思い当たる節は腐るほどにあつた。

地和ちゃんのいう合いの手とは、黄巾連中の黄ばんだ声援があまりにもばらばらであつたため、まさし君仕込みの”こーる”や”おた芸”を密かに広めた件を指すのだろう。

残念ながら、都の歌姫相手に”おた芸”を打ち、「歌が聞こえねえ」と聴衆からたこ殴りにされていた彼ほどのキレは再現できなかつたが、それが返つて三姉妹の歌を強調する結果を生んでいたように思える。

多分、”おた芸”は最低限演者と聴衆の主従が逆転させぬように打つものなのだ。

強すぎる光は、別の光と食い合つてしまう……。演者が太陽で月が聴衆という関係は決して崩してはいけない。第一黄ばんだ男の放つ光など、それがしは見とうない……。

それがしは三姉妹の演唄会によつて、また新たな真理を知ることができたのであつた。

あ、整理券を広めたのは単純に席取りで毎回死に物狂いの戦いを繰り広げるのがクソだるかつたせいである。

しつかし、よもや自分の仕業だとばれているとは……。

「ほら、何とか言いなさいよー」

ずいっと地和ちゃんに詰め寄られ、強く説明を求められる。

ああ、これは仔細を打ち明けなければなるまいな、と腹をくくつたところで身内から擁護の声が向けられた。

獸の耳を模した頭巾を不機嫌そうに逆立てた上司殿である。

え、上司殿？

「……それについては私が説明する。それで良いでしょ？」

わざわざ車座から立ち上がり、地和ちゃんとの間に入つての擁護であつた。

おお、上司殿。上司殿——！

それがしはずっと上司殿のことを、部下を見捨てぬ優しいお方だと信じておりましたぞ！

よし、これで天和ちゃんの怒りは早々に解けよう。

後で揮毫を貰いに行けるな……。

それがしが内心で歓喜の雄叫びを上げているのは対照的に、地和ちゃんは不承不承といった顔を見せていた。

「……分かつたわよ。でも、ちゃんと全部説明してよね！」

ぷいと顔を背けつつ、地和ちゃんは姉妹とともに車座の中へと座り込む。

「まずは誤解を解かなきゃ、話が始まりそうにないわね」

と三人の着座を確認した上司殿は、そのままそれがしと褐色青年の間に着座して、今までのことを説明し始める。

我々が黄巾賊に紛れ込んだ理由。三姉妹を知り、黒幕の存在に思い至つたこと、三姉妹を助けるための策を練り上げたこと……。

上司殿の説明を聞いた三姉妹は、各々が違った反応を見せた。

地和ちゃんは目を大きく見開いて、

「そんな……。 ”あいつ” が私たちを陥れようとしていたなんて……」

とあからさまに驚いた表情を見せた。

人和ちゃんはとうとうため息をつき、

「まさか、私たちの知らない間にそんな厄介事に巻き込まれていたなんてね……」

と頭を抱え込んでしまう。

そんな二人とは異なり、天和ちゃんは、

「んー。良く分からないけど、めんどくさいことになつてたのー？」



「んんと……」

地和ちゃんの歯切れが悪い。

彼女を見かねて、人和ちゃんが代弁を買って出た。

「私たちは人気が出るまでは各地で旅芸人をしていただけで、そんな私たちを助けてくれた人が二人いたのよ」

「あ、于吉さんうきつと馬元義さん？ えっと、私たちに妖術を教えてくださいましたのが于吉さんで、興行の下準備をしてくれたのが馬元義さんかな？」

「ちよ、ちよつと人和、ちい姉!？」

何でもないことのようにすらつと口にする姉妹に対し、地和ちゃんが抗議の声をあげた。

「……ちい姉さん。今までは世話になった相手だったのかもしれないけど、もう状況が変わっちゃったんでしょ？ 私たちに罪を押しつけようとする人なんて、恩人でも何でもないわ」

「そんなの、まだ決まったことじゃないじゃない……!」

二人が口論を交わす中、天和ちゃんがしばし考え込んでから口を開く。

「恩人でも何でも、お姉ちゃんは私たちが無事に済むならそれが一番だって思うかなあ」

そのお言葉に妹二人が黙り込む。

正直な話、彼女らの口論は結果の見えた話であった。

何せ、首謀者と疑われた三姉妹の安全を確保するには、黒幕の特定は不可欠なのだ。

無論、ただ潔白を証明するだけならば、黒幕以外の人間を適当にやり玉にあげても良い。三姉妹を想う信者の連中ならば、彼女らのために身を犠牲にすることも厭わないだろうし、甘い汁を吸おうとしていたごろつきどもに罪をかぶせても良い。

だが、そうして黒幕を見逃したところで、彼（または彼女）にとつて自分を知る三姉妹という存在は、後々目障りになってくるはずだ。

つまり、こうして袂を分かった以上、三姉妹は黒幕の対立は既定路線に乗ってしまったのである。

後は世話になった相手に矛を向けることを納得できるか、という問

題であった。

「……分かった。全部話すわ」

地和ちゃんは不満そうに唇をふるわせ、やがて姉妹に同調した。

それから、三姉妹は各々の言葉でぼつりぼつりと今に至った経緯を語り始める。

最初は大陸中の村や町を練り歩く、売れない旅芸人であったこと。自慢の種だった歌は人々に受けず、大道芸や手品を披露して糊口を凌いでいたこと。

そうして、極貧生活を続けていたところに彼女らの前へ現れたのが、于吉という人物であったこと。

彼は妖術師であつたらしく、しばし旅を共にした後三姉妹へ拡声の妖術を授けると、『太平要術の書』なる巻物を残して、三人の前から去つていったという。

「ちよつと待つて、張角さん。『太平要術の書』って何なのかな？」

幹部連中の疑問を代表するようにして、玄德殿が口を開いた。

それに対して、天和ちゃんが頭の中から記憶を引っ張り出すように口元をへの字に曲げて答えられる。ううん……。こうして身近で見比べてみると、やはり甲乙捨てがたく、双方共に眼福であった。

「んー。良く分からないんだけど、”太平の世を作るために必要なことが書かれている”って于吉さんは言っていたかな？」

「ええっ!？」

玄德殿が仰天した。玄德殿が求めて止まなかった悲願の答えが、その『太平要術の書』とやらには記されているというのだ。そりゃあ、ビビる。それがしだつてビビる。ビビった。

「はあ……?？」

反面、上司殿はいかにも胡散臭そうといった表情を浮かべられていた。確かに、書物を読んだだけで太平の世が実現できるのならば苦勞はない。この世に、いかなる聖人・英傑も必要ないということになる。

だが、そんな上司殿の反応など気づかず、玄德殿は悲願の答えが分かるかもしれないと言う希望から、ものすごい勢いで天和ちゃんへと詰め寄った。

「お、教えて！ この大陸に住む虐げられた人たちを救うには、どうしたらいいのっ？」

ものすごい剣幕で玄德殿に肩を揺さぶられ、天和ちゃんの母性がぼよんぽよんと揺れた。

……よし！

「ちよ、ちよつと。目が回るからー」

「あつ、ごめんなさい……」

揺さぶり地獄から解放された天和ちゃんは、ふうと長い息を吐いて、胸の谷間から細長い巻物を取り出した。

……よし！

「……アンタ、さつきから何を力んでいるわけ？」

「い、いえ。お気になさらず!?!」

上司殿にそう返しながら、天和ちゃんが胸元から細長い巻物を取り出そうとした瞬間を、必死に脳内に刻みつける。これは大事な場面であるから、絶対に忘れてはならないだろう。

「これが、『太平要術の書』……?」

「そう。私たちには必要のないものだから、玄德さんにあげまーす」

随分と軽い仰りようだ。

その気軽さが引つかかったらしく、今まで静観していた子龍殿が解せないという風に口を挟んだ。

「大事なものではないのですかな？」

「……元をたどれば、この巻物のせいで私たちは争乱に巻き込まれかけたわけでしょう。後生大事に持っていたってしょうがないわ」

人和ちゃんの答えに成る程と思う。実際、彼女たちは平和を手に入れるどころか罪人に落とされかけたのだ。そんな縁起の悪いものを手元に置いていたくないと言う心情は、それがしにも良く理解できた。

「それに、多分あなたたちの思っているような書ではないわ。開いてみれば分かるでしょうけど……」

その言葉に促されるようにして、ごくりと喉を鳴らした玄德殿が巻物を紐解いていく。



巻物の全幅はそう大きなものではなかった。

天和ちゃんの胸にすっぽりと収まる程度（ここ大事）であり、その長さは一尋程度であろうか。

玄徳殿は車座の中央に巻物を置き、皆が見えるように広げていた。

「どれどれ」

「んー？」

「何だあ、こりゃあ」

幹部連中から素つ頓狂な声が次々にあがる。

それも無理からぬ話であった。

何故なら、紙面に平和に関する記述など全く見あたらず、ただ妙な絵図が記されているだけであつたからだ。

何というか、まるで子供の寝小便のような……、そんな染みが全体に広がっている。

これが天和ちゃんの汗だというなら、それがしも色々と撈るのだが、生憎と染みは色とりどりに分けられており、その境界を細い線が縦横に引かれていた。つまり、これは意図して描かれたものなのだ。

んー。これは……、何だ？

「これって……」

幹部連中のなかで、上司殿だけが顔色を変えて言葉を失っていた。

「桂花ちゃん、これが何なのか分かるの……？」

玄徳殿の問いに、上司殿は重々しく頷く。

「これは、この世界の地図……、だと思っわ」

「ええっ!？」

その答えに、幹部連中が驚愕した。

そうして玄徳殿を押しつけ勢いで、地図へと皆が殺到する。

「こいつはもしかして黄河か？」

「それなら、ここが冀州で、ここが幽州なんですか？」

「はあー、この南の青い線が音に聞く長江かしら。よくもまあ、こんな小さな紙に……」

皆が詰め寄り、自らの記憶と“世界の地図”を照らし合わせてい

く。

最も熱心に地図の真贋を見定めているのは、やはり上司殿であった。

「有り得ない……、有り得ない……」と呟きながら、顔を地図に近づけては指差し確認をしておられる。

それがしも感心しながら外巻きに地図を眺めていると、

「子遠さん、子遠さん」

と玄徳殿がいつものようにそれがしの袖を引っ張りにきた。

どうやら、興奮した幹部連中に場所を取られてしまったらしい。

「どうしたのですか、玄徳殿」

「うん、そのね。私、あれがこの世界の地図って聞いてびっくりしたんだけど」

どこか釈然としない面持ちのまま、玄徳殿は続けられる。

「地図なんかと太平の世がどう繋がるのかな？」

「ん、それは、その」

正直、それがしにもよく分からなかった。

この時世において地図というのは、町中の案内板か軍事に用いられる地形図くらいのものである。

目の前にある世界の地図は、本物だとすれば確かにすごい。

だが、実用性を考えると、流石に首を傾げざるを得なかった。

だって、世界の地図を使って街中を歩くことはできないし、世界の地図を持っていても、周辺の細かい地形までは良く分からない。

ほうほう、成る程。世界つてのはこんな形をしているのかあ。……それで？ という感想以外に言いようがない代物なのだ。

それがしが玄徳殿に満足行く答えを返せずにいると、誰よりも前めりになっていた上司殿が理解できないといった具合に吐き捨てた。

「……意味分かんない。何で、海に向こうの大陸まで描かれているのよ。実際に航海した人がいるとでも言うの？」

「桂花ちゃん。海って、あの？」

「そうよ、この中華大陸より広い青塗りの部分が全部海」

「え、ちよつと待って」

玄徳殿が目を丸くして、さらに問われた。

「中華大陸つて、こんなになちつちやいの？」

「小さくはないと思うけど……、こちらは多分大秦国で、こちらは匈奴ね。色分けされているから憎たらしいくらいに分かりやすいわ」

上司殿が忌々しげにそう言うのと、玄徳殿がふるふると頭を横に振られる。

「そう言うことじゃなくって……、”天下”つてこんなちつちやいつてことなの？」

その言葉に、上司殿がはっと顔を上げられた。

「桃香……」

「私、幼い時から帝はこの世界を——、天下を治める人だつて教わってきたよ？　でも天下がこんなになちつちやいんじゃ……、天の外側はどうなつちやうの？」

玄徳殿は止まらない。

「大秦国つて国は天下には入らないの？　国というからには人が住んでいるんでしょ？　天は人の上にあるものなんだから、大秦国の人たちの上になつて、天はあつていいはずだと思う。じゃあ、天下つているのは何なんだろう……。人の数だけいっぱいあるものなの？　世界つて何だろう。私たちの世界の外側に暮らしている人たちも、私たちみたいに悩んだり、色々なことを考えて生きているのかな……」

しばらくして、玄徳殿は頭を抱え込んでしまった。

「玄徳殿……」

彼女の悲願は、この世界で苦しんでいる人々を救うことであつた。

だが、彼女の考えていた世界が思っていたよりも狭かつたことに気がついて、混乱してしまわれたのかもしれない。

それがしはどう声をかけたものかと困惑した。

上司殿もそれは同様で、手持無沙汰に地図を指で撫でておられる——、つて、

「上司殿、その地図……」

「えっ？」

上司殿の撫でた箇所が、にわかには輝きを放ち始めたのだ。

輝きの中から我々の良く知る文字が躍り出し、空中に意味をなす文を構築していく。

——地域情報——

(勢力) 袁紹

(本拠) 南皮

(武将数) 四

(部隊数) 五

(兵力) 三五〇〇〇

「な、何これ……」

流石の上司殿もへたりこんでしまい、空中で煌々と光る文を見上げていた。

それがしも驚きはしたが、これは理解の範疇にあったため、引き寄せられるように浮かび上がる文へと近寄っていく。

「ちよ、ちよつと子遠つ。不用意に手を伸ばしちや駄目！ 何かあったら……」

「いや、多分これ……。まさし君の言う”すてえたす”みたいなものなのではないですか？」

「は？」

まぶたを閉じて、青春時代を思い出す。

まさし君は、何かと”すてえたす”と称して他人の能力を数値化することを好んでいた。

道行く人々とすれ違うたびに、「あれは九十。六十。八十」と評価していくのがひどく面白くて、それがしも数値化してくれと頼み込んだものである。

ちなみにそれがしは「おーるふらつと」と言われた。良く分からないが、けなされているわけではないだろう。

上司殿の顔にも段々と理解の色が見えてきて、やがて不愉快そうな、いつもどおりの表情を取り戻される。

「ちよつとどいて」

と言つて上司殿はそれがしの前へと進み出て、空中で光る文へと恐る恐る指を伸ばされた。

文字に指が触れた瞬間、ピンと甲高い音が鳴り響き、さらに違った文が構築されていく。

——人物情報——

(名前) 袁紹

(性別) 女

(統率) 八十

(武力) 六十九

(知力) 五十

(政治) 七十七

(魅力) 八十

「これは……、本初の情報……、かしら？」

「恐らくはそうでしょうなあ」

本初殿の下には、顔良、文醜、田豊といった人物の名前が列挙されており、やはり同じような情報が記されている。

「先程上司殿は南皮の辺りを指でなぞられたと思いますが、他の場所をなぞってみれば同様に情報が見られるのでは？」

「……そうね。やってみる」

続いて上司殿が図上の陳留近辺をそつと撫でると、やはり違った情報が浮かび上がってきた。

——地域情報——

(勢力) 曹操

(本拠) 陳留

(武将数) 四十五

(部隊数) 二

(兵力) 五〇〇〇

「つて、武将数多いな！」

思わず突っ込みを入れてしまった。

上司殿も解せないといった風に、首を傾げておられる。

「人材の豊富さで言ったら、袁家だって馬鹿にできないはずなのに……、この差は一体何なの？」

言うが早いか、浮かび上がった文字に触れて、先程のように詳細を読み取っていく。

——人物情報——

(名前) 曹操

(性別) 女

(統率) 九十九

(武力) 七十一

(知力) 九十二

(政治) 九十六

(魅力) 九十六

「おー……」

流石に天に愛されているとまで噂されるお方の”すてえたす”である。良くは分からないが、これはどの値も相当高いのではないだろうか。

上司殿も感心されているかと思いきや、彼女は何故かげんなりと肩を落とされていた。

何故だろう……？

情報を下に辿っていくと、すぐに疑問は氷解した。

元讓殿や妙才殿といった腹心の後に、ずらっと男性の名が連なっていたからである。

(名前) 閻炎

(名前) 閻牙

(名前) 炎牙

(名前) 炎狼

(名前) 狂夜

(名前) 劍牙  
(名前) 劍牙 (その二)  
(名前) 死狼  
(名前) 死進  
(名前) 時夜 ……

どうしよう……。劍牙 (その二) という御仁がすごい気になる。  
これ劍牙その一さんと対面した時、何て会話しておられるのだろう  
……?

良好な関係が保てているのだろうか？ 赤の他人だというのに、すごい心配になってきたぞ。

「……何なの、この男の群れは……」  
男性嫌いの上司殿にとって、孟徳殿のお傍に男性の名前がずらっと並んでいる状況は、あまり面白くないことであつたのだろう。

苦虫を噛み潰した表情の上司殿がこれ以上機嫌を悪くされないうめにも、それがしは慌てて話題を変えようとした。

「でも、女性もいらっしやいますぞ。この程イク殿とか、郭嘉殿とか……」

「そつちはもう確認済みよ。ふうん……。知力が九十七、ねえ」  
興味なさげに鼻を鳴らし、上司殿はそのまま冀州の、我々が駐留している辺りを指でなぞられた。

——地域情報——

(勢力) 北郷一刀  
(本拠) 放浪軍  
(武将数) 五  
(部隊数) 二  
(兵力) 二〇〇〇  
(勢力) 劉備  
(本拠) 放浪軍  
(武将数) 二

(部隊数) 一

(兵力) 一〇〇〇

(在野) 七

おおー……、北郷殿の勢力もやはり表示されるのだなあ。

しかし、義勇兵は放浪軍というくりなのか。何か性質が違う気がするんだけど、細かいことはまあ良いか。

「えっ?」

しかし、それがしの袖を掴みながら傍で見ていた玄德殿には意外な内容であつたらしい。

我が愚連隊を指し示す情報を、信じられないような顔つきで凝視なさっている。

「こ、これっ。わ、私に確認させて!」

そして慌てた様子で玄德殿を指し示す文字を触り、その詳細を表示させた。

——人物情報——

(名前) 劉備

(性別) 女

(統率) 七十八

(武力) 八十(五十・的盧)

(知力) 七十三

(政治) 七十八

(魅力) 九十九

(名前) 荀イク

(性別) 女

(統率) 四十八

(武力) 六十六

(知力) 九十六

(政治) 九十九

(魅力) 九十六



「は——？」

それがしは言葉を失った。

馬鹿な……、上司殿の武力が高すぎる。絶対に十台だと思っていたのに……。

いや、まさかあれか？ 子龍殿の組み技特訓が、彼女の武力を引き上げてしまったというのか？

何と恐ろしいことだろう。その内、上司殿の機嫌次第ではそれがしの首をポキッとやられてしまうかもしれない。今後より一層ご機嫌伺いに力を注がなくては……。

あと、劉備殿の武力が八十もあつた事にも仰天させられた。でもこれ、多分バルバトスさんの分が五十も上乘せされているってことだよね……？

恐るべきはバルバトスさんというわけか。やはりご機嫌伺いをしておこう。ほんと怖い。

あ、玄徳殿の魅力は至極当然の結果だと思いました、まる。

何せ、あの母性は三国一であるからな……。先程の孟徳殿も魅力では玄徳殿に負けていたし、これは母性も上回っていそうだ。

敗北を知りたい。

しかし、成る程。ここまで読んできて、それがしにもようやくこの妖術書が何故”太平の世を作るために必要なことが書かれている”と言われたのか理解できるようになって来た。

この妖術書は恐らく、世界のあらゆる勢力と数多の英傑を表示することができるとだ。

『敵を知り、己を知らば百戦危うからず』と古来から言われているように、戦いにおいて相手と自分を客観的に比較できるということは大きな強みになるだろう。

試しにとそれがしも、様々な地域の英傑を探し出していく。

名族や、新興の豪族。そして、まだ野に居る英傑たち。

ピツ、ピツと適当に世界各地を指でなぞっていくと、南方の大陸にあつてはならない文字列を見つけ出してしまった。

(勢力) 正史

(本拠) まさし朝おーすとれいりあ

(武将数) 四

(部隊数) 一

(兵力) 五〇〇

「ファッ!？」

何で!?! 何でまさし君がそんなところに居るの!?!

何時の間に中華大陸から離れていたの、あの人!?!

「何やってるのよ、アンタ」

「いや、上司殿! まさし君がつ、まさし君がですな!」

「あいつのことなんてどうでもいいじゃない」

とって興奮しきりのそれがしに対して冷たい目でにらみ返してくると上司殿は何気ないそぶりで北郷殿の勢力を表示させた。

きらきらきらと文字が躍っていき、彼らの”すてえたす”が表示される。

「ちよつと、上司殿。もう少し、まさし君の情報を……」

「そんなもの後回しよ。ふむふむ、北郷の魅力は九十七。当然だけど桃香ほどじゃないわけね。関雲長は……。統率が九十六に、武力が九十七って……。成る程、確かに大陸有数の使い手だわ」

ぶつぶつと呟く上司殿のお言葉に、遠巻きにしていた子龍殿が反応を見せられる。

「九十七。この数字は、絶対的な力関係を表しているのでしょうか?」

「どうかしらね。張翼徳の武力が九十八になっているけど、子遠の見立てではこの娘たちってほぼ互角なんでしょう? 多少の数値差なんて時と運で変わるもんじゃないかしら」

「そう願いたいものです」

と子龍殿は猛獣を思わせる笑みを浮かべられる。

先程から彼女は地図を興味深く眺めたはいたものの、その上に浮か

び上がった英傑たちの情報についてはあまり興味を持っていないようであった。

武人というものは机上の空論で勝敗を付けられることをあまり好かないから、彼女の反応も仕方のないものなのかもしれない。

「子龍、アンタの武力も見てあげようか」

「いや、遠慮しておきます」

「そっ」

肩をすくめて、上司殿は孔明殿たちの”すてえたす”を見ようとする。

「あの、上司殿。まさし君の情報を……」

それがしがお願いしても、上司殿は聞いてくれぬ。

理不尽だ。

上司殿はそのまま、孔明殿たちの”すてえたす”を一瞥して、すぐに情報をぱっとかき消してしまわれた。

「むむっ。」

上司殿の様子がおかしい。

はてな、とそれがしが横から手を伸ばして再び孔明殿たちの”すてえたす”を表示させようとすると、間髪居れずに上司殿がかき消してしまう。

「……何か知りたいことでもあるわけ？」

あつ、これは駄目な奴だ。

多分、上司殿にとって面白くない情報が彼女たちの”すてえたす”に記載されていたに違いあるまい。

上司殿は忌々しげに地図を睨み付け、

「こんなものは参考にもならないわ」

とつまらなそうに吐き捨てた。

ええ……。つい今さっきまで興味深そうに色んな情報を見ていたのに……。

それがしが反論しようとしたところに、思わぬところから同意の声  
が飛んできた。

「うん……。こんなの、嘘ばかりだよ」

玄德殿だ。

そのお声には、隠し切れぬ怒気が多分に含まれておられる。

一体、何が彼女をこうまで怒らせてしまったのか。

玄德殿は再びこの近辺の情報を表示させて、てんででたらめに情報を呼び出し始めた。

「張角さん、張宝さん、張梁さん、第六なんとかさん、昼青龍さん、馬元義さん……。やっぱり、そうだ」

彼女は優しげであった眼を精一杯に怒らせて、表示された情報を睨みつける。

「この書物には、子遠さんも、撫子ちゃんも、梅花ちゃんも、廖化さんも、ロウハン君も……。皆が載ってないんだよ。こんなのって絶対おかしい！」

「玄德殿……」

玄德殿はそれがしや愚連隊の面々を見回して、さらに続けられる。

「私は一人じゃ何もできない駄目な人間なのに……。計算だって武芸だって人付き合いだって、私よりずっと立派にできている人たちが、この書物には載ってないんだよ。何でなの？ ねえ、子遠さん。これってどういうこと……？」

玄德殿の問いかけに、それがしはしばらく思索する。

脳裏に浮かび上がったのは、おさげを揺らし、筋骨隆々の体を見せつける貂蝉殿のお姿であった。

「それは恐らく……。 ”もぶ” と英傑の違いなのだと思います」

”もぶ” って何？」

「この大陸の乱世を――、英傑たちの生きざまを大きな物語として括った時、主役にはならず背景として生きる人々のことですか」

説明を続けるうちにそれがしの中で理解が深まっていく。

貂蝉殿のいう外史とは、要するにこの書物に記された英傑たちが織りなす物語のことなのだ。街頭のお芝居の中で名もなき兵士が話題にならぬように、 ”もぶ” がどう動こうとも物語に大きな影響を与えない。

「背景って……。じゃあ、居なくても良い人たちってこと？」

「そんなことはありませんぞ。事実、玄徳殿の勢力を表す情報にある（兵力）という数値……。これが我々のような”もぶ”を指し示すのだと思われませぬ。兵の数が大きいほど、勢力としては強大になるのですから、無意味ということはありません」

「でも……、子遠さんたちは数字じゃないよっ！」

それがしの取り繕いを遮るようにして、玄徳殿は叫ばれた。

「私、桂花ちゃんと二人ぼっちなんかじゃないよ！ 名前のあるみんなと一緒にさ！ だから、この書物はみんな嘘ばっかりなの!!」

「玄徳……、殿——ッ!?!」

涙目になる玄徳殿の背後で、浮かび上がっていた文字が更に変化していく。

玄徳殿の勢力情報が、人物情報がでたらめに数値の増減を繰り返すし、やがて燐光を帯びて虚空へと消えていってしまう。

後に残った情報は北郷殿の勢力情報と、在野を指し示す”八”という数値だけであった。

「……私、今決めた」

と玄徳殿は意を決したように宣言される。

「世の中の力ない人々を幸せにするって夢は諦めないけど、この書物に書かれていることなんて当てにしない！」

「桃香——」

そのお顔は、初めてお会いした時に拝見した”ひろいん”としての表情に酷似していた。

それがしは思わず苦笑いを浮かべる。

彼女のような手合いは一度こうと決めると、絶対に初志を貫徹するし、謎の覇気によって周りを従えてしまうのだ。

「桃香……」

「お頭……」

事実、それがしと愚連隊の面々は彼女の姿にコロリと屈服してしまっているではないか。

「この世の中が”英傑”だけの物語だって言うなら、私はそんな物語に参加しないっ！ 私は”もぶ”なんて呼ばれている人たちと一緒に

に歩くのっ!! だから……、だから……」

気持ちだけが前のめりになり、彼女の言葉が詰まっていく。

「ごめんなさい、うまく言葉にできないや。私、頭が良くないから……」

それがしは笑ってしまった。

最後の詰めが甘いのも、玄德殿らしいと言うかなんというか……。

それがしはひざまづく。

「玄德殿——、いえ。桃香様」

「ふ、ふえっ!? 子、子遠さんっ」

顔を果実のように真っ赤にされた玄德殿に、それがしは言う。

「お志、しかと耳にいたしました。ただ、いささか具体案に欠けているように思われますな」

「それは……、その……、えっと。ごめんなさい」

しゅんとする玄德殿、可愛い。

「まあ問題はありませんぞ」

「えっと、もしかして……」

玄德殿の期待に応えようと、それがしはさも知恵者然とした口ぶりで、いつも通りに大言壮語を吐き出した。

「……それがしには腹案がございますから」

玄德殿のお顔に笑顔の花が咲き誇り、上司殿が呆れたように肩を竦められる。

愚連隊の強面連中も「また始まった」という顔になった。

我々にとつてはいつも通りのやり取りだ。多分、これからこのやりとりは何かしら問題が起きるたびに行われていくことであろう。

「どんな!? どんな案なのっ? 私たちはこれからどんな道を歩いていけばいいのっ?」

と身を乗り出す玄德殿、可愛い。

「それはですな——」

「あ、ちよっと待って」

と、ここで上司殿から待ったがかけられる。

「んお? とうなさいましたか、上司殿」

「本題に移る前に、子遠。今、桃香のこと何て呼んだ？  
何だろう。」

上司殿のお顔がいつにもまして、怖い。

「あ、えっと」

後ずさりしたところに、上司殿に肩をがしりと掴まれる。

「ちよっとお話しましょう」

「あ、あの桂花ちゃん。私は、その」

「桃香はちよっと黙っていて。大丈夫、すぐ済むから」

「あ、うん」

この後、上司殿のご機嫌が回復されるまでに先日と同様小一時間かかることになった。

これもいつも通りのやりとえばやり取りなのだが……。すごくやるせないのも確かではある。

## 第十一回 曹孟徳、視野を広げる

魏の武帝——、曹操孟徳といえ、三国鼎立期随一の實力者にして空前絶後の大天才として今も世人に良く知られている。

天に愛された、とでも言うべき彼女の才覚はまこと万事にわたって発揮され、政の運営から軍隊の指揮、はたまた房中の術や酒造などといった俗物的なものにまで、他者の追隨を許さぬ業績を残していた。

何かと世の中を色眼鏡で見える筆者であるが、彼女のことは高く評価している。”美男子を大勢飼って侍らせる”という文化を今の世に伝えてくれたからだ。

現実の男性になんぞ興味はないが、少なくとも創作のネタを提供してくれたことは本当にありがたい。

”美男子はあれむ”……。ああ、何と甘美な響きだろうか。紙、活版印刷に続く世界に誇る我が国の大発明とするならば、三つ目には”美男子はあれむ”を数えるべきだと大真面目に思う。

しかも、彼女は史料に曰く「女色に耽り、美男子とは決して交ぐわなかつた」そうだから、恐らく美男子同士の交ぐわいを見て楽しむだけにとどめたに違いあるまい。

慧眼だ。わかつている。気が合いそう。美男子同士の交ぐわいなら、ご飯三杯は余裕でいけるだろう。

そんな曹操孟徳であるが、実は学術的な意義において「同時代人で初めて劉備玄徳という人物の業績を史料として詳細に記した」可能性があることは意外に知られていない。

彼女が残した膨大な史料群は南京の大書庫に所蔵されており、今は『孟徳日記』などと銘打たれて平民でも閲覧料さえ支払えば読むことが可能である。

『孟徳日記』は平たく言えば、当時の覚え書きをまとめたものだ、前巻には彼女が生涯を通じて流浪の大賢者、摩佐史”なる異民族と交わした手紙の写しが、後巻には日々書き留めた私的な所感がつらつらと収められている。

全編にわたって意味の分からぬ単語、正史を覆す記述が随所にあつ



て、「歴史に残る大天才が、このように意味の分からぬ事を考えているはずがない。これは間違いなく偽書である」などと疑われた時代もあったらしい……。いや、今でも頭の固い御用学者は偽書と疑って聞かないのだが。本当に、頭の固い馬鹿と現実の男どもは死ねばいいと思います。

さて、これより先はそんな曰く付きの『孟徳日記』を読み解くことで、他者から見た劉備玄德とその仲間たちに焦点を当ててみようと思う。

劉備玄德という英傑が何故、何処ぞの王になれるほどの器を持ちながら、立身出世の機会を幾たびも得ながら、群雄割拠の争いから先んじて身を退いてしまったのか――。

正史を読むだけでは見えてこない側面が、『孟徳日記』には記されているのだ。



光和七年、九月の朔日ついたち。天高く晴れ渡る。

この日、心地よいまどろみの中にあつた私の意識を、小鳥の鳴き声  
が呼び覚ましたのは朝日が昇って間もない頃であつた。

寝所に敷き詰めた羽毛張りの寝台から上体を起こすと、すぐ傍より  
「ん」と可愛らしい声が聞こえてくる。

寵愛を与えている腹心――、秋蘭の寝ぼけ声だ。

微笑ましげに彼女を見下ろす。

先日大いに乱れた痕跡が今も色濃く残されている寝台の上で、彼女  
はすうと幸せそうな寝息を立てながら寝返りを打っていた。

肌けた胸元がちらりと覗いて、ふと悪戯心が内にもたげたが、彼女  
の目の下に見える隈のことを思い出し、伸びかけた手を引き込める。

今は、そつとしておこう。

彼女には心身共に充実した状態で自分に尽くしてもらいたい。  
才有る者を無用に使い潰すなど、才無き愚者の所行であつた。

「華琳姉え、いるツスカー?」

「……華倫?」

身支度をしている中で、寝所の外から聞こえてきた見知った声に、

私は思わず目を丸くした。

その声が、陳留にて留守居を命じていたはずの従妹、曹子孝のものであったからだ。

「入って、構わないわよ」

自身の金髪を櫛で漉きながらそう答えると、「お邪魔するツス」と華倫が天幕の入り口をめぐり上げ、その私によく似た顔を覗かせてきた。

風に揺れる麦穂の如き、一つに結わえたきらびやかな金髪を揺らし、華倫は入ってくるや否や私と秋蘭の寝姿を交互に見る。

「あ、昨日は秋姉えとお楽しみツスか。春姉えは一緒じゃなかったんすか？」

「珍しくあの娘が身を退いたのよ。疲れているようだから、この娘を癒してくれってね」

「え、あのがつがつした春姉えが!？」

私の答えに、華倫は鈍器で頭を叩かれたような顔をして、言葉を失った。

その様子に、くすりと笑う。”がつがつした”とは大した発言だ。

私は彼女らの間に垣間見える関係性を面白がりながらも、脅しつけることにした。

「今の言葉、春蘭に伝えておきましょう」

「か、勘弁してくださいッス……。あ、そうだ。髪を結わえるの、あたしがお手伝いするツスよ」

怯える子ウサギのようにしおらしくなった彼女の反応をひとしきり楽しんだ後、私は彼女に身支度を手伝わせた。

「それで、陳留にいたはずのアナタが何故冀州くんだりまでやってきたのかしら」

「あ、それなんすけど」

華倫は私の髪を結う飾りひもを摘みながら、思い出したかのように声を漏らした。

そして懐から取り出したのは、形も大きさもバラバラな十数枚にわたった紙の束。恐らくは手紙だろうが、体裁というものが全くわかつ

ていない。

しかし、だからこそ私にはこの不格好な手紙の送り主を、即座に判別することができた。

「もしかして——」

「はいッス。まさしつちからお手紙ッス。多分、すぐに華琳姉えも読みたいだろうッスから、届けにきたんスよ」

「頂戴」

口早にそう返し、華倫の手から手紙を奪う。

今はこの大陸から去ってしまっているであろう知人から送られてきたその手紙は、植物の汁やら土汚れやらにまみれてしまっていたが、確かに彼の筆跡を手紙の中に残していた。

私は貪るようにして、それを読み取っていく。

「何て書かれてるんスカ？ まさしつちの文は大陸言葉じゃないから、あたし読めないんスよ」

「そうね、この文章は私でないと解読できないでしょう。私ですらようやく文意がある程度解せるようになったばかりなのだから」

心持ち鼻を高くしながら華倫を見ると、彼女はお預けを食らった犬になっていた。

彼女はこうして私の保護欲をくすぐる顔をすることがある。

この顔をされれば、従姉である私は弱い。

「直訳でいいなら、この場で朗読しましょうか」

「お願いするッスー」

コホンと息を整えて、私は知人の手紙を読み始めた。

「拜啓曹操様。私は内政ちーとと軍事ちーとに飽きたので、新たなちーとをすることにしました」

「えつと、”ちーと”っていうのは確か大陸言葉では”挑戦”を意味する言葉だったッスカ？」

「正確には”前人未踏の挑戦”よ。今まで誰も成し遂げなかったことを成し遂げることを指すらしいわ。直接意味を聞いたことはないけれど」

「ああ、あの厠爆発とか……。つて、成し遂げたものなんてほとんどな

いじやないツスカあ！」

と華倫がたまらず吹き出す。

そもそも彼との付き合いは華倫の方が長い。いつだったかに、「か、何進様の部曲に、ウンコばつか研究してる何かすっごい変人がいるツス！」と私のところへ駆け込んできたときのことを、私は今でも鮮明に思い出すことができる。

彼女の知らせを聞いた当初はただの気が触れた人物かと呆れたものだが、実際に見てみると……、やはり評価は変わらなかった。

異民族——、まさしは間違いなく変人である。狂人や変態の亜種と言い換えてもいい。

ただ、彼の思考には本来の狂人や変態にはありえない理屈が見え隠れしていた。支離滅裂ではない……、整然とした理屈である。

私は即座に、まさしという人物に興味を持った。

この曹孟徳は、大陸において有数の知患者と自負している。理のない戯れ言ならば取り合わないが、理の通った行動、言葉ならば話は別だ。

私に理解のできない事象などあつてはならないのだから。

ゆえに、私は彼に接触した。

出会ったばかりの彼はひどく非友好的で、胡散臭そうに「すごい金髪ツインテドリルだ」などと良く分からぬことを言つては腹の内を明かすことがなかったのだが、根気強く交流を続ける内にその態度も徐々に雪解けの相を見せてくれた。

”めいど服”などの前衛的な衣装が、都を中心に流行り始めたのも私が彼の発想を取り入れて広めたためだ。

ほのかに懐かしさを覚えながら、更に読み進める。

「私は、根気の問題で外交ちーとをできません。私は、資源ちーとを選びました。だから、おおすと……、らりあ？　へ向かいました」

「おおすと何たらって何処のことツスカ？」

「それは……、分からないわ。あの男は私たちにない知識を前提に話す節があるから。恐らくは故郷の近隣にある地名なのではないかしら」

そう言つて、南向けに取り付けられた窓の向こう側へと目をやる。既に三年以上は顔を見ていないから、相当遠方にあるのだろう。その”おおすとらりあ”とやらは。

「私は、ち―とで稼いだお金を使って人を雇いました」

「あれ？ まさしつちつて華琳姉えからの借金まみれじゃなかったツスか？」

「都合の悪いことはすぐに忘れるのよ。あの男は」

嘆息し、さらに読む。

「そして、私は王になりました。しかし、おおすとらりあには人がほぼ居ません。これは国ですか？ いいえ、村です」

「王様!? まさしつちすげえツス！」

「いや、自称でしょう。化外の地ならば、何とでも言えるわ」

苦笑いしつつも、私の中にはあまり面白くない連想が湧き出てきた。視野が広がったと言うべきか。だが、今は捨ておくこととする。

「村ではち―とができません。いえ、時間をかければできるのかもしれませんが、私は根気の問題でそれができません。ここには山のように大きな鳥や、龍が住んでいます。とりあえず高い岩山に村を立てようとしたら龍が住んでおり、討ち取ろうとした華雄さんが丸呑みにされました。ごっど、べいどお？ な頼れる医者か龍を光になれ？ して何とか無事に済みましたが、華雄さんはべとべとで涙目でした」

「相変わらず、まさしつちは何言ってるかわかんないスね」

「こんな文章にもあの男なりの理が潜んでいるのよ」

「で、結局まさしつちは何で手紙でしたんすか？」

首を傾げる華倫に対し、私は手紙の最後の一枚をひらりと見せた。

「助けてくだち」

「いや、無理でしょ」

普段の口調が崩れるほどの真顔で華倫が切つて捨てる。

確かに片道で何年かかるか分からない道のりを救援に赴くのは到底無理な話であった。

しかしながら、と私は返す。

「この手紙は一体誰がもたらしたの？」

「あー、頭に獣耳を生やしたやたら可愛らしい女の子ツスね。何でも『大王様から案内に付けられたニヤ』とか。今は栄華の玩具になっているツス」

しばし考える。

恐らくその少女とやらは現地で交流を深めた豪族の家臣であろう。

何故子飼いの者を遣さずに、外様の与力を使者として送り出したのか――。

私は口元が緩んでいくのを抑え切れなかった。

「……これは『化外と交流すべし』という彼からの提案よ」

「へ？」

「彼は別に救援を求めているわけではないの。彼の救援を名目に使者を送ることで、化外の勢力と友好関係を結び、この国の守りを固めよと言っているのよ」

自分の中で、かちりと推理がはまっていく感覚が私はたまらなく好きであった。

あの男のもたらす知識は発想は、いつも私の視野を広げてくれる。

現在、漢王朝の失政によって乱れに乱れたこの国では、やがて群雄割拠の戦火が燃え広がっていくことであろう。

私はその機に乗じて、覇を唱える腹積もりである。だが――。

戦乱が続けば、どうしても国内が荒廃する。弱体化してしまう。

そのような時期に、一体何がこの国にとって一番の脅威となるのか――？ 外患である。

古来より、この国は北方の外患に悩まされてきた。

今まではこの国の持つ地力の高さから、何とか外患の侵略を跳ね除けてきたが、それも今後はどうなるか分からない。

もしかすると、蛮族による征服王朝などというものが、内乱の隙を衝いて打ち立てられてしまうかもしれないのだ。

それでは例え国内をまとめて成り上れたとしても本末転倒になってしまうではないか。

備える必要があつた。

「華倫。陳留に帰つたら、南方の使者に優秀な使者を十人をつけて返しなさい」

「優秀な使者ツスカ？」

「ええ。健脚で、養う家族がない者が望ましい。地図を書ける者、日記を付けられる者、夷語に対して理解の深い者、武術に長けた者、兵の統率に慣れた者を二人ずつ選び出すの」

「……大盤振る舞いツスね」

私の指示に、華倫は何処か釈然としない表情を見せていたものの、すぐに了解と領いた。

政治的な判断については自分が口を挟む余地はないとでも考えたのかも知れない。私は彼女の潔さに、少しばかりの寂しさを覚えた。

「よおし、姉えの髪の毛、整え終えたツス」

「ありがとう。それじゃあ、大天幕へと向かいますでしょうか」

「秋姉えは？」

「今しばらくは寝かせてあげましょう」

言つて、私は寢所を出る。

空の高い、気持ちの良い朝であつた。

本来ならば、黄巾賊の討伐がこの後に控えていたはずであつたから、このように静かな朝は迎えられなかつたに違いあるまい。

反乱の芽を外交的な決着によつて未然に防いってしまった劉備、そして我が方に利益をもたらしてくれた秋蘭の交渉術にはひとまずの賛辞を送つておく。

寢所から大天幕へと向かう途中で、私たちはとある男に呼び止められた。

「——か、孟徳」

「あら、アナタは……」

彼は曹家に身を寄せる客将の一人であつた。

伸ばし放題の銀髪を一つに縛り、漆黒の衣装を身にまとひ、凡百に紛れてもすぐにそれと分かる端正な顔立ちをしている。

「どうしたのかしら、きょうや狂夜」

「……俺は劍牙だ」

凡百に紛れてもすぐにそれと分かるのだが、“彼ら”は厄介なことに似たような顔つきをした者が無数に居るので困る。

「あつ。劍牙っち。おはよッス」

「お、おう」

炎牙の表情があからさまに不機嫌なものへと変わっていったので、私はコホンと咳払いをする。

「それで、どうしたのかしら。劍牙」

「いや、何。アンタに忠告に来たのさ」

と言って、彼は天幕壁の骨に背を持たれかけ、腕を組んでは語り始める。

「何でも、劉備と協定を結ぶそうだな？」

「正確には劉備と公孫サンとの協定ね。一両日中には今後についての会合を開くつもりよ」

私の言葉を受け、劍牙はこれ見よがしに大きなため息をついた。

「……何か不満でも？」

「孟徳、アンタ喰われるぜ？」

彼は皮肉げに肩をすくめ、更に続ける。

「劉備は危険だ。奴の台頭を許せばアンタは苦勞することになるだろう。話し合う必要なんざなく、とつと潰すべきだと進言する」

「随分と劉備を買っているのね？」

「俺が、奴を買っている？」

私の答えに、劍牙は冷笑を浮かべる。

「単に王としての器を図るなら、アンタと奴じゃ比べ物にならん。脳内はお花畑で、人を炊きつけるだけしか取り得がねえ、まるで宗教の教祖みてえな奴だ。ただ……、奴は戦乱を煽っている癖に人を殺し、殺される”覚悟”ってもんを持つてねえ。そんな覚悟もねえ奴が俺たちと同じ舞台上が上がってくるのは腹が立つんだよ」

「知り合いなのかしら」

私が問うと、劍牙はニイと口の端を持ち上げてこちらを見た。

「……いいや、俺が知っているだけさ。アンタだって少し調べてみ



りや、分かると思うぜ。例えば、オトモダチの公孫サンだが……、奴は友人であることを利用して公孫サンの領民を私兵に仕立て上げているはずだ。義勇兵として、な」

「フム」

先だつて秋蘭から提案されて、取り寄せた情報を内心で反芻する。

劉備玄德、幽州啄郡生まれで先の県令の娘。

盧植子幹のもとで学び、公孫サン伯珪と友誼を得る。

その後、現県令との諍いから街を離れて義勇軍を結成までは、各地を転々としていたために足跡をたどることができなかつたが、少なくとも公孫サンとの接触はなかつたはずだ。

彼の勘違いだろうか？

……いや、彼の顔には自信というものが満ち溢れていた。ここで彼の言を「証拠がない」と切つて捨ててしまうのも大人気ないだろう。

それに、覚悟のない者が戦乱を煽ることを快しとしない考えに関しては、私にも頷くべきところがあった。

戦場とは、勇者と勇者。知患者と知患者がぶつかり合う場であるべきなのだ。

だから、もし劉備という人物が誰かの後ろで戦いを煽るだけの人間であつたのならば、彼女の評価をそれなりに下げる必要があるだろう。

「分かつたわ。アナタの言葉、参考にさせてもらいましょう」

「フン、分かれば良い。……それとだな」

「何かしら？」

とここで、剣牙は言いにくそうに言葉を詰まらせた。

「俺に真名はない。剣牙という名が唯一の名前なわけだ」

「ええ、知っているわ」

私は彼に微笑み返す。

彼の言わんとすることは分かっていた。ただ、それを受け入れられない理由が私には存在したというだけだ。

「そうか……」

少し落ち込む剣牙に対し、華倫が明るい声で慰めた。

「あたしのごときは真名で呼んでいッスよ。剣牙っち」

「……」 おりきやら」は優しいなあ」

「あはは、その呼び方流行ってるッスねー」

「このやりとりこそが、私が”彼ら”に真名を預けない理由でもあった。

何だかんだと言っても、私は従妹が可愛くて仕方ないのだ。

少なくとも、彼女のことをまともに呼ぶようになるまでは、私は”彼ら”に真名を預けることはないだろう。

「それよりも今日の料理当番、剣牙っちッスよ」

「ああ、分かっている。料理は得意分野だからな。任せておけ……」

言って、私たちはその場で別れた。

彼は炊事場へ、私たちは大天幕へと歩みを進める。

そうして大天幕が林立する天幕の先に見えたところで、またぞろ男に呼び止められた。

「——か、孟徳」

「あら、アナタは……」

彼もまた、曹家に身を寄せる客将の一人であった。

伸ばし放題の銀髪を一つに縛り、漆黒の衣装を身にまとい、凡百に紛れてもすぐにそれと分かる端正な顔立ちをしている。

……全身黒ずくめというのは彼らの民族衣装か何かなのだろうか？

いずれにせよ、次こそ間違えようがないだろう。

「どうしたのかしら、狂夜」

「……俺は剣牙だ」

「ちよつと待って。剣牙とは先ほど会ったでしょう」

慌ててそう返すと、彼の機嫌が急速に悪化していった。

「そいつは俺じゃない。別の剣牙だ」

言われてはたと思ひ出す。我が陣営には剣牙なる人物が二人所属していることを。

気まずい空気が流れる中、事態を打破したのはやはり従妹である華倫であった。

「あはは、姉えも忘れっぽいツスね！ 剣牙っちは髪の毛が外に跳ねていて、つつちーは内に跳ねているんスよ」

おはよツスとそのまま華倫が声をかけると、剣牙（その2）はほろろと涙を流し、

「……」 おりきやら」は優しいなあ」

「おりきやら」って言うなツス。あたしは華倫ツスよー」

とお決まりになっているらしきやりとりを交わしていた。

この従妹には誰とでも仲良くなれる才能があるのかもしれない。

少し微笑み、彼に謝る。

「ごめんなさいね、剣牙（その2）。それで一体何の用かしら？」

「いや、何。アンタに忠告に来たのさ」

と言つて、彼は天幕壁の骨に背を持たれかけ、腕を組んでは語り始める。

「いや、ちよつと待つて。もしかして、劉備のことかしら？」

「……分かっているなら、話が早いな。アンタ——」

「喰われるとでも言いたいのか？」

私が先んじてそう言うのと、剣牙（その2）は驚きのあまり硬直してしまった。

「え、何故……？」

そのうろたえようを見て、私は心持ち肩を落とす。

どうやら劉備のことを嫌っているのは一人ではないらしい。

「先ほどの剣牙も全く同じ忠告をしていたのよ。だから言わんとしていることは分かる。話はそれだけ？」

「あ、えつと。脳みそお花畑は……」

「それは聞いた」

うぐ、とのけぞり彼は続ける。

「じゃあ、人を殺す覚悟については……」

「アナタも同意見だということには気に留めておきましょう」

出した忠告のことごとくが先ほどの忠告とかぶっていたため、直に剣牙（その2）は頭を抱え込んでしまった。

「くっそ、あの野郎……。他の忠告なんて思い浮かばねえぞ……」

「話がそれだけなら、私は大天幕に向かいたいのだけれども」

「ま、待った！」

歩みを進めようとしたその瞬間、何か思いついたように彼は笑みを浮かべて私を呼び止めた。

「話を聞きましょう」

「劉備は……、どんな人間だって話せば分かると思っっている節がある」  
「性善説、ということかしら？」

盧植という知恵者のもとで勉強に励んだ以上、儒学についてもそれなりに修めているはずであるから、孟子と荀子の教えを知っていると自体不思議ではない。

彼は頷き、さらに続けた。

「そうだ。敵だって話し合えば分かり合えるというのが、奴の信条だよ」

「それは少し、樂觀が過ぎるわね……」

敵というものは常にこちらを出し抜こうとしている存在であると警戒しておかなければ、足元をすくわれかねない。

もし劉備が敵とも分かり合いたいという甘い考えを持っているのなら、少し評価を下げる必要があるだろう。協定を結ぶ相手として、こちらの足を引っ張る可能性があるからだ。

私の感触がよかつたためか、彼は途端に饒舌になった。

「そうだ、樂觀的なんだよ。奴は。くだらない考え方だと思わないか？ この世界は理不尽がはびこるつまらない世界なんだ。それを――」

「――剣牙（その2）」

私の声を聞き、彼はびくりと身体を震わせた。

あるいは、私の覇気に当てられたのかもしれない。

「一つ忠告をしておきましょう」

「な、何だ？」

動揺している彼に対し、私は滔々と語りかける。

「この曹孟徳は天に愛された人間よ。天は私を愛している。つまり天は私のためにあるといつても過言ではない……」

だから、と私は胸元に手を置き続けた。

「この世界にあるものすべては私のためにあるものなのよ。それを”つまらない”などという資格はアナタにはない。私が”主役”で、アナタは”脇役”。アナタは、私のためにその武才を尽くしてくれればいいのよ」

「全部、お前の……？」

剣牙（その2）は理解しがたいといった表情を浮かべていた。

その理由は分からないでもない。何故なら、ある一面において”彼ら”と私はよく似ていたからである。

それはこの世界に対する接し方——。傲岸不遜ともいうべき自己愛である。

自己愛を持つ者同士が互いに向かい合った時、その力関係が対等であつた場合は争いが起きることだろう。

だが、彼と私は対等ではなかった。

故に、こうして懐に置いて”飼っている”。

そのことに気付き、分を弁えればよし。弁えなければ——。

私の思考が剣呑な方向へと転じる前に、華倫が仲裁を買って出た。

「まあまあ、つつちー。話は分かったツスから、そろそろ炊事場に向かった方が良いツスよ。剣牙つつちが腕をふるっているはずツスから、このままだと負けちゃうかもツス」

「アツ」

思い出したかのように彼は声を上げると、

「すまん、孟徳。この話はまた今度で……」

「ええ、いつてらつしやい」

脱兎の如く、この場を去る彼の後ろ姿を見て、華倫はほっと安堵の息を吐いた。

「……華琳姉え、あれは言い過ぎツス」

「そう？ 私は本心を語っただけなのだけども」

「つつちーだって必死なんスよ。あたしたちの勢力で名を挙げるのに」

「華倫は本当に優しいわね」

私がそう褒めると、華倫はぼつが悪そうに顔をそむけた。

「ほつとけないだけツス。あの子たち、昔のあたしそつくりツスから……」

言われて成る程と合点がいく。

私という天才の従妹として生まれてしまった華倫は、幼い時分にはよく私に食ってかかったものであった。

曹孟徳ではなく曹子孝を、自分をもつと見てほしい。私はここに存在しているのだ……、と。

悲痛なまでの心の叫びが感じ取れたため、昔日の私は華倫という存在を扱いかねていた。

彼女の態度が軟化したのは一体何時の頃であっただろうか。

彼女の心にどのような変化があったのかは知る由もないが、今こうして彼女と向き合えることを私はとても嬉しく思う。

「それにしても、劉備という人間は随分と憎まれているのね」

「つつちーたちの知り合いの仇とかなんスかね？」

華倫に言われて考えてみる。

彼らのいう劉備は敵を敵とも思わず、誰とでも分かりあえるといった平和的な思考をしているはずであった。

そんな彼女から直接的な被害を受けたというのは考えにくい。

彼女の扇動によって暴走した民草から被害を受けたという線はどうだろうか？

……いや、取り寄せた情報を鑑みるに彼女が乱世の表舞台に影響力を及ぼすようになったのは、ごくごく最近のことである。

考えれば考えるほどに、彼らが劉備を憎む原因が良く分からなくなっていた。

「ありえるとするれば……、先祖の代の怨恨かしら。劉姓ということとは異民族の征伐に関わっていた可能性もあるでしょう。先祖が敵同士だったのではないかしら。あるいは、口から出まかせを言っているか……」

「ん、口から出まかせとは思いたくないツス。あの子たち、根はいい子たちばかりツスよ」

「それは私が選んだのだから当然ね」

もし、私が人を選ばなかった場合、彼らのような異民族出身の客将は今以上に幕下を占めていたことだろう。

曹家の門を叩いた者の中で、引き取らなかつた連中の顔をふと思い出す。

「どういう基準で選んだんすか？」

「自身の牙を隠しているか、それとも見せているかの一点が大きかつたわね」

ん？ と華倫が首を傾げたために説明を続ける。

「彼らのような異民族出身の連中には、自身をひたすら下げてみせようとしている者もいたのよ。これから仕えようとしている主に対し、偽りの自分を見せるなど、叛意があると言っているようなものでしょう？」

「それはまあ、確かに」

「恐らく、彼らの中には主を廃して成り上がる者も出てくるはずだわ。それが”この国の中”だけで済めば、まだ良いのだけれど……」

まさしが私にもたらししてくれた視野が、警鐘をしきりに鳴らしていた。

つまり、蛮夷の地で彼らが成り上がった場合、この国全体が危機に晒される可能性があるのだと……。

私は前を向き、大天幕へと歩みを進めた。

「華倫。手紙を二通渡すから、陳留へ帰ったら遣いを出して頂戴」

「宛先はどこッスか？」

「一通はもちろん、まさしのところよ。そしてもう一通は、涼州刺史ね」

「え、涼州ッスか？」

目を丸くする華倫に私は是と答える。

「……私の見立てが確かならば、羌族などの異民族が反乱をおこす可能性がある」

「ええっ!？」

「だから領内で怪しい動きをする者がいないか、それとなく注意を促

そうというわけ。場合によっては協力を申し出てもいいかも知れないわね」

一瞬、異民族の反乱を自身の覇道の一手とすることも考えたが、不確定要素が多すぎるためにすぐさま切り捨てた。

敵を知り、己を知れば百戦危うからずとは孫子の言葉だが、私は異民族というものに対してまだ知識を蓄えていないのだ。

警戒するに越したことはない。

「帰ったら、情報を集めなければならぬわね」

だが、その前にすべきは黄巾賊の処分である。

劉備玄德――。これほどまでに恨みを買う人物とは、一体どんな人間なのだろうか？

好奇心がむくりともたげる。

この瞬間、剣牙たちの要求を受け入れて劉備との会談を取り止める線はなくなった。

私は、何よりも自分の審美眼を信頼しているのだ。



## 第十二回 曹孟徳、玄德と出会う

光和七年、九月の二日。鱗雲流れるも、晴れ。

劉備たちとの会談の日がやってきた。

会談の予定地は冀州の広宗だ。そこは我々の駐屯地から馬を走らせて一刻もしない近隣に位置していたため、私は太陽が南中してから悠々と現地へと出立することにした。

愛用している黒馬に跨り、選りすぐった供回りと共に冀州の平野部を駆けていく。

緩やかに流れていく景色を馬上から眺めていると、轡を並べていた秋蘭が空を見上げて口を開いた。

「……この調子なら、予定時間の半刻前には目的地にたどり着くはずですよ」

「そう、丁度良い塩梅ね。あまりに遅ければ愚鈍と思われ、あまり早く着きすぎても足元を見られるだけだから」

会談の要点は、劉備からどれだけの好条件を引き出せるかにかかっていた。

劉備と公孫サンの協定は、彼女らの関係を鑑みれば既に決定されたものと考えて良いだろう。仮に黄巾賊鎮圧の功を中央に認めさせるだけならば、公孫サンの後援だけで十二分に事が足りる。

しかし、劉備が更なる立身出世を望むならば――？

無血で騒乱を未然に防ぐような人物が、果たして”軍功によって多少の官職を得る程度”で満足するだろうか？

そんなことはありえないと、私は断言する。

劉備は盧植の私塾で学んでいたという。ならば、今の今までに彼女が官職を得る機会など、いくらでもあったはずだ。

それを、数多ある誘いを蹴り続け、今になってようやく世に名を轟かせようというのであるから、彼女の志は、野望はおよそ常人の凶れるものではあるまい。

今回の功績を以て、何らかの企てを実現させようとしていることは、容易に想像がついた。

——だからこそ、我々にも付け入る隙がある。

立身出世の足がかりとして、私の後援を得られることはまさしく千金に値するといっても過言ではない。

我々の価値を彼女らに強く印象づけさせ、なおかつ相手から協定を申し出るようにし向けさせる。

こちらから前向きな姿勢を見せることは得策でない。こちらで協定に前向きなのはあくまでも秋蘭一人であり、それ以外は中立か否定的だという姿勢を取るべきだ。

ゆえに今回の供回りには秋蘭に加えて私の方針に忠実な春蘭や華倫、そして劉備を快く思っていない剣牙たちを敢えて用意した。

……ちらりと供回りの面々へと目をやる。

秋蘭は会談においてこちら側の総責任者であるためか、先ほどからしきりに陽の傾き具合を気にしていた。

私の期待に添えるよう、万全の進行を心がけているようだ。昨日たっぷり眠れたせいも、目の隈が若干とれていることに少しほっとさせられる。

右翼と左翼に陣取っていた春蘭や華倫は武官として周囲に気を配りながらも、久しぶりになる私との遠出に何処か楽しげな表情を浮かべていた。

そして後続の剣牙たちはというと、最近彼らの間で流行っているのか、腕組みをしながら手綱を持たずに馬を走らせている。

……馬上で得物を振るうための鍛錬か何かであろうか？

いや、その内の一人などはまるで仰向けに寝そべるようにして、不遜な態度をとりつつ、ものすごく器用な体勢で馬を駆っている。恐らくは彼らの民族的な騎馬技術の一つなのだろう。北方、西域の遊牧民は、用を足し、眠ることすら馬上で済ませるといふ話であるから、彼らも遊牧を生業としていたのかもしれない。

こうして俯瞰すると、やはり秋蘭の気の張りようが心配であった。あまりに強い緊張は、思わぬ失敗を招いてしまうものだ。

ゆえに、私は秋蘭に声をかけた。

「秋蘭。会談の際に警戒すべき相手をおさらいしましょうか」

「は——」

彼女はしばし考え込み、まず第一に私も聞き知っていた人物の名を挙げた。

「恐らく、劉備勢の交渉担当としては荀文若が出てくるはずですよ」

「都で王佐の才とまで謳われた秀才ね。何進のところを辞去したとは聞いていたけれど、まさか無名である劉備の幕下に収まるとは……、劉備がそれほどの人物ということかしら？」

「おい、待った」

私の呟きを聞き咎めた剣牙（1なのか2なのか、それとも狂夜なのか、はたまたそれ以外なのかは一見しただけでは分からない）が、仰向けに寝そべり馬を駆りながら口を挟んでくる。やはり器用だ。手元に置いて飼うべきと考えた私の目は確かであった。

「何で荀イクが劉備の所にいる」

その問いかけに、秋蘭は眉根を寄せて答えた。

「華琳様の仰るように、都の職を辞したからだが」

「そうじゃなくて——、何で荀イクが劉備を選んだ」

そう返す剣牙（仮）は困惑と苛立ちが入り交じったかのような、複雑な表情を浮かべていた。

例えるならば、まるで思い通りに事が運ばなかった子供の表情とでもいうべきか。

彼の中では、荀文若が劉備に仕えるということは余程ありえないことであったのだろうか。

「もしや……、”歴史の修正力”って奴か——」

「ちげーだろ」

「馬鹿野郎、修正力なら荀イクは曹操陣営に来てるわ！」

「フン。草場の陰に隠れて、中学校からやり直せ」

いきなりの罵詈雑言が（仮）に向かって降り注ぐ。

「す、少し間違っただけなのに、そこまで言うなよ……」

まったくもっていつものやりとりである。彼らはとにかく仲が悪い。

しかも、皆が精神面において打たれ弱くもあるため、こうして他者

の悪意を受けた者は往々にして不貞腐れてしまう。

私はため息をつき、寝そべり乗りをやめてしよぼくれている(仮)に問いかけることにした。

「荀文若を知っているのかしら」

私の問いに、彼は自信なさげに顔を持ち上げ頷く。

「……一方的には、な。だが、俺の予想では孟徳、アンタに仕えるはずだったんだ」

「お前だけの予想じゃねーだろ」

「馬鹿野郎、ドヤ顔で言うな。何かいらつく」

「フン。いたずらになりけりて、現代社会でやり直せ」

再び罵詈雑言の嵐が巻き起こり、彼の心が折れかけたため、私は手を挙げて罵声を制する。そして、一言「成る程？」と呟いた。

剣牙たちはこのように、皆の前で未来予知の真似事をするところがある。正直、一割も的中すればいくらか的中率ではあるのだが、時折はつとさせられるような推論を組み立ててくるために悔れない。

面白いのは、彼ら異民族の中の一人が未来予知をすると他の連中が突然不愉快になることであつた。

単に相手のやる事なす事ごとくが気に入らないだけなのか、それともある種の競争意識でも働いているのか。

いずれにしても、足の引つ張り合いや殺し合いでもはじめぬ限り、彼らが競い合うことは私にとって歓迎すべきことであつた。

競争の果てに、彼らの才を錬磨してくればいいのだ。錬磨された彼らの才は、すなわち私の力になる。

そして競争意識が己の糧となることは、秋蘭たちにとつても同じ事であつた。

「……文若が何を思つて劉備に仕えることになつたかなど、当人でない限り分かるわけがないだろう。ただ、劉備にはそれがし——、呉子遠も仕えているからな。都では上司部下の関係であつた彼女らのことだ。先んじて幕下に収まった呉子遠を通じて劉備のところ身を寄せた可能性はあるかもしれない」

「呉……？ 知らん名だ。誰だそいつは」

彼らの疑問には、右翼で耳を傾けていた春蘭が声を張る。

「それがしはそれがしだな！ 見れば分かる通りの変な奴だぞ。いつも『あいええ』と死にそうな顔をして仕事をしていて、仕事をしていない時は何かしら妙なことを考えている。こっそり見てみれば、大抵一人で笑ったり『ふあつ』とか『ひえつ』とか奇声を上げては怯えたりしている、まあとても面白い奴だ」

「あれ、もしかして、その鳴き声……。 ”じむかすたむ” さんツスカ？」

聞き知った名前であったのか、左翼の華倫も馬首を寄せてきた。

「何だ、華倫も知っていたのか」

「まさしつちの知り合いツスよね。会ったことはないツスけど、栄華の天敵って聞いているツス」

「待って。何故、そこで栄華の名前が出てくるのかしら？」

思わぬ名が挙がったため、私は解せないといった風に問いかけた。

曹子廉こと栄華は私の従妹だ。物心着いた頃から私の部曲として仕えていたため、他勢力の官人とあまり接点がないはずなのだが……。

「何進様のところと一緒に仕事した時に酷い目にあつたらしいツス」

「酷い目、ですって？」

仕事を押しつけられたといった類の話であろうか。

栄華も華倫と同様、私にとっては可愛い従妹だ。彼女に迷惑をかけたというのなら、それなりの態度で接するべきだろう。

ぼろりと言葉を漏らした華倫であったが、私の表情から何かを察したのか、慌てて手を振りながら補足してきた。

「逆恨みみたいなものよ。直接被害を受けたとかそういうんじゃないツス」

「……もしかして、 ”毒入り走狗事件” か？」

「知っているの、秋蘭？」

秋蘭は先ほどまで張りつめていた気を緩め、苦笑いを浮かべては私に言った。

「いえ、大したことではないのです。単に働かせすぎの人間と、働きます

ぎの人間がいたために発生したいざこざというべきか——」

そういつて語られた内容は、この私を呆れさせるに十分すぎるものであった。

曰く、呉子遠という男はおよそ有能とは思えぬみてくれをしていながら、武官としても文官としてもそれなり以上に働ける能力を有しており、どんな仕事でも与えればそれなりにこなしてみせることから、現場では便利屋としてそれなりに重宝されていたらしい。

しかし、そのままただの便利屋として扱われているだけならば良かったのだが、別の職場への転任と、朝廷で下されたとある布告が彼の扱いを面倒なものへと変えてしまったそうだ。

「それは……、男性の宮中入り禁止令の事かしら？」

「はい」

秋蘭は頷く。

男性の宮中入り禁止令とは、昨今続いていた天変地異を『男性が政治の中枢に関わっているから起こったのだ』と判断したために下された悪法の一つであった。この布告によって、男性の立身出世は事実上ほぼ閉ざされたと言っている。例外として男としてのアレを去勢すれば宮中入りも可能なのだそうだが、あまりにもおぞましい所行のため、今のところそこまでして立身出世を望む者はいざ聞かない。

「あの法律が制定されたために、女は働かずともある程度の出世が約束されるようになりました。ただでさえ女尊の風潮がある当世に、男を小間使いとし女が成り上がる土壌ができあがったわけです」

「ふむ」

おぼろげながら話が見えてきた。

「つまり、新たな職場の上司が今までより多くの仕事を呉子遠に投げようになり、仕事が回らなくなったということなのね？」

そうして、機能不全に陥った職場と栄華が仕事を共にしたために迷惑を被ったと。成る程、この流れならば呉子遠に罪はない。敢えて言うならば、理不尽に抵抗をしなかった気概の無さを責めるべきか。

だが、秋蘭は乾いたように笑うと更に続けた。

「いえ……。上司だけでなく、同僚までもが仕事を丸投げした結果、”

それでも職場がそれなりに機能してしまっただけが問題なのです」  
「……何ですって？」

秋蘭がため息をつき、明後日の方へと目をやる。

「あいつは、潰れかけた屋台骨を支える才にかけては並外れたものを持っていて……。一時は”遊んでいるだけで出世のできる職場”が話題になったものです」

「それで、どうなったの？」

「一、二年は問題なく機能したのですが、当時の上司が昇進していなくなった後、新たに入ってきた人間が子遠を追い出しました。『自分の職場に男は必要ない』と」

私は言葉を失った。

たった一人で一つの職場を支えていた人間を切り捨ててしまえば、一体後に何が残るのか。

「当然ながら、仕事の要領を知っている者がいなくなった職場は崩壊しました。……栄華が仕事を共にしたのは、恐らくこの後でしょうね」

「あの時の栄華、まじおこだったツスよ。『何で男に頭を下げて仕事を教わりにいかなければならないのでしょうか？』しかも変な猫耳にやたら冷えた目で見られるし……』って。何進様との力関係から、栄華が泥をかぶらなきゃならなかったらしいツス」

栄華は占いを真に受けるほど馬鹿ではないが、それでも私の影響を多大に受けた結果、男を下げて女を持ち上げるきらいがある。

彼女の不満顔が目には浮かぶようであった。

「そういうわけで、『よく走る狗を煮たら毒入りだった』ことから”煮ても食えない走狗”なるあだ名が彼には付いたのです」

走狗とは漢の高祖に仕えた韓信を指す言葉である。韓信は用済みになった結果、首を切られてしまったが、子遠の場合はクビを切られてしまったわけだ。

私はようやく得心がいき、頷いた。

「成る程、呉子遠という人間と栄華の関係については良く分かったわ。それにしても、ずいぶんその男について詳しいのね？」

「いえ、私と姉者は以前より子遠と付き合いがありました……。彼が転任する際にも推薦状を書くなど、色々と便宜を図ったのですよ」

「自分の部下にと口説かなかったのかしら?」

話を聞く限りにおいて、呉子遠という人物は相当に有能だと思われる。それならば手元に置いて損はないはずなのだが……。

秋蘭は心なしか肩を落とす、言いくくそうにして答えた。

「当時のうちは女所帯だったので、その……」

つまるところ、周囲に見目麗しい女ばかりを侍らせていた、当時の私に配慮したわけであった。

私は嘆息し、言う。

「そういったことは、相談してくれても良かったのよ?」

「それはその……、申し訳ありません」

頭を下げる秋蘭を宥めつつ、この件については彼女に咎はないなど自身の形振りを省みる。

確かに数年前……、まさしと出会う前の自分は朝廷の出した法律ほど極端な思想を抱いていたわけではなかったが、それでも男性に対してある程度蔑んだ感情を持っていたことは否めなかった。

まさしという強烈な個性が、私の視野を広めてくれたのだ。男性にも取り上げるべき人物はいるのだと。

ならば、彼女を責めるのは筋が違う。責めるべきは未熟であった、自身の考えである。

まあ、呉子遠という人物が本当に得難い才を持っているというのなら、一度口説いてみてもいいだろう。何でもそれなりにこなすそうだから、戦働き以外にムラっ気のある春蘭の副官に添えてみるのも面白そうだ。

「ともかく、劉備陣営に二人の侮れない人物がいることは理解できたわ。他に気になる者はいる?」

「私が見た限り、彼女の陣営にはあの趙子龍がいたように思われますが……、あの者は今、公孫サンの将であったはずですよ。単なる寄騎であった可能性もあります」

「へえ、子龍が」



子龍は一時期、私の幕下に身を寄せていたことがある。卓越した武才を持つ逸材であったが、生憎「どうにも私はこの空気に馴染めませぬ」との言葉を残し、辞去してより音沙汰がなかった。

彼女は一所に長くいる性分ではないから、公孫サンのところから劉備のところへと主を変えた可能性は十分にある。

そんなことを考えていると、春蘭が声を張り上げた。

「華琳様、目的地が見えて参りました！」

私はその声に思考を止め、顔を上げ、目的地へと目をやる。

——そして困惑した。

目の前にはやけに整備の整った道が続いており、その先には会談の予定地である天竺由来の仏教寺院が建っている。

何の変哲もない、小綺麗な廃寺だ。

そう……、目の前の廃寺はあまりにも小綺麗に過ぎた。

「……どういふことかしら？」

広宗が会談の予定地選ばれたのは黄巾賊の根城の一つであったからだ。当然、事前の情報ではあの仏教寺院も賊の略奪に遭い、散々に荒廃していたはずであった。

だというのに、寺院は比較的まともな瓦が屋根に敷き詰められており、土壁も真新しいものに塗り替えられている。

劉備が我々との会談のためにわざわざ整備したのであろうか……？

その疑問は寺院へと近づくにつれ、やがて氷解することになる。

周辺の僧坊を片づけている兵たちの姿がちらほらと見えるようになり、山門には達筆で作られた垂れ幕がかかっていた。

「何スか、これ？」 おいでませ、討夷將軍ご一行様……？」

私の思考は一瞬真っ白に塗りつぶされ、すぐに色を失って秋蘭に問いかけた。

「……この後、中央討伐軍は広宗に布陣する予定があるの？」

「い、いえ。そもそも官軍を編成する必要はなくなりましたから、軍が差配される予定はなかったはずですよ」

秋蘭も困惑を隠せないという顔をしている。私はしばし考え込み、

齒噛みして質問を変えた。

「……討夷將軍には宰相の盧植が任じられていたわね？」

「は、はい」

「その任はもう解かれたの？」

秋蘭が「あつ」と声を挙げる。

盧植という人物が不正や鼻屑を嫌うことは都に広く知れ渡っていたため、すっかり念頭になかったが、そもそも今回の騒動で動きを見せた劉備も公孫サンも、盧植の門下生であるという共通点を持っていた。

いくら清廉潔白な人となりをしていても、誰だって弟子は可愛いと考えよう。その弟子たちが活躍したとあらば、功を労いに將軍自らがこの地に駆けつけてもおかしくはない。そして彼女は騒乱を鎮圧するために任命された將軍なのだから、現地入りして実情を調査するという格好の名分を確かに持っているのだ。

……ただ、中央の將軍が自主的に動くには迅速が過ぎる節があった。

官というものは本来的に腰が重いものなのだ。それは比較的柔軟な軍政の分野においても変わらない。

となれば何者かが盧植を呼び寄せたということだろう。何らかの政治的意図をもって。

「……文若の仕業かしら？」

一つ、計算が狂うことになった。

会談の場に官軍の、それも明らかな劉備派閥が出席することになるのならば、こちらの立ち回り方も変わってこよう。

後手に次ぐ後手に、私は嘆息を禁じ得なかった。

……黄巾賊の騒乱という立身出世の足がかりが、恐るべき速度で鎮圧されて、さらには何者かの道具にされようとしている。

私が出遅れたのは、情報が不足していたためか？

それとも、身分・環境の差か……？ いや、慢心していたのかもされない。この私を先んじるものが現れるはずがない、と。

いずれにせよ、この曹孟徳を出し抜いた人物が並外れた才覚を持つ

ていることだけは、間違いがないであろう。

手元に置いて、飼っておきたいという欲求が生まれる。

「気を引き締めなくてはね」

馬より下りて、現在修繕真っ最中の僧坊と道を見回しながら、歩くことにした。

「あつ。そこ、まつすぐで。いつせーの、せつ！」

修繕を行っていた兵たちの装備は、上等なものから粗末なものまでばらつきが見られる。

恐らくは義勇兵。だが、彼らの規律の整い方からは何処となく官軍の風が感じられた。

「劉備の兵では……、ありませんね」

解せないといったように秋蘭が呟いた。

「分かるの？」

「ええ、劉備の兵はもつと奔放で野卑ているというか……、有り体に言えば柄が悪いのです」

「へえ」

となれば、あの兵たちは公孫の兵となるのだろうか。東夷北狄を相手に馬を駆るだけの女というわけではないらしい。

「よおーし、紳々さん。竜々さん、良い仕事ですよ！」

「兄ちゃん止せやい、照れるやないか」

「……おいらはボイラーって言ってみてくれませんか？」

「そらまた何で？」

「いえ、何でも。もう少ししたらいったん休憩しましょう！」

私は「へえ」と息を漏らした。

先ほどから彼らは中々に手際の良い仕事をこなしている。

まるで大工か何かのようだ。兵というよりは、兵の格好をした職人集団とでもいった方がしっくり来る。

そして、集団の統率をしている青年は、職人の棟梁さながらに堂の入った指揮を見せていた。

あれは、隊伍に分けた兵卒に細やかな作業を分担させているのだろうか。修繕の現場には既に組み立てられた建材が横になっており、ま

るで流れるような早さで僧坊が往事の形を取り戻さんとしていた。「ん？」

と、ここで青年が見物している我々の存在に気がついた。

「あー。もしかして、曹操さんたちでしょうか」

「ええ。精が出るようね」

早足でこちらに駆け寄ってくる青年に対し、私は微笑みかける。

中肉中背。端正とはいえないまでも、そこまで悪い顔ではない。印象に残ったのは、その瞳であった。この世の善性を心の底から信じていると言わんばかりの、輝きを放っている。

「ええと。ようこそ、いらっしやいました」

青年は私たちを見回し、納得したように頷いた後、深々と頭を下げた。

恐らくは相当な名家の出なのだろう。作法は完璧といえなかったが、それでも彼の所作のひとつひとつから、身に纏う粗末な装備では隠しきれないほどの品の良さが滲みだしていた。

「アナタたちは、公孫伯桂の兵かしら？ 随分と準備が良いのね」

私の問いに、彼は頬をポリポリと掻いて苦笑いを浮かべる。

「ああ、いや。もし寺院の整備のことを言っているらしたら、これは俺たちの勝手にやっつてることなんです」

「……何ですって？」

青年はまるで悪戯が見つかった子供のようにそっぽを向き、

「仲間の朱里と雛里が都の伝手を使ってくれました、都の將軍様に知らせてくれたんです。だって、討伐軍ができあがる前に劉備さんが動き出してしまいましたから、負けるわけには行かないなあと思って。上手く行けば中央の將軍様にも目をかけてもらえますし、何というか……、懐で草履を暖める的な？」

私は目を丸くした。

彼がただの兵ではない、抜け目なく立身出世を志す一人である以前に、到底聞き逃せるものではない一言を漏らしたからだ。

——”懐で草履を暖める”と彼は今言った。

私は恐る恐る問いかける。

「一つ、質問良いかしら？」

「ええ、なんなりと」

私はごくりと唾を飲み込み、続ける。

「——山本勘助は存在しなかった」

「いや、それには諸説があつて……、つてこれすつごいデジヤブを感じるんだけど！」

……” でじゃぶ”！ これは紛うことなきまさし語である。目の前の青年をまじまじと見た。

さらりとしていて焦げ茶がかつた髪と同色の瞳。成る程、こちらの方がずつと上等な見てくれをしているが、私の知る彼の面影がおぼろげに見える。

同郷の者か？ いや、いずれにしても……。

「アナタもまさしを知る者なのね——」

「は、まさし——？」

「あつ、これ風評被害のパターン見えてきたよ！」

秋蘭の声から感情が失われるのと同時に、青年が頭を抱えて叫びだした。

「何を狼狽しているのか分からないけれども、私はむしろ喜んでいいのよっ。」

例えば、と私は続ける。

「先程の言葉……。古代ニッポンの宰相、ヒデヨシの故事ね？ 至弱より至強へと成り上がった英傑の一人の」

私としてはノブナガの革新的な生きざまを好むところであるが、ヒデヨシの如才無さも愛おしかった。ただし、イエヤスは駄目だ。あれからは輝きを感じない。ミカタガハラ of 戦いなどは失笑ものであった。もし仮に会うことができたのならば、左氏伝を百回読み直せと言つてやりたい。

青年は私の言葉を聞き、何故かがつくりと肩を落としていた。

「……何で、中国の英雄に日本の戦国ネタが通じてるんだらう。ほんとかこれ奇妙な感覚だ……」

「あら、英傑の話は国や時代を跨いでも評価されるものよ？ 無論、英

傑の価値を知る者でなければ、その真価は分からないのでしようけれど」

例えば身内を見回してみても、思慮深いはずの秋蘭ですら苦虫を噛み潰したような顔をするばかりで、反応が悪い。春蘭や華倫に至っては良く分からないといった顔をしている。外つ国の知識に価値を見出すには、ある水準以上の開明的な視野が求められるのだ。

意外なのは、剣牙たちであった。

「お前は……」

かつと目を見開き、穴が開きそうなくらいに青年を見つめている。その反応に、秋蘭がぞんざいな調子で言葉をかけた。

「どうした。再会を喜ばんのか？ ニッポン出身の、お前たちの仲間だろう」

「え、ニッポン!?!」

青年が飛び上がった。

「髪や目の色で分からなかったけど……、皆さんも日本人なんですか?」

わつと剣牙たちに青年は駆け寄り、嬉しさがにじみ出した様子で一人一人の手を取ろうとする。先程心が折れかけていた一人は、彼の勢いに負けて「お、おう」と目を背けながらも手を預けた。だが、続く二人目は――。

「触んな、ハーレム野郎」

忌々しそうに彼の手を払いのける。

私は驚いた。今までに彼らがここまで敵意を露骨に表した相手は、劉備以外にいなかったからだ。もしか、目の前の青年も何らかの因縁がある相手なのだろうか。

「お、おい、それは流石に無礼じゃないか?」

春蘭が目を白黒させて二人目の行状を咎めると、彼は吐き捨てるようにして青年を睨みつけた。

「北郷一刀。天の御遣いと呼ばれて義勇軍を率いている奴だな」

「え、何で俺の名前を……? 北郷一刀は確かに俺のことだけだ」

二人の緊迫したやりとりの裏で、他の剣牙たちがこそこそと話し

合っている。

「てめー、何でさつき払いのけなかつたんだよ」

「いや、俺の前世ってああいうのに弱くて。こう、ヒエラルキー的に……」

「何が、スクールカーストだ。下克上だバカヤロー！」

「まさしって良く聞いてたが、日本人だったんだな……。何てダサイ名前なんだ」

何の話か分からなかったが、彼らが何らかの決意を固めていることだけは良く分かった。まさしという名の何処が格好悪いのかについては理解しかねるところがあつたが……。それよりも緊迫した二人である。

「で、天の御遣いなんだな？」

「はあ、周りからそう呼ばれていますけど」

二人目は青年の、北郷の言葉に満足した様子で笑みを浮かべると、私に声をかけてきた。

「こいつは今、”天”を騙った。今すぐ首を斬るべきだと思うが、どう思う？」

「ん、何故？」

私が首を傾げると、彼はその場で器用につんのめって勢いを失う。

「え。いや、だって”天”だぞ？ 帝だけが”天”を名乗れるんじゃないのか」

「それは帝の……。 ”天子”のことを言っているのかしら。今は巷で良く言われる”天使”の話ではなかったの？」

私の反応が期待と違ったものであつたのか、彼は口元に手を当ててぶつぶつと独り言を言い始めてしまった。「原作では……」とは一体何のことだろう。

とにかく、家臣が非礼を働いたことは私の過失でもある。私は北郷に謝ることにした。

「どうやら、部下が礼を失したようね」

「いや、それはまあ良いんですけど……。それよりハーレムってどういうことですか！」

口から泡を飛ばして抗議する北郷の顔には、憤懣やるかたないといった感情が露わになっていた。

「はあれむ」とは確か、まさしの言葉で異性を選び取りに侍らすことだと理解していたけれども、アナタは”はあれむ”を志す者なの？」

それならば私と同じである。利害が対立しない限りは温かい目で見守ってやることもやぶさかではなかった。

だが、彼は両手で大きくX印を作り、断固としてこれを否定する。「断じて！ そんな爛れたことやつてませんよ。だって俺、まだ未成年ですよっ？ そりゃあ、興味が無いとは言いませんけど……」

段々と小さくなる北郷の言葉を何処で聞きつけたのかは分からないが、突如横合いから柔らかかで可憐な、それでいて肉食の獣を思わせる声が挟まれる。

「ふむふむ……。ご主人様は爛れた行為に興味がおありと。そのお心、しかと理解いたしました。今夜はそれはもうぐっちよぐっちよと燃え上がりましょう？」

といって、横合いから北郷に抱きついてきたのは近頃都で流行っている”メイド服”を身に纏った少女であった。中々に端正でふくよかな体つきをしており、私の審美眼を持ってしても「合格」と唸らざるをえない容姿をしている。

「ええっ、美花何処にいたんだ」

「ずっとお側に。寝所であろうと、廁であろうと、何時もアナタのお側に仕えるのがメイドたるものの務めです♪」

「怖いよー！」

可憐ではあるが、まるで蛇のように締め上げるメイドから北郷は顔を赤くして必死に逃れようとしていた。その様子には私は疑問を投げかける。

「そこまで愛されているのならば、閨で相手をしてあげればいいじゃないの」

甲斐性、という言葉がある。北郷が今求められているのは、まさにそれであった。据え膳を何故、彼は食べないのであろうか？



私の援護にメイドはぱあつと顔を明るくする。

「周囲のご理解も頂けたことですし、二人を阻むものはもうありませんね？ それとも……、ご主人様は私がお嫌いですか？」

しゅんと、寂しげな顔を見せるメイド。女である私には良く分かったが、あれは一種の駆け引きであった。だが、男である北郷には分かっていなかったようだ。よもや彼女を悲しませてしまったのかと、彼は途端に慌て出す。

「き、嫌いな訳じゃないよ。ただ……」

「ただ？」

「何度も、言うけど！ 俺は未成年なの！ 残念だけど一刀さんは全年齢版なのでした！ ちゃんと甲斐性を持てるようになるまで、そういういい加減なのは絶対に駄目！ 祖父ちゃんとの約束！」

メイドに抱きつかれながら、毅然とした態度をとる北郷。物腰と同様、随分身持ちが堅いものだとは内心呆れてしまった。私ならばさっさと愛人の一人にしているところだ。

北郷の言葉を受けて、メイドはきよとんと硬直したかと思うと、

「……つまり甲斐性を持てれば良いと？」

「う、まあ。そうだけど……」

「そして、残念？」

「それは言葉の綾で……」

「つまり相思相愛ですね」

「何で!？」

再び攻勢が開始される。

「うわああ……」

まるで自身の匂いを移さんとするばかりに、くんずほぐれつとメイドの柔らかな肢体が北郷に擦りつけられている様をみていると、こちらも心が高ぶってくる。……今夜は久方ぶりに数人を同時に相手することにしよう。

「何で美花はこんなに肉食系なんだ……」

「私ですから♪」

と幸せそうに顔を蕩けさせているメイド。これもまあ愛の形なの

だろうと私なりに納得していると、耳元でギリギリギリギリギリギリギリギリと大樹に鋸をかけているかのような音が鳴る。

剣牙たちの歯ぎしりであった。

「あの野郎……、”オリキヤラ”まで魔の手にかけてやがって」「てか、あれはやばいな。前かがみになっちまう。俺、立ってないよな？」

「いちいち見せんな！ 小汚い！」

常日頃仲の悪い彼らであったが、どうやら北郷を敵と断じる過程において急速に仲を深めつつあるようだ。

それはめでたいことであったが、そもそも彼らは皆天が与えたもうた美貌を持っているというのに、何故こうも持たざる者の僻みにも似た感情を抱いているのであろうか。普通に口説けば、いくらでも女性を得られそうなものを。

しまいには、親の仇でも見るようなまなざしを北郷に向けて、ただ一心に「種馬野郎」と輪唱しはじめた。

「ちよつとやめて！ その輪唱マジ止めて！」

「うるせえ、種馬。去勢しろ」

「風評被害にも程があるんですけど!? ——って」「きやっ」

足までメイドが絡ませていたことが災いしてか、剣牙たちに抗議をしようとした北郷は体勢を崩して倒れこんでしまう。

倒れる瞬間、自分が下敷きにならんとメイドを抱きしめる様は中々評価に値する行動ではあった。

が、それがかえっていけない。

「ご主人様……」

恋は盲目というべきか、身を呈して助けてくれた想い人に惚れ直したというべきか、メイドは北郷に被さるようにして、人目も気にせず愛を語り始めてしまう。

……流石にこれ以上は閨でやるべきであろう。

私が制止の声をかけようとしたところで、凜としていながらも真冬を思わせる女性の声が僧坊の影からかけられた。

「……お仕事に取り組んでおられるかと思えば、何をなさっておられるのですか。御主人様……？」

武と美を極限まで突き詰めると、こういう形として現出するのだと納得できる存在が、そこにいた。

引き締まりつつも女性らしさを損なっていない肢体。意志の強そうな瞳、真つ直ぐと乱れない黒髪。

彼女は理想だ。

武の道をとった女性があるべき理想の体現である。

恐らくは備える気質も高潔に違いあるまい。あれが高潔でないなど、断じて許されることではない。

呆然とする私の傍へ、彼女が近づいてくる。否、北郷のもとへ近づいてきたという方が正しかろう。今はそれでも構わない。

「あ、愛紗……。これは、その」

むすつとしたまま彼女は北郷を見下ろすと、そのままメイドへと目を向ける。

「美花。お仕事中に御主人様の邪魔をするなど、どういう見だ」

「ごめんなさい。昂ぶってしまいました」

とメイドは驚くほどの変わり身の早さでむくりとその場に立ち上がると、北郷へと手を差し伸ばす。

「さ、ご主人様？」

「あ、悪い。サンキュな」

黒髪の彼女の機嫌が更に降下していった。

見れば見るほど彼女らの間には、いわゆる三角関係が展開されているのであろうことが理解できる。

つまり、それは”心の隙”だ。

私は無我夢中で彼女に話しかけた。

「アナタ、名前は？」

「む、貴女方は？」

まなざしを、声をかけられたただけだというのに小躍りしたいくらいに舞い上がってしまう自身の心に、私は戸惑いを隠せなかった。

これではまるで、生娘のようではないか。

「私は、曹孟徳。今は河南で県令をしているわ」

「御役人様でしたか。それは御無礼を。私は関雲長と申します」

彼女の名前を頭に刻みつけ、私はひっしと彼女の目を見てこう言った。

「単刀直入に言うわ。関雲長。私のモノにおなりなさい」

「は？」

「華琳様!？」

雲長以外の、周囲から驚きの声上がる。

雲長はというものの、明らかに迷惑そうな表情をしていた。それはそうだ。私の見た限りにおいて、彼女は北郷に懸想しているのだから、要らぬ誤解を受けたくはなからう。無理筋の要求であった。しかし。

身持ちの固い北郷と恋愛巧者であろうメイドを交えた三角関係が展開されているというのならば、話は別であった。

寂しさを紛らわせるために、心の迷いはいくらでも生じよう。

その隙に乗じる。一度閨に招き入れてしまえば、心の底から屈服させることなどたやすい。

私は、私の理想とでもいえる彼女を手に入れるために、形振りをかまうつもりはなかった。

その攻勢を、北郷が遮る。

「あ、あのー!」

「……何かしら?」

目標を決めた以上、いくらまさしを知る者だとしても彼は倒すべき敵であった。

私が冷たく睨みつけると、彼は少ししり込みしながらも私と向き合う。

「夏侯惇さんや、夏侯淵さんは曹操さんにとって、どういう存在ですか?」

思わぬ問いが返ってきたことに、私はおやつと目を見開く。

彼は、春蘭たちを何処で知ったのであろうか?

私はどうやら嫉妬を覗かせ始めた彼女らへと目をやり、

「私にとっては何物にも代えがたい、身体の一部のような存在よ」と正直な気持ちで打ち明けた。

例え、目の前の雲長に惹かれていても、春蘭たちは春蘭たちで私にとっては寵愛を与えるべき大事なものたちである。何があっても手放すつもりなどなかった。

結果として、若干嫉妬の和らいだ気配を周囲より感じたが、それにも拘らず私は戦慄することになる。

周囲の、北郷を見る目が明らかに変わったからだ。

「俺にとつての愛紗も同じです。失いたくない、誰と替えることもできない、大事な仲間なんです！ だから……」

「御主人様……」

この場合、熱っぽい目で頭を下げる北郷を見ていた雲長は問題ではない。

”明らかに北郷に対して警戒を緩めてしまった”春蘭や秋蘭、そして華倫の方が問題であった。

「華琳姉え、あいつ良い奴っぽいッスね？」

と耳打ちをしてくる華倫の眼は、面白いものを見つけたと言う風に輝いている。

私は確信した。

目の前のこの男は、傍らにいる春蘭や秋蘭が何者であるかを知つて、今の言葉を吐いたのだ。

雲長の心を繋ぎ止めるための世辞という訳ではないだろう。

本心から雲長を大事に思っており……、それにも拘らずこの男は今……、私から春蘭たちを”寝取ろうとした”。

意識してか、無意識の内かは分からないが、この男がやったことはつまるところそういうことなのである。

彼の在り方に、私はニツポンのヒデオシを彷彿した。

”人たらし”なる才覚があるとまさしは言っていたが、目の前のこの男が持つものがまさにそれだ。

先ほどの職人たちとのやり取りを見るに、きっと老若男女を引き付ける魅力を持っているのがこの北郷という男なのである。

警戒せねばなるまい。

下手をすると、彼は私に並び立つほどの英傑にまで成り上がる可能性がある。

草履取りから一国の宰相にまで成り上がったヒデヨシは、国中の美女を侍らしたという。油断をしていれば足元をすくわれ、この私ですら彼の愛人程度に成り下がりがかねない。

……いや？ その場合、気兼ねなく雲長を交えた複数人でまぐわうことができるのでは……？

種馬扱いを嫌がる彼に種馬としての在りようを教え込めば、自然と雲長の貞操観念をほどいていくことも――。

「曹操さん？」

「……何でもないわ」

思考と野望が横道にそれかけたことを自覚した私は、髪をかき上げ、何でもないと風に取り繕った。

流石に私の思い描く野望を、一時の色恋にかまけて投げ出すと言うのはありえない。そういうものは、万が一に夢破れたときにでも考えればいいのだ。

「ところで、何か用事があつたのではないの？ 雲長」

「ああ、そうでした。討夷將軍様が御主人様をお呼びです。そろそろ、玄徳殿もいらつしやるでしょうから、その場に居るようにと」

「つまり、俺たちは認められたわけか。やった！」

雲長の手を取り、嬉しそうにする北郷。だが、顔を赤くしている雲長の方がもつと嬉しそうに見える。

若干の嫉妬を交えて、私は横槍を入れることにした。

「私も、そこに向かえばいいのかしら？」

「ええっ？ はい、そうなります。申し訳ございません」

申し訳なさそうに頭を下げる雲長。

残念ながら口説くことは叶わなかったが、彼女と北郷という存在を知ることができたのは収穫であった。

だが、彼らという人物をもつてしても、世にあつてはなお小粒であつたことを私はすぐに思い知ることになる。

世界の広さを思い知ったのは、廃棄された寺院の庭先においてであつた。

◇

キインと硬質な響きが、日暮れ前の空気に良く響き渡つた。

今、盧子幹と隣り合つて茶を嗜む私の目の前では、武人と武人が互いの武技を賭けて競い合っている。

「——今のを防ぎますかッ」

「フフ。私も母様から名代に任じられてる分、負けるわけには……、いかないのよ、ねっ！」

一方は流浪の武芸者である趙子龍。

青髪短髪のこの女性は、細身の大槍を器用にくるくると回し、まるで演舞のような軽やかな動きで相手の隙を窺っている。

そしてもう一方は江東の虎——、孫文台の娘である孫伯符。

桃色髪をばさりと振り乱し、牛をも両断できそうな大剣を肩に担ぎ、ただ子龍のもとへと悠然と歩みを進めていく。

庭先の熱気と剣風が、こちらにまで吹き荒れてきた。

直後に再び大きな剣戟の音が鳴り響く。二人が再び激突したのだ。

「うひゃあ、おっかないッスねえ」

と茶を啜りながら、呆れ声を華倫が漏らした。

彼女の言うとおりに、槍と大剣という得物の差はあれども、両者は武の頂点を目指すことのできる天稟を備えているようだ。

二人の距離が一瞬にして縮まったかと思えば、次の瞬間にはまた離れている。息つく暇もない神速の展開にこちらの目が回りそうだ。

激突のとばっちりを受けて、岩の上に寝そべっていた剣牙のいずれかが吹き飛んでいった。今のは場所が悪いだろうから、仕方がない。

それにしても私では流石にアレには勝てないな、と素直に負けを認める。

才覚の問題ではない。

私には、武技の他に磨くべきものが多すぎるのだ。

「子龍の方が攻め方を変えましたね」

秋蘭が目を細めるとおりに、子龍は手数にて伯符を翻弄することにしたようだ。

槍の動きを最小限に抑え、突きを主体にした構えをとっている。「ハッ」

裂ぱくの掛け声と共に、千変万化の槍の穂先が、上下左右から伯符の急所へと差し迫っていった。

が、かかる伯符も負けてはおらず、勝負を決する致命打のみを器用にいなして、一発に重きを得た必殺の強打を子龍の脳天へと見舞っている。

「勘……、のようなものでしょうか？ あのないし方には説明が付きません」

秋蘭の疑念には、同じく戦勘を大事にする春蘭が答えた。

「多分そうだと思うが、あれはちよつと凄いな。私じゃ、ああは動けない」

「姉者でもか」

「もちろん、負ける気はないぞ？ ほんとだぞ？」

秋蘭が微笑んだところで、力比べの天秤が子龍の方へと丁度傾いた。

「どうやら単純な個人技では、子龍の方に分があつたらしい。」

「あ、あ！ もう、負けたあつ。うう、ムシヤクシヤする！」

喉元に穂先を突きつけられ、口惜しげに地団太を踏む伯符を見て、先ほども微笑を絶やさなかつた盧子幹がパンと両手で拍子を打つた。

「二人ともお疲れ様！ 風鈴としては、有望な若い世代の人たちがこんなにも見られて嬉しいな。だから、そう口惜しがらないで、一緒にお茶を飲みましょう？」

……そもその話、何故江東の人間である孫家の長女が冀州くんだりまでやってきていたのか、これには先だつてより音に聞いていた、孫文台の大進撃が背景にあつたようだ。

「伯符ちゃんはね。文台さんの代わりに冀州を見分するようにとやつ



てきたんだよ」

と汗を布で拭きながら、庭を望むことのできる茶席の設けられた東屋へとやってきた伯符を子幹が紹介する。

伯符は私をちらりと一瞥すると、挑発的なまなざしを向けてきた。

「何だ、貴女も来ていたんだ。抜け目ないこと」

彼女とは昨今頻発していた賊の討伐に関連して、獲物をどちらが狩るかという血なまぐさい知り合い方ではあったが、国境際で面識があった。

私は薄く笑って言葉を返す。

「お生憎様ね。そもそも私はこの土地で討伐軍を待機させていたのだから、この場に居るのは道理でしょう」

「でも、戦なんて起きないんでしょ？　はあー、つまんなー！」

肩を竦める伯符に対し、春蘭があからさまに眉根を寄せた。

「おい、華琳様に対して少々口が過ぎるんじゃないか？」

この苦言に伯符は楽しそうに笑い声をあげて、「怒っちゃあよ。わんちゃん？」と挑発する相手を変えてきた。

「な、何だと！　華琳様に犬と呼ばれる分にはご褒美だが、お前に言われても嬉しくはないぞ」

「それはちよつとドン引きするけど、抗議したいなら一つ手合わせでもする？　受けてたつわよ」

恐らくは相手を挑発することで、その本心を引きずり出そうとしているのだろうが、それにしただって好戦的過ぎる。

何故か？　とは考えるまでもなかった。

先程の試合が原因だ。

周囲を挑発することで次なる相手を物色し、うさを晴らそうとしているのだ。

呆れた猛将だと半ば感心すると共に、この様子では劉備に用事があるわけではないのだからとも当たりをつける。

私は子幹に問いかけた。

「見分とはどういうことかしら。將軍？」

子幹は口元に指を当て、困ったように唸りながらこれに答える。

「えつとね。文台さんがすぐ近くまで進撃してきているのはご存知？」

「伝え聞く程度には」

「彼女は、未だ戦は終わっていない。自分がこの地の叛徒を殲滅すると言つて聞かないのよ。多分、賊の討伐によつて演習をかねようというのだから、彼女らの兵糧を供出するのは近隣の村々になってしまうから、おいそれと大軍勢を受け入れるわけにはいかないわ。それで今は中央の軍と梁の国境で睨めっこしている最中なの」

「だから、劉備ちゃんの話と一緒に聞いて現状を知ってもらおうと言うわけ、と彼女は締めくくる。

彼女の説明を聞いた私は、乱世の足音がまた一步近づいてきたかのような心地を覚えた。

恐らく孫文台の言は単なる建前で、彼女は黄巾など眼中にしていな

い。今回の騒乱を奇貨として朝廷より委譲された軍権を用い、周辺への威圧外交と兵の鍛錬を行っているのだ。もしかすると、人材の探索も同時に行っているのかもしれない。

つまり、彼女は間近に迫る乱世を心待ちにしているということだ。この私のように。

となると、伯符がここに居ることに大した意味はない。

どうせ、大勢が終息に決するまでは何かと難癖をつけようとするのだから、劉備との協定に何かしらの動きを見せることはないだろう。

だが、意味がないのならば、何故彼女がここに居座っているのかが逆に気になった。

朝廷への忠誠を示しているだけであろうか？

「その顔、私は何故ここに居るのかつて考えてる顔よね」

伯符は流し目で口元を持ち上げ、面白そうに言った。

「答えは簡単。何か面白そうなお話がありそうと思っただけでしたー！ どう、予想外だった？」

と悪童さながらにおどける伯符の頭を、

「阿呆」

と堅く巻かれた書簡を使って背の小さな嘆息交じりに少女が小突いた。

少女は緩やかに波打つ白藍色の髪を感情に任せて揺らしながら、肩を精一杯に張っている。

薔薇を模した花飾りをつけた上着が年不相応に大人びているのが、少し印象的であった。

傍らには先程の北郷も控えており、二人のやり取りに苦笑いを浮かべている。

「いたっ。何するのよ、雷火……」

涙目で抗議する伯符に対し、雷火と呼ばれた少女は額を押さえ、これ見よがしのため息をつく。

「お前がそう子供ののように庭で駆け回っておる内に、私は現状を義勇兵の小僧から聞いておったのだぞ」

隣の北郷へと目を向けつつも、彼女は伯符への叱責を止めようとはしない。

先程から孫文台の長女であるはずの伯符に不遜な態度を取っているあたり、この娘の孫家における存在感は見た目以上に大きそうだ。

もしかすると、見た目どおりの年齢でないのかもしれない。

「雷火が仕事をしてくれたなら、私はもう仕事をする必要なんてないってことよね？」

「仕事はしろ。お前の母は勤勉だぞ」

「冥琳ならもう少し優しくしてくれるのに」

「だから、私が今回のお目付け役なのだというに」

再び書簡が伯符の脳天へと降り注いだ。

「さて、小僧が言うにはそろそろ劉備なる御仁がやってくるはずであるが、やけに遅いに見える。何ぞ手違いでもあったのか？」

悶絶する伯符を尻目に、少女が子幹に問いかける。

子幹は困ったような表情を浮かべ、懐かしむようにして空を見上げた。

「ううん、張子布さんごめんなさい。劉備ちゃんはとっても良い子な

んだけど、昔から時間をきちんと守れる子ではなかったから……。それでも最近はしつかりした子が補佐についてくれたはずなんだけどなあ」

「天下の將軍を待たせるとは、劉備もとんだ大人物なのだな」

多分、皮肉で言ったであろう子布の言葉に、子幹は嬉しそうにぱあつと顔を明るくした。

「そうなのよー。劉備ちゃんは将来絶対に凄いことをやってのけるって思っていたのだけど、まさか無血で騒乱の元を断ってしまうんだなんて……。風鈴はほんとに嬉しいわ」

子幹の主導で昔話に花を咲かせる中、私は何時の間にもやら茶席について饅頭に齧り付いていた子龍へと声をかけた。

「子龍お久しぶり。先程の試合は見事だったわね」

「孟徳殿もお久しぶり。いや何、今回は相性が良かったただけですな。あの御仁は相手次第で無類の強さを発揮しますぞ。そしてその本領はむしろ兵を率いてこそ光ると見ました」

と二人で退屈そうな顔で円卓に頬杖をつきはじめた伯符を見る。

確かにあのように悠然と前のみを歩む様を見た兵たちは、彼女の背中を見て鼓舞されることであろう。それに獣じみた勘も戦場では役に立つ。

前線の突破を図る将としては、うってつけの人材であろう。それに見た目も良い。

劣情をくすぐられる。

孫家という紐がついているため手元において飼うことはできないが、敵として相見えるかもしれない者たちにあのような虎子が潜んでいることは嬉しい知らせであった。

雑魚ばかりでは成り上りの甲斐がない。

「言葉には出さずとも、負けん気と言うものは伝わるものですよな」

からかい混じりのその言葉に、私はくすりと笑い声を漏らす。

「あら、アナタも実戦では負けるつもりなんてないって顔をしているわよ。公孫伯桂の将としてか、劉玄徳の将としてかは分からないけれど」

言外にどちらに請われ、選んだのかと聞いたつもりであった。

だが、子龍は少しきびしうに頬を掻き、意外な答えを返してくる。

「桃香様にはその……、」フラれて”しまいまして」

「アナタが、劉備に？」

”フラれた”ということは、目の前の彼女が自ら劉備と言う存在を主君として仰ごうとしたということだ。

それを……、大陸有数の武芸者を袖に振るなど常識ではとても考えられない。

一体何を考えているのか――。

その存念が知りたい私の心情を察してか、子龍はさらに説明を続ける。

「と言つても最後まで悩まれてはいたのですよ。決め手はあの方の進むべき道ですな。悩むに悩まれて、最終的には白蓮殿を……、伯桂殿をお願いします、と」

「進むべき道？」

それは一体どのような道なのか。

子龍は頷き、さらに続ける。

「はい。決して、恐らく、多分、願わくば、私が子遠殿にちよっかいをかけたことが原因だとは思いたくはありませんなあ」

快活に笑う彼女は、劉備の歩むべき道については語ろうとしなかった。

疑問がさらに膨れ上がっていく。

劉備という存在が、私には良く分からなくなってしまうた。

そう困惑を深めている時に、

「……華琳姉え。何か地響きが聞こえないっすか？」

という華倫の言葉を聞いて、私のはっと我に返った。

この地響きは馬の駆ける音である。

よもや賊徒の集団がこの廃寺院に攻め入ってきたとでもいうのであろうか。

「皆、武器をとりなさい。何かが近くまで――」  
言い切らぬ内に空より何かが飛来する。

投石や矢の類ではない。

……あれは人だ。べしやりと液体混じりの嫌な音を立てて、何の変哲もない風体をした鎧姿の男性が庭先に落ちてきたのだ。

ちよつと良く分からない。

そして、男性を追うようにして中空へと踊りだした巨体が大地を一旦轟かせながら着地する。

どんな名馬も霞んでしまう艶やかな毛並みと、不自然なほどにやせ細った凶相が特徴的な馬であった。いや、馬か……？

「し、子遠さん大丈夫？ 怪我してないっ？」

馬上より心配そうな声が降ってきた。

桃色の綺麗に切りそろえられた”短髻”が印象に残る、目元の優しげな少女である。

声をかけられた男性はというと、

「バルバトスさんに、必死に付いて行っただけなのに……、解せぬ」

などと呟きながらまな板の上に置かれた魚のようにびくびくと痙攣していた。

「桃香ちゃん！」

私が彼女らの素性を問うよりも先に、子幹が喜びを持って答えを教えてくださいました。

彼女が待ち望んでいた少女と言うと、選択肢は一つに限られよう。

「アナタが劉備、なのかしら」

私の問いに彼女はぼつが悪そうな表情を浮かべて頬を掻いて答えた。

「えつと、お察しのとおり劉玄德です。ごめんなさい。ちよつと遅刻しちゃいました……」

女性と相對し、私の劣情がすぐられもせず、ただただ身震いをしてしまうことはこれが初めての経験であった。

劉玄德という人物は——、私にとって一目見たときから特別であったのだ。

### 第十三回 劉玄德、成らず者を志す

「それにしても、風鈴先生が何でここに……?」

劉備は解せないという風に首をかしげた後、すぐに自身が馬上の人であることに気がつき、慌てだした。

「あつ、ごめんなさい、馬上でっ! わ、わ、わ」

転がり落ちるようにして馬から下りるその様は、一見無様にも見えかねないものであつたのだが、不思議と侮蔑の理由には成り得なかつた。

さらさらとそよぐ桃色の短髪や、焦りで早くなっている息づかい、ふわりと持ち上がった金縁緑地の短袴など、およそ彼女を構成する全てのものがこの世にいる誰とも比べようのない、独特の存在感を振りまいていたからだ。

「おー……」

「劉備ってあんな髪短かつたっけ?」

「おい、雑魚ども。注目するところはそこじゃねえ」

大の劉備嫌いを喧伝していたはずの剣牙たちですら、彼女の存在感に目を見開いて息を呑んでいた。

……いや、訂正しよう。

「めっちゃ……、ばるんてしてるだろうが……」

彼らの目を引いたのは、別段彼女の存在感ではなかった。一体、何を凝視していたのかは些事であるため、この場においては捨ておこうと思う。

彼女は。一体、彼女のような雰囲気を持つ人間を何と形容すればいいのだろうか。

見た通りの印象からいえば不器用で、彼女一人では生きるのに苦勞しそうだと思う。

如才なさとは到底無縁であり、頭の回転も速くはなさそうだ。

では見目麗しいだけかというと、そうではなさそうな凄味がある。

人という生き物の格を儒者の視点で分類することを私は好かないが、

「あれは——」

徳者・仁者・礼者・信者・義者・智者。いや——。

私は彼女を形容する言葉をほとんど無意識の内に模索していき……、最後に思いついた”ソレ”に胸がひどくざわめいた。

「あれは、”母者”……」

そうではない。

私は剣牙のいずれかに護身用の短刀を投げつけ、あらためて浮かび上がった言葉を脳裏より追い出そうとする。だが——。

”王者”。

彼女を一目見て、即座に連想したこの言葉を私は払いのけられずにいた。

だって、そうではないか。何をせずとも、当然のごとくその場に在ることが受け入れられて、ただそこに在るだけで決して蔑ろにされることのなく、他者から一目置かれる存在を表す言葉を、私は”王者”以外に知らない。

「……あの子が討夷將軍の待ち人？」

「そうらしい。劉姓のようだが、知れた名ではないな。平民か」

孫家の会話を耳にしながら、私はつぶさに彼女を観察する。

彼女の纏う雰囲気は、果たして劉氏の、宗家の血脈の為せる技なのか？ いや、易姓革命を経験しておらぬ長寿の王朝に、凡百の、卑俗な劉姓などごまんと存在する。つまり、生まれが彼女を形作ったわけではない。

「うーん。見た感じ、能力よりも人柄、的なの？　うちにはいない手合

いッスね。華琳姉え」

華倫の言葉を反芻する。

そう……、能力があるようには思えないからこそ、あのような尋常でない雰囲気纏えていることが不思議であった。

ただのお人好しでは侮られる。

今の時代に”善良”という言葉は”愚か”であることと同義だ。

”王者”とは我欲を捨て、私利を分け与える慈母のような存在であり、そうした人徳を信用されているからこそ、周囲の人々から敬われ、



尊敬を勝ち取れるものだが、生き馬の目を抜く世にあって、”王者”が”王者”たらんとするためには、権力者としての地位や名声が必要となる。

富に飽いた名家豪族から、ああいった手合いの者が生まれるのならば、まだ理解できた。

でも、彼女のような無位無官が？ 何故？

彼女の人品を健やかに育んだ環境の存在。

彼女という存在が世に現れることを許した時勢。

恵まれた師。

恵まれた友。

恵まれた部下。

いくつもの幸運が重ならなければ、彼女のような人間が生まれるはずが……。

天命、という言葉が頭をちらつく。

「劉玄德……」

気がつけば、私は爪が肉にめり込むほどに、二の腕に爪を立てていた。

「バルバトスちゃん、大人しくしていてね？」

もやもやと湧きだした悪感情を理性で押さえ込む。

私は息を吐くと、劉備に撫でられた凶相の名馬を改めて見た。

見れば見るほどに名馬である。

そうだ、彼女の傍らにあのようなおよそ凡百からかけ離れた名馬があることが悪いのだ。……いや、果たして馬か？

とにかく、凡百ならざる馬らしき何かを侍らせた存在が、凡百であろうはずがない……。そんな先入観が私の心に働いたのである。私の自尊心に楔を打ち込んでいたのである。そうに違いない。

まだまだ自分は青いということであった。

私に判断を誤らせた凶相の名馬は、不機嫌そうに蒸気にも似た灼熱の息吹を吐き出しながら、倒れ伏している鎧男を睨みつけている。

「えっと、先生に皆さんごめんなさい。まず、子遠さんの様子を見ても良いですか……？」

劉備がちらちらと鎧男を心配げに見ながら、すまなそうに言ってくる。急な彼女の到来に凍り付いていた私たちも、彼女に許可を求められたことでハツと我に返った。

「え？ ああ、そうね。怪我をしているみたいだもの。大事があつてはいけないわ」

盧子幹が答えると、劉備はほっと安心した顔を見せる。

「あ、ありがとうございます！ほんとに、遅刻したのにほんとごめんなさい……！」

一直線に鎧男の介抱へと駆け出す彼女の後ろ姿を見守りながら、「一体、道中で何があつたのかしら……？」

と子幹はしきりに首を傾げていたが、冷静さを取り戻した私は内心で答えを導き出す。

先ほど、今際の際に鎧男は「必死に付いていただけなのに……」と呟いていた。つまり、戦傷の類でない。事故だ。

秋蘭が劉備の兵を指して、『奔放で粗野』と評していたことを思い出す。もしかしたら内輪でじゃれあつた結果がアレなのかもしれない。だとすると、私たちとは違つた民度で生きていることになるわけで世界が違つと感じさせる。

「大丈夫？ 子遠さん」

劉備は倒れ伏した鎧男の上体を抱き寄せて、心配そうに声をかけた。

まるで母が赤子をあやすかのような姿勢は、端から見ても名画の如く目に映る。が、抱かれている男の鼻は赤子とは似ても似つかぬだらしなない伸び方をしていた。

「ぐおお、すっげえ痛かった……。あつ、あつ、あつ。強いて言うなら母性の感触も相まって最高に幸福でありますが！」

「……母性？」

「それはさておき！ 玄德殿は大事な会談を控えておられるのですから、お気になさらず。今すべきことに集中しなくてはなりませんぞ！」

劉備に抱き起こされた男は、さも知恵者然とした早口で彼女をたし

なめる。鼻を伸ばす余裕があるあたり、見た目よりもずっと傷は浅いようである。

頑丈さに舌を巻くと同時に、この男が呉子遠かと改めて気づいた。成る程、平凡そのものといった見てくれをしており、何処からどう見ても有能そうには見えない。もし文官服でも着ていたならば、裏通りで金づるとばかりに無頼漢がこぞつて声をかけにきそうだ。

だが、見た目通りの人間でないことは既に秋蘭たちから聞いていた。

そんな有象無象を装う呉子遠を、主たる劉備がじつと見つめる。

「子遠さん」

「はい、何ですか？」

「えつと……、この前みたいに”真名”で呼んでくれないの？」

物憂げに劉備が言うと、抱かれたまま格好を付けていた子遠がピシリと凍り付いた。

「そ、そそそそれはですな……っ」

子遠は顔を真っ青にして、慌てて飛び起きた。

そしてそのまま表情に影を落とす劉備と、不機嫌そうに蒸気を吐く名馬を交互に見ている。

名馬からの圧力が増し、子遠が短い悲鳴をあげた。

どうやら、何かを心中で天秤にかけているようだ。

というか、あの蒸気は生き物が出して良いものなのだろうか……？

「……それがしは相変わらさずだな」

彼女らのやりとりを見ていた中で、秋蘭が漏らしたその言葉を私は聞き逃さなかった。

「随分と嬉しそうね」

秋蘭にしてみれば、願わくば自分の部下にとすら考えていた男である。逃した魚を惜しむでもなく、こう優しい言葉が口から出てくる。ことが不思議であった。

秋蘭は目を弓なりに細めると、苦笑いを浮かべる。

「いえ、少なくとも主君に大事にはされているようですから。もう”巡りあい”に物を申す無粋はしません」

「ふうん？」

巡りあい。

確かにあの子遠という男は劉備に真名を許されるほどには大事にされているようだ。では何故、子遠自身が彼女に真名を許していないのかという疑問は残るが、少なくとも都の、人を人とは思わぬ職場に比べて彼を取り巻く現在の環境が別天地であることは疑いようがないだろう。

そんな別天地に生きる子遠が意を決したかのように拳を握りしめる。

そして、先ほどまでの知恵者然とした振る舞いからうってかわって、たどたどしい調子で真摯に言葉を絞り出した。

「あの、それがしのお気になさらず。と、ととと桃——」

と二人が妙な空気を漂わせ始めたところで、

「んおっ。」

桃色の空気を斬り裂くようにしてヒュンヒュンヒュンヒュン、と一本の飛来物が子遠に向かって何処ぞより飛んできた。

「……」とう「刀？」

目を見開いた子遠が見つめる方を、釣られて見る。

「……何かしらっ？」

先ほどは人が飛んできた。

蒸気を吐き出す、馬らしき何かも飛んできた。

もう、この期に及んで石でも槍でも、何が飛んできたとしても驚いてやるものかという心積もりで、私は赤らんできた空を見上げて目を凝らす。

西日を受けたソレは、金属色に煌めいていた。

規則的に円運動を続けていた。

緩やかな弧を描いて、降下。そして、すくい上げるように子遠の膝を狙って滑空した。

ん、膝？

「ヒエッ!？」

色を失い、間一髪というところで子遠が飛来物を跳び退いてかわす

と、ソレは瓦が敷かれた回廊を支える、極彩色に塗られた柱の一本にツターンと深々突き刺さった。

持ち手以外は柱の中に埋まってしまっているため良く分からないが、あれはどう見ても鋸である。

鋸であった。

はて、鋸とはああもたやすく柱に突き刺さるものだったか……。

何処からあれは飛んできたのか。刺客か？ 刺客なのか？

ころころと急転する今の状況は私の頭脳をもってしても、事態の把握が難しい。が、当事者たる子遠はこの状況をかなりの確度で理解できたようであった。

顔を真っ青にして、まるで華南か都あたりで全財産を溶かした商人のようにガクガクと体を震わせている。

そして、恐る恐るといった様子で鋸が飛来してきた方向へと目を向けた。

再び騎馬の駆ける音。程なくしてそれは下馬した大勢の人間が足早にこちらへと向かってくる音に取って代わられる。

庭先に姿を現したのは、見るからに柄の悪そうな男衆であった。

「お頭あー！」

「あ、みんなー！」

一瞬、今度こそ無頼漢がやってきたのかとも思ったが、ぱあつと嬉しげに呼びかける劉備や今回の会談を設定した秋蘭が特に何も反応を見せていないことから、私は警戒心を引っ込めた。

頬に傷のある大男。浅黒い肌の青年。他にもやけに年若い者が多く見えるが、いずれも歴戦の凄みを感じさせる。

良く言えば豪傑の集まり。悪く言えば場数を踏んだ山賊に毛が生えたような集団。そんな彼らが劉備を主にと仰いで庭先に整列している中を、集団にそぐわぬ華奢な少女が割って出てくる。

「桃香、無事!？」

「桂花ちゃん！ えっと、私は何ともなくて……、むしろ子遠さんの方が……」

桂花とは恐らく真名を指すのであろう。獣耳を模した頭巾を揺ら

し、少女はボロボロでガクガクと震えている子遠を睨みつける。

「ヒ、ヒエツ」

「……フン、どうやら無事のようなね」

相思鼠色の上着についた砂埃をばんばんと払いのけ、彼女は当然のように劉備の隣に並び立った。気のせいかも知れないが、一瞬劉備が「ちえっ」と残念そうな声を漏らしたことが少し気にかかる。

「フム」

突如現れた彼女は果たして何者で、二人はどのような関係なのだろう？

真名を互いに許しあっていることから、信頼の置ける間柄であることは間違いない。ただ、それだけの単純な関係でないようにも見える。

「あの、上司殿……？　今の投擲術は一体……」

「この間、子龍に習ったのよ」

「やっぱりか……」

確かなのは、劉備の手勢において彼女は子遠よりも高い位置にいるであろうこと……。ああ、成る程。

私は半ば彼女の正体に気づきながら、確認を兼ねて声をかけた。

「アナタは？」

私の呼びかけに、少女は居住まいを直し、じつとこちらを見つめてくる。

その所作の端々には私に対する敬意が透けて見える……。私のことを見知っているのかもしれない。しかし、敬意とともに彼女の瞳には人品を見定めようとする不敵な意志も見え隠れしていた。

不遜ではあるが、物怖じしない態度がむしろ清々しくすら感じられる。前評判の信憑性が増した。

「……荀文若と申します。曹孟徳様。お会いできて光栄です」

「道理で」

彼女は、剣牙たちの予想では私の幕下に収まるかもしれない少女だ。確かに私のもとで辣腕を奮っていてもおかしくない才気が彼女からは感じ取れる。自分に絶対の自信を持っているであろうあの

強気な目つきも、私の好みと合致していた。

器用ではなさそうだが、頭の回転は速そうである。それも図抜けて  
。劉備と違い、その人の価値が分かりやすく、心が洗われるような心地すらした。

当然のように、手元に置いて愛でたいという欲求が沸き上がる。が、恐らくは叶わぬ願いであろう。都で”王佐の才”とまで謳われた彼女が今、誰の隣に並び立っているかを考えれば、自明の理であった。「え、も、孟徳殿？」

私たちのやりとりを聞いていた子遠が意外そうに目を白黒させる。信じられないといった顔だ。

彼は私の傍らにいる秋蘭や春蘭を見て、さらにこちらへと目をやる。

何だろう？

私が首を傾げる中、彼は何処かを注視しようとする目と目を動かし……、何故か寸前に自分で自分を殴りつけた。

「えっ？」

私が驚き、声を上げると、彼は気にするなという風に涙目で返してきた。頬の腫れ方が尋常ではない。本気で、自らを殴ったのだ。何故。

「お気になさらず……！ 自戒と自衛の一環なのです！」

何が何だか良く分からないが、彼が変人であることは疑いようがなかった。ただ、秋蘭と文若が殺気の混じったまなざしを彼に向けていることから察するに、彼女らには彼の魂胆が理解できたようである。後で聞いてみるのもいいかも知れない。

この無茶苦茶なやりとりに、何故か私はまさしが「ついんでどりる」なる言葉を口走った時と同じ、ほのかな愉快さを感じとった。

「とにかく」

文若は咳払いをし劉備に目配せすると、庭先に集まった者たちに向けて、朗々と自分たちが遅刻した理由を語り始める。

「まずは会合に遅れてしまったことを謝罪いたしたく、それと同時に

皆様にはお願いしたい儀がございます」

「遅刻した上で、願いたい事？ 随分と面の顔が厚いように思えるが」

孫家の知恵者、張子布が眉根を寄せて口を挟む。が、文若は別段堪える素振りも見せず続けた。

「そも、我々が会合に遅れた原因は此度の”下手人”を追いかけたことにあるのです」

庭先に集った一同の間に緊張が走った。

「今朝方、我々は”下手人”の襲撃を受けました。襲撃自体は死闘の末に撃退することができましたが、お恥ずかしながら肝心の敵を捕り逃してしまったのです」

「襲撃……」

顔色も変えずに語る文若に代わって、頬を腫らした子遠が何とも言えない顔つきで目をそらしたのを私は見逃さなかった。二人の態度の差を見るに、嘘偽りではないが正確な話ではないということなのかも知れない。

私は情報を少しでも引き出すために、文若よりも脇の甘そうな子遠に向けて問いかけることにした。

「ねえ、アナタ。確か呉子遠と言ったわね」

「え、あれ？ 何故それがしを……。いや、うーん。ああ？ はいはい。成る程。それで何かご用でしょうか」

彼はこてんと首を傾げ、一瞬呆けて、すぐに合点のいった顔を見せる。

勝手に疑問を抱いて、勝手に自己解決するところは前評判に聞いたとおりだ。

恐らく、彼のこの個人で完結してしまう物の考え方は、都での勤務経験が作り上げたものなのであろう。他に頼る者がいなかったからこそ、自分で何かを考え、自分で答えを出して、答えの是非はさておいても、とりあえず前に進んでしまうことが癖になってしまっているのだ。

部下としては手も掛からず、それなりに有能だが、こういった手合いは一転して自分が一団の長になると途端に無能を晒す恐れがある。



彼の上司は彼が人を正しく使えるようになるまで、危なっかしくて目が離せないだろうな、と少し同情しながらも私は続けた。

「文若の言う下手人とは此度の騒動の首謀者という理解でよいのかしら？」

「あー……、はい。」罪のない”旅芸人の姉妹を慕う民草を、”結果として”騒動が起きそうなほど煽っていたという意味では、そうですね」

”罪のない”のくだりは、秋蘭を通じて口裏を合わせていたものであった。本来ならば管理責任を問われかねない旅芸人の三姉妹が被るべき罪を、何とかかうやむやにせんがための小細工だ。

私としても三姉妹の人心を集める歌唱能力には注目しており、彼女らを助け恩を売ることに異存はない。

が、”結果として”とはどういうことだろうか？

三姉妹が負うべき罪を下手人に被せねばならぬところに、こうしたうやむやな物言いはいかにも拙い。

まさか甘さ故に下手人にすら情が湧いたか？

それとも下手人が助けるべき価値のある英傑であったか。

こればかりは、自分の目で下手人を見てみないことには話が進まない。

私は更に問いかけた。

「アナタたちは襲撃を受けたのでしょうか？」

「んー、襲撃と言いますか、仕官と言いますか、逆恨みとも言いますか。何というか……」

要領を得ない。質問を変える。

「……下手人はどのような人物だったのかしら」

「悪し様に評すれば軽佻浮薄。考え無しに好き勝手する輩とも言い表すのがしっくりくるかとは思いますが。ただ、うーん……、その」

「その？」

子遠は逡巡し、自身の考えを探るかのようには言葉を選びながら紡いだ。

「まさし君を……。ああ、いえ突飛ではあるが根っからの悪人ではな

さそうな気配を感じたのです」

彼の戸惑いは全て理解した。無論、呉子遠という人物も。

「——それは保護すべきね」

私が真顔で言い切ると、何故か秋蘭と文若が「嗚呼」と天を仰いだ。

「あの……、その、孟徳様……?」

恐る恐るといった風に語りかけてくる文若に私は微笑みかけた。

才ある者の言葉は、私にとって千金に比する価値がある。

「何かしら」

「いえ……、お願いしたい儀とは我々だけでは下手人を討伐するのに戦力が足りず、ご助勢をいただきたいといった内容だったのですが……」

少し考えを巡らせて、私はこの提案に頷いた。

「確かに保護するのにも、心を挫く必要があるか……。良いでしょう。

我々も兵を出します。華倫?」

言うが早いのか、私はすぐ後ろに控えていた華倫を呼ぶ。

「ん、与力はあたしスか。華琳姉え」

「ええ。悪いけど、急ぎ駐屯所へ戻り、兵を率いて劉備の兵に協力なさい」

華倫は私の言葉を反芻するようにしてうつむき、何事かを考え込み始める。

「あの、孟徳様……。保護ではなく、討伐でして……」

「ん、了解ッス」

彼女は腹心の中では数少ない、私の意図を正確に理解して迅速に行動に移せる人物だ。また、群を抜いて人当たりもまさし当たりも良い。

春蘭では細かい機微まで理解できず、剣牙たちでは劉備勢と揉める恐れがある。更に秋蘭はこの場の責任者の一人であり、今動かすと差し障りが出る。適性で選りすぐっても、消去法で選んでも彼女以上の適役はいなかった。

「近侍の、足の速い騎馬隊をお借りしても良いッスよね?」

「ええ。アナタの才覚で自由に兵を操ることを許しましょう」

「かしこまりーッス」

自らのすべきことを完全に理解した彼女は、まさし仕込みの”敬礼”をとって、会談の場より去っていった。

去り際に各勢力に対し、手短な挨拶をしていく人当たりの良さは、私には持ち得ない彼女だけの才覚なのかもしれない。「捕り物……。じゃあ、私もお暇させてもらおうかしら」と追従しようとする孫伯符の脳天で高鳴る木簡の打突音は、この際気にしないことにする。

「さて……」

私は子遠をじつと見つめる。

本題はここからであった。

「な、何のご用でありましょうか」

幾分警戒しつつもこちらを窺う子遠に対して、私は誠意を込めて微笑みかけた。

私は老若男女問わず、すべての才ある者を愛している。私の価値基準に従えば、彼もまた才ある者であった。だが、それ以上に”同志”だ。間違いなく。

「……上田合戦の功労者は？」

私の試すような問いに対し、彼は間髪を置くこともなく冷静に返す。

「んんっ、第一次ですか？ それとも第二次ですか？ いずれにせよ真田。いや、引っかけてYAZAWAという可能性が……。ハッ!?」

子遠は驚きのあまりか口をあぐりと開けたまま硬直した。

私はゆつくりと、力強く頷く。

やはりだ。

やはり彼には私と同じものが見えているようであった。

子遠は、何かに耐えるようにして下唇を噛みしめ、やがて私に向かつて、手を伸ばす。彼の両目からは大量の涙が流れ出していた。

「おお……。おお……。この知識はまさしく真田丸、まさし君の……。おお……。っ！」

ともすれば崩れ落ちそうになっている彼に近寄り、私はその肩を

そつと抱き寄せた。

「ヤマモトカンスケは？」

「う、ひつぐ……、實在、しなかつたのですぞ……！」

見解の一致。心が晴れ渡るようであった。

「川中島の戦いは？」

「ひつぐ……、領土は取れても……、得難い人材を失ったのですぞ！」

典厩という実弟を失った信玄の気持ち、いかばかりか。わたしにとつては春蘭や秋蘭、華倫や栄華を失うようなものだろうか？ 想像するだけで、胸が張り裂けそうさ。

それにしても、子遠のこの喜びようは……。

私は哀れに思つて、優しく語りかけた。

「そう……、アナタには近くに理解者がいなかったのね。アレを正しく理解できる者は、この大陸にはほとんど存在しないから……」

そして彼は今、この大陸に数少ない理解者と出会うことができた。

「でも、私は理解できる」

胸に手を置き、誇らしげにそう返す。

「おお……！」

私は大いに気を良くして、北郷へと目を向けた。

「そして、北郷一刀。彼もまた、まさしを知るものなのよ」

「おお、確かに……！」

子遠の声喜びに満ち溢れる。しかし……、

「あ……、ここで俺かあ」

何故、北郷は他人ごとのように振る舞っているのだろうか？

「そういえば……、秋蘭の言からすると剣牙たちも北郷と同郷であったのよね……。ならば、まさしを知っているのかしら」

「け、剣牙殿！ 音に聞く、あの剣牙殿でありますか！ するとここには、その二”も、”その二”殿もいらつしやるのですかな!？」

「人を”その二”呼ばわりするんじゃないねー！」

剣牙たちの中から二人分の抗議の声が上がる。

その反応に、子遠はとても嬉しそうにしていた。

「おお、おお……。一目だけでもと会いたかった者に出会えた……。

是非ともお気持ちを伺いたい。何と言いますか、人の縁を感じますぞ……」

私は頷く。

まさしと出会った当時、こんな素晴らしい知識を理解できる私は、やはり特別な存在なのだと確信した。

だとするならば、いま目の前にいる彼も特別に違いあるまい。そして、北郷も。

今この瞬間、我々の絆はここにいる誰とよりも深く繋がったのだ。これは実にすばらしいことであつた。

と、多幸福感に包まれていた私のひとときに水を差すようにして、

「……変態の話は時と場を弁えなさいー!」

ドスの利いた声が子遠を私より引きはがす。

文若である。

私は興が削がれた不快感に眉をひそめた。

「変態? 無論、私とてまさしが変人であることを否定はしないのだけれども——」

折角の”同志”との語らいを、無理解によって阻まれるというのは面白くない。

彼女の、先ほどまで才ある者の強気で好ましいと思っていたまなざしが、途端に頑迷な色眼鏡に見えてきてしまう。

人というものは、心の持ちようによって世界の見え方が変わってしまふということに、私は今更ながら気がついた。

そうして、文若の頑迷さをなじる言葉が百通りほど思いついたところで、

「もう! 今日喧嘩するために集まったのではないのでしょうか?」

と盧子幹が険悪な空気を何とかしようとして割って入った。そうであつた。

今日の本題は、まさしについて語るのではなく、あくまでも黄巾賊の後始末を会談することにあつたのだ。

「北郷さん。お話は東屋あずまやでするわけではないのよね?」

先ほどまで空気に徹していた北郷は、ぶんぶんと大きく頷きながらも盧子幹の問いに答える。

「はい、はい。そうです！ あの、公孫サンさんと俺たちで大きめの僧坊を片づけてありますから、そっちに移動しましょう。公孫サンさんも待つてます」

「はい、満点花丸をあげましょう！ じゃあ、皆。お話をする場へと移りますよー」

盧子幹と北郷、この場の空気を切り替えという思惑の一致した二人が、矢継ぎ早に畳みかけていく。

無論、その提案に否やと唱えるほど理性のない者はここにおらず、ぼつぼつ皆が呼応していった。

「はい、じゃあ俺が先導します。ついてきてください！」

「ええ、お願いね？」

目的地への移動を始まり、極彩色の回廊をぞろぞろと皆が並び歩く中で、私は一人ため息を漏らした。

……どうにも、今日の私は調子が悪い。

こうも簡単に冷静さを失ってしまうなど、全くとって私らしくないというのに……。

私は、私が私らしくなくなった原因にちらりと目を向ける。

彼女は何かやたらに意気込んでおり、「頑張るぞい」と子遠や文若と戯れていた。

◇

それがし、針のむしろの連続で滅茶苦茶胃が痛い……。

先ほど孟徳殿と意気投合してしまったのが、そもそのケチのつきはじめだと思うのだが、一体何が悪かったのだろうか。

回廊を皆とぞろぞろ歩いていた時には、上司殿から「アンタ、孟徳様に寝返るつもりじゃないわよね？」と鬼の目でわき腹を小突かれ、玄徳殿には「もう一緒にいられないの……？」と、涙目で衣服の裾を掴まれ、正直気が気でなかった。

流石の上に立つ者への好感度だけで、はいはいと所属を変えたりは

しないよ、それがし……。すぐに所属を変える者は、転職の面接でひたすらなじられるのだ。それがしは詳しいのである。

いや、実を言えば、確かに孟徳殿のことは希有な御仁だと思った。素晴らしいお人だと思われた。

だって、まさし君について共に語り合えるのである。これは非常に大きい。

大きいと言えば、小振りな割に何故か大きな母性が感じられたのにも大層驚かされた。

一瞬、自分を抱きしめているものは小さな母性ではなく、よもや大きな臀部なのではないかと疑ったほどだ。臀部に抱きしめられる……。自分で言っていて、何言ってるかわからんな……。

確か、ああいう居心地のよさを“ばぶみ”というのであったと記憶している。まさし君はやっぱり言葉を知っているなあ。

とにかく、それがしの好感度を表にしてみるならば、以下のようになるだろう。

#### 【玄徳殿】

それがしに対する優しさ……天元を突破した太陽の如く柔らかい

母性……広大な大洋の如く柔らかい

それがしの好感度……紛うことなき我が主柔らかい

#### 【孟徳殿】

それがしに対する優しさ……ゆりかごの如きばぶみ

母性……さながら臀部の如きばぶみ

それがしの好感度……かけがえのない我が同志ばぶみ

#### 【上司殿】

それがしに対する優しさ……三国一素晴らしいの一言（絶対に服従する所存であります）

母性……三国一の美少女軍師に相違ない（絶対に服従する所存であります）

それがしの好感度……上司殿への服従は絶対遵守事項なのであります

以上を鑑みれば、それがしが玄徳殿のもとを離れるなどあり得ないのである。あと上司殿も怖いし。あのわき腹の小突き方、的確に急所をぎりぎりしてほんと痛かった……。

それにしても、初対面の孟徳殿ぼつみに対し、話があっただけで「かけがえのない我が同志」って、それが少しちよろすぎない……？

そんな生来のちよろさがにじみ出ていたのだろうか。それがしがいくら「誤解でありますぞ。弁解の機会を！」と主張しても、玄徳殿たちの猜疑心は中々払拭できなかつた。

まさし君曰く、多数の”ひろいん”が猜疑心を抱いた状態を、”爆弾が並んだ状態”と呼ぶらしい。

誰かの”爆弾”を破裂させると何故か他の”ひろいん”にまで嫌われてしまうようで、「やはり、ヤンデレ幼なじみはコスパ大正義やな。バイノーラル最高なんやな」と強く主張していたことを、昨日のことのように覚えている。

何で幼なじみだと大丈夫なんだろう。というか、まさし君って幼なじみいたのかなあ……。

とにかく、”爆弾”を破裂させぬ為には”ひろいん”のご機嫌を取らなければならぬ。姫様に接するかのごとく、かす傳かなければならぬ。

だから、それがしは道中、もう必死にお二人に対し忠節を誓った。

お二人の魅力を、西王母のような古代神話を引き合いに出してただひたすらに熱く語り続けた。

こうしてようやく上司殿の機嫌が直り、玄徳殿のお顔に笑顔が戻られ、ようやく人心地がついて「よおし、これからがんばるぞい」と会談に臨んだところで、

「皆さんぐめんなさい！ 私たち、軍功は要りません！ 天和ちゃんたちが罪に問われないなら、後は皆さんで調整してもらえればな〜って、思います！」

次なる”爆弾”が会場の下座より投下されたのだ。

……ちよつと待って、それがしまだ心の準備ができていないの！

元は名のある高僧が住んでいたであろう、白壁と木目色の柱で作ら



れた落ち着いた一室に可愛らしい玄德殿のお声は実に良く響いたものであった。

「は？」

席を囲む参加者の低いお声もまた、実によく響いたものであった。西日よけにと窓際に吊るされた白布が、外から迷い込んだ風を受けて、ゆらゆらと揺れる。

下座を立って、深く頭を下げる玄德殿の短袴もひらひらとしておられる。

白布の前に直立していたそれがしは、「ああ」と嘆いて天井を仰いだ。

玄德殿は真心に溢れたお方ではあるが、いかんせん口が上手くない。何事もまず、大事だと思つたことから口にしてしまう。

つまり、脈絡というものが欠けやすいのである。

恐る恐る見回してみると、参加者一同は皆が皆一様に目を見開いて絶句しておられた。

「劉備さん……う？」

席順の近い北郷殿。その補佐として壁際に起立している関雲長殿、諸葛孔明殿はこちらの発した言葉の意図を測りかねておられるようだ。

「えつと、桃香……う？」

公孫伯桂殿。壁際組の趙子龍殿。このお二人は、話が違ふという困惑がありありとお顔に出ておられた。

孫伯符殿は……、あれ？ 何時の間にもやらないぞ。張子布殿が頭を抱えておられるあたり、何かあったのかも知れぬ。

上座の盧子幹殿は驚きつつも、静観。

次席の孟徳殿と傍に控える元讓殿、妙才殿は――、

「おい、それがし」

「は？ え、あいでもででもででで？」

気づけば、それがしの頭は間合いを詰めてきた妙才殿によって小脇にすっぽり抱え込まれてしまっていた。

「……話が違ふよな？」

絶対違ふよな？

私の苦労は水の泡か？

無

駄だったのか？ んん？」

的確にこめかみをぐりぐりとされて、ひたすら痛い。いや、痛さの中に、耳のあたりから感じる柔らかさがあり、とても矛盾した快楽を感じる。

「桃香ちゃん、あなたのやったことは人に評価されて然るべきものだと風鈴思うのだけでも……、ご褒美だってもらえるのよ？」

「はい！ でも私……、決めたことがあるんです」

上座の子幹殿と下座の玄德殿が静かに見つめ合う中、壁際族のそれがしも、ちらりと横目に見える妙才殿の豊かな母性に抗おうとしていた。否、ちらちら見ようとしていた。

だって、これは抜け出せぬ。痛いけれども、抜け出せぬ。

そんな煩悶から解放してくださいなのは、いつものように頼れる上司殿である。

「……ちよつと放してくれない？ 夏侯妙才。今から事情は話すから」

「ムッ」

名残惜しき感触から解放された後、それがしは上司殿に引っ張られ、尻を抓られつつも玄德殿の席へと近づく。

「桃香」

「う、うん」

気持ち先走っている玄德殿を、上司殿は見守ることに決めたようであった。

玄德殿は大きく深呼吸し、席を立ちあがっては会場の皆に宣言される。

「私、”商人”になろうと思うんですっ！」

「はあっ!？」

これには何故か剣牙殿御一行がぎよつとされる。何だろう……。彼らの様子は当てが外れたというか、出鼻をくじかれたと言った風にも見える。

「ちよつと待ってくれ、桃香。商人って物を売り買いする、あの商人か？」

まさかと念を押す伯桂殿に、玄德殿は決意を込めた表情を返される。

「そうだよ、白蓮ちゃん！ 私、”みんな”のためにこの大陸をまたにかけた商売をやってみたいの！ だから……、本当にごめんなさい！」

シンと沈黙が会場を支配した。聞こえてくるのは、ただ風にそよぐ衣擦れの音だけである。

彼女らの困惑は、それがしにも良く分かった。

何故なら、商人とは要するに利をひたすらに追い求める存在という社会通念があるからだ。

ただ富と権勢を求めるならば、ここで軍功を足掛かりとして官職をもらっておいした方が明らかに得である。

上手く県令以上の官職を得られれば、税の徴収権だって自由に行使できるのだ。ぽっと出の商人などでは得られぬ安定した収入が得られるというのに、それを玄德殿は蹴ると仰った。そして何故か、頭を下げてすらいる。

理屈が合わない。損をしてまで、我々に何を求めているのか。そういった顔を、皆がしておられた。

「おい、俺じゃない方」

「何だよ、俺の偽物」

「……こんなルートやったことあるか？」

「知るか、馬鹿。原作から外れたんじゃないやねーの。誰かさんのせいで」

「お前のせいかな」

「お前のせいだろ」

「お前ら喧嘩はやめろよ。……んで、どっちが剣牙なの？」

壁に背を預けて、一様に絵になる仕草を保っていた剣牙殿御一行は、釈然としない面持ちで神速の殴り合いを始められた。おお、こうなるのか。まあ、（互いが自分を元祖と思っていれば）そうなるよなあ。

「劉玄德——」

それがしが剣牙殿たちの戦いの行方を眺めていると、孟徳殿が鋭い

目つきで口を開かれた。

まるで挑むような口ぶりだ。

最早、和やかに会談を行う雰囲気ではない。彼女は静かに席を立ち、ずかずかと玄德殿へと近寄り、上背のある玄德殿を睨み上げた。「今日の会談は、各自の功績を確定するためのものだった……。それはひとえに今後の政治的な関係を調整したかったからではなかったの？」

「……はい、勿論私としては皆と仲良くできたらと思っています。でも、手柄は要らないんです。だって——」

「協力とは……、互いに利害が一致して、はじめて成立するものでしょう」

孟徳殿はかぶりを振って、玄德殿のお言葉を遮る。

「それは何故か？ 利害によつて相手の出方が明確になるからよ。協力すれば、得になる。翻意を決めれば、損をする……。楔を打たぬ協力関係など、誰が信じられるものですか。皆が同道している時に、一人だけ損得抜きでつきまとう者に対して、私の抱く感情は一つのみよ。つまり——、胡散臭い」

一氣にまくしたてる孟徳殿の顔は、先ほどそれがしに見せた慈母の如きソレとは一線を画した激しいものであった。

延々と殴り合っていた剣牙殿たちですら、息を呑んで黙ってしまうほどの圧力を孟徳殿から感じる。誰だ、ばぶみとか言った奴は。すごい怖いぞ。

「えと、えと……、ほんとに私たちには手柄が必要ないんです。だって、その方が”みんな”にとつて、天下にとつて良くなるはずだから——」

「”みんな”。”みんな”、ね……」

「あの、孟徳さん！」

孟徳殿は冷たい声で呟き、玄德殿の呼びかけを無視しては子幹殿へと向き直る。

「……どうやら、劉備は今回の手柄をこの場にいる”みんな”に譲ってくれるそうよ。功を出し抜かれたのは業腹だけれども、彼女が手柄

を要らないというのならば、それを否定することもないと思うわ。どうかしら、將軍」

「ええつと……」

「北郷も伯桂もそれで良い？」

子幹殿が困ったように頬を撫でている間にも、孟徳殿は自らが主導して北郷殿や伯桂殿へ同意を求める。

もう完全に、玄徳殿をいない者として扱う腹積もりのようだ。

「みんな、ごめんなさい……」

ううむ、胃が痛い……。我々と会談参加者の距離が遠ざかっていくかのような錯覚に陥る。

何がきついつて、”多分こうなるだろうと予想していた”からこそ、玄徳殿のお気持ち伝わってきってしまうのだ。

今朝がたのことを、それがしは思い起こす。

大商人、張世平殿との駆け足の交渉を終えて、この地へと戻ってきた直後のこと。

騒乱の首謀者たる馬元義殿と刃を交わす前のことである。

『はつきり言って、今からだは無礼は避けられないわ』

と、前もつての打ち合わせで上司殿は利害関係に厳しい孟徳殿が気分を害される可能性を示唆しておられた。

故に一案として、参加者のお気持ちを逆立てないよう、徹頭徹尾に弁の立つ上司殿が名代として演説することも考えてはいたのだ。

だが、玄徳殿はあくまでも自分の言葉で決意を表明したいと仰られた。

『でも、筋が通らないから。本当なら私が率先して謝らないといけないんだよね？』

それがしは玄徳殿の口から、「スジが通らぬ」などという乱暴な言葉が出てきたことにまず嘆いて、次に彼女の決心を大いに褒め称えた。

何故なら、彼女にとって今回の会談は終点ではないからだ。いや、そもそも出発地点ですらないのかもしれない。

大した意味がない、とは言い過ぎかもしれないが、玄徳殿の気持ちの整理さえつけばそれでいいのだ。

だから、謝って気が済むのならばそれで良い。

もう、我々のすべきことはつきりと定まっているのだから。

我々がこの場に出席したのは、あくまでも謝罪をするためなのだ。

孟徳殿や、伯桂殿に対して、前もって詰めた協力関係を突然反故にしたことへの謝罪である。

本当ならば、関係者が動き出す前に「やっぱり無しね」とお断りの連絡を入れたかったのだが、生憎と時間がなかった。

ぎりぎりまで諸侯と協調して今後も力なき民のために何らかの活動を続けていく路線を捨て去ることができなかつたともいえる。

そのせいで、玄徳殿に余計な悲しみを背負わせてしまったことについては……、はなはだ心苦しく思っていた。

「ううむ……」

どうしたものかとそれがしは唸る。

今後のことを考えれば、本当はこのまま静かに退出した方が良いのだが……。

「子遠」

上司殿に小突かれて、思いなおす。

だって、”ひろいん”に悲しい顔は似合わないのである。

「おっほん。いや、これで万事丸く収まりますな。後は我々も頭を下げてお仕舞いです。お疲れさまでした、玄……、いえ、桃香様」

それがしは悲しそうにしておられる玄徳殿に対し、努めて明るい声で労いをかけることにした。

「子遠さん……」

上司殿のお墨付きなのだ。今回ばかりは鋸も手厳しいツツコミもやっつてこない。

代わりに孟徳殿たちから怒気を叩きつけられることになる。

「何じゃ、その茶番は……」

とは張子布殿の言である。

確かに第三者の視点に立ってみれば、我々の言動は周りを虚仮にしたものには聞こえないだろう。

当事者たる妙才殿や元讓殿に至ってはあからさまに敵意の混ざっ

た眼で睨みつけてきていた。

これは、今までの友好関係も水泡に帰したかな、と他人事のように思う。

……だが、仕方ない。

これから我々がしようとしていることは、はつきり言つて間近に迫る乱世に、真つ向から喧嘩を売るに等しい所業なのだ。

下手をするとこの場にいる英傑たち——、乱世を利用して成り上がらんとする方々にとって我々は目障りな存在と化すかもしれない。

だったら、ここで関係が切れたとしても、余計な情報を与えずに立ち去った方が利口というものではないか……？

などと自己完結していると、ふと孟徳殿と目が合った。

こちらの考えを見透かさんとする、矢のように鋭い目つきである。

「——何を企んでいるの。呉子遠」

「企み、でありますか……」

それがしは返答に窮する。

他の面々を見ても、明らかにこのまま静かに立ち去ることができない雰囲気だ。

それがしは彼女らへの対応を決めかねて、我が主たる玄德殿を見た。彼女が心配そうにそれがしを見ておられる。が、それだけだ。

ただ見つめてくるだけで何かを仰る様子はない。まつげ長いなあ。

それもそうかと納得する。なにせ玄德殿というお方は大志を抱くことはできても、目の前の処世術には長けておらぬのだ。

困ったそれがしは、頼れる上司殿にもどうしたものかと目で問う。たすけてー。たすけてー、と。

「……何よその目つき。視姦？ 視姦なの？ほんとそれ止めて頂戴。いくら私が三国一可愛くても、時と場所すら選べないなんて、エロザル過ぎて笑えないんだけど……」

すると予想はできていたのだが、ものすごい勢いで流れ矢がぐざりと飛んできた。

……全然痛くないよ。全然痛くないけど、それがしは心の中で号泣

した。

「ゴホン」

だが、今回ばかりは単なる罵倒では終わらない。

「……元々はアンタの発案でしょ。だったら、アンタがビシツと決めなさい」

何と上司殿から優しいお言葉も返ってきたのだ。

思わず二度見してしまう。上司殿、お気を確かに、と。

彼女はツンとお顔を背けて、苛立たしげに組んだ腕を指でトントンと叩いておられた。

そして、小声で続けられる。

「……孟徳様は時代の寵児。英傑のお一人よ」

「はい」

それは耳にした噂だけではなく、かの『太平要術の書』を見ても分かることであった。

彼女はいずれこの大陸を代表する群雄の一人になるのであろう。

伯桂殿も、北郷殿もそうだ。伯符殿は退出してしまわれたが、多分あの御仁も名が記載されているのではないだろうか。

もう、かの書物は焼き捨ててしまったため、確認などできないのだが。

「そんなお方と私たちは対面しているの。滅多にあることじゃないわ。凡人のアンタなんて……、私たちのこれからを考えると、この場を逃したら歴史に名を残すこともできなくなっちゃうかもしれない。私みたいな三国一の美少女軍師と違ってね」

「ああ、はい」

何となく、上司殿の仰りたいことが分かってきた。

つまり、ここで英傑みたいな歴史に名を残すかっこいい答えを返してみる、ということであろう。

後年、我が国の歴史が何らかの書物にまとめられるとして、取り上げられるほどの問答をしてみせろということであろう。

うむ、うむ、成る程。

うん……。



無理じゃね？

「いや、それは無理——」

「無理じゃない！」

「あいだあッ!？」

焦れつたくなつたのか、上司殿は思い切りそれがしの脛を蹴飛ばしてきた。

それがしは涙目ながらも、これ以上のお叱りを受けぬために孟徳殿や皆さんと向き合うことにする。

かつこいい答え。かつこいい答え……。

……いや、もう口から出任せに徹してしまおう。

高度の柔軟性を維持しつつ、臨機応変に答えていけばいいのである。いける、いける。いけるって。

それがしは咳払いをして、さも知恵者然とした風に口を開いた。

◇

「……我が主、劉玄徳はいわゆる玄鳥の卵を食したのです」

これに対し、孟徳殿が返してくる。

「……『尚書』かしら？ 商王の初代に関わる逸話ね。それで、その故事に何の関係が？」

ぶつちやけた話、特に意味はない。だが、それがしは頑張って続けた。

「商の人々は国が滅びた後に、各地を渡り歩いたと言います。商売を生業として」

「ふむ、それで？」

適当に話している内に、何となく考えがまとまってくるのはいつものことであつた。

玄徳殿をちらりと横目で見る。

彼女は、それがしを信じて疑わないと言った表情をしておられた。

ああ……、これは裏切れぬなあ、と改めて思う。

「大事なことは……。商いとは本質的に公に寄らぬ、民によって行わ

れるものだということなのです」

「……それは当たり前前の話だ。塩鉄論の時代より、軍需物資以外の商売は民間がやるものと決まっている。韜晦とうかいを決め込むのか？」

張子布殿が苛立たしげに口を挟んでこられた。

迂遠な物言いを好かぬ御仁なのだろう。口先だけではない、本物の知恵者によくいる手合いだ。

他の方々もそれがしの演説に耳を傾けておられていた。

しかし、塩鉄論なあ……。

塩鉄論とは、昭帝の時代に市井の物価を安定させるため、桑弘羊そうこうようなる文官が唱えた政策をめぐる論争である。

平たく言えば、塩のような莫大な利益が見込める品物を国が管理するか、民間の商人に任せるかを巡った利権争いであったが、うーん。「軍需物資においても、例えば塩の専売などは既に形骸化しておりますよね」

「何が言いたい」

「これは官塩があまりにも高価すぎて、民草が公を通しては買えなくなってしまう結果、そうなってしまったわけです。もし、安かったのならば、”小麦粉のような何か”など誰も買いません」

恐らくはこちらの魂胆を探っているのだろう。張子布殿からの言葉は、すぐには返ってこなかった。

「小僧の言いたいことはつまり、民を救うために物価を低く抑えたい。そのためにお前たちは商いを志す、と言うことで良いか？」

「はい、その通りであります」

張子布殿がため息を吐かれる。

毒気が抜けたように見受けられるのは、恐らく利害が自分たちと対立しないと彼女の中で納得ができたからだろう。

ゆえにそれがしに対する答えも、自然とぶつきらばうなものになる。

「何だ、そんなことか……。ならば、勝手に商えば良かろう。商品を安く売ってくれるなら、客としては何も言うことがない」

「——待ちなさい」

だが、孟徳殿は解せないと言った風に眉根を寄せて再び口を開かれた。

「……アナタ、何を考えているの?」

「ええとですな……。玄徳殿は、力ない民を救うためにできるだけ多くの品物をできるだけ安く流通させたいとお考えなのです」

で、いいですよ? と玄徳殿に振れば、うんうんと力強く返事が返ってきた。大変可愛い。

「それは、ただ新参として商人の世界に参入するだけではないということ?」

その問いに、それがしは答える。

「今の世は官匪が跋扈し、民の血税たるや朝廷への賄賂へと用いられる始末。かといって、なんとか税を払ったとしても、高騰した物価が民の生活を阻んでおります」

黄巾の連中を思い起こす。

彼らは三姉妹の魅力に取りつかれた面も勿論あったが、それ以上に自作農として食っていけなくなつたため、自分の故郷から逃げだしたという一面も持ち合わせていた。

「暮らしていけぬのならば、どうすれば良いのか。逃げるしかありません。何処へ? 反乱でも起こしましょうか? いえ、もつと安心して暮らせる場所がありません。それは豪族の所有する荘園です。豪族の奴婢にさえなつてしまえば、とりあえずは生きていけますから」

孟徳殿と、子布殿の顔色が変わった。

当たり前である。お二方も今の時世に乗っかり、逃散した民を自らの荘園に囲い込んでいる豪族の一員なのだから。

無論、それを弾劾する気はない。皆がやっていることである。

それこそ、それがしにとつては元の雇い主である何遂高様とて、広大な荘園に奴婢を囲い込んで大規模な畜産業を経営していたのだ。

この国随一の権力者であってもやっているというのに、彼女らだけを責め立てるとするのは筋が通らない。

「えつと。子遠さん、だったわね? つまりあなたたちは自作農の困

窮した生活を助けるために、国中を舞台に商いを始めるということで良いのかな……？」

子幹殿のおずおずとした問いに、それがしは力強く頷いた。

「はい、その通りでありますぞ」

「風鈴としては、とても素晴らしい考え方だと思う。この国の税収は自作農が減ることで減っていくばかりだもの。でも、それは……」

言葉は続かなかったが、うまくいかないだろうと言外に語っておられた。

そりゃあ、そうだと納得する。

何故ならば、我々のしようとしていることは、下手をすればこの国の商人と豪族すべてに喧嘩を売るような所業だからである。

まず第一に、自分たちよりも安い値で商品を売ろうとする商売敵が出現すること自体が拙い。下手をすれば、自分たちの商品が売れなくなる。もし安値に対抗しようとしても、結局は利益が目減りしてしまう。

第二に、今の商人にとって大口のお客様である豪族の意にそぐわない。

豪族は奴婢を囲い込むことによって、農地を広げ、その経済力を強めていつている。奴婢の補給源である零細の自作農が救われることは、翻って豪族の不利益になる。

「だから、我々が商人稼業を始めたとしても、古参の商人や豪族の妨害を受けてとん挫することになる、ということですよね」

「ええ、そう。そういうことになるかな」

子幹殿の表情は暗かった。

このことを認めるということはすなわち、朝廷の政治は機能不全に陥ってしまった……。漢王朝はもう長くないと認めるに等しかったからである。

それがしはそんな子幹殿の鬱屈した感情を吹き飛ばすように、あつけらかんと返した。

「まあ、とりあえずものの試しにやってみます。成功とか失敗は、そういうのは後で考えればよろしいので」

「そんな気軽に――」

「上手くいけば、自作農の減少に歯止めがかかるかもしれないし、そうしたらこの国に起きるかもしれない戦乱を未然に防ぐことができず、我々は事前には常日頃世話になりっぱなしの張世平殿に相談してみることにしたのだ。」

自信こそなかったが、勝算がないわけではなかった。

流石に単なる思い付きに愚連隊の皆を付き合わせるわけには行かず、我々は事前には常日頃世話になりっぱなしの張世平殿に相談してみることにしたのだ。

これって無理筋か？ と。

すると、彼は傍目には悪党じみて見える贅肉を揺らしながら答えてくださった。

『多分お志をそのまま叶えるというのは難しいと思いますが、万が一成功すれば非常に面白うございます。玄徳様のためならば、この私も一肌脱ぐ覚悟ですよ』

無論、世平殿にも打算はあるのだと思う。

上手く立ち回れば敵対する商人を圧倒することができ、今よりも幅広い商売が可能になるはずだ。

それに計画がとん挫したとしても、玄徳殿を旗頭にした強大な商人閥を作り上げることができる。

それでも別にいいのだ。

それがしにとって、重要なことは唯一つ。玄徳殿の笑顔を曇らせないこと、それだけである。

そもそも玄徳殿は戦というものがお嫌いだ。

できれば、敵対する相手とだつて戦わずに話し合いで揉め事を解決したいと思っておられる。

ならば、いつでも戦から逃げ出せるよう、なるべく土地には縛られない方がいい。

官職なんて以ての外だ。要らないところに責任が生じてしまう。

玄徳殿はお優しいし、何よりも大きい(器がだよ?)。周囲の期待に對し、さながら英傑のように振る舞うことだつて可能であろう。

でもそれは、ともすれば彼女自身の望みを押し殺した形になってしまいかもしれない。

少なくともこの世界では……、貂蝉殿の仰る所の外史においては彼女が彼女のまま、のびのびと暮らしていたって罰は当たらないと思うのだ。

そのための努力ならば、怠け者のそれがしではあるが、前向きに善処させていただく所存である。

だからこそその商人であった。

上手くいけば、困窮した自作農を豪族たちの戦に巻き込まれぬよう、戦のない土地へと逃したりもできるだろうし、わりかし良い案だと思っただよなあ。商人として生きるのは。うん。

「あのっ」

それがしが一人で納得しているところに、孔明殿が声をかけてきた。

「玄德さんたちが商人になるとして、その、規模はどれくらいになるんでしょうか？」

「え、規模、ですか……」

どうなるんだろう……。そういった細かいことまでは考えていなかったぞ。

ええと、世平殿の商家に愚連隊が合流するとして……。他には……。

「人手だけなら、5000を超えた程度よ。元手については協力してくれる商人との兼ね合いもあるから、今は詳しく話せないわ」

それがしがまごついていてるところに、上司殿が助け舟を出してくださいました。

いつもいつもありがとうございます、上司殿。それにしても、5000を超えるのか。

て、多くね……？

孔明殿も同じことを思ったようで、

「しよ、商品を卸す場所というのは決めているのでしゅかつ？」  
と思いの外、えらい食いつきを見せてきた。

なんだか、予想外の展開である。

正直、それがしとしては当座を凌ぐことと玄徳殿が不自由にならぬよう、無い知恵を振り絞っただけであり、細かい展望までは良く分からない。

商品を売る場所に何か問題があるのだろうか？

商品が品薄の場所に、売りに行くとかでは駄目なのん……？

それがしがぼけっと思考していると、やたら真剣な顔をされた孟徳殿がこちらの出方を探るように仰った。

「アナタたちのやりたいことというのは……、とどのつまりは朝廷の財源を確保しようということよね？」

「んお？ ええ、はい。自作農の逃散を防ごうと言うのですから、結果としてそうなるんじや、ないかと……。一応」

「成る程……」

孟徳殿が何か静かに考え込んでおられる。

何を考えておられるのだろうか。気になって仕方がない。

「商う品は、既に決めているの？ 主に巡回する地域は？ 利益は出る見込みがあるのかしら？」

「え、いや、あの」

矢継ぎ早に質問が飛んできて、それがしは何やら風向きが変わったことを感じ取った。

これは……、我々のやろうとしていることに何かしらの利を見出したと言うことなのだろうか？

そろそろ自身の手之余ってきたため、それがしは上司殿に助けを仰いだ。

たすけてー。たすけてー、と。

当然ながら、上司殿は呆れ顔であった。

「ほんとアンタって、肝心な時に締らないのよね……」

「申し訳ない」

「ま、いいけど……」

ため息をつき、上司殿がそれがしと応答役を交代しようとする。その時、

「あ、あつ。はい！ はい！ 孟徳さん！ 扱ってみたい品物ならあります！ 私、あるのっ！」

事の成り行きを神妙に見守っておられた玄德殿が突如手を挙げては澆刺に声をあげられた。

そのあまりの勢いに、孟徳殿は顔をしかめながらも問いかける。

「劉備、玄德……。一体、何を取り扱ってみたいと言うの……？」

「外”の品物っ！」

「外”……？」

「そう！ 私、中華の外と貿易がしてみたいんです！」

まさかの答えには孟徳殿をはじめ、会談の参加者全員が仰天してしまった。

中華の外って、騎馬民族とか騎馬民族とかああいう人たちのことだよね……？」

え、できるの、そんなこと？

それがしの中では、えらい物騒な連中が積み荷に襲い掛かってくる光景しか思い浮かんでこないんだけど。

孟徳殿もそれがしと同感であったのか、何やら複雑な面持ちをしておられた。

「異民族との貿易……。それは確かにやり方次第では莫大な利益を生むことになるわ。でも、危険も伴う。アナタが、そんな博打をしようという動機は一体何？」

先ほどまで無視をされていた相手と向き合えたことで、玄德殿の眼には安堵の色が窺える。

そのせいか玄德殿は真摯に、孟徳殿を見ながらゆつくりと語り始めた。

「うん。私も匈奴の人たちのことは聞いてるし、確かに怖い人たちなのかもしれないけど……。でも私、実際に会ったことはないから。それに……」

「それに？」

玄德殿が言う。

「ずっと付き合いのないまままで喧嘩になっちゃうよりも、普段から仲



良くしておけば、喧嘩にもなりにくいと思うんだけど。違うのかな？」

……ああ。

これが玄德殿だなあとという感想しか湧いてこなかった。

諍いになることを怖がるよりも、まずは一度接し、同調を試みる。理解しようと努力する。

そんな彼女だからこそ、それがしは離れようとは到底思えないのだ。

尊敬ができ、心配が絶えず、見ていて和んで仕方のない——、そんなお方こそが劉玄德その人なのである。

彼女の言葉を聞いた孟徳殿は、まるで鈍器で殴られたかのようによろめいていた。

「アナタの、その視野は——」

「はい——」

こころなしか声を震わせ、孟徳殿が問いかける。

「アナタの視野は……、本当に、アナタ自身のものなの？」

ちよつと謎々すぎて、それがしには良く分からない問いかけであった。

上司殿はといえば、その意味するところが理解できたようで、静かに目を閉じ、玄德殿の答えを待つておられる。

玄德殿はしばし考え込み、こう答えられた。

「私の視野って、考え方のことですか……？　だったら私だけのものってないのかもしれませんが」

玄德殿がこちらを見る。やけに熱っぽいまなざしにどきりとさせられた。

「私は義勇兵団を立ち上げるときに、子遠さんの言葉に感動したから、義勇兵団を立ち上げよう！　って気になったんです。私の発想じゃありません」

次に上司殿を、彼女は見た。

「商人の人たちと一緒にお仕事をし始めたのも、桂花ちゃんや他の皆の意見があったからで……。勿論、中華の外側へ行ってみようとも、

自分だけじゃ考えもしなかったと思います」

そうして再び、孟徳殿を彼女は見る。

「私だけじゃ何もできません。孟徳さんは一人でたくさんことができる英雄かもしれないですけど、私は英雄じゃありません。成れませんし、成れたとしても成りません」

静かに息を吸い、彼女は吐いた。

「私、みんなと同じ、何者でもない誰かです。成りたくないから、私は”成らず者”でいたいんです」

——成らず者でいたい。

そんな彼女の真摯な答えを聞いて、孟徳殿はただ静かに目を閉じた。

「それでもアナタは……」

う、うーん……。

お二人のやり取りに、ちよつと身震いすら覚えたけど、玄德殿。

ならず者の使い方間違ってるよ……。誰だよ、間違った意味教えたの。

三国一の愛天使の一角がならず者とか、それがし絶対許されざるよ……。

まあ、でもとりあえず……。

この場は何とか凌げたので、良いのかなあ？

## 最終回 劉玄徳の足跡を読む。

『私一人では何もできない——。英雄になんて成りたくない』  
『孟徳日記』に見る劉備玄徳のこの発言は、今こうして”冬混みけつと”に参加しようとはるばる上海県にまで足を運ばれた歴史愛好家諸君にとつては、意外な発言に思えるかも知れぬ。

何故なら、諸君の知る劉備玄徳とはまさしく英雄の中の英雄……。黄巾賊の騒乱が起きた際には並みいる諸侯に先んじてこれを鎮圧し、権力者との伝手を生かして、あれやこれやと大陸有数の大商人にまで立身出世した人物であるからだ。

ゆえに筆者は『孟徳日記』の記述に眉唾ものの気配を感じ取った諸君等の歴史感覚を否定しない。

諸君等の思い描く劉備像と『孟徳日記』から伺える人物像がかけ離れている以上、その疑念はごくごく自然なものなのである。

かくいう筆者も、南京の大図書館でこの記述を初めて目にした時には首を傾げたものであった。

「英雄を志していなかったと……？　んなわけないでしょ。よしんば真実であったとしても、この発言は商人特有の、ただの謙遜に過ぎなかったはずよ。やっぱり、この史料は偽書だったのかしら」と。

さて、勉強熱心な諸君等の中には、ここで劉備に関する人物像を示している史料を根拠としていくつか思い浮かべておられるかもしれない。

例えば、我々にとつて読んでいなければ”にわか”呼ばわりされてもおかしくはない聖書——、『三国志』には劉備玄徳についてこう記されている。

劉備伝曰く、『彼女は幽州涿郡、樓桑里の生まれです。匪賊の討伐に功があつて、英傑たらんと大志を抱いて商人になつたのです。当初は塩の密貿易に手を染めて糊口をしのいでいたようですが、折り良く黄巾の乱に功を得て、ご主人様と曹操の庇護のもと、真つ当な政商としての道を歩み始めることになりました。ご主人様への媚びの売り方は常々気にいらねーですが、そんなやくざ商人も笑顔で懐へ入れてし

まうご主人様の何と素晴らしきことか。やくぎ者集団の姫、略して賊さーの姫を更生させたのは、ひとえにご主人様の徳によるものですよ。ご主人様、マジご主人様」と。

『三国志』の作者である陳寿は蜀漢の文官であり、決して公平な立場から物事を叙述しているわけではない。

だが、丸つきりの嘘偽りということもなからう。

後年の歴史家である裴松之はいしようしも、劉備伝の注釈にこう書き残している。

『北郷キチなクソ婆の偏向記事ですが、一応同時代人の史料として無碍にはできませんわね。また、魏帝の事跡もきちんと記述されていることから、恐らく劉商聖君のくだりについてはある程度信頼できるものと考えられます。けれども……、この記述はむしろ魏帝が主導になって、北郷某がそれに追従したのだと解釈した方が自然ではないでしょうか？ 何故なら、燕雀では鴻鵠の志を知ることにはできないからです。確かに劉商聖君は私財をなげうち、民の困窮を救いましたわ。これは多くの儒者が指摘するように北郷の目指す徳を専らとする政治に近いものがあると私も認めましょう……。しかしながら、彼女は決して自己犠牲には走らなかつた。冷徹な計算によって、人心の掌握と自勢力の拡充をはかったのです。思うに、魏帝と劉商聖君は己が領分を認めあい、乱世を平らげるために政と商の両側面から手を取り合うことにしたのでないでしょうか？ そもそも男なんか魏帝を差し置いて……』と。

この二つの記述から分かることは、劉備玄德という人物が「やくぎ者を戦力として抱えていた新進気鋭の武装商人」であり、「人心掌握術に長けていた」ということである。ここに各地に残された逸話や北郷一刀との関係性をもって、後世の儒学者が「慈愛の人」という属性を付け足した（ご存じの方も多からうが、劉姓であることと、儒家の名門、荀家の娘が付き従ったことから、劉備という人間は儒学者人気がすさまじいのだ）とするのが、通説的な見方と言えよう。

大陸の津々浦々にある華人街に建てられた劉聖像などはまさにこうした人物像をごちやませに、大袈裟にした形で作られている。

意志の強い瞳や弁が立つ不敵な口元が特徴的な美女であり、“めいど服”や“対魔忍こす”、奇妙な獣耳の頭巾を豊満な肉体に纏いながら優しげに両手を差し伸ばしている……、と改めて冷静に考えてみると、なんというか怪しい宗教の教祖を思わせる見てくれだ。

間違つても「私という人間は駄目駄目だ。英雄になんかなれない。というかなりたくない」などと弱音を吐くような人物には見えない。そう……、通説に則るのならば、『孟徳日記』の記述はおよそ信じられるものではないのである。

それでは、何故筆者が『孟徳日記』の記述を認めようという気になったのか？

理屈でいうなら最近発見された魏帝陵墓の副葬品に、『孟徳日記』の筆跡や作風と酷似した詩文が紛れ込んでいたことが一つにある。

文人としても高い名声を誇る曹操は、“摩佐史調”と呼ばれる独特な作風を得意手の一つとして修めていた。

別名“びびる調”とも呼ばれる、この時代性を越えた珍妙な詩文の作り方は、三国鼎立期以前にもそれ以降にも存在しない希少なものだ。

この希少性のある作風に則った詩文が陵墓より発掘されたことから、陵墓自体も本物であろうと比定されることになった。そして、同時に“摩佐史調”詩文の散りばめられた『孟徳日記』の信憑性をも高めることにつながっている。

もう一つには、権力者によって作られた国史ではどうしても歴史の潤色を払拭することができないという、歴史学の新しい観点が挙げられるだろう。

昨今、個々人の日記のような古記録を好んで取り扱う若手歴史家が増えてきたのは、このような学術的風潮があり、筆者も彼らを大いに支持するものである。

だが……、ああだこうだと理屈を重ねても、これらの理由だけでは筆者が『孟徳日記』の記述に惹きつけられてしまった理由としては十分足り得ない。

だって、白状すれば……、一番の理由は“ろまん”によるものなの

である。

”弱気で凡人な劉備”という人物像に、ある種の”ろまん”を感じてしまったからなのである。

歴史とは、例えるならば現実を起こったある一場面を画家が絵画に描き写したようなものであり、そこから真実を論じようとすることはすなわち、井戸を見て大海を論じるようなものなのだ。と筆者は考える。

たとえ幾つもの絵を切り張りしたとしても、情報の脱落を防ぐことはできない。完璧な歴史真実を再現することは不可能なのだ。

だからこそ、筆者は断言しよう。

歴史の真実とは個々人によって差異があり、決して一つではありえない、と。

お堅い歴史の見方がある一方で、美少年や美青年や美中年が赤裸々に裸と裸のお付き合いをしていたっていいではないか。

推し面や推しかっぷりんぐについて語り合ってたっていいではないか。

歴史の”ろまん”は大事だということを、「現実をああだこうだ」と視野狭搾に南京の大学でふんぞり返っているクソ爺どももよくよく理解すべきだと思いました。そして、私の執筆した論文『三国鼎立期前夜における華北地域にみられた男色の民族学的考察』に目を通すべきだと思いました。まる。

さて、本来ならばこのまま劉備とその周辺にまつわる話を長々と書き連ねていきたいところなのだが……残念ながら今回はここで筆を置こうと思う。

いや、正直な話、締め切りに間に合わなかったのだ。何とか”冬混みけつと”の期日に間に合わせようとしたのだが、七日間も徹夜をしたというのに全く終わりが見えなかったのである。

一昨年までは印刷屋さんの前で雪の降る中、ぎりぎりまで書き続けるという裏技が使えたのだが……、昨年になって我々に理解のある印刷屋さんが汚職官僚の手によって店じまいを余儀なくされてしまっ

た……。筆者は権力の犬を絶対に許さないよ。

というわけで、続きは”夏混みけつと”での刊行を目指すとして、歴史愛好家諸君等にはどうか未完成の拙作でお許し願いたい。

お詫びにと言っては何だが、ですま八日目の早朝に見えた奇妙な幻覚のことを付録として載せたいと思う。

——あれは筆者が目に隈をこきえて、原稿を枕に意識を失いかけていた時のことであつた。

梁山の頂きより東方、朝日の差し込む窓辺の向こう側に、やたら不気味な筋肉ハゲが宙に浮かんでいたのを目撃したのである。

私はとっさに彼に向かって叫んだ。

『よもや、貴方は男色の神様ですか!?!』

朝日が眩しくて良く分からなかったが、ホモ神様は困つたように笑われたように見受けられた。

『ああ、うん……。やっぱり、私に時間というものは意味をなさないケド、すごく懐かしい気持ちになるわねん。実はアナタに時空を越えた贈り物があるのよん』

私は狂喜乱舞してホモ神様に願つた。

『ついにこの世が腐海に沈むのですか!?!』

『いえ、とある歴史の一場面を傍観者として鑑賞させてあげようと思うのよん。けど、完全な再現は不可能だし、あまり長い時間は見せてあげられないわん。宋江ちゃんか、呉用ちゃんがアナタを起こしに来るころには覚めてしまうようなものねん』

私は知人の名を出されて不機嫌になつた。新参者の淫乱桃色駄肉な親戚も、”出たら負け軍師”のへたれ男も、現実というものはいつでもクソである。

ゆえに私が不貞寝をしようとする、ホモ神様は仰つた。

『あの北郷一刀様にも当然お目にかかれるわよん。とつてもイケメンなんだから』

『是非とも、是非とも私を桃源郷へと連れ去ってください』

瞬間、筆者の意識は暗転し、梁山ではない何処かへと瞬時に跳躍す

ることになった。

◇

まず第一に飛ばされた場面は、何処かの関所前であった。

「——狂夜よ。本当に行くのか」

見れば、伸ばし放題の銀髪を一つに縛った美男子が二人、曰くありげに見つめあっている。

どちらもいけめん、瓜二つ。双子かな？ お揃いかな？ 私は「やったぜ」と乱舞しようとしたが、生憎と私の身体は消え失せてしまっているらしく、みじろぎも、鼻血を噴くことも、彼らに頼ずりすることもできなかった。

「——くどいぜ、剣牙」

美男子の一人が嘲るように笑った。端から見れば鏡写しのように見える二人であったが、私には容易に判別がつく。狂夜の方が、アホ毛の数が違うのだ。それに声も違うし、八重歯の数も違う。判子絵とかいう言葉を好んで使う盲目どもは絶滅すべきだと思いました。まる。

《挿し絵省略・筆者による狂夜と剣牙の人物画》

狂夜は背中に提げた大剣をがちやりと鳴らし、街の見える方を睨みつけた。

「曹操はもう駄目だ。俺の価値が分かってない。それに劉備と手を組むのも論外だろう」

「……お前の価値といってもなあ」

剣牙が困ったような顔つきになる。

話の流れで彼らが曹操の飼っていた美男子であることは容易に想像が付いた。良い感性をしていると曹操の肩を抱いて誉めてやりた

い。「あれこれ考えたが、ようやく理解できたぜ。これは“魏ルート”じゃない」



「ああ、まあ確かにこんなルートはなかったと思うが」

狂夜はさらに力説する。

「未来知識で自勢力の超強化。ハーレムルートが解禁されないってことは、歴史の修正力が働いてるんだと思う。だから、俺は勝つ予定の勢力を探すことにするさ」

「それな。俺も色々考えたんだが、ハーレムはやっぱ無理じゃないか。こう、競争率的に」

剣牙の反応に、狂夜の表情が赤黒く染まった。

「倍率とか競争率とか、運ゲーとか、ハーレムエロゲだろうが、これは！ エロゲってのは物理的にも精神的にもポルノでなきゃいけないんだよ。ちよろくないヒロインに必要なかねえ！ 適当な努力で適当なハーレムで、それに適当に叩ける雑魚がいてこそそのエロゲだろうが！」

「いや、俺、アンチ嫌いじゃないけどそれ以上に純愛二次SS派だったし」

「そうか……」

「そうなのよ」

気まずい沈黙が二人の間に流れる。単語のいくつかは良く分からなかったものの、“ちよろさ”が大事ということについては大いに納得できた。

最初はイヤだイヤだと拒否していても、その内攻め手の手練手管に「あへあへ」と言い始める様式美こそが大事なのだ。

「俺の〇〇はどうだ！」と必殺技が繰り出されれば、食らった相手が「悔しいが感じちやう……！」と返す伝統芸能こそ尊いのである。

それをいつまでも「あへあへ」と言わないとか、マグロにも程があるろう。現実をさておき、そんな物語は私が決して許さぬ。

「……とにかく、董卓包囲網が始まるまでが勝負だ。俺は行くぜ」

「ああ、董卓包囲網で勝つ勢力が恐らく正解ルートだ。とりあえずは、呉に行ってみるさ」

剣牙は納得しがたいといった表情を浮かべ、狂夜に問い。

「それなんだが、仮に呉が董卓包囲網で勝ち組になれたとして、その後はどうするんだ」

狂夜は何を言っているのかと目を丸くして、これに返す。

「何やかんやで、うはうはだろ」

「何やかんやで、うはうはか」

「ああ」

気まずい沈黙が二人の間に流れる。一見浅慮なようにも思えるが、私は狂夜を否定しない。物語の主人公というのはそれでいいのだ。彼は主人公顔だから、必ず報われる。新天地で勝ち組に加わった暁には必ず、理想の美男子に尻を貫かれることだろう。

「……じゃあな。お前は成立しない魏ルートでいつまでもくすぶっていろ」

「俺だって、この世界が魏ルートじゃないことは分かってるんだけどなあ」

「なら、何でまだ陳留にいるんだよ」

剣牙は言いにくそうに、これに答えた。

「目当てをゲットできそうにないのは確かなんだが……、あの”オリキャラ”に『また明日ツス』と言われてる内は、何か踏ん切りがつかないんだよ」

狂夜は小馬鹿にするように鼻で笑い、無言でその場を立ち去った。

狂夜の背中が関門の向こう側へと行ってしまったところで、剣牙はぽつりと呟く。

「アイツ、多分一生童貞だな……」

処女は早々に喪失することが決定しているため、私としては願ってもないことであった。

◇

形容しがたき満足感のある内に、私の意識は次なる場面へと旅だった。

そこはどうやら、何処かの兵舎であるようで、美髪の女武人や帽子をかぶった文官らしき少女、”めいど服”に身を包んだ少女など、

様々な美少女たちが一人の男性を囲んで、不安げな表情を浮かべている。

囲まれていた男性の姿を見た瞬間、私の胸は高鳴った。

見てくれ自体は凡百より多少優れている程度。先ほどの双子美男子とは比べるべくもない。だが……、身に纏う雰囲気但凡百のソレとは隔絶しているのだ。

浮世離れしているというべきか。

貴人を思わせるきらきらと輝く白い西洋服に、この世の善性を信じ切っているかのような瞳の輝き。

私は「中身がいけめんだ！」と叫びたかったが、生憎と肉体を持たぬがゆえに声が出なかった。

私は知っている。

ああいう手合いは、強気攻めに転じると途端に美味しい役どころに収まるのだ。

一見無邪気に見えるのに、鬼畜で手慣れているところに萌えるのである。

”壁ドン”だ、”壁ドン”こそ、彼にはふさわしい。無論、男に。私は詳しいんだ。彼を見れば、いけめんにうるさいまさこおばさんだつて同じことをいうだろう。ああ年賀状書いておかなきゃ。

《挿し絵省略・筆者による”中身いけめん”の人物画、及び棒人間複数》

絶頂の只中に浸っている中で、”中身いけめん”が口を開いた。

「参ったな。劉備さん、すごいや……。俺、三国志の世界を生きること」

たはは、と力なく笑うその姿に私の背筋がぞくぞくとする。

弱気もまたいいものだ。

もつともつと、あの涼しげな目もとを曇らせたい。

「朱里……。そんなに劉備殿の持ってきた話は衝撃的だったのか？

その場にいたというのに、私には彼女が何やら崇高なお志を抱いてい

ることしかわからなかったのだ」

美髪の武人に朱里と呼ばれた文官らしき少女は、これに頷き答える。

「衝撃的……。うん、そうですね。劉備さんのお話は本当に衝撃的でした。今ならご主人様が前に仰られた『本来、私たちは劉備さんの家臣になるはずだった』というお言葉も納得できます……。愛紗さんもそれは感じたのではないですか？」

「それは……」

愛紗と呼ばれた女武人は、承服しがたいと言った風に口元を切り結んだ。

「思うに、劉備さんはこの大陸から、乱世の原因そのものを未然に取り除こうとしているんです。それに、乱世が続くことで脅威が増す”外患”まで何とかしようとしているんですから……。これはちよつと常人の考える計画じゃありません。もし事を成し遂げることができたら……。あの人は文字通りの”救世主”になっちゃうかもしれないです」

「救世主、ですか」

”めいど服”の少女が、その言葉を聞いて曇り顔の雰囲気いけめんを見た。

いや、まどるっこしい物言いは止めよう。この人、あれだ。北郷一刀だ。

やたら不気味な筋肉ハゲをまだ引き連れていないところを見るに、まだ男色と種馬の両刀使いに目覚めていない頃の北郷一刀だろう。

つくづく惜しい。ホモ神様、もう少し後の時間を見せてくれないものか。

それにしても、彼が北郷一刀だとすれば、彼の曇り顔も納得のいくというものだ。

”天の御遣い”とまで謳われた彼は、恐らく劉備に嫉妬しているのだろう。

私の推測は正しかった。二人は、負の感情をもって強く意識し合う関係であったのだ。

後は「実は劉備は男だった」とかいう新説が生まれれば完璧なんだけれどなあ……。兎角に人の世は住みにくい。

「朱里、劉備さんの計画は上手く行くのかな？」

北郷がそう問いかけると、朱里は残念そうに首を振る。

「残念ながら、黄巾の騒乱のような局所的な反乱を防ぐことはできません。……それどころか、緊張状態にある諸侯の力関係を大きく揺り動かすことになるでしょう」「えっ？ 何でなの？ 劉備お姉ちゃんの良いことをするんだよね？ 悪い奴らが邪魔をするってことなのか？」

少女たちから少し離れた位置で、肉まんを頬張っていた背の小さな赤髪の少女が首を傾げる。

「その悪い人たちが悪いことをできないようにするのが、劉備さんの計画なんだよ。だから、国中の悪い人たちがこぞって邪魔をしちゃうの。劉備さんの計画は上手くいかないと思う。敵が大きすぎるから……」

三角帽子の少女が、赤髪の少女に答える。

私は面白い場面を見ることができたと、目を細めた（いや、今の私に目などないのだが……）。

「どうやら話の流れから考えて、彼女らは劉備の志した”全国的な民間による均衡策”について話しているようだ。

これは後世において、大商人の既得権益を弱め、新興商人たちが自由に商売できる土壌を作り出し、ある程度物価を安く安定させる効果があったと理解されている。

だが、それと同時に大きな動乱のきっかけにもなる計画であった。「そっか、失敗しちゃうのか……」

北郷は苦虫を噛み潰したかのような表情で言う。

彼は民を第一に考える徳の人として有名であったそうだから、劉備の策がとん挫することを面白く思わなかったのだろうか。

そんな彼に対して、朱里が一つ進言する。

「……ご主人様、討夷將軍様にかけて、幽州か涼州の役人にしてもらいましょう！」

「え、そんな厚かましいこと言って大丈夫なのかな？」

うろたえる北郷に対し、朱里は更に畳みかける。

「匪賊退治の軍功で何とか叶えてもらうんです。それに、劉備さんの志を手伝うため、と付け加えれば、将軍も無碍にはできないと思います」

「確かに盧植さんは劉備さんの師匠にあたる人だから、彼女を助けたいと思っただけ……」

「だが、それは人の弱みに付け込む卑劣な所業ではないか？」

朱里の言葉に頷きかけた北郷を制し、今度は愛紗が難色を示した。美髪に、この潔癖な態度……。成る程、この少女は関羽らしい。

あまりの勇ましさに、実は女顔の男だったのではないかという珍説もあつたのだが、胸元を見るに女のようにだ。

残念すぎる……。

しかし、ということは関羽と相性の悪そうな少女は諸葛亮ということだろうか。

胸元的には、諸葛亮を応援したい。大きな胸元は、知人の桃色髪な親戚を思い出すのだ。

まったく、頭脳と胸は反比例の関係にあるのかもしれない。

頑張れ、貧乳！ 負けるな、ペチャぱい！

私の応援を受けてというわけではなからうが、諸葛亮は退かなかつた。

「愛紗さん。乱世に入る前に、良い立地に権力基盤を持つことはすごい大事な事です。諸侯が劉備さんを知らない、今こそが千載一遇の好機なんでしゅ……、です！」

貧乳が囁んだ。

そのあまりの必死さに、さしもの関羽もたじろいでしまう。

「そ、そこまでなのか……？」

貧乳が勝った！ 時代は、何時だって貧乳が勝つべきなのである。私が勝利の余韻に浸っているところに、諸葛亮が続けた。

「はい。乱世を止めることはできませんが、劉備さんが作ろうとしている商人閥は、きつと多くの人とお金と物を根拠地にもたらしてくれ

るはずです。そして、劉備さんの根拠地は大商人や大豪族のいない場所が適しているでしょうから、辺境が選ばれると思います。異民族との交易をやってみたいとも言っていましたし」

「そうなる……、戦略上、なるべく都に近い、この国の”端っこ”を取った方が後々有利になるよね。化外との交易が活発化したら、その玄関口は多くの富をもたらしてくれるようになると思う」

「だからこの辺境かあ」

三角帽子の少女——、乳の凹み具合からしてホウ統だろう——。が彼女の言葉に賛意を示し、北郷も成るほど納得した。

私も成るほどという思いである。

世にいう三国鼎立初期にあたる、”南北の経済戦争”はこの時より始まったのだ。

「ご主人様……、恐らく曹操さんも劉備さんを利用するための策を練っていると思いますし、決断は早い方が……」

「……朱里」

急かす諸葛亮の目を、北郷はまっすぐに見つめた。

諸葛亮の顔は真っ赤である。彼女のような内気そうな手合いにとって、雰囲気いじめんの視線は神経毒に等しい。

案の定、はわわとうろたえ始め、先程の勢いは何処にやらという風にしておらしくなってしまうた。

「……俺が偉くなったら、劉備さんを利用するんじゃなくて、彼女の支援者になれないかな？　乱世をできるだけ早く終わらせる手伝いができるのかな？」

「それは……」

「俺、何となく分かるんだ。朱里が俺に気を使ってくれてるってこと……。多分、劉備さんに負けられないような立場に俺を押し上げようとしてくれるんだよな？　俺と劉備さんの立ち位置があまりにも似すぎているから……」

その言葉に諸葛亮が押し黙る。

凶星であったのだろう。彼女は労しげに北郷を見上げながら、主の真意を押し量っている。

彼の存念いかほどか。

自分と立ち位置が似ている存在が、知らぬ間に自分よりも崇高な志を成し遂げようとしているのだ。悔しくないはずがない。

自分の至らなさが情けない？ それとも、相手の器量が恨めしい？ 主の心を曇らせないような心を砕く朱里の様は、まさに理想の忠臣を体現しているかのように見受けられた。

こうしてしばしの沈黙が訪れ、やがて北郷は柔らかく微笑む。

ポンと朱里の頭を優しく撫でて一言、

「別にどっちが上とか、そんなのどうでもいいと思うんだ」

「え？」

目を丸くする少女たちの反応を見て、北郷は苦笑いを浮かべる。

「乱世を平穏に終わらせたいと願うなら……、それとも仲間だろ？ 誰が主導で乱世を終わらせても、この世界が平和になるなら言うことないよ」

私は彼の言葉に驚きを隠せなかった。

……どうやら、私の推測は間違っていたのかもしれない。

北郷一刀という男は、他者の優れた一面を目の当たりにしても嫉妬などせず、ただ己の不甲斐なさを恥じる、真に善性の塊のような男であったようだ。

誰かの風下に付くことが苦ではないというのは、一見向上心のおかげでもないように見て取れる。

例えば、梁山泊においてひいひい喘いでいる“出たら負け軍師”のクソ男などは、「働きたくない。貝になりたい」と公言してはばからない。殺意を催す向上心のなさだ。

だが、北郷は違った。

いけめんだからである。

いけめんは何を言っても様になるなあ……。現実にはいたら潰しているけど。目から鱗が落ちる思いであった。

北郷の言葉を周囲がじいんと重く受け止めている中、

「ご主人様の懐はやっぱり広いですね……。何だっけ収まっちゃいます♪」



”めいど服”の少女がするりと北郷の懐へ収まっていった。  
専門用語で、抱きついたとも言う。

「なあっ!？」

当然ながら、周囲の少女たちは色めきたった。

「美花、ずるいのだ!」

「はわわ、ご主人様! 離れてください!」

私は目を瞑り、目の前で繰り広げ始めた痴態を視界に納めないようにする。

誰が女にたかられる男の姿を見たいというのか。

ホモ神様よ、私は貴方を恨みます。

失意のままに、私の意識は暗転した。

◇

次なる場面は、豪華な官舎の中であった。

朱塗りの柱が立ち並び、その中で多くの人々が上座に座るただ一人の女性にかしずいている。

あの桃色髪に、暴力的なほど膨れあがった駄肉……、恐らくは孫家の係累に当たる誰かであろう。

”混みけつと”で同じような体型の少女と良くお隣さんになるので、とかく孫家の血脈は分かりやすい。

彼女と知人を比較して、ふと「胸って遺伝するんだな……」と血涙を流したくなったが、私はぐっと感情を飲み込んだ。

血脈を羨ましがると言うことは、突き詰めて言えば私のご先祖様を冒瀆することにも繋がり、儒の道から外れてしまうからである。

「んで、子幹のところはどうだったんだい? 収穫の一つでもありやあ良いけどね。別段無くても構いやしないが」

孫家の女性が、頬杖を着きながら最前列の文官に問いかけた。

先程の場面からそう時代が離れていないと考えれば、孫堅とするのが妥当であろうか。

孫堅らしき女性に問われた文官は、波打つ白藍色の髪をそよがせながら、これに答える。

「……即刻近隣の商人をかき集め、密な協力関係を結ぶべきだと考える」

「協力う？ そりやまた、何故」

眉をひそめる孫堅らしき女性に対し、文官は言葉を選びながら真剣な面持ちで続けていった。

「塩鉄論の焼き直しとでも言うべきか……。大陸中の豪族と商人、双方の既得権益に切り込もうという大馬鹿者を見かけたのだ」

その言葉を聞いて孫堅は一瞬ほかんと大口を開けた後、すぐに「そりや、大馬鹿だ」と腹を抱えた。

「我が君よ……。笑い事ではないぞ」

「悪い、悪い。でもねえ……」

余程愉快であつたらしく、その笑い声は中々におさまらなかつた。

孫堅の人となりは、後世において“派手好き”で“喧嘩好き”な反骨の人であると伝わっている。

あまりにも大きな敵を相手に喧嘩を売ろうとしている人間に対し、好感を抱いたのかもしれない。

「でも、そんな馬鹿は潰されるのがオチだろ。だというのに、雷火がそれも警戒してること、ただの馬鹿じゃ済まないってことだね？」

孫堅の問いに、文官が頷く。

「当人自体もただ者でなく、また曹家の小娘も何やら小細工を仕掛けようという節がある。そう簡単に、数百年以上も続いた豪族の世が崩れるとは思えんが……。せつかく乱世に備えて地力を蓄えておる時に、屋台骨を揺るがされてはたまらんから……。今まで以上に、既存の商人と結託をしておく必要があるのだ」

「張昭様」

と隅に控えていた黒髪の少女が、文官に声をかけた。

幼いながらに無駄に胸がでかい。これは頭が悪そうだと私は当たりをつけた。

「何だ、公瑾」

「塩鉄論……。ということはその馬鹿な所業とやら、均輸法の実施によ

る自作農の救済を指しているのでしょうか？ ならばこの国の構造的に不可能だと私は考えます。だって、既存の商人や豪族を味方につけなければ、商う品物を仕入れることすらできないではありませんか。それに商人たちは中央への顔も利きます。下手な改革など、鼻薬を嗅がせてしまえば、どうとでもなりませう」

私は舌打ちをしたい気持ちでいっぱいであった。

この黒髪の巨乳は、どうやら未来の大宰相、周瑜であるらしい。

日頃より私の提唱する、胸の大きさと知能の反比例を否定する生きた証拠こそが彼女であるわけだ。

呪ってやる。過去の人だけだ。

張昭と呼ばれた文官は周瑜の意見に頷いて、

「確かにお前の言うとおりだと、私も思う。だが、最終的にはどうであれ、既得権益がかき回されることで諸侯に動揺が走るはずだ。……それは好機とも言えんか？」

「あつ」と声を漏らした周瑜に対し、張昭は更に言った。

「動乱が起きれば、頭角を現す者と馬脚を出す愚図に人は分かれるものだ。武力による動乱だろうが、金に関わる動乱であろうが。我らは当然、頭角を現す側にならねばならん」

「……理解いたしました。つまらぬ事を聞き、申し訳ありません」

「あまり年上相手だからつてへりくだるもんじやないよ、冥琳」

頭を下げる周瑜に、今度は孫堅が声をかける。

「年上……、だど？」

張昭は孫堅の言葉に目を丸くして、

「そうか、年上か……。そうかあ」

と何故か突如表情を和らげてしまった。

ひよつとすると、今まで年上扱いをされてこなかったのだろうか。確かに背の丈も胸の凹み具合も、共感できるほど小さくまとまっている。

もし、私の予想が正しければ、それはもうさぞかし嬉しいに違いないまい。

そんな張昭の上機嫌を一瞬の内に粉碎したのは、孫堅によく似た桃

色髪の少女であった。

「そうよ、冥琳。雷火なんて威張ってる割にちっこいんだから、あんまり持ち上げても嫌みつたらしくなるだけじゃない」

「ち、ちっこいだと。このイノシシ娘！ もういつペン言ってみろー！」少女の一言で、緊張感の溢れていた会議の場が女と女の取っ組み合いの場に早変わりしてしまう。

やはり胸のでかい女にろくな奴は居ないのだと確信しました。まる。

「……のう、策殿よ。お前の捕まえてきた、あの変態男は今どうしておるのじゃ」

取っ組み合いも佳境に入ったところで、肌の浅黒い銀髪の女性がイノシシ女に声をかけた。

策と呼ばれたところから察するに、この空気を読まない乳でか女は、かの有名な孫策なのかもしれない。

後の”南海霸王”が、こうも人をからかって楽しむ性格をしていたとなると、色々がっかりする人も多くんじゃなからうか。

私が今の世に少なからずいる”呉信者”に「ご愁傷様です」と黙禱を捧げていると、孫策は張昭を腕力に物言わせて押さえ込みながら、浅黒い肌の女に答えた。

「ああ、馬元義の奴？ とりあえず、素っ裸のままつてのも見苦しいから適当に服を見繕って、部屋に放り込んであるわよ」

「理解しがたいのじゃが……、結局あ奴は何故素っ裸で幽州の荒野を一人歩いていたのだ？」

女の問いに、孫策はへらりと笑う。

「何でも、劉備のところのワンちゃんに服を全部吹っ飛ばされたんだって」

「ワンちゃん？」

「そ、ワンちゃん。あんまり強そうには見えなかったけど、面白そうな性格してたわね。何でもヒテンミツルギ？ だか、十七分割？ だか、流し斬り？ が完全に決まって吹っ飛ばされたんだって」

要領を得ない孫策の説明に、浅黒い肌の女はこめかみを押さええた。

「まったくもって状況が分からん……。流し斬り？　が完全に決まると何故服だけが破けるのじゃ。服だけを破く奥義なんぞ在ってたまるかよ」

「いやあ、そこは馬元義の身体が頑丈ってだけじゃない？　とにかく、面白そうだから捕まえてきたってわけ。言ってることも訳わかんなくて面白かったしね」

「はあ……」

浅黒い肌のため息など素知らぬ風に流して、孫策は自由を奪った張昭の頭頂部を撫でる作業を再開する。

「ぬおお……。やめ、やめんか！」

私はその様を見て、浅黒い肌の女と同様に嘆息した。

他人をからかってばかりいる彼女のこの姿を見て、誰が彼女の輝かしい未来を想像できようか。

こう見えて、彼女は近い将来華南全域を牛耳る大勢力の主になるのである。

曹操と北郷による曹北同盟を敵に回し、彼女らの猛攻から自領を守りきるどころか、一転攻勢に出るほどの名将に育ってしまうのである。

それが、あんな、大きな、胸を……。育ち……。

何だか気分が悪くなってきたため、私は目を瞑ることにした。

そして私の意識も、それに伴い何処かへと飛んでいく。

◇

「ついに”樂市樂座”を実施する時が来たようね……」

次なる場面は、金色の巻き髪を揺らしながら、小柄な少女が周囲に侍る側近たちに向けて言葉を発しているところであった。

「樂市、樂座ですの？」

三国時代にしてもいささか先進的な服装感覚を持った、金髪の少女が解せないと言った風に口元に手をあてた。

「そうよ、榮華。領内に商税を減免する特別区を作るの」

「商税を……」

「はい、はい。華琳様。質問いいですかあ？」

拳手をしたのは春巻きを思わせる髪型が特徴的な少女だった。

その無邪気な在りようは陣営内でも可愛がられているようで、ころなしか周囲からの視線も柔らかい。

「何かしら、季衣」

微笑む巻き髪に対し、季衣と呼ばれた春巻き頭は首を傾げつつ、疑問を述べた。

「難しいことはボク分かんないんですけど、それって領民の人たちが負担する税が減るってことですか？」

「結果的にはそうなるでしょうね。特別区で商いをする全ての商人が商売をしやすくなり、結果として民に必要な生活物資の価格も安く抑えられるはずよ」

「ということとは、良いことなんですね。華琳様すごいです！」

手放して喜ぶ季衣や黒髪の武将とは対照的に、青髪の女性が難色を示した。

「しかし、減免する税は我々で肩代わりする必要があります」

「はあ？　ちよつと待ってください。曹家にそんな金銭的余裕なんて……」

青髪の指摘に栄華と呼ばれた少女が色を失う。

彼女の反応はごくごく自然なものだと言えよう。一体、誰が身銭を切ってまで民の税を肩代わりしようと思うのか。

徳治とは美德であるが、愚かでもある。

いつの時代も、きれいごとがそのまま通るのならば苦労などしないのだ。

そんな現実的な憤りを見せる栄華に対し、巻き髪はくすりと笑う。

彼女の懸念など、どうという問題でもないとも言わんばかりに。

「負担は利益で賄うわ」

「利益で……」

「私のことが信じられないかしら？」

「いえ、お姉様の見識を疑うわけではありませんが……」

この相手を試すような口振りに、私は嗚呼と息を吐きたい衝動に駆

られた。

彼女は恐らく曹操孟徳だ。

この、まるで予知能力か、千里眼でも持っているかのよう”損して得を取る政策”を易々と思いつく政治的視野の広さに、人の才を見定めようとする癖を持つ為政者は、曹操孟徳を置いてほかにないだろう。

何故だろうか……？

紙の上のいけめんには興味のないはずの私の胸が高鳴る。

私の中に流れる血が、女色に励めと轟き叫ぶ。

《挿し絵省略・曹操を美男子風に描いた人物画と棒人間多数》

「無論、一人の商人から得られる利益が少ない以上、量を確保する必要があるわ。思うに、アナタはその量が確保できるという保証がないと言いたいのよね？」

「……仰るとおりですわ。私には量を確保できるあてが思いつきませんの」

悔しげに口を尖らせる栄華のことを、曹操は愛おしげに見つめている。

と、見つめられていることに気がついた栄華の頬が桜色に染まった。

瞬く間に展開される百合百合した空間。

「お姉様……」

「栄華」

その母に頬を撫でられたかのような心地の良い空気を打ち砕いたのは、飄々とした雰囲気を持つ別の少女であった。

「あー。もしかして、劉備さんツスカ。華琳姉え」

手鼓を打った少女の言葉に、曹操は我が意を得たりとばかりに頷く。

「その通りよ、華倫」

一方で百合空間の展開を邪魔された栄華の方は、こころなしか不満

そうに見える。曹操はそんな彼女の頬に手を当て、小さな声で「また後で」と呟いた。

その百戦錬磨の手腕には、物語の世界を生きる私をしても、「まるで物語の人間みたいだ」と驚嘆を禁じ得ない。

「華倫の言うとおり、劉備を利用するのよ。彼女が率いることになる商人閥……。その人的資源を味方にする事で、この陳留を一大交易拠点に作りかえるの」

「しかし、既存の商人が何と言うか……」

青髪の発した憂慮を、曹操はきつぱりと切り捨てる。

「既得権益に胡坐をかいている怠け者など切り捨てても惜しくはないわ」

これだ。

この打てば響く明晰さと、愚鈍を切り捨てる冷徹さこそが、私の心を癒してくれるのだ。

やつぱり、馬鹿は要らないよね。

やはり、頭脳明晰な人物は良い……。

良い……。

「それにまさしのいうノブナガの政策を一度試してもみたかったのよね」

何か言った気もしたが、良くは聞こえなかった。

曹操は続ける。

「当面は経済の拡充を図り、動乱に備える。情勢が混沌としてきたら、一気に辺境への進出を図るから、皆もそのつもりでいるように」

「辺境」の言葉に一同が目丸くする。

「辺境……、端っこかあ。って、華琳様。敵は誰になるのでしょうか？」

良くわからないといった風に黒髪の女性が問いかけた。

青髪の女性と面影が似ていることから、この二人は姉妹なのかもしれない。

曹操は黒髪の質問に少し悩むそぶりを見せた後、「北の袁紹」と端的に答えた。



「えっ!？」

家臣たちの間から仰天の声が挙がった。

当然である。この時期の袁紹といえ、大陸屈指の大豪族であり、小勢たる曹家とは比べようもない財力と兵力を保有しているのだ。

常識的な見方をすれば、アリの巨象に挑むようなもので、全く勝負にならない。

だが……、それでも曹操は彼女をして「辺境を手に入れるには、一番与し易い相手」と豪語した。

家臣に白紙の紙を用意させ、彼女は筆で大陸図を書き込んでいく。

「涼州は都を挟んでおり、遠方に過ぎる。華南は大豪族のひしめく土地であって、抜本的な政治改革に向かない。ゆえに取る価値のある辺境といえ、自然と北方になるわけだけれども……」

とここで無念そうに歯噛みして、続ける。

「幽州は既に公孫サンの縄張りよ。幽州牧の劉虞とどちらが政治的主導権を握ることになるかまでは分からないけれど、劉備とのつながりを考えるなら、公孫サンが頭角を現してもおかしくはないわ。化外との玄関口を既に保有しているというのは、それだけ大きいの」

だからこそ、と彼女は冀州を丸で囲んだ。

「我々の伸張次第で、袁紹は二つの仮想敵勢力と接することになる。やりようによっては十分に勝ちが拾えるわ」

曹操の説明に、家臣たちが口々に感嘆の息を漏らした。

私も感動ひとしおである。

「当面は辺境で賑わう富を自領へと誘導する策をとり、ゆくゆくは我々の土地が拠点となるように仕向けましょう」

先の北郷や孫家における一場面もそうであったが、どうやら三国鼎立に向かう群雄たちの道筋は、劉備の行動に影響を受けていたらしい。

となると、俄然劉備という人物に対する興味関心が、私の中で膨れ上がっていく。

一体どんな人物なのだろうか……？

恐らくは、胸の小さな賢人であるに違いあるまい。

私がここではない何処かへと思いを馳せている中、曹操もまた遠くに目をやってため息を吐いていた。

「まさしの話にあつた南進が遅れてしまうのは残念だけれども……、仕方がないわね」

何処か寂しげにも思えるまなぎしを険しくさせて、さらに彼女を独白する。

「劉備玄德……。アナタは自分のことを英雄でないなどと言い張るけれども、私はそれを認めてあげない。アナタのことを徹底的に英雄として遇して、私に並び立つ存在として利用し尽くしてあげましょう」

◇

私はその後も様々な場面を垣間見ることができた。

都で元気に酒を飲んで涼州弁を話す痴女や、呉子遠の親族らしき女性と大將軍が語らっている場面。

そして、弱気なお嬢様然とした少女が、眼鏡娘や動物に好かれた赤髪少女、きやんきやんと吠える小娘と語らっている場面、そのいずれもが劉備に関する話題を口を上らせている。

劉備玄德とは私たちの時代においても特別な存在だ。

困窮した民を救うために立ち上がり、結局は“志半ばで失敗してしまった”という同情を差し引いても、その人気は三国の英傑、いずれに勝るとも劣らない。

一体、彼女の魅力の源泉は何処にあるのだろうか。

私は、彼女の魅力がその特異性にあるのではないかと睨んでいる。時代の最先端を走る寵児というわけではなく、むしろ時代に歯向うようにして生きた、その異質さに人々は惹きつけられたのではないだろうか。

……そんなことを思いながら次に飛んだ場面は、この大陸ではない何処かの村落であつた。

火を噴く怪鳥が空を飛び、二足で走るトカゲの群れが草食のトカゲを襲っている、おぞましい世界の中にぽつりとたたずむ村落である。

村の入り口には『だっしゅ村もどき』と看板が掛けられていた。

私の精神は入り口をくぐり、村内の散策をひとりで始める。

「ゴッドヴェイドオオオ」という勇者じみた叫び声が聞こえ、仮面をかぶった良く分からないちっこい蛮族やら、猫耳をはやした蛮族やらが「ゴッドヴェイドオオオ」と好き勝手に暮らしている中、漢民族らしき女性が毛皮の上に座り込んで、豪快にまんじゅうのようなものを頬張っていた。

頬張った瞬間、その表情が苦み走る。どうやらお気に召さなかったようだ。

「……不味すぎる。まさしよ。この”べじまいと”とかいう食べ物は本当に人が食すものなのか？ こんなもの塗らずに普通にまんじゅうだけを食えば良いではないか」

女性の隣には”まさし”なる人物が座っているようだが、絶妙な位置に蛮族の祭壇が建てられていて、その顔が良く見えない。

「なに、おうすとれいりあに来たのだから、再現してみたかっただけ？ 相変わらず、お前は良く分からんことを考える。都にいた時もそうだったなあ。好き勝手になにかをやって、好き勝手に暮らして……」

まさしが何かを返すと、女性が眉根を寄せた。

「何？ ”にーと”とはそうあるべき、だと？ 常々思うが、その”にーと”とは何なのだ。楽しいことが大好きで働いたら負けだと思っっている人種だと？ 何処ぞの豪族か。迷惑をかける相手はもつと少ないと？ お前の言うことは本当に分からんなあ……」

とそこで思い出したように女性が言う。

「迷惑をかけた相手といえは、都で良く見かけた”じむかすたむ”に文は出しているのか？ 出してない？ いや、それは恩知らず過ぎだろう……。他人が主人公の”らぶぷらす”に興味はない？ お前、もうちよつと私に分かるように話せよ……」

女性は辟易したように肩をすくめる。ただ、相手のことを疎ましく思っているわけではないようだ。

そこはかとなき親愛の情が見て取れる。

女性は咳払いをして続けた。

「……まあ、お前がそう破天荒なおかげで私も天職を見つけていることができたわけだな。化け物退治は楽しいよ、実際。強くなっていると  
いう実感がある。今なら、霞の奴にも勝てるかも知れん。何、すてー  
たす的にむりげーだと？ う、うるさい！ 無理を努力でひっくり返  
すからこそ、価値があるんだ！」

その後、女性はまさしの方へと手を伸ばし、まさしが食べていたま  
んじゅうを奪い取ってしまう。

「……やはりだ。ずるいぞ、お前。自分の分には”べじまいと”を  
塗ってなかったのだな。これだからお前は……」

ずるいだの何だの。いい加減、真名で呼べだの何だの、ああ、これ  
あれだ。痴話喧嘩だ。

急速に興味をなくした私は、更なる歴史的場面へと飛んでいった。

『次で最後よん』

ホモ神様のお言葉に期待が膨らむ。

いよいよだ。今の今までは前座であった。

思うに、ホモ神様が見せたかったものとは、劉備の残した軌跡なの  
であろう。

これまでの場面において、私は劉備という人間のことを、同時代人  
がどう捉えているかを理解することができた。

……だが、肝心の本人を未だ直接見ることができていないのだ。

一体、彼女はどのような人間だったのだろうか。

私は気弱だが、一本芯の通った貧乳の少女であることに今月分の給  
料を賭けてもいい。

聖像にあるように、猫耳の頭巾をかぶっていれば言うことなしであ  
る。

そしていつでも劉備を甘やかしてくれる忠実な家臣が、呉子遠様を  
筆頭に侍っていて……、たまには男色にふけることで私の目を楽しま  
せてくれるのである。

私の意識は飛んでいく。

景色もそれに伴い移り変わり、移り変わり、辺境を乗り越え、砂漠

を渡り、巨大な湖の周りにある石造りの都の寸前で、

ぽよん。

ぽよん。

「し、子遠さん、どうしよう！ あ、あれ、この国の兵隊さんだよな。話して分かる雰囲気じゃないんだけど……」

ぽよん。

ぽよん。

「お、おおおお落ち着くのですぞ。玄德殿。こう言う時は外交的な非礼を犯さぬよう、毅然と……。ヒエツ、矢が飛んできた！ 上司殿、上司殿！ どうすればっ!？」

ぽよん。

ぽよん。

「アンタたち、うっさい！ 今必死に考えてるんだから！ 何であいつらが血眼になって私らを追いかけてるのか——、そういうえば桃香。さつき女の子拾ってたわよね。あの子、何よ」

「んう？ えっと、お父さんやお母さんを悪い人たちに殺されちゃったとかで……。放っておけなかったから、つい……」

ぽよん。

ぽよん。

「……やけに身なりが良かったわよね。ちよつと身分聞いてみなさい」

「え、えええっと。王族だって、すごい。偉い人の子だったんだ……」

！

「……子遠。精鋭率いて、突撃。前に向かって、敵を蹴散らして逃げるわよ」

「フアッ!？」

ぽよん。

ぽよん。

「いやいやいや！ 上司殿！ 逃げるというのに、前に進むとかまるで意味が分かりませんぞ！」

「うっさい、やれ！ 殿をじりじりと削られるよりも、死中に活を求め

た方がずっとマシよ!!」

「いやそれは無理、あいでもででで?! は、はひ、よおし頑張るぞい!」

私は目を閉じ、さっさと現実へと戻ることにした。

「てめーら、仕事だ。お頭のために命張れや!!」

「久しぶりにタマの取り合いだ。臆病もんはここで死ぬ!」

親戚によく似た桃色巨乳女も、”出たら負け軍師”に良く似たクソ男も、仕事場にうじゃうじゃいる山賊もどきの男どもも現実にいる分で十分である。

仕事したくないなあ……。

梁山泊よりも待遇が良くて、この美少女軍師を甘やかしてくれる素晴らしい職場はないものか……。

ないよね……。

くおまけく

20XX年、日本で刊行。『初心者の三国志』より。

その後の劉備……

広宗での会談後、張世平の助力を受けて大規模な武装隊商を組織化。大陸中を渡り歩く大商人となる。

彼女の活躍により、商人の世界は大きく二つに分かれた。

自由な市場と競争原理が一定に働く華北の商界と、豪族と結託した御用商人が価格を厳密に統制する華南の商界の二つにである。

前者は、魏帝曹操の先進的な施策により、洗練された官僚制度が整備されることになり、後者には後の世まで続く貴族を頂点とした身分制度が構築されることになった。

この政治的、経済的に立場を違えた二つの世界が軍事的衝突を繰り返した時代こそが、今で言う南北経済戦争の時代であり、後に曹操の

風下に立っていた北郷が蜀へと移転し、勢力図が三国鼎立状態に膠着するまで、数多の戦いが繰り広げられるのである。

こうして南北争乱期、三国鼎立期成立の立役者となった劉備であったが、本人自体は大陸情勢に関わることはなく、自身の影響力が及ぶ範囲で困窮した民を救うべく、私財をなげうち続けた。

彼女の投資した財を元手に、商人として大成した集団が後の山西商人であり、その支援を受けた武侠集団、梁山泊である。

彼ら山西商人の特徴は、何と言っても独特の理念に基づいて行動していることにあるだろう。

生産の拡大。それは商売によって得た利益により、また新たな商売と雇用を自発的に生み出そうとする概念である。

劉備によって救われたことが、他者に手を差し伸べようという姿勢に繋がったのであろうか。

彼らの商業活動は実に広範にわたって広がっていき、今日には大陸の外側に幅広い交易圏を作り上げるまでに至った。

漢王朝以上に効率化された官僚機構を生み出した曹操——。彼女という存在は一代によって完成しすぎていたために、彼女の作り上げた魏王朝は、次代において呉王朝に吸収されることになった。

対する華南を牛耳った孫家は、呉王を中心とする強固な貴族制を作り上げることに成功したが、同時に権力の分散を招いてしまい、数代の後に有力貴族に王権を篡奪されることになった。

そして蜀の北郷は数多くの子孫を残し、魏勢力や呉勢力との婚姻外交によって終始、一定の存在感を持ち続ける。

呉王より権力を篡奪した貴族も、元をたどれば北郷の流れを汲む者であったことから、「曹操が素材を集め、孫策が饅頭を作り、北郷の子孫がそれを食した」と、世人に評価されている。

だが、その北郷の血筋ですら今や玉座に存在しないことを考えると、今の世に名と功績を残しえたのは劉備ただ一人だと言えるのかもしれない。

そんな彼女だが、天寿を全うする際に残した資産は周囲の人々が驚

くほどに少なかったそうだ。

彼女の目指した戦のない世の中を作り上げることは生涯かけてもかなわなかったが、臨終の際には安らかな表情を浮かべていたそうであるから、その人生はおおむね幸福であったのであろうと考えられる。

その後の荀イク……

儒学の名家である荀氏の息女として生まれた彼女であるが、その半生は戦いの歴史であった。

劉備一党における、事実上の総大将兼実戦部隊長であった彼女は、劉備と反目する勢力との武力衝突を一手に引き受けることになる。

彼女の名声が大陸に轟くことになる最初の戦いとしては、まず黒山賊との戦いが挙げられるであろう。

当時、洛陽の近隣に根城を置いていた黒山賊は都の大商人から支援を受けており、その兵数たるや数万を下らなかった。

個々の練度や装備も流民を核としていた黄巾賊とは比べものにならない、権力のしがらみによって動くことのできなかつた官軍も、市井の人々もまさか劉備の一党が黒山賊に打ち勝つとは思っていなかったと考えられる。

彼女が黒山賊の織滅に用いた十面埋伏の計は、今でも軍人を志す人々にとっては理想的な伏兵の用い方であり、タラス河畔の戦いで用いた荷馬車の城砦化戦術と並んで後世の評価が高い。

もし彼女が曹操か孫策のいずれかに仕えていれば、南北朝の争いはあれほど長期化しなかったのではないだろうか。

余談だが、彼女は強烈な新参嫌いであったと今の世に伝えられている。

例えば、趙雲が劉備の才覚に惚れ込み、家臣に加わりたいと申し出てきたときには「決して加えてはならぬ」と家臣入りを反対したという。

更に黒山賊との戦い後に駆け込みで加わろうとしてきた張遼についても同様に反感を示したが、こちらは追っかけという形で無理にと



一行に加わってきたため、最終的に家臣入りを許している。

後に呉懿の副官となる王平との相性も悪く、「反骨の相がある」という言いがかりをつけたことはあまりにも有名だ。

これらの逸話は果たして彼女の人見知りによるものなのか、それとも才覚あるものへの嫉妬なのかは未だに議論の分かれるところである。

その後の呉懿……

三国一の忠臣として名高い彼であったが、正直な話、劉備一党に所属したところこそが、彼にとって不運であったのではないかと言わざるを得ない。

武装隊商として各地を流転するようになってより、まず彼が直面したのは略奪経済を主とする匈奴らの襲撃たちであった。

万里の長城の外側で暮らす騎馬民族にとって、迷い込んだ農耕民族とはまさに搾取・略奪の対象であり、平和的な交渉など臨むべくも無かった。

無論、後に彼らと和解することになるのは歴史が証明しているが、それまでは激しい争いの連続であり、呉懿はそこで人並み以上に恵まれた武才と、天才軍師との奇妙な相性の良さをもって、副官である王平とともに戦場を縦横無尽に駆け巡ることになる。

有名な逸話としては、三日三晩の全力疾走が挙げられるだろうか。その功績は、神出鬼没の騎馬民族をして「あいつら怖い。馬を走らせて追っかけてくるんだもん」と言わしめるものであり、今でも”貧者の最終兵器”だの、”対騎馬民族決戦人型兵器”だの”とりあえず困ったら呉懿使つとけ”だのと、世に居る歴史愛好家から高い評価を受けている。

余談だが、彼が天寿を全うする際に残した資産は周囲の人々が驚くほどに少なかつたそうだ。

恐らくは主の清廉さを踏襲してのことだろう。

多くの功績を為した人物はそれに伴う財貨を得てしかるべきだが、

「今度は貝に生まれ変わりたい」との迷言も残していることから、歴史上初めての社畜であったとする珍説も流布されている。